ある工業大学生の受難

如月由縁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある工業大学生の受難

【Ｎコード】
Ｎ１７８４Ｎ

【作者名】
如月由縁

【あらすじ】
非常にハイスペックだが残念なイケメンである工業大学生の香坂鉄兵。ある日彼が趣味の研究の産物である機械を動かしたところ、気が付いた時には異世界に迷い込んでいましたとさ。
最強主人公異世界お気楽ファンタジーものです。

ある工業大学生の日常と旅立ち

香坂鉄兵は非常に残念なイケメンである。

１８６ｃｍという高身長に８２ｋｇの体重。やや重量級ではあるがそれは太っているというわけではなく、全身の筋肉が鍛え上げられているせいである。

かといってマッチョな体形をしているのかといえば、脱げばそれなりにゴツイ体格をしているものの、彼は作業着以外の普段着では自分の体形よりもかなり余裕のあるゆるい服装を好んできているために着やせして見える。見ようによってはモデルのようにも見えなくはない。

髪は巻き込まれると大変な事故になりかねない機械をよく扱う関係で短く刈り込んでいるが、クセ一つなく、長くすれば女性も羨む様な質のものになるだろう。

容姿は無論、非常に整っている。あえて言えばややタレ目でそのせいかいつも眠たげにみえるところが気になるものの、そのタレ目でさえ、人と話している時に小首を傾げる癖がある彼には、そのタレ目と仕草が天然の流し目になっていて、男の友人でさえも話してたまにやばいと感じる程の評判である。一つ一つのパーツは無論美しく、絞まった表情は凛々しい。まさにイケメンと呼ぶに相応しいものである。

香坂鉄兵は非常に残念なイケメンである。

とはいえ、それは世間で言うところのようなヘタレであるとか性

格が破綻しているかということではない。

ではなにが残念なのかといえば、有り体にいえばそのイケメンっぷりを発揮させるような環境にないことと、本人自身が自分の趣味と学業に夢中なためにそれを活かす事に関心がないところである。

小中学生の頃はチビで太っていたため注目されることもなく、ひたすら部活の剣道に明け暮れる剣道少年だった。

高校生になると身長が伸び始め、それに伴って腹の横にあった脂肪は身長に引きずられるように縦に筋肉となって今の容姿に落ち着いたわけなのだが、高校は男子校であり、モテはしたがそれは男にばかりであった（ちなみに高校でも剣道部に所属していたのだが、今の容姿に落ち着いた頃から先輩に妙な視線を投げかけられるようになったので身の危険を感じて辞めた。にも関わらずいつも竹刀を持ち歩いていたわけなのだが、それが結構な頻度で使用されていたことについては彼を哀れんで欲しい所である）

無論、町に出ればそれなりに注目もされていたのだが、結構な近眼である彼は本を読むときや機械を弄る作業をするとき以外は眼鏡を外しているのでその視線に気がつくことはなかった。

高校で部活を辞めて暇を持て余した彼は、家でゴロゴロしていたところを父親にとっ捕まり、時給２５０円という労働基準法に違反する賃金で父親の経営する町工場でこき使われ、灰色の青春を過ごす事になる。

とはいえ、それがつらく悲しいものだったのかと言えば本人的にはそうでもなく、町工場で旋盤を操っているうちに機械工学に興味を持ち、のめり込んで行った。あまり勉強をする方ではなかったが、

実際にはかなり頭の良い彼は、興味が湧いた途端にみるみると成績を伸ばし、家から近い中では一番良い工業大学の機械工学科に進学した。

大学は共学であるが、悲しいかな工業大学であるために女生徒はほぼデザイン系の学科にしかおらず、機械工学科には５０：１程度の割合でしかいない。それでも女性がいるにはいるのだが、そういう環境にいる女性はちやほやされるために色々勘違いをしているか、もしくは池袋辺りに生息している人種だけだった。

前者も後者も見目麗しい鉄兵に当然のように擦り寄ってきた。だが、姉が二人いるために女性の本性というものを嫌というほど知っていて女性に幻想を抱く機会すらも与えてもらえなかった彼は、前者には冷ややかな態度を取っていたために敵視され、後者とは敵対していないものの、妄想の餌食にされ続けている（彼女は漫画研究会に所属している。漫研に所属している男友達が一度ニヤニヤしながら会誌を持ってきて見せられた事があるのだが、彼はそれを絶叫しながらその場で破り捨てて部屋の隅で長いこと怯えていた）。

ともあれ、大学で彼はめきめきとその才能を発芽させ、水を得た魚のように活動を始めた。一度興味を持って勉強したことは忘れないという擬似的な完全記憶能力を自力開発した彼は授業では無論トップクラスの成績を収め、入ったサークルの機械工学研究会では気の合う仲間と無駄に本格的でお馬鹿な発明をしては笑い合い、製作過程と結果を動画にして公開しては注目を集めたりと充実した毎日を送っていた。

二年になる頃には、公開した動画を見て、いたく気に入られた機械工学研究会の顧問の教授にスカウトされて教授の研究室に入り浸るようになり、二年の後半になる頃にはもはや家に帰ることもなく

大学の研究所に住み着いて暮らしていた。

三年になった今では院生の研究の手伝いをするどころか自前の研究を始め、教授が忙しい時には教授の代わりにゼミや講義を行うなど、もはや一介の学生とはいえないような生活を送っていた

もう大学院に進む事も決めていたし、このまま人生を送れば院生・研究生・準教授・教授と工学に身を捧げる人生が待っているのは明らかだったし、彼もその道に疑問を感じてはいない。

だが、この話の主人公である彼には無論そんな人生など待っているはずもない。

転機が訪れた鉄兵のその日の行動はいつも通りであった。

いつものように講義を終えた鉄兵は、サークルに寄って同期の仲間と

「次の発明どうするよ?」

と無駄にレベルの高いバカなアイデアを出し合って駄弁ったり

「いいからこの漫画は見ておけ!」

と同期にお勧めの漫画を熱く語られたり借りてみたり

「おまえのイケメンは残念すぎる」

とおちょくられたり

「おまえの漫画も裕子（漫研所属・池袋系同期）に描いてもらおうか？」

とやり返したはずが結局その相方は自分になることに気がついて猛烈に自爆をし、双方ともに悶絶したりしていたら、研究室のゼミ生が訪ねてきた。

どうも研究でわからない所があるから院生に質問したら

「忙しいから鉄兵に聞いて来い！　あ、あとそれ終わったらこっち来て手伝うように言っといて～」

と言われたらしい。これは結構よくあることなのでサークルの仲間も慣れている。

仕方がないからゼミ生と一緒にサークルを出た鉄兵は、ちょうど飯時だと言う事に気がついて

「先輩！　お腹空きました！」

と図々しく夕飯をねだっておごってもらいながら質問に答える。ちなみに体育会系出身の鉄兵は先輩に甘えはするが従順なので先輩方には結構受けがいい。

夕飯が終わり、ついでに夜食用にカツサンドをテイクアウトしてゼミ生達と研究室に戻ったら

「おう、鉄兵。いいところに戻ってきた。ちょっと手伝ってくれ～」

という院生に攫われて研究用の倉庫で手伝いをした。その手伝いが終わると

「どこが悪いんだろな～」

と研究室のテレビで教授には隠しているスーファミを取り出してマリカーで対戦しながら討論を重ねた。

そんなこんなで夜も更けて十時を過ぎると院生も帰っていき（ゼミ生はとっくに帰った）、鉄兵は自分の作業を始めることにした。

鉄兵は自分の卒業研究を早くも進めているが、三年ということもあり、焦るようなものでもないのでのんびりと進めている。そんなこんなで気がつくと日が変わっていたので卒研の方はこれまでとし、少し休憩する事にした。

研究室に戻って夜食用に買っておいたカツサンドを取り出し、夜の大学をてくてくと闊歩して研究用倉庫に戻る着いでにペットボトルの紅茶を買う。ちなみに夜の大学は基本立ち入り禁止だが警備員の人達とは顔馴染みでもはや見逃されているし、成績が良く大学に利益をもたらすことがほぼ確定している鉄兵は学長からこっそり研究室棟と研究用倉庫の鍵をもらっていたりするので問題はない。

研究用倉庫に戻った鉄兵はカツサンドを頬張りながら趣味の研究の方に移ることにした。

勝手に大学の設備を使って行っている研究は、簡単に言えば似非ニュートリノ検出器である。とはいえまだまだ一介の学生である鉄兵にそんなものが作れるわけもないし、そんな設備があるわけもな

い。こんな感じか？　と一応理論にだけは則っている、簡単に言えば「適当に似たようなものを作ってみた」系の、まさに趣味のミニチュア模型である。

昨日の段階でほぼ完成していたので、鉄兵はカツサンド片手にちょくちょくと微調整を行い、ちょうど一つ目のカツサンドが食べ終わった頃に完成した。

「ふむ」

完成したそれを見て鉄兵は満足気に頷くと、二つ目のカツサンドを手に取りながら連動しているＰＣを弄くってさっそくスイッチを入れてみた。

低いうねりを上げて機械が動き出す。

「うし！」

それを見て、鉄兵は小さく喝采を上げた。

なんの意味もない機械だが、やっぱり正常に動くと気分が良い。一応製作過程の映像はとっているのでこれもネタ動画として公開するか？　とか考えながらＰＣモニターを見た鉄兵は、そこに異変が起きていることに気がついた。

ＰＣモニターを見ると、何かを検出したようだった。

無論、ニュートリノのはずはない。というか検出されたらされたで大変な事になる。

そんなバカなと思いながらＰＣモニターに目を寄せ、その正体を見定めようとした鉄兵は、そこで意識が飛んだ。

その身体が煙のように掻き消え、鉄兵が手に持っていたカツサンドだけが床に落ちた。

ふいに機械がショートを起こして動作を止め、ＰＣはエラーを起こしてモニターはブルーバックを映し出した。

しかし、それを見るものはなく、研究用倉庫は朝になって院生が来て散らかった倉庫内を見て怒り出すまでは無人のままであった。

ある工業大学生の日常と旅立ち（後書き）

１１／１８：報告いただいた誤字修正
「工業大学の機会工学部に進学した」→「工業大学の機会工学科に進学した」
１１／２５：同じところをさらに修正
「機会」→「機械」
これは恥ずかしい……

１２／２９：指摘いただいた誤字修正
機械を弄る作業をするとき意外は
↓以外は

Hello, Another World

気が付いた鉄兵が最初に目にしたものは、赤い円形状の物体と、その物体の脇に見える青空だった。

やや朦朧とする意識の中、その物体の正体を見極めるべく目を凝らし、ついでに自分の状況を確かめる。

赤い円形状の物体は、どうやらパラソルのようだった。とはいえただのパラソルにしてはすこしおかしい。

何がおかしいのかとぼんやりと考えると、その違和感の正体はすぐにわかった。

パラソルの生地に当たる部分から、うっすらとまばらにしか光が漏れて出てきていない。

つまり、そのパラソルはビニール等で作られたものではなく、光を通さない物質を傘の布地部分に使い、その隙間を補強するように赤い布地で補強しているようだった。

状況はといえば、どうやら仰向けの体勢のようだ。背中にでこぼこと地面の突起を感じるが、直接地面に寝ているというよりは少し柔らかい感触を感じるので、どうやら敷物の上に寝ているようだった。

ようするに現在、鉄兵は赤いパラソルのような物の下で寝そべっているようなのだが、その状況に関して思い浮かぶのは疑問符のみである。

鉄兵の感覚でいえば真夜中の研究用倉庫でＰＣモニターを覗き込もうとしていたはずなのに、次の瞬間には目を閉じて真昼の太陽の下で寝転がっていたのである。何が起きたのかと疑問に思わないほうがおかしいだろう。

少し起き上がって寝転がっていた地面を見る。予想通りそこはむき出しの地面の上で、鉄兵はそこに敷かれた赤い布の敷物の上に寝転がっていた。どうやら山の中のようである。開けた場所にいるが、少し離れた所には青々と茂った木々が見えた。

ついでに気が付いたが、鉄兵は作業着を着ていたはずなのだが、今はなぜかその作業着の下に着ていたＴシャツとトランクスしか履いておらず、それも微妙に湿っていた。

これはどうしたものかと本格的に思考するために鉄兵は眼鏡の位置を直そうとした。が、眼鏡に伸ばしたはずの右手は宙を切り、危うく右目を人差し指で突きそうになる。

それでようやく気がついたが、鉄兵は眼鏡をかけていなかった。だが、ぼやけているべきであるはずの視界は極めて良好だ。それこそ、眼鏡をかけている時以上に。

これにはさすがに鉄兵も驚いた。これまでの事だったら研究室かサークルの仲間に悪戯されたとでも思えば納得できることだったが、さすがに身体的な部分が改善されているとなれば異常事態だと思わざるを得ない。

「気が付いたかい？」

不意を打つように透き通った声が聞こえた。

そこで鉄兵はようやく自分以外に誰かがいることに気が付き、声のした方に目を向ける。

見ると、すぐ近くの木陰に、岩の上に座って煙管をふかしている男がいた。

その男の第一印象は、ズバリ「白」であった。

真っ白な髪に透き通るような白い肌。目の色はさすがに白ではないが、かといって黒であるかといえばそうではなく、黄緑に近い緑色だった。

第二印象は「日本かぶれの外国人」だった。

真っ黒な着流し姿で片手に煙管。腰まで届きそうな長い白髪を黒い布で１５ｃｍほど立たせてまとめている髪形は、ポニーテールと言うよりは間違った現代風のチョンマゲである。

そう思ってみてみれば、パラソルも敷物も、彼が座ればそのまま茶の湯でも立てそうなものであった。いや、これは絶対にいつも立ててている。と、鉄兵は根拠も無くその考えを深めた。

男が唇を片方だけ上げてニッと笑った。なんとなく爬虫類っぽい感じがするが、非常に端正な容姿をしていた。鉄兵のような艶めかしいがどこか無骨で凛々しい方向の端麗さではなく、育ちの良い貴公子然とした、品の良さそうな顔立ちである。

だが笑った姿はどことなく愛嬌があり、二枚目というよりは三枚

目になりかけた二枚目半といった印象を受けた。

「おまえさん、川に流れて土左衛門になりかけてたんだぜ。大丈夫か？」

口調まで時代劇風である。これは随分と訓練された外国人だなと思いつつ、大学の近くに川なんてあったかなと考える。思い出す限り、大学の近くに川はなかった。というかそれなりに都内に近い場所なので山すらあった記憶がない。というか川を流れていたって…服が湿っている原因はわかったが、どうしてそうなったのか理解に苦しむ……どうにも日常からかけ離れた出来事なのでどうにも実感が湧かないが、実は結構やばかったのか？

そんな風に鉄兵がぼけーっと考えていると、そんな鉄兵を見て男は苦笑しながら口を開けた。

「俺はシロディエール。おまえさん、お名前は？」

「香坂。香坂鉄兵です」

あだ名は絶対「シロ」だろう。名は体を現すものだな。と、鉄兵は少し失礼な事を考えながら答えた。

シロは鉄兵の声を聞いて少し驚いたようだった。だがその驚きをすぐに隠してニッと笑う。

「コサカテペイ（発音は←→→←↓↓）？　変った名前だな」

「こ・う・さ・か・て・っ・ぺ・い。呼びにくかったらテツで良いですよ」

「それじゃテツと呼ばせてもらおうかね。俺のことはシロでいいぜ」

やっぱりあだ名はシロだったなと思いつつ、鉄兵は「はい」と返事を返した。

「まあなんともないなら良かったよ。服はずぶ濡れだったから脱がして干しといたぜ。随分変った服で脱がすのに手間取っちまった」

作業着は一般的な人から見ると、まあ変った服……なのか？

そんな事を考えながら指差された方を見ると、シロとは反対側の死角には、ポットのようなものがかけられた焚き火があり、その近くには木の枝に刺して作業着が干されていた。

煙が公害になるからと最近では焚き火は禁止されているはずである。こんなところで焚き火して怒られないのか？　とか思ったが、それよりもその焚き火の横には小型の馬が寝ていて、鉄兵はちょっと驚いた。いや、馬というか多分ロバとかラバとかそんな名前の生き物だろう。耳の長い馬みたいなその生物を鉄兵はテレビで見たことがあったような気がする。

「そっちのロバはハルコさん。よろしくしてやってくれ」

良い顔で笑いながら、シロはロバを紹介した。

訓練された日本かぶれの外国人。おまけにロバ付き。鉄兵はシロのカテゴリーを趣味人から変人に変更した。

シロはハルコの方に歩いていくと、ハルコの近くに置いてあった

荷物のリュックから袋と布を取り出し、布をポットの取っ手に当てて引っつかみ、鉄兵の横に腰を下ろした。

見た目からして年は同じくらいだろうと思っていたのだが、動作を見ると少し年上のように見えた。オッサン臭いというわけではなく、堂に入っているというか、なにか貫禄のようなものを醸し出しているのだ。

ポットを地面に置いて袋をまさぐると、シロはその中から土の器を二つと茶器を取り出して、そのまま湯を立て始めた。やはりと言うかなんと言うか、予想を裏切らないシロの行動に鉄兵は思わず感心する。

やがてお茶ができ、鉄兵の前に差し出される。

鉄兵は正座をして、見よう見まねに器を三度回して三口で飲み干した。飲んでみたら緑茶ではなく紅茶だったので驚いたが、温めの紅茶は猫舌の鉄兵にはありがたかったし、喉が渇いていたので心地よかった。

一息ついたら同時に「こんなところでなにやってるんだろうなぁ」と今更ながらに我に返ってもしまったが、こうなったらとりあえず気にしないことにした。

「結構なお手前で」

「お粗末さまです」

シロはなぜか妙に関心したような顔をしながら、本人は器の紅茶を一息で飲み干した。

「作法を知ってるとは驚いた。こいつは緑茶を出すべきだったな。いや失礼した」

むしろ茶の立て方を知っている方が驚きだと突っ込みたかったが、仮にも命の恩人であるので自重する。

命の恩人と言えば、まだお礼すら言ってなかった事を鉄兵は思い出した。

「助けていただいたみたいで、ありがとうございました」

ちょうど正座をしていたので、丁寧にお辞儀をする。

「まあ気にするなって。堅い事は苦手でね。ついでにその敬語も止めてくれると助かるぜ」

「それじゃ遠慮なく」

お礼の言葉の切り返しにいきなり態度を一変させるのもどうかと思ったが、手をひらひらさせながら若干鬱陶しさを混ぜた苦笑を見せるシロ表情を見たの限りでは、本気でそう思っているようなので、その言葉に甘える事にした。礼儀は重要だが、鉄兵だって堅い会話は得意ではないので渡りに船というものだ。

「それにしてもここらは確かちょうど街道の真ん中で、どっちに行っても徒歩で二日はかかる場所だが。なんでまたこんな場所で土左衛門になんてなろうとしてたんだ？」

「なんでだろう。他の場所にいたはずなんだけど、気が付いたらこ

こにいた。これホントの話ね」

別に土左衛門になりたかったわけではないのだが、そこは突っ込まない。というか隣町まで徒歩四日ってここはどこの田舎なのだろうか。ひょっとして北海道とかなのか？　なんでまたそんな場所にいるのだろう。本当にこっちが聞きたいくらいである。

テツとしては本当の事を話しただけなのだが、シロの表情を見た限り、言葉通りには捉えてもらえなかったようだ。何か言いたくない事情があると勘違いしたようで、違う話題を振ってきた。

「それにしても聞き慣れない言葉を話してるようだが、そいつはどこの国の言葉なんだ？」

「え、何語ってそりゃ日本語だろ。というかシロは外国人なのに日本語上手いなぁ」

海外の論文は無論英語だし、論文を発表する時には英語のスピーチが必要な場合もあるために、英語も一応練習していたので喋れるが、今はシロが日本語で話しているから鉄兵も日本語で話している。おかしな事を聞くものである。

「俺は確かに外国人だが、そんな言語は知らんし、翻訳機なんて持ってないぞ。テツが翻訳機を使ってるんじゃないのか？」

「翻訳機？」

当然そんなものは持っていないし使ってない。というか勝手に同時翻訳をしてくれる翻訳機ってどんだけ性能の良い翻訳機なんだろうか。

……というかようやく気が付いたが、なにか会話が噛み合ってない気がする。

「あぁ、風の精霊に干渉して言葉の意味を伝えるってぇ最近評判の例の翻訳機だろ？　まだまだ希少で高いもんだし、テツはさしずめ領主の息子ってとこか？」

風の精霊と来ましたよ。

テツは心の中で思いっきり突っ込みながらも血の気がサーっと引いていくのを感じた。

「……シロ。ちょっと変なことを聞く」

「どうした？」

「ここの地名を大陸名から正確に言ってくれないか？」

シロは怪訝な顔で鉄兵を見た。

「ここはミッド大陸オズワルド王国アイダ領のソネット村とカディス町の間だが、そいつがどうかしたのか？」

ミッド大陸なんて聞いた事がない……

シロの顔をじっと見るが、シロは真剣な顔で見つめられて戸惑っているようだった。少なくとも、嘘をついたりからかっていたりしている気配はない。

……どうやら間違いはないようだった。

少なくとも、ここは日本ではない。

地球でもないようだ。

恐らくは異星か異世界か。

というか精霊とか言ってるし、多分ファンタジーな異世界だ。

Ｈｅｌｌｏ，Ｗｏｒｌｄ

いや違う。Ｈｅｌｌｏ，Ａｎｏｔｈｅｒ Ｗｏｒｌｄか。

テツは無意識にプログラミングで有名な言葉を捻りながら、目の前が真っ暗になるっていくのを感じた。

Ｈｅｌｌｏ，Ａｎｏｔｈｅｒ Ｗｏｒｌｄ（後書き）

８／１７：ご指摘いただき英語の誤字修正。超恥ずかしい誤字でした！　さらにここの日付の部分も間違えてました！　動揺しすぎです
９／１２：御指摘いただいた誤字修正

異世界の歩き方

ここは恐らく異世界だ。

その事実に目の前が暗くなり、意識が飛びかけた鉄兵だったが、それと同時に精神にあまりにも大きくかかった負荷を取り除くべく、環境に適応するための意識が働き始めた。

ここは恐らく異世界だ。

そう、まずは認めよう。ここはきっと異世界だ。

まだ担がれている可能性は無きにしも非ずだが、気を失う前後の事やシロの反応を見る限りではその可能性が限りなく高い。

少なくともこんな大掛かりで性質の悪い悪戯を仕掛けてくる友達はいないし、そんな行動力は奴等にはありえない。ついでにシロのような役者を雇ってくる金もコネもないだろう。

まずは認めよう。ここは異世界だ。

そうやって今現在自分の状況を認識すると、気の遠くなるような動揺が多少は和らぎ、それを胸の奥に無理やり押し込める事に成功した。

そう、ここは異世界だ。だからなんだというのだ？

いやそこまで開き直るのは無理があるだろう。という冷静な突込みが心の奥底から聞こえてきたが、とりあえず無視する事にする。

とはいえ、異世界というならば「だからなんだ?」で済まされない問題は確かにあるだろう。

さて、それならば、ここが異世界だとすると何が問題になるのだろう。

鉄兵は再び思考に没頭しはじめた。

ちなみにその横でシロは呆然とする鉄兵をやや心配そうに見ていたのだが、我に返ったかと思ったらまた考え込み始めたのを見て、腰の袋をごそごそと探り始めた。その中から煙草を一掴み取り出して、煙管に詰め込み人差し指をその先にそっと当てる。

人差し指の先からポッと小さな火が現れて煙草に火が付いた。

シロは旨そうに煙を吸い込むと、良く晴れた空に向けて輪っか状の煙を吐き出した。風が無いので煙の輪っかは崩れず、非常にのどかな景色が山深い街道の外れに流れる。

そんな風に目の前でまさにここが異世界であると決定付けるような「魔法」と思しき現象が起きていたのだが、鉄兵はそれに気がつかず自分の考えにのめりこんでいく。

ここが異世界であった場合の問題点を考える。

とりあえず呑気なところでは、元の世界の問題だ。最近は家に帰ってないし放任されてるからしばらくの間は家族も心配しないだろう。大学の関係者は急に自分が姿を現さなくなれば心配するだろうが、一週間くらい高校時代の友人とぶらりと旅行に行く事もざらに

あったので、こっちもしばらくは大丈夫か？　いずれにせよそんなにすぐに帰れる気がしないので問題にはなるだろうが、まあ帰れてから考えても遅くは無いだろう。

大学の授業はといえば、前期の必修は実験と製図。これは二回休むと問答無用で「不可」になる。他の単位は卒業に必要な分まで楽々足りているが、その二つの必修は取れないと４年に上がれないから留年確定だ。今日は木曜日で実験は月曜日、製図は水曜日の講義である。つまり１１日以内に帰れないと留年確定である。そんな簡単に帰れる気がしない。最悪だ。留年がほぼ確定してしまった。

就活はせずに研究者の道に進む事を決めてた事だけが救いだろう。そっちの道は一回くらい留年してたところで評価はあんまり変らない。とはいえ親にもう一年無駄な出費を出させて負担になるのは心苦しいので学長になんとか奨学金を受けれないか相談してみよう。

さて、切実な問題はなんだろう？

とりあえず食料問題だろうか。この世界の物質が自分の体が分解して吸収できる物質ならば問題ないが、そうでないなら一ヶ月も経たずにＯＵＴだ。まあこれはどうしようもないから考えるだけ無駄だろう。さっき紅茶を飲んだ限り、水を飲めば喉が潤うことがわかっているだけ救いか？

次はこの世界についてなんにもわからないことについてだが、言語は違うが幸いな事に話が通じるようだし、シロに聞けばどうにかなるだろう。あまり特殊な世界じゃないと良いのだが。

お次はこの状況についてである。さっきの話を聞いたとおりなら、近くの町まで最低徒歩二日の距離らしい。時速４ｋｍで一日１０時

間歩いたとして大体８０ｋｍ。食料など装備もないし、一人で歩こうと思ったら下手すれば野垂れ死にである。街道というからには道はあるのだろうが、地図もコンパスもないし、万が一道を外れでもしたらもう終了である。日本かぶれのあの格好からは怪しいが、どうやら旅に慣れている様子のシロに近場の町まで連れて行ってもらうしかないだろう。

とりあえずの最後は先立つものが無いということだ。小銭くらいなら作業着に入っているが、貨幣が同じとは思えない。ようするに現在所持品０、所持金０の一文無しという状態である。多分公園にたむろってるホームレスの人達より悪い経済状況だろう。元の世界に返る方法を探すにもまずは生きて生活をしていかねばならない。町に着けば何か稼げるバイトがあるかもしれないが、それにしてもまずは資本が必要である。これもやはりシロに頼るしかない。

ついでに元の世界に返る方法がさっぱり検討すら付かないのが一番の問題だが、元の世界の問題から考えて、緊急の問題からは一段下げて考えることにしたので、今は考えないことにする。

とまあここまで考えて結論は出た。

シロにたかろう。

生きていく道は他に無い！

「シロ！」

「お？　おう、なんだ」

ぼーっと煙草をふかしていたシロはいきなり復活した鉄兵に声を

かけられてちょっと驚いたようだった。

そこでようやくシロが何も聞かずに鉄兵の気が治まるまでじっと待ってくれていた事に気が付いて、非常に良く出来た大人だなと感心をした。やはり良い人のようである。この分ならうまく厄介ごとを背負い込んでくれるかな？

「シロ、ぶしつけで申し訳ないんだけどお願いがあるんだ」

「金ならないぞ」

「それもあるけどそうじゃない」

「それもあるのかよ」

露骨にいやな顔をされたがここで投げ出されるわけには行かない。残念ながら鉄兵はこんな状況にほっぽりだされて生活していけるほど特殊な環境には育っていないのだ。ぶっちゃけこの交渉には自分の生死がかかっている。なんとか言い包めねば。

「シロ、俺を助けてくれないか？」

「いいぜ」

いいのかよ！　と思わず素で突っ込みそうになるくらいあっさりとうなづかれて、鉄兵は逆に肩透かしを食らったようにポカンとシロを見た。

「いいの？」

「良いも悪いも、俺は一度おまえさんを助けているんだが。助けないほうが良かったのか？」

鉄兵は慌てて首を振る。まさかそんなマゾではない。

「一度助けたなら身が落ち着くまでは助けてやるさ。でなけりゃ野暮ってなもんだろ？」

ニッと笑うシロを見て、鉄兵はシロの背後から後光でも射されてるかのように眩しそうに顔を覆った。

「シロ、あんた良い人だ！」

良い人だ。良い人過ぎる。これは……たかれる！

腕に覆われてシロからは見えない鉄兵の表情がニヤリと変化したのは君と僕との秘密である。

とはいえ旅慣れたシロが底抜けに人が良いだけの人物なわけはない。

鉄兵の姿を見て感じるものがあったのか

「まああんまり厚かましくしたらほっぽってとんずらするけどな」

と、しっかり釘を刺すのは忘れなかった。

異世界の歩き方（後書き）

８／１８：誤字修正
８／１８：文章の順番を変更（内容に変更無し）

「で、どんなトラブルなんだ？」

「は？」

「いやだから、助けてもらいたいってことはなにか厄介事に巻き込まれてるんだろ？」

そう言ったシロの表情は、なぜかわくわくしているようだった。

鉄兵はちょっと考えた。

さてどういって説明しようか。異世界から来たなんて言って信じてもらえるものだろうか？　いや、ひょっとしたら異世界人がひょいひょい現れるような世界なのかもしれないが、違ってたら頭のおかしい人と思われるかもしれない。それはあまり得策じゃないし、少しぼかして説明するか。

「簡単に言うと、常識が無くて困っている」

「そいつは残念な話だな」

「とはいっても頭が残念なわけじゃなくて『この大陸』の常識ね。転移魔法とかってここにはあるの？」

「あるにはあるが、こことしばらくは使える奴が出たって話はきかないねぇ」

精霊がいるなら魔法もあるだろうとカマをかけてみたが、やはり予想通り魔法はこの世界では常識のようだ。転移魔法もあるようだが、難しい魔法のようだ。時空転移の魔法でも使える人がいれば元の世界に帰れるかもしれないと思ったが、その案はどうやら没にせざるを得無そうだ。

「どうも俺は転移魔法のようなものに巻き込まれたみたいなんだ。俺はミッド大陸の出身じゃないし、ミッド大陸なんて場所も知らない」

「なるほど。だからさっき地名を聞いてあんなに血の気の引いたような顔をしてたわけか」

納得がいったというように、シロはポンと手を叩いた。

とりあえず嘘はついてない。ぼかしてもかなり胡散臭い話になってしまったが、うまく納得してくれたようだ。

「そういうわけだから、この大陸の常識が無い。ついでにお金が無い。小銭くらいなら持ってるけど多分この大陸では使えない」

「世知辛いねぇ」

金の話をするとシロは苦々しい顔をした。金の相談が厄介事であるのはどこの世界でも一緒のようだ。

「で、俺はどうやっておまえさんを助ければ良いんだ？　俺は転移魔法なんて使えないぜ？」

「シロは旅人だろ？」

「まあな」

「なら、しばらくの間、一緒に連れてってくれないか？」

シロは気の乗らなそうな顔をした。

「俺は一人旅が好きなんだがなぁ」

まああんな酔狂な格好で旅をしている人間だ。多分そうだろうと思っていたし、一応は対策も考えてある。

「自慢じゃないが俺は頭が良い」

「ほう？」

「この大陸の常識は持ってないけど、多分シロが知らないような事を色々と知っている」

「その心は？」

「俺と一緒だときっと楽しいぜ」

鉄兵の言葉にシロはニッ笑った。

「あっはっは！　確かにテツは楽しい奴のようだ」

「しばらくよろしく」

鉄兵はニヤリと笑って右手を差し出した。

「あぁ、しばらくな」

シロも笑顔でその手を握り返した。

「さて、そういう事ならこの大陸の常識については旅の間においおい話すとして、そろそろ出発するかね。テツもさっさと町で休みたいだろ」

太陽はまだまだ頂点に達したばかりの頃だ。これから出発してもまだまだ距離を稼げるだろう。

「服着るついでに焚き火を消してあっちの荷物を取ってきてくれ。持ってもらうぞ」

「了解」

鉄兵が立ち上がると、シロは茶道具を片付け始めた。

鉄兵は焚き火に近寄り、干してある作業着を着た。

ついで近くに用意してあった土山から土を取り、焚き火にかけて火を消す。ほどよく消えたところで上から蹴り潰していると、その音に反応してロバのハルコさんが目を覚ました。

ハルコさんは頭だけ起こして眠そうに首を振るとこっちを見た。目が合う。目と口周りの毛だけが白く、つぶらな瞳は非常に可愛らしい。

ハルコさんは鉄兵にあまり興味がなかったようで、軽く嘶いて顔

をそむけた。

『おはようさん』

その嘶きは、鉄兵にはそう聞こえた。

ロバが喋った。その事実に鉄兵はぎょっとする。

が、ここは異世界である。ロバが喋るのも不思議ではないのかもしれない。

「おはようございます」

なので鉄兵も紳士的に挨拶を返した。

するとハルコさんはビクッと身体を振るわせた。

『あら驚いた。あなた私と話せるのね』

ハルコさんがむくっと起き上がって嘶く。

驚かれてしまいました。やっぱりロバが喋るのはこの世界でも普通のことではないらしい。

「話せるようですね。こっちも驚いてます」

『不思議なこともあるのねぇ』

ハルコさんは首を傾げて嘶いた。全く以ってこちらも同意見である。

「お、さっそくハルコさんと仲良くなったのか？」

そこにパラソルを差したシロが寄ってきた。

「シロ、ロバと話せるのはこの大陸だと普通のことなのか？」

「なんの話だ？」

「いや、今ハルコさんと話してたんだ」

「ほう」とシロが感心する。

「最近の翻訳機はレベルが高いんだな。ハルコさんと話せるなら俺も買おうかな」

そういやシロは未だに鉄兵が翻訳機を使っていると思っているようだ。無論そんなものは使っていないが、無駄に警戒されると困るし面倒だから言わないことにする。

「ハルコさん、いつもお世話になってます。って伝えてくれないか？」

通訳を頼まれてしまった。鉄兵はシロの言葉をそのままハルコさんに伝える。

『こちらこそ。良い主人で私も楽よ』

鉄兵はそのハルコさんの言葉をシロに伝えた。まさかロバと人間の通訳士をする日が来るとは思ってもいなかった。

とまあそんな一幕があってしばらく鉄兵は通訳に没頭させられたが、話はおいおいという事でさっさと出発することになった。

両手で抱えられない程の大きなリュックを気合を入れて持ち上げる。そうすると荷物は予想外に軽くて鉄兵はよろめいた。

ずいぶん重そうに見えたが中身は軽いものが詰まっているのだろうか？　片手で持ってみるとやっぱり軽い。が、なぜか生地が千切れそうなほどに引っ張られていたので慌てて両手で持つ。

ふと視線を感じてそちらを見ると、シロが驚いた表情でこっちを見ていた。

「いやぁ……おまえさん、力持ちなんだなぁ」

よくわからないことを言う。

「なぁ、この傘を持ってみてくれねぇか？」

そういってパラソルを差し出されたので持ってみる。これがどうかしたのだろうか？

やはりシロは驚いているようだったが、すぐに立ち直ってニッ笑った。

「こいつは良い。ついでに傘持ちも頼むかな」

「男同士で相合傘なんて丁重にお断りいたします」

冗談めかしたシロに鉄兵も冗談めかしてパラソルと返事を返した。冗談とはいえ本音でもあるが。

「そんじゃ出発するか」

パラソルを差しなおしたシロはハルコさんをとんとんと叩いて歩くよう促すと、自分も歩き始めた。

荷物を背負って鉄兵も歩き出す。ちなみにハルコさんは一切荷物を背負わされていない。なぜなのかとシロに聞いたところハルコさんは旅のお供で荷物持ちの従者ではないからだそうだ。どうやら今の鉄兵の待遇はハルコさん以下らしい。

街道を行く道すがら、この世界のことを聞いていく。

大陸の地図をみせてもらったのだが、この大陸は6つの国に分かれているようだった。あえて言えば北海道のような形をした大陸なのだが、中央に少し小さな国があり、先の尖った六角形のような領土を持っている。他は大体がその尖ったところを境目に綺麗に6つにわかれているのだが、なんでそんな綺麗に分かれているのかシロに聞いてみたところ、竜人と呼ばれる種族が真ん中の領土を占拠してしまったからしい。

竜人はもともと端の方の山脈に住んでいたらしいが、大昔の戦国時代に当たる時期に周辺国からちょくちょくとちょっかいを出されたらしい。どうもそれを近所迷惑と感じた竜人は、そっちがその気ならばと立ち上がり、大陸の中央を制覇して今のような領土を奪ってしまったらしい。

その強力な軍事力に立ち向かえる国は無く、新たな竜人の領土は

事実上の中立地帯となった。そうなると尖った六角形の頂点を境に他国に攻め入るための要所が使えなくなったらしく、限られた範囲の中だけで戦争は続けられ、やがて統合が終わり自然と7つの国の姿に落ち着いたらしい。

竜人がいるのならば他にはどんな種族がこの大陸にはいるのかと聞いてみたところ、代表的なのは6つの種族のようだ。人間族、魔族、獣人族、精霊族、幽鬼族、そして竜人族の6種族である。

人間族はそのまま人間の事である。

魔族は人間と外見は同じだが基本的に青黒い肌をしていてるらしい。性格は基本的に好戦的で傲慢のようだ。

獣人族は二足歩行で道具を使う人間型の獣といったものらしい。漫画に出てくるような耳のみ獣の種族もいるらしいが、それは人間族と獣人族のハーフで半獣人と言い、もうちょっと獣っぽいらしい。

精霊族は人間よりやや小柄で耳と目が特徴の種族らしい。簡単に言えばエルフのような生き物のようだ。

幽鬼族は人間と同じ姿らしいが独特の特殊能力をもっているらしい。血を吸わない吸血鬼みたいなものだろうか。

竜人族は基本的には人間と同じ外見のようだが、特殊能力で西洋竜の姿になれるらしい。

代表的なのはその6種族だが、その他、巨人族やら魚人族やら色々な種族がいるようだ。

貨幣については国ごとに流通貨幣が違うので基本的に国境を越えたら交換しなくてはならないらしい。基本的にというのは他の国の貨幣価値のが高く、そちらで取引をした方が喜ばれる国もあるからだ。

どの国も流通している貨幣の種類は同じで、銅貨、銀貨、金貨、白金貨がそれぞれ大小の2種類づつらしい。それぞれの小硬貨5枚で大硬貨1枚の価値。大硬貨2枚で次に価値の高い小硬貨1枚の価値のようだ。ちなみに大硬貨は小硬貨の5倍の大きさがあるのかといえばそうではなく、原材料の質の低いものが小硬貨に使われ、質の高いものが大硬貨に使われているので大きさは１００円玉と５００円玉位の差である。

ついでにシロがパラソルをさしたままだったのでその事を聞いてみると、色素が薄くて直射日光に弱いらしい。まあシロの白っぷりをみれば納得できる話である。名前までシロなのだから色素が限りなく薄いのも無理らしからぬ事だ。なので特注製の傘をいつもさしているらしいがこれが相当重いという。

そこで判明したのだが、どうやら鉄兵の筋力は相当上がっているらしい。

さきほど傘を持った時にそんなに重くも無かったので

「そんなでも無いだろう」

と言ったら

「この傘は俺の体重より重いんだがなぁ」

と言われてしまったのだ。

シロは鉄兵ほどじゃないにせよ身長が高い。恐らく１８０ｃｍはあり、黒の着流し姿の裾からはみ出る筋肉は結構がっしりしているように見える。少なく見積もっても６５ｋｇは超えているように思える。

なので半信半疑でいたら俺を持ち上げてみろよと言われ、持ち上げてみたのだが、実際簡単に持ち上がってしまった。

そこでなにかを思いついたらしいシロに右手を地面と水平にして高く上げるように言われたのでやってみたら、傘を差したままのシロの身体がふわりと舞った。

あまりに高く跳んだのでびっくりして硬直していると、シロはそのまま鉄兵の手のひらの上に着地した。都合大人二人分の重量を片手のひらで持ち上げているわけだが、重さはほとんど感じない。

「あっはっは。こいつはいい。このまま持ち運んでもらうかな」

と機嫌が良さそうなシロの声が頭の上から聞こえてきたのでしばらくはそれに付き合いそのまま歩いていたが、重くなくても腕が疲れるので降りてもらった。

「しかしたいしたものだな。今のを大道芸で披露したら稼げるんじゃないか？」

と上機嫌にシロが言う。確かにそれもありだなと思ったので案の一つに加える。

だが、なんでいきなり筋力が上がったのだろうか？

月のように重力が弱いのかなとも考えたが、それにしては道々の草花や動物も地球と似たような生態をしている。さきほどシロがものすごいジャンプ力を披露していたのでその可能性は高いと思ったのだが、試しに自分も荷物を置いて思いっきりジャンプしてみたら１０ｍほど跳べてしまった。重力が弱いと言っても跳びすぎである。

環境のせいではないとすると、突然目が良くなったり筋力が格段にあがったりと自分の身体に何が起こっているのかが気になるところだし、その能力について測定してみたいところだが、いずれにせよ比較対象が今のところシロしかいないので、検討するのは町についてからの方が良いだろう。シロにしても自分の体重以上の重さの傘を差していたりと、普通の人間ではない気がするのだ。

そんな風にして旅をしているとやがて日が暮れてきた。

なので野営の準備を始めることにしたのだが、そこで鉄兵がこの世界に迷い込んでから最初の事件が起こった。

旅の始まり（後書き）

１２／３１：指摘いただいた誤字修正
城→シロ

「そろそろ野営の準備かな」

日もだいぶ傾き、空が赤みを帯び始めた頃、シロが辺りをちらりと見ていった。

街道の横には小川が流れ、反対側にはちょうど森にも開けた場所がある。野営をするポイントとしては絶好の場所だろう。

「今日はここまでか」

なるべく早く町に着きたいが、徒歩で二日の距離なのだから焦っても無駄だろう。鉄兵は人生初の野営に緊張しつつ開けた場所に荷物を下ろした。

「町までは後どれくらい？」

「まあ急げば明日の今頃かな。ちなみにテツは野営の経験は？」

「全くのゼロ」

それを聞いてシロが軽くため息を吐く。

「んじゃ森に行って焚き木でも拾ってきてくれ。なるべく乾いてるやつを頼むぜ」

シロは鉄兵が下ろした荷物をがさがさ漁り、ベルト付きの鉈と革紐を取り出して鉄兵に渡した。

「了解」

落ちてる木の枝を革紐でまとめて持ってくれば良いのかな？　多分鉈は藪を切り開く用だろうなどと考えつつ、鉄兵はそれを受け取って森の中に入っていった。

街道から森の中に入ると一転して空気が変る。ひどく青臭い濃密な森の空気を嗅いだのは小学生以来のことだった。

虫の声はうるさいほどに鳴り響いている。だが、動くもの一つ見当たらない、ある意味で静謐としたその空間は、これも一種の異世界だなとか鉄兵は思った。

森での注意はなんだったか。確か窪地にはガスが溜まっていて下手すると一酸化中毒を起こすとかあったな。などと考えながら、鉄兵は腐葉土になりかけの朽ちた枯葉に混ざって落ちている木の枝を拾っていく。

ふと、鉄兵は森の木の中に樫の木が混ざっているのに気がついた。

腰に下げた鉈を見ながらちと考える。

ある事を思いついた鉄兵は、最近では蚊を潰すのでさえためらい、研究室では用紙の無駄遣い厳禁とエコを叩き込まれていたので少し躊躇ったが、心の中でごめんなさいと呟きつつ、その樫の木の中から若干小振りのものを選んで一本切ってもって帰ることにした。

集めた焚き木を下ろし、鉈を手にして樫の木の根元に標準を合わせる。そのまま鉈を思い切り樫の木に打ち込むと、予想以上に手応

え無く、ガコーンと鼓膜の割れそうな大きな音を残して鉈は樫の木を二つに切断した。

ズシーンと大きな響きと振動を大地に残し、樫の木が倒れる。

鉄兵は自分の力の無茶っぷりに少し驚いたが、さっきの要領で倒れた木から木の枝を切り離し、できた丸太を２ｍほどの間隔で切っていった。６ｍほどの樫の木だったのだが、先の方は細すぎて使えそうに無かったので、２つだけまとめて持っていくことにする。

とそこまで作業を終えた鉄兵は、森の空気が変っていることに気がついた。

なにが変ったのかと辺りを窺う鉄兵は、すぐにある事に気がついた。

虫の声が聞こえないのだ。

さきほどまではあれほどうるさかった虫の声が完全に途絶えている。その事実に、鉄兵はなにか異常事態が起きている事を悟った。

不意に寒気が走る。

強烈な威圧感が背後から迫る。物音一つしない森の中で、近づいてくるカサカサと枯葉の擦れる音だけが耳に届く。

鉄兵は鉈を手に、思い切って背後を振り返った。と同時に目の前にその威圧感の主が躍り出た。

緊張の中、その正体を見定める。

「!?」

威圧感の正体に鉄兵は戸惑った。発する気配とその姿に余りにもギャップがあったのだ。

威圧感の主は、一人の人間の女性だった。

眼光鋭い、両刃の剣を構えた一人の女性。やや大柄のその女性は、こんな状況にも関わらず思わず見とれてしまうほどの美人であった。

一言でその女性を言い表すなら、それは『高貴』だった。

容姿が美しいのは無論ながら、その身に纏う空気すらも美しかった。剣を構えるその姿は、全てが凛々しく、気高さに溢れている。

赤に近い茶色のセミロングヘアをカチューシャで束ねたその女性の剣は光を帯び、身に纏っている赤色の革鎧と思しきその鎧には、なにやら複雑な模様が刻み込まれている。神話の絵から飛び出してきたようなその姿は、鉄兵にギリシャ神話の戦女神を連想させた。

鉄兵にとっては二人目の異世界人との遭遇だったわけだが、その美形率に呆れてしまう。とはいえシロも美形だが、残念ながら格が違う。

こんな人間が本当にいるんだなと鉄兵が驚き怯んでいると、女性の表情に変化が現れた。

「なんだ人間か」

女性がぼそっと呟いた。その表情がふと緩む。

その途端から徐々に虫の声がまた鳴り始め、森の空気は元に戻った。

女性の表情は緩み、森の空気は戻ったが、それでも構えを解いてはいなかった。

「この街道は現在閉鎖されている。貴公はなぜこんなところにいるのだ？」

初耳である。シロもそんな事は一言も口にしていない。

鉄兵がまごまごしていると、女性の表情に鋭さが加わった。

「貴様、山賊の類か？」

女性が手に持った剣を立てる。

「いえ、ただの旅人です」

慌てて鉈を手放し手を挙げて、降参のポーズをする。

「まあ良い。今日はこれまでだな」

女性はしばらくじっと鉄兵を観察していたが、やがて再び表情が緩み、剣を鞘に納めた。

女性が鉄兵にニコッと微笑みかけた。

「野営の準備中か」

「ええ、そうです」

女性は緊張を解いていたが、鉄兵は女性の零れるような笑顔にさらに緊張を深めてしまう。

「そんなにしゃちほこばるな。構わん、普段通りにいたせ」

口調すらも高貴であった。高貴だ高貴だとは思ったが、どうも本当に高貴なお方のようだ。そんな人がなぜ武装してこんなところにいるのかは知らないが、どうにもこの世界の人間はわかりやすい人が多いみたいだなとか鉄兵は失礼な事を考えた。

「それじゃ遠慮なく」

「よろしい」

素直な鉄兵の返事に、我が意を得たと言わんばかりに女性は再び微笑んだ。惚れてしまいそうなほどの素直な笑顔である。

「野営地が決まっているならちょうど良い。ご相伴に預かるぞ。焚き木の確保は手伝おう」

どうにも奇妙な展開になったようだが、命令慣れしているらしいその口調に鉄兵は抗う気すら起きなかった。焚き木を拾い始めた女性を見習い、鉄兵も散らばった荷物をまとめ始める。

必要分の焚き木が揃うと革紐で一つにまとめて脇にかかえ、先ほど切り出した樫の丸太を肩に担ぐ。

女性が半分持つと主張したが「重くないからいいです」と断る。それでも食い下がってきそうだったから樫の丸太を人差し指の先に乗せてバランスを取って見せると納得したようだった。というかものすごく驚いて硬直していたので、その隙にさっさと歩き出した。その後に慌てて女性がついてくる。

「そなた、ものすごい力の持ち主だな。そうは見えぬが幽鬼族なのか？」

「いや人間ですよ」

女性は「そうか」と頷いたが、何か納得できないようでもあった。

「そういえば名を名乗っていなかったな。私はアリスだ。貴公は？」

「鉄兵です」

ふむ、とアリスは頷くと、しばし宙を見てなにやら呟き始めた。

「よろしく頼むぞ、鉄兵」

「はい、よろしく」

シロは鉄兵の名前を発音できなかったので、アリスが自分の名を呼ぶのを聞いてちょっと驚く。が、久々に聞いた気がするその発音に鉄兵は少し嬉しくなった。

野営地に戻る道すがら、先ほど言っていた、街道を閉鎖しているという話を詳しく聞く。なにやらガルムという大型の魔獣が発生し

たらしく、討伐されるまでは閉鎖の予定なのだそうな。もう5日ほど前の話なのでシロがここいるのはおかしいはずなのだが、まあシロの事だから何をしててもおかしくない気がする。ちなみにアリスはその魔獣を成敗しに来たらしいが、一人で来たという事は腕に自信があるのだろう。先ほどの威圧感を見ればそれも納得できる気がする。

それから野営地には連れがいると言う事を説明した後に、アリスは西洋風の格好でシロは日本風の格好なので、どちらが一般的なのか聞いてみたのだが、アリスはシロのような格好は聞いたことすらないそうだ。やはりシロは変人だったようだ。

そんな風に話を重ねていると、野営地に着く頃には鉄兵の緊張も解け、普段の口調で話せるようになっていた。

「おや、こいつはえらい美人を連れてきたな。どこで攫ってきたんだ？」

野営地に着くと、すでに準備を終えていたシロが煙管をふかしつつ冗談を飛ばしてきた。

「状況的にはその逆が近いんだけどな」

「無礼を言うな。迷惑だったのか？」

冗談だってと鉄兵は笑いかけたが、アリスは口をへの字にして拗ねてしまった。凛々しいという言葉が似合うアリスだが、そういう表情をすると意外と可愛らしい。

「貴殿がシロ殿か。私はアリスだ。野営を相伴したい。世話になる」

「よくわからんがよろしくなお嬢ちゃん。確かこの国のお転婆な第三王女がそんな名前だったっけか？　武が立ちすぎて狭い王宮に収まりきらず、世直しの旅をしてるとか聞いたことあるな」

「良くある名前だ」

含みのある笑顔をお互いに向けている。これは俗に言う暗黙の了解というやつではないか？

「ひょっとして俺、すごい失礼な事してる？」

「おいおいテツよ、何を言っているんだ？」

「そうだぞ鉄兵。私達は第三王女の話をしてただけだ」

なにやら楽しげに諭されてしまった。まあそれならそういう事にしておいた方がいいだろう。面倒事は少ないに限る。

「さて、夕食の支度にとりかかるかね」

「私も手伝おう」

シロとアリスは二人で夕食の準備を始めてしまった。王女様のくせにアリスはなかなか手際良くシロを手伝っている。こうなると生活無能力者の鉄兵は暇である。焚き火の番をしつつ、切り出してきた樫の丸太をナイフを借りて削り始めた。

そうこうしているうちに夕食ができ、みんなで食べ始める。メニ

ューは塩味の豆のスープと干し肉である。味気ない食事だなと思いながら食べてみると、塩味が絶妙で案外おいしかった。

「そういえばこの街道封鎖されてるらしいぞ。シロは知ってたのか？」

食事をしながらシロにきいてみる。

「ガルムだろ？　そりゃ知ってるさ。そいつを見物にきたんだからな」

なんとなく予想できたがやはりシロはろくでもなかった。

「おぬしもなかなか豪胆だな」

アリスが関心したようにほーうと声を漏らす。

一人で退治しに来たあんたもな。と突っ込みたかったが、相手は王女様なので黙っておいた。

食事が終わって一息入れていると、シロがリュックの中からケースを取り出し、その中からアコースティックギターのようなものを取り出して引き始めた。その音にシロの声が乗り、物語が語られる。

物語は、竜人の悲恋の話だった。よく聞くどこにでもありそうな話だったが、シロの技量も相まって、鉄兵はいつしか樫の木を削る手を止めて聞き惚れた。

やがて話は終わり、音色が止む。二つの拍手が満天の星空の下に響いた。

「すごいなシロ。上手いよ！」

「なかなかたいしたものだ」

アリスと二人でシロを褒める。

「本職だからな」

その言葉に、シロは楽器を鳴らしながら軽くウィンクをして答えた。

「吟遊詩人であったのか。なるほど。それならばその奇抜な格好も納得ができるというものだ」

アリスは感心したように頷いている。鉄兵は「吟遊詩人というよりは遊び人の気がする」とか思ったが、口にするのはやめておいた。

シロの演奏をバックミュージックに、穏やかに夜が流れていく。

「よし完成」

ひたすら樫の木を削っていた鉄兵は、完成したそれを見て満足そうに頷いた。

「木剣か？　変った形をしているな」

完成した鉄兵の手の中のものを覗き込んでアリスが聞いてくる。

「木刀っていうんだよ。うちの国ではこれが主流かな」

鉄兵が樫の木を削って作っていたのは木刀だった。生木を削って作ったので出来は最悪だが、とりあえずはこれで良いだろう。樫の丸太はもう一つあるので乾いた頃にもう一本作る予定である。魔物とかもいるようだし、こんなものでも武器は持っておいた方が良いと思ったのだ。

魔物といえばそういえば。

「そういやガルムってのはどんな魔獣なんだ？」

出来上がったばかりの木刀を軽く振り回しながらアリスに聞く。

「そうだな……」

アリスがガルムについて説明を始める。

と、そこにアリスの背後の草陰がガサっと音を立て、ひょっこりと犬のようなものが頭を出した。どうやら狼の子供のようだ。なかなか可愛らしい。

「ガルムは魔力感応力が強い狼が魔力に当てられた魔獣でな、普段はまさに普通の狼の姿をしている」

その狼の子供から、なにか黒い霧の様な物が噴出してその身に纏わり始める。

「だが体内に溜めた魔力を解放すると巨大化してな。黒い大きな獣になる」

黒い霧はどうやら質量をもっているようで、まわりの木をメキメキと押しつぶし、狼はみるみる巨大化していく。

「まあ体長１０ｍくらいが一般的だな。今回は発生したばかりだからもっと小さいかもしれん」

１０ｍとか嘘ですね……あなたの後ろのアレは３０ｍはありますよ。

「……」

気が付くと、シロの演奏が止まっていた。ちらりと見るとシロの顔は引きつっていた。たぶん自分も同じような顔をしているだろう。

「……テツよ」

「はい」

「あれはさすがに大きすぎるよな」

「そう思います」

「俺はハルコさんを背負うからテツはお嬢ちゃんを頼む」

「了解いたしました」

打ち合わせが終了した。

「どうしたのだ？」

未だ背後の巨大な獣に気が付いてないアリスは、二人の顔を見て怪訝な表情を見せていた。が、二人の視線が自分の後ろに向いている事に気が付いて、背後を振り返る。

「！！？」

さすがにこのでかさは予想外だったのだろう。アリスの身体が硬直する。

それを合図に全てが動き出した。

ガルムがアリスに襲い掛かり、大人一人分はありそうな巨大な爪がアリスに伸びる。

その爪がアリスに届こうとするその瞬間。なんとか間に合った鉄兵がアリスの身をかっさらい、横っ飛びに飛んで転げ回った。

転がってる間に体勢を立て直した鉄兵は、未だ転がるアリスを受け止め、だっこする。俗に言うお姫様だっこだが、これ以上にこのだっこが相応しい相手もいないだろう。

「全力で逃げるぞ！」

ハルコさんを肩に担いだシロが叫ぶ。色々突っ込みたいところだがそれどころではない。

「了解！」

鉄兵は一声叫んで脱兎のごとく逃げ出した。

一目散に逃げる鉄兵達を、木々を押しのけガルムが追撃し始める。

かくして非常に環境にやさしくない命をかけた鬼ごっこがはじまった。

アリス・イン・アナザーワールド（後書き）

２０１１／１／１３：指摘いただいた誤字修正
「腕に自身があるのだろう」
→「腕に自信があるのだろう」

新たな仲間

鉄兵は半ば涙目になりながら必死に足を動かしていた。

後ろからはまさに山のような巨体が迫ってくる。まるで悪夢のような現実に遠い世界に行ってしまいたくなる。が、一瞬でも気を抜いたらそれこそ本当に遠い世界にいけてしまうだろう。つまりは死後の世界へだ。

アリスとは比べ物にならないほどの圧倒的な威圧感に吐き気を催しそうになる。ガルム本来の平均体長である１０ｍだとしても家一件分の大きさとティラノサウルスと変らない脅威度だが、後ろのガルムは体長３０ｍもあるのだ。建物で言えば１０階建てのビル。生物で言うなら最大級のシロナガスクジラがそれくらいの大きさだと考えていただければ分かりやすいだろうか。

そんなものが元の姿である狼同様の俊敏さで迫ってくるのだからすぐに追いつかれてしまいそうなものだったが、今のところ、このチェイスは拮抗を保っている。そうであってくれと祈りながら走り出したのだが、鉄兵の足は鉄兵の期待通りに強化されていて、アリスを抱っこした状態でさえなんとか追いつかれずに逃げれていた。

周囲の景色がものすごい速さで流れていく。多分今いるような街道でＦ１カーに乗って全速力でかっ飛ばせばこんな景色が見えるのだろう。そんな命がけの追いかけっこの最中だが、それでも続けていれば慣れてくるもので、次第に頭が働いてくる。

鉄兵達は自分が来た方向とは逆の方向に走っている。今は街道を走っているが、この速度ならそれほど経たずに町についてしまう気

がする。

「森の中だ。二手に分かれるぞ！」

同じ考えに至ったのか、鉄兵の横を走るシロが険しい声で叫んだ。

「アリス、身を丸めて！」

このまま森の中を駆け抜ければ腕の中のアリスに指示を出す。その意図が通じたようで、アリスは鉄兵の胸に抱きつき、膝をまげてしっかりと鉄兵の腕に固定した。

「せーの！」

シロの合図で左右にわかれ、一斉に森の中に飛び込んだ。

急に獲物が二手に分かれたことでガルムは戸惑ったようだったが、よほどお姫様にご執心なのか、しばし迷ってこっちを追ってきた。

森の木を押し倒して走るガルムの姿はエコ戦士であるいつもの鉄兵なら卒倒するような光景だが、今はそれどころではない。視力どころか動体視力すらも強化され、さらには暗視能力さえも得ていた眼力で森の木の位置を見極めながら、疾風のように夜の森を駆け抜ける。

森に入ったのは正解だったようだ。木を回避しなければいけないから走る速度は落ちたものの、走りにくいのはガルムも同じようで、さらには木々に目くらましの効果があり、徐々に距離が広まってきた。

とはいえこのまま振り切れそうかといえばそれは難しいだろう。どうしたものかと鉄兵が酸欠になりそうな頭で考えていると、ふと自分に抱きついているアリスがごそごそと動き出した。目線をそちらに向けるわけにはいかないから確かめようが無いが、なにやら自分の腰の辺りを探っているようだ。

「光るぞ、気をつけろ！」

アリスが叫び、何かを後ろに投げつけたようだった。

アリスが投げたものが淡い光を放ちつつ放物線を描く。近くの木に辺り砕けたそれは、その瞬間、強烈な光を発した。

その光の強烈さに、ガルムが怯み、足を止める。

「今だ！　引き離せ！」

言われなくても全速力で、それこそ死ぬ気で森を駆け抜ける。

「右手に川がある。川中をしばらく走って反対側に抜けろ！」

アリスの指示が飛ぶ、相手は狼である。いくら距離を離したとしても匂いを辿られたらそれまでだ。

鉄兵は川に飛び込み流れを逆走を始めた。かなり速度が落ちるし水音はバチャバチャとうるさい音を立てる。これで気がつかれたらそれまでだが、今はこうするしかない。

５００m程もそうやって川を逆走した鉄兵は、川の中から思いっきり跳躍し、川辺に水の後をつけることなく反対側の森の中に入っ

た。

アリスを下ろして地に伏せさせ、庇う様にその上に覆いかぶさり、息を殺して辺りの様子を窺う。

ガルムの姿が遠くに見えた。かなり遠くにいるはずだが、それでも大きく見えるその巨体は、どうやらこちらを見失ったようで、見当外れの方向をさまよっている。

それを確認するとさすがに緊張感の糸が切れ、鉄兵はアリスにもたれかかって荒い息を吐いた。

アリスの頬に顔をあて、抱きつくようにおぶさる。とんでもない体勢の気もするが、あの危機を脱出した後である。何も考える事などできない。

「こほんっ。なんとか逃げ切れたようだな」

「ああ」

それより多少は冷静であったアリスは咳払いをしつつ離れるように促す。だがそれに気がつく余裕があるはずもない鉄兵はうなだれるように返事をするのが精一杯だったし、ましてやアリスの顔が真っ赤に染まっている事になどに気がつけるはずもなかった。

やがて息が整うと、鉄兵は立ち上がって伸びをした。馬鹿げた話だが、わずかに休んだだけなのに体力はもう回復していた。とはいえ限界以上の力を使ったという記憶から来る倦怠感だけは去る事が無く、今すぐにもう一度同じ事をやれといわれたら無理だろうが。

「とりあえず助かった……のかな？」

「しかし、あれを野放しにする事はできないが、倒せる気もせん。どうしたものか……」

まだあの化け物と戦うらしい。根性のあるお姫様だ。

ならば俺は手伝うのか？　としばし宙に視線を彷徨わせながら考えたが、結論はすぐにでた。

無理。

確かに昔は剣道少年で、争いに対する抵抗感は一般的な人間に比べたら薄いだろう。原因不明に強化されているこの肉体ならひょっとしたらあの化け物とも互角に戦えるのかもなーとかも一瞬考えてしまったが、肉体能力と心構えは別物なのだ。

剣道で鍛えた心構えは、あくまで人間サイズのものに対する心構えなのだ。あんな化け物と戦う心構えではない。その覚悟ができてない以上、例えヘタレと言われようが、それが絶対に必要な状況でもない限り、蛮勇は奮うものではないのだ。でないと返って足手まといというものだ。

とはいえ、このまま見捨てるのも後味が悪いのもまた事実だ。自分が関わらなくても何とかなる状況だと良いのだが……

「町に行けばあいつを倒せそうな戦力はあるのか？」

「いや、無理だな。通常のガルムならまだ対処もできようが、あの特殊なガルム……フェンリルとでも言おうか。ともかくアレに対抗

できるような戦力は無い」

無理らしい。困ったものだ。まあお姫様が一人で退治に来ているような状況なのだから察して然るべきであったかもしれない。

ついでにそれを聞いて鉄兵は今の状況ではどうでも良い事に気がついた。フェンリルもガルムも北欧神話にでてくる狼の名前である。なんでそんな聞き覚えのある名称なのかと思ったら、恐らくは例の原因不明の翻訳機能のせいなのだろう。自分と同じ種族が人間と翻訳されたように、ガルムもその特徴が鉄兵の持つ知識の中で該当する名前が当てられているからなのだろう。

「しかし妙だな」

「なにが？」

「あのフェンリルには殺気がなかった。そう、だから気がつかずに先程のように不覚をとってしまったのだ。決して腰が抜けたわけではないぞ！」

さりげなく言い訳を混ぜたアリスの頬が少し赤みがかる。

本当に可愛い子だなぁと場違いな事を考えつつ、それを聞いて鉄兵はあのフェンリルの正体が子狼だった事を思い出した。

ひょっとして……

「あいつ、ひょっとして遊んでるつもりなんじゃないか？」

「どういうことだ？」

「あのフェンリルの本体は子供の狼だったんだ。だから狩りゴッコでもしてるつもりなんじゃないかと」

「……なるほどな」

アリスはその美しい顔に似合わない苦々しい顔をした。まあ子供の遊びであんな目にあったのだ。たまったものではない。

「まあここにいても始まらん。」

「それじゃとりあえず荷物のところに戻るか」

「そうだな」

アリスは頷くと鉄兵に向けて両手を振り上げた。そのままじっとしている。

「？」

なにやら柔道でも始めそうな姿勢だが、そのポーズの意味が分からず首を傾げる。

「抱っこして連れて行ってくれ。私はあんな速度で走れんぞ」

納得である。

それにしてもシロはアリスより重いであろうハルコさんを肩に担いで同じような速度を出していたはずなのだが。

……なんとなくそんな気はしていたのだが、やはりシロは人間族ではないのだろう。

ともあれ、アリスをお姫様だっこする。冷静にやると結構恥ずかしい。

しっかりアリスを抱きしめると、未だ巨大化したままのフェンリルの動向を気にしつつ、鉄兵は街道の脇を戻っていった。

「お疲れさん」

それから程なく野営地に着くと、すでにシロは帰って来ていた。相も変わらず煙管をふかし、飄々としている。ハルコさんも無事なようだ。

「さて、そんじゃ始めるかね」

ポン、と煙管の灰を捨て、シロが立ち上がる。

「なにをだ？」

「そりゃ犬の躾さ。ちょいと時間が合ったから考えてみたが、あんな迷惑な野犬をほったらかしとくわけにもいかんだろ」

呆れた事を事も無げに言ってくれる。何か策はあるのだろうか？

「どうにかなるのか？」

同じ事を思ったのだろう。アリスが不安を隠さずにシロに聞く。

「そりゃなるさ。俺は竜人族だからね。ちぃとばかしきついが、お嬢ちゃんにしてもガルムなら倒せる実力だあるんだろう？　ちょいと手伝っておくれよ」

なるほど、竜人族だったらしい。

「しかし竜人族とはいえ、私と協力したとしても厳しいのではないか？」

「厳しくたってやらなきゃいけない事もあるさ」

珍しくシロが真面目な顔をしている。どうにかなりそうではあるものの、状況はかなりシビアのようだ。

「……待て」

鉄兵はの口から押し殺した声が出る。

「止めるなよ」

厳しい視線でシロが睨む。

「……止めないさ」

どうやら蛮勇を奮わなければいけない事態のようである。

「前にも言ったが俺は頭が良い。なんの策も立てずに特攻するなんて俺の主義に反するんだよ」

そう言って、精一杯の強がりで鉄兵はシロにニヤリと笑った。

「無理しなさんなって」

鉄兵の強がりをもちろん見抜いているが、それを指摘するほど野暮ではない。シロはニッ笑ってそれ以上は何も言わなかった。

「しかし策といってもあの巨体に対して何の策を弄すというのだ？」

「それを考えるためにここに戻ってきたんだろ？　シロ、なんか役に立ちそうなものは持ってないか？」

「役に立ちそうなものねぇ。あいつに通用しそうなものってぇと……そうだな。あれくらいか？」

シロががさがさとリュックの中を漁り始める。やがて取り出したのは結構な長さのロープだった。

「こりゃ魔力でコーティングしてるロープだからな。あのでかぶつでも引きちぎるにゃてこずるだろうぜ」

ご都合主義の神様万歳である。長さも十分だし、これは使えそうだ。

「シロ。シロの竜人の能力はどんな感じ？」

「えーとだな。身長は１８ｍちょいだな。白竜だから氷の吐息を吐ける。二三分動きを止めてくれるなら、あのでかぶつだって凍らせて見せるぜ」

そいつは頼もしい言葉だ。実際にやってもらおう。

「アリス。あの光るやつまだ持ってる？」

「光玉の事か？　まだ何個か予備があるぞ」

ちなみに光玉は名前のまんま光の属性の魔力が篭った天然物の小さな水晶玉のようで、かなり値の張るものらしい。そのくせかなり壊れやすい物なのだが、壊れるとその時に魔力が開放されて閃光を発するらしい。

状況は整った。かなりひどい作戦だが、それでもなんとか作戦らしきものが鉄兵の頭脳に浮かぶ。

作戦内容を伝えると、結局のところ力任せの作戦にシロとアリスの二人は呆れたが、他に良い案も出なかったのでその作戦に決定した。

「いっちょ神話をなぞりますか」

「私は右腕を噛まれる役か……」

「俺は神様役だな。なかなか気分がいいねぇ」

ついでに語ったフェンリルに関する神話の内容を聞いて、それぞれに一喜一憂する。

というわけで鉄兵達は行動に移った。作戦を遂行するために各自準備に入る。

そして一時間程がたち、フェンリルが鉄兵達を探すのに飽き、毛

繕いを始めた頃、ドゴンッと派手な音が静かな森に響き渡った。

「OK。我ながらどうかと思うが成功した」

鉄兵の足元にはフェンリルが折った木を再利用した巨大な杭が角度を付けて打ち込まれていた。その端にはしっかりと溝を掘ってそこに何十にも巻いてロープが縛ってある。ロープが切られないというならば例えフェンリルが引っ張ったところでロープはすっぽ抜けたりしないだろう。ロープの先を辿って行くと、同じようにしてロープが縛られた、まだ打ち込まれていない丸太の杭が付いている。

「上手く気を引けたようだな」

アリスはその鉄兵の横でフェンリルの様子を伺っていた。フェンリルの方を見ると、思惑通り先ほどの音に気が付いたらしく、木々を掻き分け猛烈な速度でこちらに迫ってきていた。

「それじゃよろしく」

「しっかり頼むぞ」

握った右手の甲を互いに打ち合い、それぞれの配置に付く。

やがてフェンリルがアリスの姿を視認し、そこに殺到した。

圧倒的な迫力で迫り来るフェンリルに、アリスは神話の中のテュールのように、僅かたりとも怯む様子無くその右腕を差し出す。

フェンリルが右腕を引きちぎろうとするかのようにアリスに飛び掛ったその瞬間、アリスは右手を強く握り締めた。

アリスの右手の中の光玉が砕け散り、開かれたアリスの手のひらから光が溢れ、閃光が夜の闇を切り裂いた。

森の中での追いかけっこの時に引き続き、またしても視界を奪われたフェンリルは急制動をかけ、立ち尽くす。

そのフェンリルの背後に突如として白い竜が現れて宙に舞い、上空からフェンリルを踏み潰さんばかりに蹴り落とした。

１８ｍの体長を誇るシロのもう一つの姿である白龍は、まさに竜と呼ぶに相応しい荘厳さと体格を持っているが、フェンリルはそれを遥かに上回る巨体の持ち主である。体格的には大人と子供ほどの差があったのだが、それでも予期せぬ攻撃は十分な威力を発揮し、フェンリルの巨体が地に伏せその頭が地面に落ちる。

すかさず鉄兵は巨大な杭を持ったままフェンリルの喉元をすり抜けて頭の上を一周し、結び目を付ける様に輪になったロープの中を飛び潜ると地面に打った杭と対角方向に一気に加速を行った。

そしてそのままロープがピンと張ったところで巨大な丸太の杭を地面に打ち込む。

地に叩きつけられたフェンリルはようやくそこで我に返ったが、時はすでに遅かった。

立ち上がろうとするフェンリルが、ロープに束縛され再び巨体を地に落とす。

そこに、シロが深く息を吸い込み、気合とともに口を開けた。白

竜の放つ氷の吐息。氷点下の吹雪が吹き荒れ、フェンリルを白く凍らせていく。

動きの取れぬフェンリルは、みるみるその身を凍らされていく。それでもフェンリルは身を縛るロープを引きちぎりはしたが、それまでだった。

すでに4本の足を完全に凍らされていたフェンリルはもはや動く事はできず、凍らされていく。やがてフェンリルは地を揺らすような長い遠吠えを上げると、その姿のまま凍りついた。

完全にフェンリルが凍りついた事を確認すると、白竜は氷の吐息を吐き止め、静かに口を閉じた。と、その瞬間、見る間にその姿が縮み、憔悴したシロの姿が現れる。

「いやーお疲れさん。驚くほど上手くいったねしかし」

「失敗したら失敗したで、それでも不意は打てたんだからどうにでもなったさ」

互いに歩んで合流し、ハイタッチをして成功を祝う。

「私は右腕を噛み千切られなくてほっとしている。ん？　……なにか、おかしくないか？」

喜び合い、軽口を叩き合っていたその時、アリスが異変を感じて警戒を戻した。

それに習い、鉄兵とシロも警戒する。

確かに何かおかしかった。新たな危機の予感に身が熱くなる……
いや、実際に熱い！？

ふと、鉄兵は北欧神話のフェンリルについて思い出した。フェンリルは火を吐くのだ。こちらの世界のフェンリルは直接関連性はないが、これは……！！

三人はいっせいにフェンリルの方に振り返った。遠吠えの姿勢のまま凍らされていたために開いていた口の間から赤いものが見える。

フェンリルの身体を拘束していた氷がみるみると溶け出す。そして次の瞬間にはフェンリルの頭周りの氷が砕け、激しい炎が空を焦がした。

首までの拘束を打ち破ったフェンリルは、続いて地面に向けて炎を噴出した。真紅の炎が鉄兵達に迫る。シロは自力で、アリスは鉄兵に庇われて、間一髪で炎を避ける。

「……！！　この！！！」

激情に狩られた鉄兵は、半ば無意識に飛び上がり、フェンリルの口を上から叩き下ろした。炎を吐いていた口が強制的に閉じられて、牙の間から火が零れ漏れる。炎の噴射は止まったが、炎で解け始めもろくなっていたフェンリルを拘束していた氷はそれがきっかけとなって砕けちり、フェンリルは再び自由を取り戻した。

「うわあぁぁぁぁーーーー！！！！」

自由を取り戻したフェンリルは、鉄兵達に襲い掛かると思いきや、後ろを向いて逃亡を始めた。口の上にいた鉄兵は振り落とされそう

になり慌ててフェンリルの毛皮に捕まる。

ドクンッ

「！！？」

フェンリルの身体に触れた鉄兵は、奇妙な感覚に包まれた。

身体は必死にフェンリルの体毛に掴まりつつも。心はその奇妙な感覚の虜になる。

鉄兵はその奇妙な感覚の正体を突き止めようとした。

奇妙な感覚？　いや、これは一体感だ。

自分のものであるはずのものが自分の外にある感覚。だから奇妙に感じるのだ。

なぜ、それが自分の外にあるのだろう？

心の底からの奇妙な感覚に、鉄兵はその違和感をなくすべく、心身ともに感覚に身を委ねた。

外にあるものが自分の中に戻っていく。

「アアアオオォォォォォォーーーーー！！！！！」

その途端、フェンリルは雷にでも打たれたかのように身を震わせ、

月に向かって地鳴りのように吼えた。

その衝撃で鉄兵は振り落とされて地面に落ちる。

その鉄兵の身体に、吸い込まれていくものがあった。

フェンリルの身体が黒い霧に代わっていき、鉄兵の身体に吸い込まれていったのだ。

フェンリルは苦しそうに身を悶えさせ、やがてヒクヒクとその身を痙攣させつつ動きを止めた。

感覚に身を委ねていた鉄兵は、自分の身に起きている事にも気が付かず、陶酔した表情で黒い霧を吸い続けた。

やがてフェンリルの身体が縮むところまで縮み、黒い霧の放出が止まった。

黒い霧を吸い尽くし、鉄兵がはっと我に返った時。フェンリルがいた場所にいたものは、元の姿である子狼であった。

「キャン！」

逃げようとした子狼の首元を、先ほどまでの敵対心に身を任せて鉄兵は無意識に押さえつけた。

子狼がキャンキャンと泣き叫ぶ。

『こわい！　こわい！』

キャンキャンと鳴くそのフェンリルの鳴き声が翻訳されて鉄兵の耳に届く。

その声を聞いて、鉄兵はなんとも穏やかな気持ちになってしまった。果てしなく迷惑な存在ではあるが、まだ子供である事には変わりないのだ。

「俺も怖かったんだよ」

『!?』

子狼の声を聞いて落ち着いてしまった鉄兵は、つい気を緩ませてしまい、手も緩んでしまった。

「あ!」

その隙をついて子狼がぜんりょくで身体を揺らし、鉄兵の手の中からすり抜けた。森の藪に子狼の姿が消える。頭では追いかけるべきだと思ったが、しかし疲れ果てた鉄兵の精神がそれに続かなかった。

「おーい!」

もはや疲れ果てその場にへたり込んでいた鉄兵の耳に、聞き心地の良い二つの声が聞こえてきた。

「テツ!　大丈夫か!」

「鉄兵!　怪我は無いか?」

鉄兵の元に駆け寄ったシロとアリスの二人は、疲れて呆然とする鉄兵の肩を揺すり、ものすごく手際良く外傷を検査していった。

「いや、大丈夫だから。多分外傷は無いと思う」

大袈裟とも言えないが、その慌てように苦笑しつつ、軽く制止をかける。

「しかし、結局フェンリルの野郎には逃げられちまったな……カーッ！！　めんどくさいねぇ」

「そうだな。本国に応援を頼まねばならぬ」

「いや、それも大丈夫だと思う」

鉄兵の言葉に二人は？マークを頭に浮かべ、同時に首を傾げた。

「フェンリルの魔力は吸い取った」

「なんだと！？」

「どうも俺にはそういう能力があるらしい。多分」

そう、きっと多分さっきのアレはそういうことなんだろう。

「人間族が魔力を吸収するなど聞いた事がない。鉄兵は……つくづく規格外のようだな。本当に人間族なのか？」

「テツとは短い付き合いだが、そいつには俺も賛同だな」

自分でもそう思います。なんでこんな力が付いているのやら。今回は助かったが、別にこんな力が欲しかったとも思わない。科学者らしくさせて欲しいところだ。

「ほんとに人間です。人間でいさせてください。お願いします」

疲れ果てた末に出た本音だと一発で分かる鉄兵の呟きに、二人は苦笑する。

「良くは無いが、まあ良い……鉄兵の言う事が本当ならば、魔力を失ったフェンリルはしばらくの間は脅威ではないな。山狩り部隊を編成しよう。申し訳ないがまたフェンリルが復活した時に手伝っていただきたい。鉄兵に本当に魔力吸収などと言う伝説級の力があるのならば、フェンリルに関してはこれ以上に無い力なのだ」

「りょう……かい」

面倒事はいやだが、確かにそのとおりなのだろうなぁと思って了承する。というか、正直今は何も考えられなかったので機械のごとく頷いた。

そんな会話が終わると、本当に危機が去ったのだと実感した鉄兵以外の二人も急に疲労が現れたのだろう。鉄兵を見習ってその場にへたり込む。

虫の声が鳴り響く夜の森に、静かな時間が流れていく。シロの演奏を聞きつつすごしたこれとは違うがまた同じ静かな時間はもうどれくらい前の事だったのだろう。

やや余裕が出てきた頃、ふとアリスの方を見た鉄兵は、その顔を

見てぎょっとした。

アリスの口がへの字の曲がっている。ものすごく不機嫌そうなのだ。特に自分が悪かったとも思わないがこういう時は謝っておくに限る。女性に関してはそういうものなのだ。少なくとも鉄兵の経験では姉が二人ともそうだった。

「えーと、アリスさんごめんなさい」

「ん？　なぜ謝る？」

「いや、フェンリルを取り逃しちゃったし」

「それはあくまで結果だ。鉄兵は全力を尽くし、最悪の事態を回避してくれた。むしろ感謝している」

「けど、なんか不機嫌じゃないか？」

その言葉を聞いてアリスがへの字具合をさらに深める。

「気がついているか？　私は今回ほとんど活躍していないのだ」

なるほど。それは気が付きませんで申し訳御座いません。

けど、十分見せ場はあった気がする。生贄役はやっぱり美女がやらないとさまと思うのだ。などと思ったが、言ったら怒り出しそうだから心のうちにとどめておいた。

鉄兵は特にアリスに言葉をかけず、その凛々しいのではない可愛らしい不機嫌顔を横目で眺めていた。

話はここで終わりではない。

本当の顛末は精根尽き果てて野営地でぐったりと休み、朝になってなんとか起き上がれるような気力も出てきた頃に訪れた。

朝食の準備を始めた二人に比べて体調は万全なものの生活無能力な鉄兵は焚き火をぼーっと見ながら食事が出来るのをぼけーっと待っていた。

『あるじ！』

と、その時に耳に飛び込んできたその聞き覚えのある声と言葉の意味にぎょっとして声のした方を見た。その正体をみて、さらに驚きを増す。

『あるじ、あるじ！』

見覚えのある子供の狼がそこにいた。声の主は、昨日の大騒動の原因であるフェンリルだったのだ。

『あるじ、あるじ。つよいあるじ。こえわかるあるじ。いっしょにいたい』

フェンリルはなかまになりたそうにこちらをみている

ドストライクだった。

それはもう、鉄兵は大の猫派だったのに、この瞬間に犬派に趣旨換えしてしまったくらいに。

『あるじ、あるじ。いっしょにいたい』

千切れんばかりに尻尾を振り、キャンキャンと鉄兵にアピールする。

「テツよ……そいつぁひょっとして昨日のやつなんじゃねぇか？」

フェンリルの姿に気が付いたシロが、腕を組み、やや緊張しながら鉄兵に聞く。

「そうだけど、ちょっと待った！！」

鉄兵の言葉を聞いた瞬間に剣を抜き放ったアリスの前に立ち、慌ててそれを静止する。

「なぜ止める。ここで捕らえねば後が大変なのだぞ？」

「大丈夫だから。おいで」

鉄兵はアリスに背を向け片膝を付き、両手を開いてフェンリルを招きよせた。

『あるじ、あるじ。こえわかる。いっしょにいたい』

招かれたフェンリルは喜び勇んで鉄兵の腕の中に飛び込み、ペロ

ペロと鉄兵の顔を舐め、擦り寄った。

「えーっと……シロさん、アリスさん。お願いがあるのですが」

鉄兵はなるべく殊勝な態度を取ってみた。

「嫌な予感しかせんな」

「まったく同意見だな……まあ言ってみな」

「飼っちゃ……ダメ？」

なるべく可愛らしく言ってみる。ほとんどの男が見れば間違いなくキモイと思うだろうが、一部の男性と女性には需要がありそうだった。

シロは無言で空を見上げ、アリスは手を頭に置き溜息とともに首を振った。

「お嬢ちゃん。そいつの被害にあったやつはいるのか？」

空を見上げながらシロが聞く。

「いや、発見したのは郵便配達の竜騎手でその後封鎖前に互いの町から出発している商隊や旅人は全員無事が確認されている。恐らくは人的被害はゼロだろう」

「まあ、なら好きにすりゃあいいんじゃねぇか？」

「……ガルムが人に懐くなど聞いたことも無いが、鉄兵ならなんで

もありそうな気がしてきたところだ。好きにいたせ」

二人とも溜息を隠さずにそう言うと朝食の準備に戻っていった。許したと言うよりかはもう面倒になって関わりたくないと思っただけのような気もするが、とりあえずそれで十分だ。

「二人ともありがとう！　恩に着る！！」

二人の背に鉄兵は心からの感謝を送ると、そっとフェンリルを抱きしめ、背中を撫で始めた。

「一緒に行こうな。おまえの名前は？」

『ない。なまえほしい。つけて、あるじ』

「そうだな……おまえはオス？　それともメス？」

『メス。わたしメス』

「なら名前はリルだな」

『リル。わたしリル』

リルは嬉しそうに自分の名を叫び、尻尾をパタパタと振りながら鉄兵の周りを回り始めた。

ちなみにオスだった場合はフェンと名付けられた事は言うまでも無いだろう。親から引き継いだ鉄兵のネーミングセンスは、鉄兵の名前を見て分かるとおり最悪のものだった。

新たな仲間（後書き）

８／２１：文章修正
「フェンリルは苦しそうに身を悶えさせ、」↓「フェンリルは苦しそうに身を悶えさせ、やがてヒクヒクとその身を痙攣させつつ動きを止めた。」

「大袈裟とも言えないが、その慌てように苦笑しつつ、」↓「大袈裟とも言えないが、その慌てように苦笑しつつ、軽く制止をかける。」

「いや、フェンリルを取り逃しちゃったし」「けど、なんか不機嫌じゃないか？」の間に「それはあくまで結果だ。鉄兵は全力を尽くし、最悪の事態を回避してくれた。むしろ感謝している」を追加

「物で言えば２０階建てのビル」↓「物で言えば１０階建てのビル」

１２／１８：指摘いただいた誤字修正
「まったく同意見だな……まあ行ってみな」
↓言ってみな

街道を行く

「あっはっは、こいつはいい」

上機嫌なシロが笑い声を上げる。上機嫌というか、これはもうしゃいでいるといっても良い。

対する鉄兵とアリス、それにハルコさんはといえば、こちらは元気なくうなだれていた。

「鉄兵……私は弱音を吐いてしまいそうだ……」

『あたしもこれはきついわね……』

「リル……もうちょい揺れを抑えられないか？」

『がんばってる。けどむずかしい』

みんなの苦しそうな声を聞いて、リルが申し訳なさそうにうめく。

さて、鉄兵達が今現在どんな状況にあるかといえば、鉄兵達は疾走するリルの上に乗っていた。無論子狼姿のリルではなく、フェンリル形態のリルにだ。

話を少し前に戻す。

「リル、おいで」

朝食を食べ終わった鉄兵は、食事中にある事を思いついて、毛繕

いをしていたリルを呼び寄せた。

『あるじ、ごよう？　リルにごよう？』

即座に鉄兵の言葉に反応したリルは、すぐさま駆け寄ってきて尻尾を振りながら首を傾げる。

「ご用だよ。ちょっと確かめたい事があるんだ」

現在のリルに魔力は無い。つまり今のリルはただの子供の狼に過ぎない。

それではちょっと危ないのではないかと思い、魔力を吸収できたのならば、逆に与える事もできるのではないかと考えたのだ。子供とはいえ狼なのだから危険も何も無いのだが、保護欲にとりつかれた鉄兵は気がつかない。

まずはあの時の感覚を思い出す。リルから魔力を吸収した際に感じたあの内側にあったものと外にあったもの。それが魔力なのだろう。あの時の事を思い出して自分の内側を探してみると、それはすぐに見つかった。

続いてリルの身体に触れる。リルの身体を自分の身体のように思い、そこに自分の中のものがあってもおかしくないと思い込む。そうやって、身体の中の魔力を移すようにしてリルの身体に注ぎ込んだ。

『きもちいい』

リルが舌を出してうっとりとする。成功のようである。

どうやら魔力を与えると気持ちが良いようだ。あまりにリルが気持ち良さそうなので調子に乗って魔力を与えていたら、やがて前回リルから吸収した以上の魔力を与えてしまっていた。何か悪影響があるといけないので慌てて魔力を吸収する。

『いたい、いたい！』

キャンキャンと吼えるリルの姿に鉄兵は慌てて吸収をやめた。どうも魔力を吸い取るとヒリヒリするらしい。

さてどうしたものかと少し考えたが、ふと思いついて右手で魔力の賦与を、左手で吸収を行い循環するように調整してみる。

『？』

なにやら不思議そうな顔をしている。気持ち良さそうでもないが痛そうでも無いのでとりあえず成功のようだ。

さて、先程はリルの元の魔力量以上の魔力を賦与してしまったのだが、特に問題はなさそうだった。つまりは、リルはまだまだ魔力保持の限界に達していなかったのではないか？

そう思うと興味が湧いたのでさっそく試してみる事にする。そうやって調整していったところ、やがてそれ以上魔力が賦与されないところまで辿りつき、リルの魔力保持限界量が判明した。

あの時のリルでもガルムとしては特殊で全長は3倍。質量では27倍の大きさだったのだが、それでもまだ全然成長途中だったようだ。あの時吸収した魔力量の感覚から考えて、リルの限界はその3

6倍。フェンリル形態になれば恐らくは全長１００mというとんでもない大きさになるようだった。山とまではいかなくても、もはや丘のようなものだ。早めに対処できて幸運だったらしい。

とはいえそんな大きさになられたら堪らないのでおおよそ3mほどになるだろう具合に魔力量を調整する。それでも大きいが、ある程度の自衛手段としてやっているわけだからそれくらいは仕方が無いだろう。魔力は勝手に溜まっていってしまうようだから定期的に抜かないとなとか考える。それが飼い主としての責任だろう。

「これでよし。リル。お疲れ様」

『おつかれ。あるじおつかれ』

「テツよ、なにをやってたんだ？」

なにやらリルと戯れていた鉄兵の行動に興味を持っていたのだろう。鉄兵の作業が終わるや否や、シロが話しかけてきた。みればアリスも興味津々にこちらを窺っている。

なので鉄兵は軽い気持ちで説明したら、またしても二人に呆れられてしまった。

「魔力賦与にも驚いたが、鉄兵の魔力量にも驚きだなぁこいつは」

「同感だ。鉄兵には悪いがこれは化け物と言うほか無い」

「化け物って……ひどいなおい」

鉄兵は心外だと反論したが、次のシロの言葉で納得せざるを得な

かった。

「テツよ。ガルムの魔力量は普通の人間族の２５人分に当たるんだがなぁ」

「……そりゃ化け物と言われてもしかたないな」

体長１０ｍの普通のガルムが人間２５人分の魔力量なら体長３０ｍのフェンリルの魔力量は質量比で単純に考えれば２７倍の６７５人分。それの３６倍の魔力量を賦与したのだから単純計算で鉄兵は最低でも２４３００人分の魔力量を保持していた事になる。しかも自分の感覚ではそれだけ魔力を受け渡したにも関わらず、魔力と思しきあの感覚はさほど減ったように思えない。

「シロ。私は鉄兵に関してはもう何があろうと驚かない事に決めた。そなたもそうした方が身のためだろう」

「そいつぁ確かにそうかもな。それよりもだ」

ニッとシロが笑顔を見せる。なにやら思いついたようだ。変な事でなければ良いのだが。

「リルの大きさは調整できるのか？」

「ああ、さっきの感覚ならできそうだった」

「乗ってみたくないか？」

ものすごく乗ってみたかった。

というわけで町の近くまでリルに乗って運んでもらう事にした。
リルもシロの提案に乗り気なようで、お願いしてみたら

『リル、あるじたちはこぶ。やくにたつ』

とおおはしゃぎであった。アリスも

「あれほどの大きさのものに乗るのは初めてだな」

と頬を上気させて非常に乗り気である。ハルコさんは

『おっこちないかねぇ』

と心配そうであったが、自分が抑えておくから大丈夫だと諭して我慢してもらう事にした。

さっさと野営を片付けて、みんなでリルの元に集まる。

とりあえずリルには３ｍほどのフェンリル形態になってもらい、その背にハルコさんに跨ってもらった。そしてリルに魔力を送り込み、リルを巨大化させていく。２０ｍほどになったところで一度魔力の供給を止め、そこでリルに伏せてもらって全員乗り込むと、乗りやすさなどを考えて大きさを調整していき、結局のところ最初の状態である３０ｍの大きさで落ち着いた。

「こいつぁ絶景だねぇ」

「……」

シロはおおはしゃぎで早くもリルの頭の上の特等席を確保してい

た。アリスは景色ではなく巨大化したリルの背に乗っている事自体に感動しているようで、その身体に擦り寄ってマタタビを舐めた猫のような表情をしている。高貴な出だけに馬とかそういった騎乗できる動物が好きなのかもしれない。当たらずとも遠からずだろう。

「そんじゃ出発しんこ～う」

興奮しきりのシロが、もはやキャラすらも変わった様子で遥か町の方を指差して進軍の指示をだす。

「了解。リル、よろしく」

『リル、はしる』

というわけで出発して今に至るのだが、リルの乗り心地は最悪であった。もともと狼なので人が乗るような身体の構造をしているわけも無い。ただでさえ掴まっているのに精一杯なのに、さらには身体が大きいので駆ける度に１m以上の高低さで揺られ、もはや鉄兵達はグロッキー状態である。

「おーい、町が見えてきたぞ～」

その中でなぜか一人だけぴんぴんしていてリルの頭の天辺で傘を片手に立っていたシロが、道の先を眺めて状況を告げた。考えてみればリルがこの姿のままで町に近づいたら町は大パニックになるだろう。

「リル、止まって。ゆっくりだぞ」

『リル、とまる』

鉄兵の指示通りにリルがゆっくりと速度を落として止まる。鉄兵とシロはそのまま飛び降りて、リルの身体を小さく調整していく。ほどよい大きさになったところでアリスが飛び降り、鉄兵はそのままリルを３ｍの大きさまで縮めた。

「リル。お疲れさん。元に戻って」

『リル、がんばった。やくにたった？』

子狼の状態に戻ったリルが尻尾ふりふり鉄兵にすりよってくる。いじらしいその姿に鉄兵は顔を緩ませて

「ああ、役に立ったぞ」

と思いっきりその頭を撫でてあげた。

「……ふーむ。ちょいと困った事になったかも知れんな」

町の方を見ていたシロが少し困った顔をしている。見てみると町までは２ｋｍ以上はありそうだが、ここからでも分かるくらい慌ただしい事になっている。懸念通り、リルが目撃されたのだろう。考えてみればリルの巨体は１０ｋｍ離れていても発見されそうだ。好奇心に負けてやってしまったが、ちょっと軽率だったかもしれない。

このまま町に行っても大丈夫だろうかと鉄兵が考えていると、アリスから「心配ない」という発言があった。

「私がいるから大丈夫だ。構わず行くぞ」

頼もしいお言葉である。確かに王女様であるアリスならこれ以上に無い身元保証人だろう。

「どんなとこかな」

鉄兵は一人つぶやく。

ようやくこの世界の文明に触れる事になる。鬼が出るか蛇が出るか。緊張を含みつつ、鉄兵はこの世界に着いてから初めての町へと向けて足を踏み出した。

街道を行く（後書き）

８／３０：指摘があった計算間違いを修正

１２／１８：指摘いただいた誤字修正

鉄兵はそのままシロを３ｍの大きさまで縮めた。

↓リル

戦女神の帰還

「町に着く前に聞いておきたい事がある」

街道を行く道すがら、ふと思い出したようにアリスが鉄兵に話しかけてきた。未だ乗り物酔いが醒めていないようで顔色が少し悪い。

「私とした事が聞き忘れていたのだが、鉄兵は何者なのだ？　人間族ではあるようだが幽鬼族の特殊能力すら超える身体能力を持ち、獣と意思の疎通ができるようだ。それに伝説級の魔術を使うというのに魔術師でもないようだし、それを使用するまでそれが使える事を自分でも知らなかったようにも見える。さらには見慣れぬ服装をしておるのだ。疑うようですまぬが、怪しく思うのは理解して欲しい」

もっともな意見だった。むしろ今まで聞かれなかった方が不思議なのだがとうとう聞かれてしまったと鉄兵は頭を痛めた。

シロに話したあの胡散臭い話をアリスも信じてくれるだろうか？　まあ横にはシロもいるのだから、シロに話したとおりに話す他はないわけであるが。

「うーんとな、俺はこの大陸の出身者じゃないんだ。転移魔法みたいなもんに巻き込まれたみたいで昨日の昼に川に流れていたところをシロに助けられたんだけど、それ以前はごくごく普通の学生で、あんな力は使えなかった。なんでこんな事になってるのかは原因不明。むしろ俺が聞きたい」

言えば言うほど胡散臭い話である。

「……ふむ。その話を信じろと？」

「ですよねー……」

アリスにジト目で見られてしまった。まあそう言うのは当然の気がする。自分が聞いても信じないだろうし、むしろ信じたらアリスの正気を疑うだろう。

ちなみに鉄兵は気が付かなかったようだが、横で聞いてたシロはアリスの言葉に嘘が混ざっている事に気が付いていた。すっとぼけて聞き忘れていたなどと言っていたが、このタイミングが来るまで聞くのを控えていたのであろう。町が近くなり門の前には兵士が集まっている。つまりは援軍を呼べるという事である。鉄兵が害なすものであるならば捕らえねばならないが、人目の無い場所でそれを聞いてもし万が一鉄兵がそのような人物であった場合はどうなるかわからない。とはいえ人手が多ければ鉄兵をどうにか出来るとは思ってないだろうが、ここまで行動をともにしてみてきて、鉄兵なら下手に暴れたりはしないだろうと見透かしての事である。

なのでシロは『案外抜け目ないお嬢ちゃんだな』などと顔には出さずに横で会話を聞いていたのだが、恐らくシロがそう考えている事はアリスも見抜いているだろう。知らぬは呑気な鉄兵のみである。だからこそ嘘をついているとは思えずに、あまり深くは聞かずにいるのだが。

鉄兵がちらちらとこちらに目を向け助けを求めているのを見て、シロはやれやれと助け舟を出す事にした。

「アリスよ。テツの言ってる事は多分本当だぜ。自分の力に素で驚

いていやがったし、渡した大陸の地図も逆さまに見てからな」

シロの言葉を聞いて、アリスはじっとシロの瞳を見つめた後に小さく溜息を吐いた。

「竜人のそなたがいうならそうなのだろうな」

なんとか疑いが晴れた鉄兵はほっと胸を撫で下ろす。しかしなぜ竜人が言うなら嘘じゃないと言えるのだろう？

「竜人って嘘を見抜けたりするのか？」

「いいや、そんな便利な能力もってないぜ」

ならなんでシロが竜人というだけで鉄兵のあの胡散臭い話を信じたのだろう？

鉄兵の疑問が顔に出ていたのだろう。シロがニッと笑って解説をしてくれた。

「竜人族が大昔に大陸の中央を占領したって話はしたろ？　それで大陸全土から恨みを買っちまってな。そんな状態もあんまり居心地が良いものじゃないからと、せめてもの代わりとまではいかないが、結構な数の竜人族が任務を授けられて大陸中で人助けの旅をしているのさ。そんな事を何百年と続けて竜人族はようやく信用され期待されてるわけだから、悪人を庇ってのさばらせておいたりしたら、それこそお仲間の竜人族から追われちまうってわけだ」

まあ任務と言っても俺の場合は半分趣味だけどな。とシロは笑って付け加えた。

なるほどと鉄兵は頷いた。簡単に言えば巡回保安官みたいなものだろうか。シロが鉄兵を助けてくれているのは、シロの性格もあるだろうが、そういう理由からでもあるようだ。改めて考えてみればそんなシロに初めに遭遇できたのだからなんとも運の良い話だ。

「まあ鉄兵が悪人だとは私も疑っておらん。しかしくれぐれも私の敵に回ってくれるなよ」

「頼まれたってお断りだよ」

アリスの口調に冗談が混じっているのを感じて、鉄兵は笑いながらそれに返した。どうあっても敵に回れる気がしないのは本当のところだが。

「そんじゃま面倒な話が終わったところで軽く打ち合わせといくか」

シロが少しだけ真面目モードになった。

「テツよ。分かってると思うがあんまり派手な事するなよ。怪力を見せびらかすくらいならいいけどな」

「了解」

人間は特殊なものを怖がるものだ。鉄兵も学生とはいえ成人しているのでそれぐらいの分別は持っている。

「テツがリル公を飼ってる事についちゃ、お嬢ちゃんに任せていいかな？」

「責任を持とう。だがそれには父王の許可を取らねばならぬ。しばらく不自由な思いをさせる事になるやも知れぬが了承してもらうぞ」

「あー……了解」

最悪逮捕とかされそうだが、可愛いリルのためである。アリスが協力してくれると言うのだから、とりあえずは多少の事は我慢する方向で行こう。

「あとはあの兵隊さんがたへの説明だが、そいつもお嬢ちゃんに頼んでよさそうだな」

「そうだな。それも承ろう。だが、いかに私と言えども闇雲に押し通す事はできん。鉄兵の力の事は話させてもらうぞ。なに、あの者達は信用が置ける。心配するな」

「そいつも了解」

身の丈３０ｍの巨大な獣が町の近くに姿を現せたのだ。危険は無いと説得したところで証拠を見せなければ納得はしないだろう。

「とりあえずそんなところか」

というわけで街道をテクテクと歩いていくと、やがて町の門がはっきりと見えてきた。門の前にはリルを見て集まってきたのだろう、３０人程の完全武装した兵士らしき物陰が見えたのだが……

「おや」

「なんだ？」

その先頭に群を抜いて背の高い大男がいたのだが、突然倒れたのだ。兵士達の間でも大騒ぎになっているようだ。

「あれは……」

それを見て、アリスがぽつりと呟き走り出した。

鉄兵とシロもお互い顔を見合わせて首を傾げたが、とりあえずその後を追う。

「姫様！　ご無事で」

「うむ。それより、やはりイスマイルであったか」

鉄兵達が門の前に着くと、アリスは兵士達に敬礼で迎えられていた。アリスは膝をつき、倒れた男の様子を見ている。どうやら顔見知りのようである。

それにしても。と鉄兵は倒れているイスマイルと呼ばれた男のガタイを見て驚いた。倒れている男は身長１８６ｃｍの鉄兵から見ても大柄な男だった。鉄兵の１．５倍以上。３ｍはありそうだった。

そんなごついガタイの首の上には無精ひげを生やしたむさい顔が乗っているのだが、むさいはむさいが案外真面目そうにも見える。それはそれはむさいおっさんなのだが、来ている服はそのむさい顔と身体つきとは裏腹に青と白を基調とした法衣のようなものを纏っている。それさえなければ山賊の親分と言われても違和感が無いのだが、こう見えて聖職者かなにかなのだろうか。

「いったいどうしたというのだ？」

「ハッ！　不明です！　突然お倒れになりました！」

アリスの問いに隊長らしき兵士が答える。どうやら兵士達にも原因がわからずに混乱していたようだ。お姫様であるアリスの知り合いであり、先程先頭に立っていた事を考えると、こう見えてこのむさいおっさんは結構お偉いさんなのかもしれない。

「とにかく治療を。衛生兵！」

兵士が駆け寄ってきておっさんが運ばれていく。

「いったいどうなってると思う？」

「さてなぁ」

どうにも近寄りがたい雰囲気なので、アリスに尋ねず横のシロにこっそり聞く。期待はしていなかったがシロもやはりわからないようだ。

「なにが起こったかはわからんが、あの親父さんが何者かは見当がつく。イスマイルといやぁ確かこの国の城付きの大神官だ。治療するはずのやつが倒れちまったんだからそりゃあ混乱するってぇもんだろ」

なるほどと納得する。やはり予想通り結構なお偉いさんだったようだ。なにがなにやらわからないが、アリスの知り合いのようだし、大した事が無ければいいけどと、とりあえず思う。

担架に乗せられ運ばれていくおっさんを見て、鉄兵は心の中で「おだいじにー」と呟いた。

「姫様。ともかくご無事で何よりです」

隊長らしき人が再びアリスを労う、その隊長さんの顔には疲労の影が濃くでていた。巨大ガルムは現れるわ神官は倒れるわで、それはもうこの隊長さんの心労もただ事ではないのだろう。

「ああ、勝手に出かけて悪かったな。だがガルムについてはもはや心配はいらぬぞ」

アリスの言葉にも隊長の不安げな顔色は隠せない。

「姫様には何か対策がおありなのですか？」

「対策ではない。もう状況はクリア済みだ。あのガルムを手懐ける事に成功したのだからな」

「なんと……！！」

兵士の間からどよめきが上がった。察しの良い兵士の何人かはリルの方に注目している。

「気がついているものもおるようだが、そこにいる子狼がそなた達が先程目撃したであろうあの巨大なガルムの真の姿だ」

急に注目されてリルが鉄兵の後ろに隠れる。どうやら怯えているようだ。

「さすがは姫様です。ですが……」

「みなまで言うな。そのような世迷言、私の言葉と言えども信じられる事ではなかろう。それにいくら私といえど魔獣を手懐ける事など出来ぬ。かつで誰も成し遂げた事の無い偉業を成し遂げたのは、我が新しき友である鉄兵だ」

アリスが鉄兵を指差した。兵士達の視線が一斉に鉄兵に向いた。

なるほどこれは怯えたくもなる。と、鉄兵は先程のリルの心情を理解した。微妙に血走っている武装した兵士の視線が３０対もこちらを向けば、それはもう恐ろしいものである。

「鉄兵。頼む」

「ＯＫ。リル、大きくなって」

『わかった。リル、大きくなる』

一声あげてリルが３ｍほどの大きさのフェンリル形態になった。

フェンリル形態になったリルを見て、兵士達が「「「おぉっ！」」」とざわめく。だがいまいち反応が薄い。恐らくフェンリルと比べて目の前のリルの姿が小さいからであろう。

「鉄兵。リルを巨大化させてくれ」

「了解」

リルに手を触れ、魔力を流し込んでいく。門は封鎖されて近くに

町の人もいないだろうが、あんまり巨大化して目撃されて騒がれると後々困った事になる気がするので、途中で鉄兵はリルになるべく低く伏せるように言い、リルを１２ｍほどの大きさにして見せた。

兵士達は無言でリルを見上げていた。言葉も無い様子だ。

「皆も見たように、ここにいる鉄兵は獣と意思の疎通を図る事が出来るばかりではなく、人間族平均の数万倍の魔力を持ち、魔力の賦与と吸収という失われた魔術をも操る大魔導師である。さらには幽鬼族の特殊能力をも上回る身体能力を持ち、その力を以って皆も見たであろうあの巨大なガルムを折伏した、まさに英雄である！」

よく通るアリスの言葉が静寂に支配された空間に響き渡る。兵士の注目がアリスに集まる。

アリスは間を取り、兵士達を見回した。やがて息を大きく吸い、口を開くとともにすっと腕を振り上げた。

「皆の者、危機は去った。勝鬨を挙げろ！！」

「「「おおおぉぉぉぉーーーーーー！！！！！」」」

振り上げたアリスの腕に合わせ、怒号のような勝鬨が挙がる。

「この町の危機を救った英雄を褒め称えよ！！」

「「「おおおぉぉぉぉーーーーーー！！！！！」」」

再び怒号のような勝鬨が、今度は鉄兵に向けられた。正直なところ鉄兵はびびって、ちょっと腰が抜けそうだった。

「よろしい。なおこの事はしばらく極秘とする。私の命令を破ったら罪は重いぞ。覚悟しておくように」

「「「ハッ！」」」と兵士が一斉に敬礼した。あまりの出来事に興奮と緊張が見て取れるが、不満の色は無いようだ。アリスのしてきた事はわからないが、どうやら随分慕われているらしい。

「では解散とする。各自、任務に励め」

兵士が再び敬礼し、去っていく。鉄兵には良く分からないが、兵士達の動作は非常に訓練されていると思われた。

アリスの方を見るとなにやら隊長と話しているようだった。なのでその間に鉄兵がリルの身体を３ｍのサイズに戻し、子狼の姿になったリルの頭を「お疲れ様」と言いながら撫でていると、話が終わったのか鉄兵の方に近寄ってきた。

「どうだ。私が調練した兵士達は中々のものだろう」

そう言ったアリスの顔は誇らしげだった。鉄兵の目から見ても大したものだと思えた。実際に育て上げたアリスにとっては鼻が高いのだろう。

しかし調練したと言ったが、いくらお姫様とはいえそんな権利まであるものなのか？

「アリスは軍のお偉いさんなのか？」

「そういうわけではないのだがな。恥ずかしい話、私は戦女神と崇

拝されている。先程の兵士達の調練もこの町に寄った時に頼まれてな。どうにも断り切れずに了承したのだ」

照れ臭そうにアリスが言う。多分これまでも今回ガルムを一人で倒しに来たように無茶な事をして名を上げていたのだろう。そんな英雄的な話にアリスの高貴な姿が加われば、兵士達から心酔されるというのもおかしな話ではないのだろう。

「とりあえず一つお願いがあります」

「なんだ？」

「英雄とかものすごく恥ずかしかったからもうやめて……」

謙虚なものだなとアリスは笑った。鉄兵としては本気なのだがイマイチ理解してくれてない気がする。

「さて、異国から来たばかりの鉄兵には書類作成はきつかろう。そちらはこちらで処理しよう」

「よろしくお願いします」

無意識に頭が下がった。それは心底ありがたいなと鉄兵は胸を撫で下ろす。そういえば文字とかはどうなっているのだろうか？　読めなかったら結構大変だ。

「お嬢ちゃん。俺達も詰所に行く必要はあるかい？」

「いや、なにやらしばらくこちらも忙しいようだ。夜に来てくれれば良い。詰所でよければ部屋を用意しておくがどうする？」

「そいつは助かるね」

「右に同じく。夕食も出してくれると助かるな」

「手配しよう」

無一文の鉄兵としては非常に助かる話だ。ちゃっかり夕食をねだる事にも成功したし、とりあえず明日までは生きていける。

アリスが門の前に立ち、口を開く。

「開門せよ」

「開門！」

アリスの指示を兵士が復唱し、町の門が開いていく。鉄兵はようやく町の中に足を踏み入れた。

戦女神の帰還（後書き）

８／２９：神官の名前をイスマイルに変更
８／３０：数値の間違いを修正
１２／１８：指摘いただいた誤字修正
シロがニッ笑って解説をしてくれた
↓ニッと笑って
そういったアリスの顔は誇らしげだった。鉄兵の目から見ても大したものだと思えるた。
↓思えた。

１２／２５：指摘いただいた誤字修正
あの親父さんが何者かは検討がつく。
↓見当がつく。

あなたは神を信じますか？

「誰もいないな」

町に入ると、辺りは閑散としていた。どうやらまだ避難所に避難した人々は帰って来ていないらしくて、ひとっこ一人見当たらない。誰一人いない町並みは、ゴーストタウンのようでちょっと不気味だ。

「そのうち賑やかになるさ。この町は結構騒がしいところだからな」

「ふーん」

シロの言葉を聞きながら、鉄兵はちらっと町の様子を見回した。建物はだいたいが木造のようだ。メインの通りである門から中央に続くこの通りは二階建てが多いが、横道をちらりと覗いてみたら平屋建ての建物が続いていた。多分、店舗は二階建てだが住宅は平屋が主なのだろう。通りの横には人がいなくて放り出されてはいるが、露天商なども見えるし、本来ならばなかなか繁盛しているのだろう

「さて、とりあえずテツの身の回りのものを揃えなきゃな」

「お会計よろしくお願いします」

「あっはっは。まあそのうち返せよ」

深々と頭を下げる鉄兵を見てシロは大声で笑う。鉄兵は現在無一文なので、無論支払いはシロになる。つまり鉄兵は現在シロのヒモなわけなのだが、正直男のヒモなどごめんである。さっさと稼ぎたいところだが、この町で稼げるような仕事は見つかるだろうか？

何が必要か話し合いながら中央の広場まで歩いていくと、右手の方から人がぞろぞろ歩いてきた。その先には石造りのなかなか立派な教会らしきものが立っている。どうやら町の人たちはそこに避難していたようで、急ぎ足で自分の店に帰っていく店主達を皮切りに、徐々に町が人で溢れていった。やがて商いをする店主達の呼び込みの声が立ち始め、町が喧騒に包まれていく。

「なるほど、これは確かに騒がしい。てかみんな逞しいなぁ」

鉄兵は盛況さを取り戻した町を見回して、シロの言葉の正確さを思い知った。町の喧騒は賑やかというか、もはやうるさいといっても良いレベルだった。さきほどまでは巨大ガルムに怯えていたはずなのに、わずかな時間の間に元の生活を取り戻すその逞しさには感心する思いだ。

「あっはっは。商業都市だからな。旅慣れたやつも多いだろうし、魔物に怯えてるようじゃ商売はできないってとこかね」

シロが豪快に笑いながら言う。どこの世界も商魂逞しくなければ成功できないのだろう。

「そんじゃま、買い物としゃれ込みますか」

「あ、おいてくなって」

ふらりと人込みに紛れて行くシロの後ろに、鉄兵は慌ててついてった。それにしてもシロは例の傘を差したままなのだが、器用にひょいひょいと人をかわして速度を下げずに歩いていく。むしろ鉄兵の方が人込みを捌けずに遅れがちになってしまうわけだが、その事

実に鉄兵は肉体的能力は向上してても、体捌き等の技術は上がっていないらしい事に気が付いた。原因不明に肉体は強化されているが、技術に関してはそこまで便利に強化はされていないらしかった。

鉄兵達は先程歩きながら決めていた指針の通りに買い物を始めた。リュックや水筒など旅に必要なこまごまとしたものを買っていく。ついでに必要なものを買うには関係のない店も覗いてみたのだが、生活用品や日常雑貨などを見ても、元の世界とそれほど差異はないようだった。ただし文化レベルは低いようで、まあ簡単に言えばファンタジーでありがちな中世ヨーロッパ的な文化レベルのようだ。

ちなみに言い忘れていたが、リルとハルコさんは荷物と一緒にアリスに預かってもらっていた。リルは鉄兵と一緒に行きたがっていたが、それなりに大きな町の中で狼を連れて行くのもどうかと思ったので我慢してもらったのだ。

結果から言えば色々動物を連れて歩いている人はちらほらみかけたので問題はなかったようだが、子狼のリルにはこの人込みの中はつらいだろうし、これは結果オーライだろう。

「さて、他には何か思い当たるか？」

めぼしい物は買い終わり、今は町の中央の広場で休んでいた。昼飯は屋台で買った串焼きで済まし、広場でベンチに腰をかけてゆっくりとしている。シロは煙管をぷかぷかふかさせ、鉄兵は町の賑やかな様子を興味深げに観察しながら買い物の最中に買ったリンゴのような果物（味は少しすっぱいがリンゴの味）をかじっていた。

シロの言葉に鉄兵はちょっと考え込む。

町の中には武装した人達を結構見かける。多分リルのような大物は例外としても町の外には危険な生物がいるのだろう。なのでＲＰＧならここで武器やら防具やらを買い込むのだろうが、武器は木刀があるから十分だろう。というよりなまじ刃物を持ったところで生物を切るような根性が自分にあるとは思えない。防具はといえば、やはりなまじそれらを身に着けたとしても、防御力が強化されるというメリットよりも、慣れない物を身に付けた事による動きにくさというデメリットの方が先にたつ気がする。それならばはせっかく肉体能力が強化されているのだから、危険に見舞われたら全力で逃げ回った方が良いだろう。残念ながら鉄兵は戦士ではなく技術者なので、回避できる危険は回避するのが主義だ。

とすると身の回りの旅に必要なものは全て揃ったし、他に欲しい物はといえば……

「そうだな……強いて言えば風呂に入りたいかな」

昨日は森の中を走り回ったので、汗や汚れで気持ちが悪かった。服も買ったし作業着は目立つからさっさと着替えたかったのだが、その前に汚れを落としておきたいところだ。

「風呂か……確かこの町には公衆浴場があったな。お嬢ちゃんとこに行く前にひとっ風呂浴びてくとするかねぇ」

というわけでシロに連れられて公衆浴場に移動した。

公衆浴場は石造りの大きな建物だった。まだ日も結構高いのだが、ちらほらと公衆浴場に入っていく人がいる。中に入ってシロが番台さんに支払いを済ませると、大き目のカゴを渡された。中には木製の、数字が書かれた手のひらサイズのプレートが入っている。多分、

これに荷物を入れろという事だろう。

脱衣所に入ると、客ではない従業員と思しき子供が脱衣所の入り口付近に三人ばかし座っていた。なんの仕事をしているのだろうと思ったのだが、その仕事内容はすぐに分かった。

「おーい。こいつを頼む」

「へい」

さっさと服を脱いでカゴに荷物を入れ、木製のプレートを取り出したシロが、例の子供に声をかける。すると子供はさっと近寄ってきて、カゴを奥に持っていった。どうやら荷物の出し入れをするボーイみたいな仕事のようだ。

シロに習って鉄兵もさっさと服を脱いで荷物を預かってもらった。ちなみに惜しげもなく晒されているシロの男の象徴を見て、鉄兵が自分のものをさっと布で隠したのはここだけの話である。鉄兵も人様よりは立派だと自信があったのだが、人種の差には勝てないようだ。

浴場に入ると鉄兵の予想とは違い、日本のような銭湯ではなくサウナだった。壁の方を見ると金属製のパイプが壁から突き出ていて、壁の周囲をぐるりと回っている。そのぽつぽつと開いているパイプの穴から湯気が噴出しているようで、ふしゅーという音を立てていた。多分この壁の向こうではお湯を沸騰させていて、その蒸気をこのパイプで均等に送り込んでいるのだろう。

ついでに昼なのに人が多い理由もわかった。サウナの中はずいぶんと薄暗いのだ。多分夜になったら何も見えなくなるので、サウナ

は昼しか開いてないのだろう。

天井に疎らに開いている通風孔が採光口の役割も果たしているので、周りや足元が見えないということはないが、うっそうとした薄暗い洞窟の中に裸で立っているようで、どうにも不安になる。

「随分暗いな。光玉とか使わないのか？」

風呂といえば明るい場所のイメージがある鉄兵は、思わず不満を漏らしてしまう。

「光玉は高いからねぇ。闇玉なら安いが、光玉にするにゃあちと手間がかかるからな」

ふむ。と鉄兵は首を傾げた。いったいどういうことだろう？

というわけでサウナで汗を掻きながら説明してもらったのだが、簡単にまとめると以下のような事らしい。

光玉や闇玉は魔石と呼ばれるもので、どうも水晶がそれにあたるらしい。環境に沿った属性の魔力を取り込む特性があるようで、暗闇の中に置いておけば闇玉が、光に照らしておけば光玉ができるようだ。鉱脈が地上に出ている天然の光玉もあるらしいが、大抵は土の中に埋まっているものなので、光玉より圧倒的に闇玉の数が多いらしい。光を浴びさせておけば闇玉から光玉に作り変える事もできるようだが、その方法では何年もかかってしまうため、通常は闇玉から光玉にするには昼間は外で太陽の光を、夜になったら炎で照らし続けるという作業を延々一ヶ月近くも行ってつくっているらしい。そりゃあ高くもなるのだろう。

吹き出た汗を水瓶の水で洗い落とし、ついで布で身体の汚れを落としながら、鉄兵は今聞いたシロの話からちょっと思うところがあって思考にふけっていった。気持ち良さそうに汗を掻くシロの横に座り、さらに没頭していく。

「シロ」

「ん？」

「光玉を作る時、光の強弱は関係ないのか」

「いや、関係あるぜ。砂漠とか日照りが激しいところの方が早く出来上がるからな。大抵光玉はそっちの方の産業になってるぜ」

シロは目をつぶってうっとりとしている。鼻歌でも歌いだしそうな雰囲気だ。

「なら、レンズでも使えば簡単に光玉が作れるようになるかもしれないな」

「レンズってぇと、あの眼鏡のあれかい。あれにどんな関係があるんだ？」

「レンズは調整すれば光を収束できるだろ。だから収束した光を当てれば光玉を作る効率も上がると思ってね」

「ほう、あれにゃそんな特性もあったのかい。それなら確かに効率は上がるが……しかし、ガラス製品は高いんだぜ？　多少効率が上がった程度じゃ足が出ちまうだろ」

「ガラスは一般的じゃないのか。なら精度の高いレンズも作るのは無理そうだな……なら水かな」

「ほう？」

そこでシロの目が開いて、その目が鉄兵の方を向いた。どうやら興味が出てきたらしい。

「水もレンズみたいに光を収束する事が出来るから、屈折率をうまく調整してそういう装置を一度作っちゃえばあとは安上がりにできるんじゃないか？」

「そいつは知らなかったな……おまえさん、本当に頭が良かったんだな」

シロがニッと笑う。微妙に馬鹿にされた気もするが、本気で感心しているようだ。

「そいつは下手すると産業が興せるんじゃないか？」

「そう？　なら夕飯の時にでも話のネタにしてアリスに言ってみようかな」

王女様であるアリスならそのアイデアを活かすツテもあるかなと、そんな考えからの発言だった。儲けになりそうな話であったが、鉄兵は残念ながらそこに関心を持てなかった。工業に身を捧げる人生を送るにはそういう金の匂いを敏感に察知して利益と研究資金を確保する能力も必要なのだが、学生である鉄兵はまだそのセンスを身に付けてなかった。

けどちょっと実験はしてみたかったので、具体的な装置の案を考えながらサウナを楽しみ、限界になったところで水で汗を流してサウナを出た。コーヒー牛乳でも欲しいところだったが残念ながら無かったので水で我慢する。先程店を一通り覗いたところ、コーヒーと牛乳と砂糖はあるようだったので、今度来る時は自作してこようかなとか考える。

「ぷはーっ！」

新しい服を着て水を喉に流し込むと、気持ち良いほどさっぱりして、鉄兵は親父臭く息をもらした。

ちなみに新しい服はごわごわした無地の白シャツと、なぜか普通に売っていたジーンズとよく似たズボンである。シャツはあまり着心地が良くないが、ジーンズは穿いた感触もジーンズと同じでまさにジャストフィットだった。

そういえばこの世界に来てからシロにアリスにと美形ばかり続いたので『まさか美形だらけの世界なのか？』と密かに考えてもいたのだが、残念ながらそんな事は無かった。綺麗な人も残念な人も個性豊かにいっぱいいる。どうやらあの二人が特別だったようだ。獣人や精霊族などもいないかなと町を歩いてる時にきょろきょろしていたのだが、残念ながら今のところ見当たらなかった。ここら辺にはいないのだろうか？

「あ～くつろぐなぁ」

「生き返る……」

どこの世界も発想は同じなようで、公衆浴場には座敷のような施

設が併設されていた。酒とつまみ（ビールとナッツだった。ただしビールはぬるかった）を頼み、座敷に寝転んでごろごろとすごす。シロに至っては按摩まで頼んでのくつろぎようだった。

そんな風に昼間から一杯ひっかけて駄目人間的な時間を過ごしていると、やがて日も暮れてきた。

「そろそろお嬢ちゃんとこに行くかね」

「そうだな……」

このまま寝てしまいたがったがそういうわけにもいかないだろう。名残惜しかったが立ち上がると急にリルの事が心配になって、鉄兵は足早に詰所に赴く事にした。

『あるじ！　あるじ！　おかえりあるじ！』

詰所は厩舎などもある関係で町の外れの方にあった。鉄兵達が詰所に着くと、厩舎でハルコさんと一緒に寝ていたリルが鉄兵達に気がついて、ものすごい勢いで鉄兵の胸に飛び込んできた。あまりの勢いに受け損ない、リルに押し倒されるように地面に横たわる。そんな鉄兵にも構わず、リルは尻尾を勢いよく振りながら鉄兵の顔をぺろぺろと舐め始めた。

「ただいまリル。良い子にしてたか？」

『リル、いいこにしてたよ』

「そっかそっか。えらいぞ～」

鉄兵はリルの頭を力いっぱい撫でてやった。気分はもはやお父さんである。

「ふむ。鉄兵は良い親になりそうだな」

「後ろに馬鹿が付きそうだけどな」

鉄兵達に気が付いて詰所から出てきたのだろう。いつのまにか現れていたアリスとシロが失礼な会話をしている。だが、親馬鹿呼ばわりされてしまったが、自分の行動を省みる限り、否定は出来そうに無い。

「まあ子供は好きだな。三人くらいは欲しいよな」

「な……！！」

特に考えもなくそんな事をアリスに言ったのだが、アリスは敏感に反応して顔を真っ赤にした。別に冗談でもないただの個人的な考えだったのだが、なにやら変な風に取られてしまったようだ。

「お嬢ちゃん。深い意味はないと思うぜ」

やや呆れ気味にシロが言う。

「そ、そんな事はわかっている！」

シロの言葉にはっと事実に気が付いたようで、アリスはさらに顔を赤くしながら叫んだ。どんだけ耐性がないんだとちょっと心配になる。

「ほーう……まんざらでもないようだな」

「くどいぞ！」

アリスを良い様にからかってシロは楽しそうだが、鉄兵は後ろに見える兵隊さん達の殺気が怖くて生きた心地がしなかった。悪いように思われてないのは非常に嬉しい事なのだが、この状況は勘弁である。

「こほんっ。それよりじきに食事の準備が整う」

ようやく落ち着きを取り戻したアリスが咳払いをして場をごまかす。

「まずは部屋の確認をして荷物を置いて来い。ハンス！」

「ハッ！」

殺気を放っていた兵士の一人が走ってきた。

「客人の案内を頼むぞ」

「ハッ！　お任せください！」

というわけで鉄兵達は客室に通された。道中ハンスと呼ばれた兵士は殺気を隠そうともしなかったのでかなり怖かったのだが、彼の殺気がここまで成長した原因であるシロは飄々としたものである。見習いたいほどの図太さであるが、見習ったら人間的に駄目になりそうだからやめておいた。

客室は棚が一つにその上にランプ。それに窓の両脇にベットが二つほど並んでいるだけの簡素な部屋だった。アリスに託したシロの荷物もその部屋に置いてあった。窓は無論窓ガラスではなく、木製のブラインドのようなもので、光の入り具合を調整できるだけの代物である。夜は閉めておかないとランプを点けたら虫が入ってくるだろう。ベッドも木の上に薄い布団のようなものを敷いてシーツをかぶせただけのもののようだ。結構硬いベットだが、多分これが普通なのだろう。

「失礼します！」

荷物を置いてしばらくくつろいでいると、ドアがノックされて兵士が一人入ってきた。

「食事の用意が整いました。こちらへ」

とまあそんな感じで案内されて部屋を出る。案内の後を付いていくと、広めの個室に通された。中には４人分の食器が用意されている。さてどこに座ったものかと考えていたらシロがさっさと一番奥の上座に着いたので、鉄兵も深く考えずにシロの横に座った。

（一体なにがあったのだ？）

（いやーはっは。無様なところをお見せしました。なにかとんでもない物を見た気がするのですが、良く覚えていなくて）

席について特にやることも無かったのでぼけーっと座っていたら、外からそんな会話が聞こえてきた。一つはアリスの声のようだが、もう一つは誰だろう。

「まあいい。食事でもしながら報告してくれ」

「はい。わかりました」

ドアノブが回され、ドアが開いてアリスが姿を現した。その後ろには見覚えのある青と白を基調とした服装をした人物が立っている。なぜ服のことしか言わないのかと言えば、身体が大きすぎてドアからは顔が見えないのだ。見えないことで逆にわかったが、服装にも見覚えがあるし、多分イスマイルとか言う神官の人だろう。

「二人ともまたせたな。イスマイルを紹介しよう」

そう言いながらアリスは部屋に入ってきた。

「失礼いたします。やああなた方が……」

続いて喋りながらドアを潜り抜けるように背を屈めてイスマイルが入ってきたわけだが、部屋に入って顔を上げたイスマイルは、鉄兵と視線が合った途端にピシリという音が聞こえそうなほど驚愕の表情を露にして石像のように固まってしまった

「はうぁっ！！」

ゴンッ！

訳の分からない奇声をあげて動き出したかと思うと、思いっきり背筋を伸ばしたためにドアの中間にいたイスマイルは後頭部をもろに壁にぶつけ、直立不動のままゆらりと前のめりに突っ伏した。

「……」

沈黙が場に流れる。一体何があったのだろう。アリスやシロでさえ、事の成り行きについて行けずに無言である。

彼の身に何があったのだろう。なにか自分を見て取り乱し始めた気もするが身に覚えは無い。しかしともかく一国の城付き大神官であるはずの彼がここまで取り乱しているのだ。素で心配である。

「はっ！」

ガンッ！　ガンッ！　ガンッ！

やがて気を取り戻したイスマイルは、手で上半身だけ起こして鉄兵の方に顔を向け、その糸目で鉄兵の事をガン見すると、即座に土下座のようなポーズを取って這い蹲り、器用にそのポーズのまま後ろに下がった。ちなみに後の効果音は下がる際に顔を下げ続けていたために額が床を打った音だ。かなり痛そうだが大丈夫だろうか。

誰も動けず喋れずに、大神官の乱心にどうしようかと身を凍らせていたのだが、やがてイスマイルは決意したように顔を上げ、すさまじい眼力を鉄兵に向けた。

「あ……」

「「「あ？」」」

イスマイルが口を開いた。奇妙な緊張感が思わず皆にイスマイルの口から零れ出た言葉を復唱させる。

「あなた様は神様ですか？」

「か？」

神様？

一瞬何を言ってるのか分からなくて首を傾げたのだが、ようやく頭に浸透してその意味を思い出す。

渾身の冗談じゃないかとイスマイルの態度を疑ってみたのだが、イスマイルを見るに１００％の純度で目がマジだ。

幽鬼族、化け物、英雄と来て次は神様扱いらしい。

一体何がどうなっているのやら。シロ辺りに聞いてみたかったのだが、シロもアリスもあまりの展開に口が大きく開いていた。

あなたは神を信じますか？（後書き）

８／２８：誤字脱字修正
８／２９：神官の名前をイスマイルに変更
２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
避難所に非難
↓避難所に避難

困った事になったな。というのが鉄兵の現在の偽ることのない心境であった。

目の前には自分を神ではないかと疑う神官。横にはあまりにもな状況について来れてないシロとアリス。聞いた話によれば、目の前で自分を神呼ばりした人物はこの国の城付きの大神官である。つまりはこの国で一番偉い神官なのだ。その人物が一目で本気とわかる表情で「あなたは神か？」と問うたのだから、シロやアリスがこれほどまでに動揺するのも無理はないのだろう。

どうにかしてくれと何もかもを放棄して　逃げてしまいたいような状況だが、自分に注目が向いている状況だからそういうわけにもいかないだろう。ならどうするかといえば。「あなたは神か？」と聞かれたのだ。素直に答えるしかないだろう。

「違います。人間です」

鉄兵はうんざりとした表情を隠しもせずにそう答えた。この世界の神がどんなものかは知らないが、少なくとも鉄兵は自分が神だと思わないし、神だった事もないし、神になろうとした事すらない。それに謎の翻訳機能が自分と同じ種族のことを人間族だと訳したのだから、人間であることに間違いはないだろう。

「本当に。ですか？」

きっぱりと否定したのだが、イスマイルはなおも鉄兵に詰め寄ってくる。いったい何を根拠にこの人はそんなに事をきいてくるのだ

ろうか？

「本当です……よ。多分」

そんなに何度も強く聞かれてしまえば、間違いのない事実でも疑ってしまう。鉄兵は何が真実か自信を失いかけてしどろもどろに答える。

「そうですか……」

しかし、戸惑う鉄兵の姿を見て、返ってイスマイルは納得したようで、自分の有様に気がついて恥ずかしそうに顔を赤らめて立ち上がった。むさい顔が赤らんでも誰も得はしなかったが、妙に愛嬌があったので場の空気が和んだ。

「これは皆様、見苦しいものをお見せいたしました」

「よい。しかしイスマイル。いったいどういう事なのだ？」

「そうだぜ。大神官様が神呼ばわりたぁ穏やかじゃないな」

「それは……ですね」

と、その時。イスマイルの腹が盛大に音を鳴らした。

「これはまた、はしたない所を……」

「とにかく食事にしよう。話は食事をしながらで構わないだろう」

苦笑交じりにアリスが手を振り控えていた兵士に合図を送る。全

員が席に着き、食事の支度が始まった。

「カティス町を救った英雄・鉄兵に。乾杯」

まずは給仕によってワインが注がれ、全員に行き渡ったところでアリスが乾杯の音頭をとった。英雄とかマジ勘弁と言ったはずだが、やはりわかって貰えてなかったようだ。

続いてオードブルが運ばれてきた。なんで詰所でこんな本格的に給仕されるのかとも思ったが、王女様が滞在しているのだから不思議でもないのかもしれない。

「さて、話は食いながらでもいいよな。さっきのアレはいったいどういうことなんだい？」

オードブルのローストビーフらしきものを器用にナイフとフォークで丸めて口に運びながらシロが言う。鉄兵としても気になったので目線でイスマイルを促してみる。

「はぁ……あ、まずは自己紹介が遅れました。私はオズワルド王国でサクヤ教の神官を纏める任につかせていただいているイスマイル＝マグナルカと申します」

「シロディエール。しがない竜人の旅人だ。シロでいいぜ」

「香坂鉄兵です。呼びにくかったらテツでいいです」

「シロ殿と、テ……テツ殿ですな」

やはり鉄兵の名前は発音が難しいようで、イスマイルは何度か鉄

兵の名前を本名で呼ぼうとしたが、どうにも発音できないようで諦めてテツと呼んだ。

「それで、どういうことなんだ？」

「はい。それはですね……」

シロに促されてイスマイルが語りだす。

「実は私が大神官の任についていますのも、法力の事もさることながら、生まれながらに一つの能力がある事が関係していまして。その能力というものが、他人の魔力を目で見ることなのでございます」

「ほう。魔見眼とは珍しい」

「はい。それでテツ殿の姿を目にしてあれほどまでに動揺してしまったわけですが、はっきりと申しまして、テツ殿は異常というのも可愛らしい程の魔力をお持ちになっております。しかも今詳細に見させていただいているところ、どこから供給されているのやら、微量ながら常に増幅していっているようにも思われます」

「ふむ。そういうことであったか」

納得が言ったというようにアリスが深く頷く。

とりあえずは鉄兵も納得がいった。リルの件でわかったことだが、自分は少なくとも普通の人間の２４０００倍の魔力を保持しているのだ。魔力が見えるというなら、自分を見て驚くというのも実感は無いが理解できる話なのだろう。

しかしそれでも神官と呼ばれるような人が軽々しく人の事を神だと思うものなのだろうか？

「いえ、話はそれだけではありません。そのテツ殿の魔力なのですが、その性質が非常に我等にとって馴染みのある魔力波長をしているのです」

「……そいつはつまり」

「はい。つまりは我等が神であるサクヤ様と非常によく似た魔力波長をテツ殿はお持ちなのです」

「……」

部屋が沈黙に支配された。鉄兵には何が凄いのか良くわからなかったが、なにやらものすごく重大な事だったらしい。

「……なるほどな。サクヤ嬢か。どうりでテツとあった時に懐かしい気がしたわけだ」

「嬢！？　……あーいえ。シロ殿は竜人でしたな。面識がおありでしたか」

「まあな。サクヤ嬢を最初に見つけたのは俺だし……ってか、そういやサクヤ嬢もテツと同じように川に流れたな。状況がかぶってないか？」

「なんと！　あなた様が伝承にあるサクヤ様を導きし子供の白竜様であらせられましたか！」

「導いたってな大袈裟だぜ。俺は近くにいただけさ……」

なにやら話が盛り上がってきたようだが、鉄兵は置いてきぼりである。そろそろ説明を促すべきであろうか？

「あのー……質問良い？」

「あ、はい。失礼いたしました。なんでしょうか？」

「サクヤさんって誰ですか？」

イスマイルの表情が凍りついた。なんだかとても怖い。

「サクヤ様を知らないとは……」

「あーこいつは他の大陸から来たらしいからな。まだサクヤの力が知られてないんじゃないか。というかあれだ。テツよ、おまえさんもひょっとして異世界から来たんじゃないのか？」

「……いや、なんの話やら」

異世界から来たと言われてぎくりとしたが、鉄兵はとんでもない厄介事に巻き込まれそうな気がしたので、本当になにがなにやらわけがわからないという表情をして誤魔化した。どうもシロには誤魔化しきれなかったようだが、アイコンタクトで黙らせる。

「ふむ。サクヤ様の恩恵にいまだ与れていない大陸があるとは哀れなものだな。イスマイル。説明を頼む」

ついでにアリスにも誤魔化しきれてなかったようで、疑いの目を

向けられてしまったのだが、アリスは空気を読んでくれたようだった。アリスに促されてイスマイルが我を取り戻す。

「あ、はい。了解いたしました。そもそもサクヤ様は……」

というわけでイスマイルに簡単な説明をしてもらった。ちなみに当初イスマイルは小説3冊分くらいある、非常に詳細な説明を始めようとしていたのだが、途中で気が付いたシロとアリスの二人に止められるという一幕があったのはご愛嬌。誰でも自分の専門になると口が止まらなくなるものだ。

イスマイルに説明してもらったサクヤ教の話を要約すると、以下のような事らしい。

時は８００年ほど前。この大陸が未だ戦国時代にあり、竜人族達が大陸の端の山脈に細々と暮らしていた時代の事。黒目黒髪の見目麗しい少女。サクヤと名乗るその人物が最初に歴史に姿を現したのはそんな時代のある竜人の集落であった。

異世界から来たと訴える少女。計り知れぬ魔力を持ち、その全てを癒しの力に特化させたその少女は、戦乱の世を憂い、強引とも言うべき方法を用いて戦乱を治めてしまう。つまりは竜人の心を揺り動かし、その圧倒的な力を持って中央を占拠し、拡大する一方であった戦局を縮小させ、統一を促すという方法である。

少女の願いは竜人に受け入れられ、竜人は少女に従った。少女も

またその自身の能力を極限まで活かし、少女の願いはその内容とは裏腹に、奇跡のような損害で成し遂げられた。

竜人は枯れた種族であるがゆえにその統治は不正も無く、拙くはあるもののそれ以前のものよりは格段に優れた治世と言えた。

だが、そうは言っても国を奪われてその支配に甘んじぬ者も少なくは無く、難民は増え、領土拡大の夢絶たれた領主達は残った領地を巡り争い、戦いはそれ以前よりも過酷で激しいものとなった。

少女はその状況を憂い、竜人の長に少しでも被害が減るように、少しでも理不尽が減るように、竜人による世界の見回り活動を申し出た。

少女の願いは叶えられ、多くの竜人が任務を帯び、諸国を漫遊するようになった。

そして少女もまた旅に出る。少女は数多くの怪我人を、病人を救い、旅を続けた。

しかし、人一人に出来る事などは高が知れている。

少女は力の足りぬ自分を責め、疲労し、疲弊し、やがて姿を消した。

そして少女が姿を姿を消して数ヵ月後の事である。この大陸で奇跡が起こり始めたのは。

その奇跡は、傷つき、死に行く者達の死の床に臨み、癒したい、救いたいと切に願う者達の元に起こった。

つまりは、治癒の奇跡の具現である。

治癒の奇跡を起こした者達は、誰一人例外なくある言葉を聞いていた。

それは、一人の少女の「その人を救って」という悲痛な叫びである。

サクヤという名の少女の身に何が起こったのかを知る物はいない。だが、その少女が何を考え、何を望んでいるのかは、少女の声を聞いた者であれば誰一人知らぬ者はいない。

その切な願いを聞いた者は例え魔力を持たぬものであってもサクヤの魔力を分け与えられ、強力な治癒の魔術を使えるようになった。

人はそれを魔力ではなく法力と呼び区別して、サクヤを神と敬い、その声を聞く者を神の願いを代行する者。つまりは神官として崇めた。

かくしてその声を聞いた者はサクヤ教という教団を作り、今に至るというわけである。

「これがサクヤ様に関する言い伝えでございます」

話し終えたイスマイルは微妙にテンションが下がっていた。その

気持ちは、鉄兵もなんとなく分かる。食事はデザートに移り、皮の剥かれたグレープフルーツらしきものが食卓には並べられていたが、鉄兵はどうにもそれに手をつける気になれなかった。

「私も巨人族であるがゆえほとんど魔力を持ちませぬ。しかしサクヤ様のお力により、この体躯が持つ破壊の力ではなく、人を癒し、平和を築く力を与えてもらえたのです。ですが……」

「イスマイルさんよ。それ以上は言わなくても良いと思うぜ」

「はい……」

シロとイスマイルの気持ちはなんとなく分かる。本当になんとなくである。イスマイルは癒しの奇跡を行うたびに少女の悲痛な叫びを聞いている。しかも大神官とまで呼ばれる存在なのだから本当に彼女の真に迫る声を聞いているのだろう、シロに至っては８００年来の知り合いが未だそんな悲痛な声を上げているのだ。彼らの胸の裡はどれほどのものなのだろう。

「で、テツよ。俺達に言う事はあるかい？」

「ん？　……そうだな。シロってすごい爺さんなんだな」

シロとアリスの口から盛大に溜息が漏れる。盛大に呆れられてしまったようだが、こちらにも事情がある。容貌や名前、能力などから察するに、認めたくはないがどうにもサクヤという人は自分と同じ世界から来た人の可能性が高い。けど、それをこんな誰が聞いているか分からない状況で暴露して面倒事に巻き込まれるのはごめんである。なので聞いている兵士がいるとアイコンタクトすると、どうやらシロもアリスも分かってくれたようだった。

「……そりゃまあ人間族に比べれば爺様だがな。俺はまだ若い方だぜ」

「ふむ。そういえば竜人は一万年生きると聞いたことがある。本当なのか？」

「いや、五千歳くらいでくたばってやるさ。竜人は何年生きちまうか分かったもんじゃないから、去り際になったら竜の墓場で即身成仏になるのさ」

非常に下手な誤魔化しの会話が目の前に繰り広げられる。言葉だけだとわからないが、実際のところ、二人の会話は相当ギクシャクしている。下手な演技に溜息が隠せない。どうもこの茶番の意図を察してしまったらしいイスマイルは顔色が青白くなってきたし、側に仕えていた兵士もやはり事実に気が付いたようで、意識が朦朧としているようだった。察しが良すぎる人ばかりでこまる。

「そういえばイスマイルさんは国の重臣なんですよね。なんでこんなところにいるんですか？」

仕方が無いから自分で話を逸らす。そうしたら予想外なほど強烈な話が返ってきた。

「は……あ、はい。それは姫様の見合いのためです」

「見合い！？」

晴天の霹靂であった。鉄兵もいい年の男の子なので、そんな関係ではなくとも美女が他人の者になると思えば動揺してしまうのは攻

めないでやって欲しい。

「はい。残念ながら姫様を取り押さえて城に戻す事が出来るのは今のところ私しかおりません。ですから見合いの度に城にはいない姫様に対する使者の役目が回ってくるのです」

「はぁ。イスマイルさんは強いんですね」

リルほどではないが、アリスの脅威度は例の森の中での出来事で思い知っている。他には聞いた話でしか知らないが、アリスの腕は確かなようだし、それを取り押さえられると言う事は、イスマイルというこの人物は神官という職業ながらどうやら凄腕のようだ。

「いや、武力では姫様には敵いません。ですが姫様も私に対して致命傷になる攻撃はしてきませんので、いつもは適当に刺された所を強引に取り押さえて自分を治癒しながら国に帰っております。まさにサクヤさまさまというのが情けない事ではありますが、それが我が国の現状です」

本当に情けないし少女（サクヤ）の願いを何だと思っているのかと思ったが、それは大人なので発言は控えた。まあとりあえず話が逸れたから良いとしよう。

「また見合いか。今回は都合が良いから王都に赴くが、いくら見合いを組まれようと私より弱い男に組み敷かれる気は無いぞ」

溜息を吐きながらのアリスの言葉。この口調だとどうやら今までも何回か見合いを組まれて実力で押し切っているようだ。相手の男には素直に同情する。

「またそのような事を。姫様より強い人間族などこの国にはおりますまい」

「そうでもないぞ。私より強い男はいっぱいいる。例えば鉄兵とかだな」

そういってアリスが自分を指差す。なんかもう嫌な予感しかしない。

「昨日の夜。鉄兵はあの巨大なフェンリルを折伏した。私も一部その手伝いをしたわけだが、その手際を見たところ、私は鉄兵に敵う気がしない。伴侶とするならば鉄兵ぐらいの実力者を私は望んでいるだけだ。それは立場を考えれば贅沢な事であろうが、不可能な事ではあるまい」

「何を仰いますか！」と猛烈な反撃に合う事を予見していたのだが、予想と反し、イスマイルの口から出たのは「ほう」という低い声であった。もう本当に嫌な予感しかしない。

「そう……でございますか。あ～ところで姫。リル殿に関する事はもうテツ殿に話しましたか？」

「いや、まだだったな」

「では、お早めにご報告を差し上げた方がよろしいかと」

「う……うむ。そうだな」

アリスがイスマイルに促され、こちらを向く。アリスの表情は分かりにくいが、なぜか嬉しそうにも見えた。

「リルの件だが、父王のお言葉によれば鉄兵が飼う事に異存は無いそうだ。ただ、個人的な興味によりリルと鉄兵を見てみたいそうなのだ。なので私と一緒に王都に赴いてもらうが異存はないな？」

「……了解」

話自体はそう大した事ではない。むしろそれくらいでリルを飼う権利を認めてもらえるのだから喜ばしい事だろう。

だけど、なぜだろう。蜘蛛の巣に引っかかり、じわじわと糸に身を巻かれている様な感覚を受けるのだ。今までの会話の中に、この本能に訴えかけてくるような危険な予感の鍵が隠されていたのだろうか？

「こちらもまだやる事があるから出発は二日後になるが、構わぬか？」

「了解いたしました……」

心地よいのか気持ち悪いのか。自分でも理解不能な予感に蝕まれつつも、原因の分からぬ鉄兵はただ頷いた。自分では自分は頭が良いと思っていたのだが、この予感の正体に思い当たらぬのだから、自分はそんなに頭が良くないのかもしれないとちょっとショックを受ける。

ちなみにさっきから会話に参加していないシロだが、ワインをちびちびやりながら、こちらを見てなぜかニヤニヤしている。どうしてか分からないが、後で一発ぐらい引っ叩いても文句は言われない

気がする。

「まあ飲めよ」

シロがワインのボトルを突き出す。

鉄兵はどうにも納得がいかないながら、解けぬ問題に悩む頭を誤魔化すようにシロにグラスを突き出した。

癒神サクヤの願い（後書き）

８／３１：文章修正
「どうもイスマイルは」→「どうもこの茶番の意図を察してしまったらしいイスマイルは」
「死に行く者達の死の床に」→「死に行く者達の死の床に臨み」

魔法入門

「テツよ。そろそろ昼だぜ」

「うぅ……」

頭が痛かった。物理的な意味で。それも相当酷く。

完全な二日酔いだった。あの後、妙な不安に苛まれてシロに勧められるままにワインを五本も六本も飲み干してしまったのが悪かったのだろう。そこそこ酒は強い方なのだが、どうやら完全に許容量オーバーだったようだ。

ひょっとしたら例の強化能力が働いて二日酔いも起きないんじゃないかなとか甘い事を考えていたのだが、現実はそこまで甘くないらしい。まあ毒物が自動的に中和されるというのなら酔っ払うわけがないので少し考えてみれば分かる事だったのだが……

「だらしねぇなぁ」

苦笑気味にシロが笑う。頭に響くからあまり笑わないで欲しい。それにしてもシロだって同じような量の酒を飲んでいたわけだが、どうしてあんなに元気なのだろうか。不公平だ。

とまあ朝からシロはちょくちょくやって来ては鉄兵をからかって去っていくのだが、その度に水を置いていってくれた。恨んでいいのか感謝すべきなのか微妙なところだが、面倒見がいいのだけは確かだろう。

そんな具合に午前中をベッドの上でへばって過ごし、昼も過ぎてやや太陽が西よりに傾き長けた頃になってようやく鉄兵は身体を動かせるようになってきた。相変わらずシロにからかわれながらベッドのへりに座ってうなだれながら水を飲むのが限界だが、この調子ならもう少しすれば起き上がれるようになるだろう。

「なんだ。鉄兵はまだへばっていたのか」

そんな風にグダグダとした時間をシロと過ごしていたら、ドアがノックされてアリスが入ってきた。会って早々ご挨拶だが、言い返す気力も無いので軽く手を上げて返事を返す。

「ご覧のとおりさ。まったくだらしねぇだろ？」

「そうだな。だらしない。だが私としては鉄兵もやはり人間なのだと分かってほっとしている」

酷い言われようだが言い返す気力も無いので以下略。

「あばたもえくぼ……かねぇ」

「なんだそれは？」

「さてな。古い友人の言ってた言葉さ。それよりどうしたんだお嬢ちゃん」

「大した事ではない。これを渡しに来たのだ」

そういってアリスが差し出した小さな袋をシロが受け取りちらりと中を確認する。そこからシロがなにやら金色の丸いものを一枚取

り出すと、その袋をこちらに放り投げてきた。受け取って中を見てみると、１円玉ぐらいの大きさの白金の硬貨が3枚と金色の硬貨が3枚入っていた。これが小白金貨と小金貨なのだろう。

「ガルムには元々５０００オズの賞金をギルドの方にかけていた。リルの脅威度から考えれば安いのだが、元々ガルムとして考えて賞金を出していたからそこは了承して欲しい。それと私の取り分は引かせてもらった。申し訳ないがこちらも経営が苦しいのだ。私が自らガルムの討伐に赴いたのも経費削減の意味合いがあったのでな」

オズはお金の単位である。オズワルド王国の貨幣だからオズとは随分と安直であるが、まあそこは突っ込んではいけないところだろう。分かりやすいのは良いことだ。

昨日店を見て回った限り、元の世界とは物の価値が違うので一概には言えないが、どうやら1オズ（銅貨一枚）＝１００円程度の価値のようだった。という事は今もらったのは３３００オズだから日本円に換算すると３４万円。元の世界で言えばティラノサウルスを一匹倒してその値段なのだから高いのか安いのか悩むところだが、この世界は物価が安いようなので結構な額に思える。さっさと稼がねばと思っていたのだが、棚ボタ的に収入を得てしまった。

ちなみに物価としては人一人の一日の食費が小銅貨2枚程度、宿賃は小銀貨1枚程度。一般的な職業の収入が月給小金貨3枚程度なので、今もらった額は一般的な年収にほぼ近い。シロと分けたとしても贅沢をしなければ半年は生きていける計算だ。

なので鉄兵は二日酔いも吹っ飛んで喜んでいたのだが、シロの感想は違うようだった。

「まあもらえるものはもらっとくぜ。赤字だけどな」

その言葉に吃驚する。もはや二日酔いは完全に吹っ飛んだ。

「赤字って……なんで？」

「ロープが切れちまっただろ。あいつは５０００オズはしたからな」

ロープ一本５０万！　一般的な年収の１．５倍のロープってどんなのだ？　と思ったが、良く考えてみればあれは魔法でコーティングしてあるとか言っていた気がする。

「マジックアイテムって高いんだな……」

「まあ作れるやつもあまりいねえし、手間がかかるからな」

そういうものかと鉄兵は頷いた。ちなみにシロがなんでそんなものを持っていたのか聞いたところ、使う状況は色々あるが、主に旅の途中で崖などがあった時にハルコさんを下ろしたり引っ張りあげたりすためなどに使っていたそうだ。白竜になって運べばいいような気もしたが、そう言ってみたところ「森の中でアレになると回りの木々をへし折っちまうからな」と妙に常識的な答えが返ってきた。変なところで常識人である。

魔法といえばそういえば。

「そういえば、魔法ってどう使うの？」

と聞いてみたのだが、何を言っているんだと言わんばかりに不思議な顔をされてしまった。

「おまえさん、魔法なら使ってなかったか？」

「そうだぞ。何を言っているのだ？」

そういえば魔力吸収も魔力賦与も伝説級の魔法だと言っていた。なら念じれば火でも出るのか？　と思って窓の外に右手を適当に突き出して念じてみたが、魔力は放出されるものの、火など出そうもなかった。

「……おまえさん。まさか本気で言っていたのか？」

「僕はいつでも本気です……」

シロに呆れられてしまった。今の格好を冷静に省みる。非常に恥ずかしい……

「つくづく規格外という事か。ということは魔力吸収・賦与は鉄兵の無意識魔法なのだな」

「無意識魔法？」

「うむ。本来魔法は精霊と契約を交わさねばならぬらしいが、稀にそれを為す事無く使えるものがいる。例えばサクヤ様の治癒魔法がそうであったようだ」

なるほどと頷く。そう考えると謎の翻訳機能も肉体強化も無意識魔法なのかもしれない。ひょっとしたら治癒魔法とかも使えるのかなと思ったが、今のところ誰も怪我をしていないの試しようも無かった。二日酔いの時に試してみればよかっただろうか。

「しかしそれだけの魔力を持ちながら魔法を使えぬとは勿体無い話だな。とはいえ私は魔法に詳しくない。シロはどうなのだ？」

「いや、俺も多少使える程度だな。魔力もあんまりないし、せいぜい火打ち石代わりに火の精霊と契約した程度さ。契約のやりかたも忘れちまったな」

そう言って人差し指を立てたシロの指先から小さな炎がポッと出た。おぉ魔法だと驚く鉄兵は、以前にも目の前で同じ事があったのだがそのことは覚えていない。

「この町には魔術師ギルドもないし……しかしそうだな。本屋に行けば初級魔術の参考書くらいは売っているかもしれん」

「そっか……それじゃ本屋に行ってみるかな」

実のところ魔法にはそれほど興味は無かったが、どうせ明日までは暇なのだ。懐も温まった事だし、魔法を試してみるのも悪くは無い。それに本屋にも興味がある。昨日町を歩いた感じ、店の看板や値札などの文字は読めないものの理解が出来た。本に対しても同じように理解できるかどうかは確かめたいところだった。

というわけでもらったお金を山分けして出かけようと思ったのだが、金をシロに渡そうとしたら

「もっときな。先立つものは必要だぜ。貸した分だけもらっとくさ」

と突っぱねられてしまった。さっき金貨を一枚だけ抜き出したのは、昨日使った鉄兵の装備の経費だったようだ。

鉄兵は少し考えたが、シロの言葉に甘えておく事にした。シロの言うとおり、先立つものは必要である。

「それじゃとりあえず借りとくって事で」

「さてねぇ、俺は人に貸しても忘れちまうからなぁ」

ニッとシロが笑う。まったくもってシロは江戸っ子でもないのに江戸っ子気質だ。ならその流儀にしたがって、違う形で返すしかないかなとか鉄兵は考えて覚えておく事にした。

「んじゃちょっと出かけてくる」

「今から行くのか。鉄兵はこの町に慣れてないのだろ？　少し待ってくれれば私も案内が出来るのだが」

「町くらい一人で歩けるさ。子供扱いするなって」

例え道に迷ってもそこらの人に聞けばどうにでもなるものだ。なので冗談めかして断ったのだが、なぜかアリスは「そうか……」寂しそうな表情を見せた。アリスも町に出て遊びたかったのかな？とも思ったが、とりあえず本屋が気になったので気にしないことにする。

「迷子になるなよ」

「アホ抜かせ」

ニッと笑うシロにデコピンを食らわせるマネをすると、鉄兵はお

金の入った袋をポケットに詰めて外に出た。

詰所の外に出るとリルが寄って来て

「つれてって！　つれてって！」

と甘えてきたのだが、どう考えても人に慣れてないだろうリルがあの人並みの中を歩くのは危険そうな気がしたので

「ごめんねリル。その姿のリルだと町は危険だし、大きくなったらみんなが怖がっちゃうから、リルはここでお留守番してみんなを守って欲しいんだ」

と諭してみたら、リルの返事は

「リル、おるすばんする！　みんなまもる！」

と真剣そのものだった。本当に健気な姿が可愛くて頭を思いっきり撫でてやる。

「それじゃ頼んだよ～」

と鉄兵は、門を曲がってリルの姿が見えなくなるまで手を振って詰所を出て行った。

というわけで本屋である。

ちなみにここに来るまでに裏道に迷い込んでゴロツキに囲まれたり、道を尋ねて案内してくれるという親切な人がいたのでついていったらゴロツキに囲まれたりしたのだが、適当にゴロツキの上をジ

ャンプして逃げたりと大した事はなかったので割愛する。アリスは頑張っているようだが、あまり治安の良い町ではないようだ……まあ路地裏と言っても相当深いところに迷い込んでしまったらしい気はするが。ともあれ本屋である。

本屋に入ると、なんだか懐かしい匂いを嗅いだ気がした。

本屋の中を見て納得する。黄色い背表紙の本が並ぶその本屋は、本屋と言うか古本屋であった。多分、これがこの世界では一般的な本屋なのだろうというのは、適当に本を選んで開いてみたらすぐに分かった。紙は羊皮紙とかではなかったにしろ結構粗雑なものだったし、活版印刷技術もまだないようで、全部手書きだった。ここにあるのは原本もあるだろうがほぼ写書なのだろう。鉄兵はとりあえず製紙技術と活版印刷技術だけはアリスに頼み込んでどうにかしてもらおうと思った。どうせ会う予定だし王様に頼み込んでも良いかもしれない。

実際のところ鉄兵は今、この世界に来てから一番の衝撃を受けていた。書籍文化の発達してない文明など耐えられそうにもなかったのだ。文明の発達には書籍の強化は一番に必要な事である。それは理系文系問わずに重要な事であった。

しかしまあ、それはそれとして今は魔法の本である。さて、どこにあるのだろうか？

「すみませ……ん？」

ちょうど後ろを通る人がいたので店員かと思い声をかけたのだが、声をかけた瞬間に明らかに間違えだと気が付いたので声が止まり、さらにはその人物の容姿に驚き、疑問の声が思わず出た。なぜ明ら

かに店員ではないのかというと、店員というには明らかに幼く、その格好も店員のものとは思えなかったからである。

声をかけた少女は、どうみても中学生程度の少女であった。にしては目に知性があったのだが、身長は１３０ｃｍ程度と低く、色々と発展途上な部分は別として、白を基調とした身軽そうな服にマントを羽織ったその服装はどう見ても本屋の店員には見えない。

そして容姿はと言えば、耳が非常に長かった。まさに某映画で見たエルフである。多分これが精霊族というものなのだろうが、耳以外には話に聞いた精霊族との差異はないし、ひょっとしたらハーフなのかもしれない。

おまけに勝気そうに見える釣り目が気になるものの、飛びっきりの美少女である。長い金髪を赤いリボンでツインテールにしてたりと、友人に借りた漫画にこんなキャラがいたので「これはまたテンプレートな異種族だな」とか思ったが、可愛いものは可愛いし、だからこそテンプレートになるのだろうな。などという不埒な考えが、この一瞬の間に鉄兵の頭の中を過ぎった。

とまあ鉄兵は驚きのあまりジロジロ見てしまったので、非常にぶしつけな目で目の前の少女に睨まれてしまった。

「なに、ナンパ？」

「いえ違います」

手のひらを横に振る。そこは違うのでしっかりと否定する。ついでに子供に手を出す趣味は無い。

「魔法関連の本はどこか店員さんに聞こうと思ったら間違えただけです。店員さんじゃないですよね？」

「魔法関連の本ねえ……こっちよ」

「え……？」

腕を掴まれ、強引に引っ張られる。やっぱり間違いだったのは間違いで、店員だったのだろうか？

とまれ鉄兵は少女に手を引かれ本屋の一角に案内された。

「魔法関連の本はこの一冊だけみたい。しけた本屋よね」

「はあ……」

口が悪い子だなぁとか思いつつも、とりあえず今の言葉で店員じゃなさそうだなと鉄兵は推測した。ならなんでこんなに強引なのかなと思ったが、今のところそういう性格なんだろうなと思うしかなさそうだ。

とりあえず少女に渡された本を見てみる。題名はずばり「初めての魔法」である。本当に初心者用の書物しかなかったようだ。ぱらぱらっとめくってみる。基本となる精霊の事や基本の魔法の系統と詳細。それに一般的な用途などが書いてあって空想小説の詳細設定でも読んでいる様な感じだが、これはこれで面白い。

「ねぇ、魔法に興味があるの？」

とりあえず買って帰ろうかなとか考えていた矢先、不意にそんな

声を掛けられた。見ればさっきの少女がまだ横にいた。結構な時間立ち読みをしていた気がするけど、ずっとここにいたのだろうか？

「まあね。最近になって魔力が結構あるって言われたから試してみようと思って」

「魔法、教えてあげようか？」

少女の言葉に鉄兵は首を傾げた。とりあえずそんな事を言うと言う事は少女はどうやら魔術師だったようである。言われてみれば格好もそれっぽいし納得だが、どうしてそんな話になったのだろう？

「……えっと、逆ナン？」

「違うわよ！」

少女が顔を赤らめて怒る。どうやら違ったようだ。となれば考えられる原因は？

「暇なの？」

「……うん、暇なの。お金も無いし」

それもどうかなと思いつつも言ってみたら正解だったようだ。どうやら家庭教師の営業のようである。少女は赤らめた顔をさらに赤らめ、俯いてしまった。

ともあれそういう事なら本職の話を聞くのも悪くは無い。

「幾ら位？」

「そうね。大負けに負けて時給１０オズでどう？」

時給銀貨１枚のようだ。一日の宿代に相当する金額だが、大負けに負けていると言う事は安いのだろうか？

「負からない？」

「え……」

試しに値切ってみたらかなり絶望的な顔をされてしまった。演技にも見えないし、どうやら本当に相場より相当低いらしい。

「わかりました！　１０オズでいいからそんな顔しないで！」

「ほんと！」

少女の顔がぱぁっと華やいだ。美少女の笑顔は良いものである。言うなればそれは駄目な大人ならばそれだけで１０オズ（１０００円）と言わずそれ以上貢いでしまいそうな笑顔であった。

「えとね……それと条件があるんだけど……」

少女が顔を赤らめる。と同時にどこからかクーと可愛らしい音がして、少女はこれ以上ないほどに顔を赤らめた。

「……前払いで、とりあえずおごりますので食事をしながらお話を伺ってよろしいですか？」

「ありがと……」

少女の本当に追い詰められて感謝するような潤んだ瞳は、鉄兵の保護欲を刺激するに十分なものであった。

魔法入門（後書き）

9／2：文章修正

「……うん、暇なの」→「……うん、暇なの。お金も無いし」

「それもどうかなと思いつつも言ってみたら正解だったようだ。」と「少女は赤らめた顔をさらに赤らめ、俯いてしまった。」の間に「どうやら家庭教師の営業のようである。」を追加

「道を尋ねて案内してくれるというのでついていったら」→「道を尋ねて案内してくれるという親切な人がいたのでついていったら」

「相当深いところに迷い込んでしまったらしい気はするが」。→「相当深いところに迷い込んでしまったらしい気はするが。ともあれ本屋である。」

家庭教師を押し売られた鉄兵は、とりあえず本を買って少女とともに料理屋に移動する事にした。

ちなみに「初めての魔法」の値段は１５０オズだった。日本円に換算すれば１５０００円と手書きの稀少本としては普通の価格だが、一般的な月給の半分ほどである。初級の魔術書なのにそれほど高いと言う事は、それほど一般的に需要は無いのだろう。本物の魔術師の個人レッスンが時給１０オズ以上なのも納得の値段なんだろうと、まだぼったくられている可能性を考慮しつつも鉄兵はとりあえず推測した。

金貨2枚で支払いを済ませ、お釣りを小銀貨で5枚もらい、そのうち4枚を少女に渡した。恐らく今は午後3時くらいなので4時間ほど話を聞けば詰所に返った時にちょうど夕食の時間になるだろう。残った銀貨1枚は今から奢る食費に当てる予定である。

本当にありがとう！　と少女に感謝されつつ、この町の地理についてはそれほど詳しくないので少女の行きつけの料理屋に案内してもらう事にした。

料理屋に入ってメニューを見たところ、文字はわかるものの、その名前からはどんな料理が出てくるのかよく分からなかった。なので前に座った少女に聞こうと思ったところ、少女の空腹は限界に達していたらしく、机に突っ伏していた。

仕方が無いので注文を取りに来たウェイトレスさんに銀貨を渡し「連れが限界らしいので大至急適当な料理をお願いします」と適当

に食事を用意してもらう事にした。

やがてテーブル食事が並び、少女が恍惚の表情を浮かべてそれをがっつき始めた。口の中をぱんぱんに張らして貪り食うその姿は小動物のようで可愛らしい。が、食べ方は案外汚い。いや、汚いというか菜食主義者……というよりかなりの偏食家のようだ。

例えば野菜炒めのような料理や海鮮パスタのような料理が出てきたのだが、器用にひょいひょいとフォークで肉や魚や貝などをよけて食べているのだ。とはいえ避けた肉や魚から出た肉汁等については無頓着なので、菜食主義というよりは偏食家なのだろう。

「しあわせ……」

少女の周りに花が飛んでいる。どうやら少女の腹の虫が治まったようだ。だが、少女は思った以上に小食だったようで、綺麗に肉類が残された皿の他にも結構な量の料理がまだ食卓には残っている。これは自分が食べなくてはいけないのだろうか……鉄兵は草食系男子に分類されるが、料理の嗜好は肉食系なので、少女の食べ残しを片付けるのはいいのだが、ちと量が多い。

はたと気が付いて厨房の方を見る。すると思ったとおり、まだまだ厨房では慌しく調理中であった。午後も遅い時間なので、現在客は鉄兵達しかいない。つまりあの調理中の料理は鉄兵達の物なのだろう。慌ててウェイトレスさんを呼んで注文を取り下げたが、時はすでに遅かった。作りかけの料理は流石にキャンセルできなかったので、テーブルの上には6人前の料理が並ぶ。考えてみれば人一人の一日分の食費が銅貨2枚なのだから、外食と言う事で多少色がついたとしてもワンコインで一食分の食事ができるのだろう。この世界の物価に慣れていないがゆえのミスであったが、そのツケは大き

いようだ。

「えっと……まだ食えない」

「無理で～す」

6人前の料理を前に恐れおののき、縋るように少女に尋ねてみたのだが、固い拒否の意が込められた笑顔であっけらかんと答えられてしまった。諦めて一人で平らげるしかないらしい……

「……それじゃ、魔法について教えてもらって良い？」

しぶしぶと料理に手をつけながら鉄兵は少女を促した。行儀は悪いが食べながらでないと時間が勿体無い。それにしても料理が美味いのが救いだが、二日酔い直後にこの料理の量は本当にきつい。食べきれる自信は皆無だが諦めたらそこで試合終了である。

「それよりも、まずはやる事があるでしょ」

「やること？」

「あなたのお名前は？」

あぁ、と鉄兵は納得した。妙な展開でここまで来たので、未だ自己紹介すらしていなかった事にようやく気が付いた。

「鉄兵です。呼びにくかったらテツでいいよ」

「鉄兵ね。変わった発音の名前ね。私はリード。よろしくね」

少女がさらっと鉄兵の名前を完璧に発音したのを聞いて、鉄兵はちょっと驚いた。シロとイスマイルは鉄兵の名前を発音できなかったし、アリスにしてもちゃんとした発音をするには少しかかった。それなのに少女は即座に鉄兵の名前を完璧に発音したのだ。なんでだろうかとちょっと思ったが、少女が魔術師なのに関連があるのかなとか鉄兵は考えた。魔術師なら色々な言語を知っていそうだという理屈である。

「よろしく、リードさん」

「さんはいらないわよ。あ、けどそれも駄目ね」

リードの顔がなにやら人が悪そうに歪んだ。ちょっと嫌な予感がする。

「私のことは師匠と呼びなさい。少しの間だけど魔法を教えるんだからね」

リードが腕を組み、ドヤ顔を見せ付ける。

「……はぁ」

「なにか不満そうね」

不満と言うか呆れたのだが、どうやらリードのお気に召さなかったようだ。理由を言えといわんばかりに睨まれているが、果たして理由を言って良いものやら。

「師匠と言うには……」

「師匠と言うには？」

「……ちょっと幼いかな。ってギャ！」

その台詞を口にした途端にリードの手がこちらに向いたと思ったら、鉄兵は軽い感電状態を味わって、悲鳴を上げてしまった。これが魔法というものだろうか。

思い切って本音をカミングアウトしてみたのだが、正直なら良いというものでもなかったようだ。可能な限りの爽やかスマイルで誤魔化してみたのだが、リードには効果が無かったようだ。

「イタタ……」

「人を見た目で判断してはいけません」

「ごめんなさい」

小さい少女に大人の対応で怒られてしまった。ちょっと情けないので素直に謝る。

「それにこう見えても、私多分鉄兵より年上よ」

「それはまた……俄には信じがたい事実ですね」

リードの手がまたこちらに向いたので、鉄兵はまたあの感電状態が来ると思って身構えたのだが、いくら待っても衝撃は来なかった。リードの方を見ると、人の悪そうな笑顔をこちらに向けている。どうにも完全に弄ばれてしまっているようだ。

「ちなみに鉄兵は何歳？」

「２１歳です」

「あ、じゃあやっぱり私のが年上だ。２２歳だもん」

あっけらかんと言ったリードの言葉に鉄兵は少し驚いたが、そういえばリードは異種族だ。成長の仕方がちがくても不思議な事ではないのだろう。

「えーっと……師匠？　は人間族じゃないですよね？」

「なんで師匠のところで疑問系なのか引っかかるけど、見ての通り私は半精霊族よ。見て分からない？」

「はじめて見ました。うちの地元には精霊族もいなかったので」

「そういえばこっちの方は人間族ばっかりだもんね」とリードが納得したように頷いた。ついでなので半精霊族の成長過程について聞いてみたところ、５歳くらいまでの成長スピードは人間族と変わらないらしいが、そこからはゆっくりと成長していくようで、大体２歳で人間族の１歳分の成長スピードらしい。ということは精神年齢は２２歳でも、リードの肉体年齢はおよそ１３．５歳である。幼い訳だ。

話が逸れたついでになんで行き倒れ寸前になっていたのかを聞いてみたところ、原因の半分はリルのせいだったようだ。リードは王都に住んでいるらしいのだが、この町に前から手に入れたいと思っていた珍しい魔術書が入荷されたと聞いてやってきたそうなのだ。ところが目当ての品は足元を見られて所持金限界までぼったくられ

てしまって旅費が無くなり、仕方ないので商隊の護衛の仕事でも受けて帰ろうと思ってたのだが、折り悪くリルの出現で街道は封鎖され、その間に路銀が尽きてしまったそうだ。

それでも今日の朝には王都行きの護衛の仕事が入ったらしいが、依頼主の商人に会ってみたらそれが幼女趣味の変態だったようで、あからさまに下心を含んだ視線を向けられたので、身の危険を感じて断ってきたそうだ。そういうわけで金はないわ腹は減るわで、背に腹は変えられないので今回購入した魔術書とは別の、それでも価値のある魔術書を本屋に売りに来たところで鉄兵を捕まえて今に至るというわけだ。

「それはまた、災難でしたね」

「ほんとに踏んだり蹴ったりよ。けど、鉄兵に会えて助かったわ」

にこやかに笑顔を向けられて、鉄兵はちょっと良心の呵責に苛まれてしまった。街道封鎖の原因を取り除いたのは鉄兵だが、封鎖の原因になったリルの飼い主は自分なのだ。なのでついつい口が滑り、余計な事を言ってしまった。

「えっと……王都に帰るだけなら、自分達も明日出発するんだけど、一緒に行く？」

「そうなの？　どうしようかな」

リードは腕を組んで人差し指を唇に当て、視線を明後日の方向に彷徨わせて考え込む。数秒考え込んだ後、リードはニコッと笑って話を逸らした。

「ま、それはそれとしてそろそろ授業を始めましょうか」

「よろしくお願いします」

まあ縁が合ったとはいえ、うら若い女性が誘われるままに一緒に旅をするというのもおかしな話だろう。話を逸らされて鉄兵はむしろほっとした。

というわけでリードによる魔法の講義が始まった。簡単にまとめれば以下の通りである。

魔法の基本は、精霊を介して魔力を変換する事にあるらしい。魔力というのがなんなのかはいまいち不明だが、話を聞くに、連想されたのは元の世界ではとっくに否定されている第五元素であるエーテルのようなもののようだった。この世界のどこにでもあり、元素変換を行う作用があるようだ。原子の電子数でも操る触媒になっているのか、はたまた転移性のある物質なのか、詳しい事はまだ解明されていないらしい。とはいえ火が水に、水が土に変換できるというような便利なものではないらしく、それなりに制限はあるようだ。そこら辺を考えると、この世界は元の世界とは違う法則で成り立っているようだ。まあ元の世界の法則もあくまで既知世界内ではどうやらそんな法則があるようだというものが実験や理論により確認されているというだけなので、異世界ともなれば法則が違っていてもおかしくない事だろう。というか人型生物が竜になって氷の吐息を吐くような世界だ。元の世界の考えで考えるだけ無駄かもしれない。

とまあリードの目をじっと見つめて彼女の話に集中して聞いていたのだが、ふと鉄兵はリードの顔が段々赤く染まっていっているのに気が付いた。

「顔赤いけど大丈夫？」

「……本気で言ってるの？」

急な風邪でも引いたのなら大変だと、鉄兵はリードの身を気遣って聞いてみたのだが、意味不明な回答をされてしまった。ますます顔を赤くして、少し怒ったような口調で発せられたその言葉の意図がわからず、鉄兵は首を傾げるばかりである。

「はぁ……まあ良いわ。別になんでもないですよー」

リードはしばらくじっと鉄兵を睨んでいたが、やがて諦めたように溜息を吐いて話を再開した。

ちなみにリードの顔が赤く染まった原因は、鉄兵の例の天然流し目攻撃によるものであった。ややたれ目で話をする時に小首を傾げる癖がある鉄兵は、その仕草をするとまるで流し目をしているようになる。それで男でもたまにやばくなると評判のその天然の流し目を向けられて非常に困って（？）いたというのが真相なのだが、普段それほど親しくない女性と深く話す機会がなかった鉄兵はその事に気が付かなかったという話である。

さて、そんなどうでも茶番劇はさておき、魔法の話の続きである。

ともかくこの世界には魔力というものがあり、どこにでもあるものなので息をしていれば身体に溜まっていくものらしい。その魔力を変換して魔法と呼ばれる現象を起こすわけだが、種族や無意識魔法によって本能や備わった特殊な機関で魔力の変換を行える人も一部いるらしいが（例えばシロのような白竜なら肺に溜め込んだ空気中に含まれる魔力を舌の付け根にある器官で氷点下の空気に変換す

る等）、基本的にはそういった人以外は魔力を変換する能力はないらしい。ならばどうやって魔力を変換するのかといえば、そこで登場するのが精霊である。

精霊と言われる存在がどんなものかといえば、これまたよくわかっていないらしい。元の世界で言えば幽霊とかそんなイメージだろうか。とにかくこの次元とは少しずれた世界にいる存在らしく、たまに意思があったり実体化したりする個体もいるようだが、基本的に喋れも触れもしない存在らしい。基本的に精霊と呼ばれる存在は一つの種（？）であるらしいが、火の側を好むもの、水の側を好むもの、生物や樹木の側を好むものなど個性は様々らしく、好んで側にいたものの影響を受け、属性を得るらしい。そして精霊には魔力を属性に応じた元素に変換する力があるらしく、精霊と契約を交わしてその能力を使用する事を魔法というらしい。

契約とは言ったが、実際のところその言葉には語弊がある。事実としては無断で精霊の力を使用するわけで、ただ乗りというか、使役といった方が良いだろう。契約の方法は単純である。普段はずれた位相にいる精霊を半実体化させ、触れば良いだけのことなのだ。精霊に重なれば精霊の一部が身体に留まり、その能力を利用できるようになるらしい。そして言葉にするなりイメージするなりして精霊の能力を使い、魔力を使用すれば契約した精霊の属性に応じた魔法が発現するという仕組みだ。

魔法を使用するのに重要なのはイメージ力と言語能力のようだ。つまり魔力を元素変換する際にどのように魔力を配置し、どの精霊にどのように具現化させるかを鮮明にイメージする能力。そして体内の宿る精霊にそれを正確に伝える言語能力のようである。なお、精霊に正確にイメージを伝えるには、通常の言語でもある程度は伝わるらしいが、精霊独自の言語があり、そちらの方が上手く伝わり、

ロスが少ないらしい。精霊の言語は精霊語と呼ばれており、発音が非常に難しく、一つの現象に対しての語彙がものすごく多彩らしく、しかも地方により使用されている言語がかなり違うため、ある程度は解析が進んでいるが、いまだ完全な言語体系は解明されていないらしい。ゆえに精霊語を学び、解明する事が主な魔術学者の仕事のようだ。ちなみに聞いたところによればリードも魔法を研究する学院で研究生をやっているらしい。

以下は魔術に関連するその他の情報についてである。

魔法には単純に魔術と呼ばれる今言ったものとは別に、神聖魔術と呼ばれるものと精霊魔術と呼ばれるもの。それに呪歌と呼ばれるものがあるらしい。神聖魔術はサクヤ教の神官達が使うものであり、精霊魔術はまれに精霊に祝福されているように精霊に力を貸してもらえるものがいて、魔力が低くとも魔術のような力が使えるものがいるようである。呪歌は精霊に共感するある波長の音を楽器を用いて出す事により精霊の活動を制御する技らしいが、非常に繊細な調整が必要らしく、使えるものも少ないとのことである。

マジックアイテム作成の技術についてはリードは専門ではないのでよく分からないらしいが、どうもミスラルと呼ばれる金属を使用するか、精霊刻印と呼ばれる精霊語を文字にしたものを使用して作成するらしい。

ちなみに精霊族と精霊の間になにか関係あるのかと言えば、特に関係はない。精霊族は魔力保持限界が高いのとともに、他の種族とは違い唯一自力で魔力に干渉できる能力があるというだけなのだそうだ。それが精霊っぽいから精霊族と呼ばれているそうな。

以上がリードによる講義の内容であった。

よく分かる魔法理論（後書き）

9／5：文章訂正
「頑張って食べるしかないか……それじゃ、魔法について教えてもらって良い？」→「……それじゃ、魔法について教えてもらって良い？」
11／9：指摘いただいた脱字修正
「この町に前から手に入れたいと思っていた珍しい魔術書が入荷されたと聞いてやってきそうなのだ。」→「この町に前から手に入れたいと思っていた珍しい魔術書が入荷されたと聞いてやってき［た］そうなのだ。」

「基本はこんなとこかな。どう、理解できた？」

「まあだいたいは」

だいたいは理解できたが、疑問点も何個かある。とりあえず本格的な事を教わる前に聞いておこう。

「２つ３つ疑問点があるんだけど」

「なに？」

「例えば身体能力を強化するような魔法もあるんだと思うんだけど、そういうのはどの属性の精霊の力を使うの？」

今の説明だと火とか水とかの属性がある魔法しか使えないように聞こえる。転移魔法はあるようだし、属性にとらわれない魔法もあるはずなのだが、そこらへんはどうなのだろう。

「あーそういう場合は無属性の精霊にお願いするの。属性が無いから属性魔法よりも魔力をロスするんだけどそれはもうしょうがない事なの」

苦笑気味に手のひらをひらひらさせてリードが言う。なるほど、無属性の精霊もいるらしい。精霊の繁殖方法は不明だが、生まれたばかりのまだ染まっていない精霊などが無属性なのかな？　とか鉄兵は憶測した。

「他は？」

「精霊族は自力で魔力変換できるっていってたけど、それならなんで師匠は魔術を学んでいるの？」

「その事ね。精霊族は自前で魔力を変換できるけど、半精霊族はその能力がないの。だから精霊語を覚えたりしないと魔術は使えないのよ」

ちょっと失礼な質問かとも思ったが、意外なほどリードはあっけらかんと鉄兵の質問に答えた。

「後は？」

「それじゃ本題。精霊との契約はどうやるの？」

「そうね。そろそろ本格的にはじめましょうか。これで魔法が使えるかどうか選別されちゃうんだけど、えっと最初は魔力を眼球に集中させて、魔力で作った膜のようなものをイメージして。その膜を通して、違う世界を見るイメージをするの。これが生身で使える唯一の魔法。精霊界と相性が悪かったり魔力が低かったりするとそこで撥ねられちゃうから頑張ってね」

そう言ったリードは少し緊張しているようだった。どうやら魔法は誰にでも使えるというものではないらしい。魔力はともかく精霊界との相性はどうだろう？　まあ異世界に飛ばされてきたような人間だし、違う世界との相性はいい気がする。ともかくやってみよう。

「お」

言われたように魔力を目に集中させて、コンタクトをつけるようなイメージをしてみたところ、ちょうど目の前に半透明の白い物体が見えた。これが精霊なのだろう、どうやら自分は魔法が使えるようだ。ちょっとほっとする。

「なんか白いのが見えた」

「どれどれ？　あぁ、無属性の精霊ね。結構珍しい精霊だし、契約しちゃったら？」

どうやら無属性の精霊はレアらしい。ラッキーだったのかな？

「半実体化はどうやるの？」

「精霊の前に手をやって魔力を放出して。あ、魔力放出はできる？」

「多分大丈夫」

鉄兵は言われたとおりに精霊の前に手を出し、魔力を放出してみた。鉄兵には魔力が見えないが、どうやら精霊には見えるようで、近づいてきて魔力を放出している辺りでくねくねと身体を動かし始めた。その様子はなんと言えば良いだろうか……撒き餌を食べる小魚のようだとでも言えばいいだろうか。

「ちゃんと魔力を食べてるみたいね。もうちょっとしたら鉄兵の魔力波長が精霊に馴染むから、後は触れたら契約成立よ」

精霊は魔力を食べるものらしい。精霊が魔力を食べる様子も小魚のようだし、魔力は精霊にとってプランクトンみたいなものなのだろうかとかどうでもいい考えがよぎった。

そんな事を考えていたら「もう良いわよ」と言われたので無属性の精霊に触ってみた。いや触ろうと思ったら液体にでも触ったかのように精霊の身体をすり抜けてしまい、驚いたらしい精霊はどこかに逃げていってしまった。これで契約完了のようだ。身体の中に内臓が一つ増えたような、感覚器が一つ増えたような妙な感覚が備わったので契約が成功した事はすぐにわかった。

「おつかれさま。これであなたは見習い魔法使いになりました」

「おつかれさまでした」

お互い頭を下げて礼をした。まさに講義後の教師と生徒のような光景である。リードの事を師匠というのはあながち間違ってないのかもしれないとか思った。呼び名はもう師匠でいいやと鉄兵は今度からリードの事をそう呼ぶように決めた。

とまあ鉄兵は精霊との契約を完了したわけだが、その際に2つほど疑問が出てきたので聞いてみる事にする。

「精霊は魔力を食べるとその魔力を与えた人にだけ触れるようになるみたいだけど、魔力をあげ続けたら完全に実体化とかってするの？」

「するわよ。どういう原理かまだ不明だけど、魔力を与え続けるとこっちの世界にも波長が合って完全に実体化できるみたい。知性のある個体と本当の意味で契約して使い魔にしてる人もいるわよ。もっとも精霊族くらいの魔力量がないと無理だけど」

精霊を使い魔にする事も出来るらしい。そのうち試してみるのも

良いかもしれない。

「それと魔力賦与は伝説級の魔法だって聞いたけど、放出とは違うの？」

「魔力放出と魔力賦与は別物です。魔力には人それぞれに波長があるから魔力を他人に分け与えるってのはものすごく難しいの」

なるほど。という事はたまたまリルとは波長があったから魔力吸収も賦与も上手くいったのであろうか？　実験してみたいところである。

というわけで実験してみる事にした。

「ちょっと試してみて良い？」

「へ？　なにを？」

「ちょっとしたこと。両手を出してもらって良い？」

リードは訝しげな表情をしつつも戸惑いがちに両手を鉄兵の方に向けた。その手を鉄兵が握る。

「え？　え？」

「すぐ済むから、ちょっとだけよろしくね」

両手を握られて顔を赤らめながら戸惑うリードに軽くウィンクをして了解を取ると、鉄兵はリルでやってみたように右手で魔力の賦与を、左手で魔力の吸収を行い、リードの魔力を調整してみた。

結果から言えば魔力の吸収も賦与も成功した。どうやら相手がリルだからたまたま出来たという事ではないらしい。ちなみにリードの魔力保持限界は人間族平均の３００人分くらいあった。これは結構すごいのではないだろうか？

「え？　今のってひょっとして……」

「自分の無意識魔法。珍しい魔法らしいね」

リードが口を開けて非常に驚いているようなのでちょっと軽はずみだったかなと後悔しつつ、さらりと流す事にする。

「それで、魔法って具体的にどう使うの？」

「え？　あぁ、うん。体内に魔法器官ができたのは感じてるでしょ？　まずは何をするかをイメージして、魔力を放出しながらその器官に命じるように言葉を発すればとりあえずは使えるよ」

「鉄兵はまだ無属性の精霊としか契約してないからむずかしいだろうね」とリードが笑う。まあなんとなくだがやり方は理解できた。とりあえず試してみる事にする。

さて何をしてみようかと考える。火とか出したら店内だし迷惑になるだろう。というか多分追い出される。ならば水か？　とも思ったが、水を出して店内が水浸しになったら以下略。それならどうしたものかと考える鉄兵に、ぬるい水が入ったコップが目に留まった。

ちょうど氷が欲しいなと思っていたところなので、氷を作ってみる事にする。

まずはイメージする。水の元素はＨ２Ｏ。昔教科書で見た氷の構成を思い出す。次は魔力の放出である。どれくらいの量が適切なのだろうか？　とりあえず人間族平均の半分くらいにしておこうか。次は魔法器官に命令する言葉である。これはとりあえず一言で良いだろう。

「氷」

鉄兵は自分の横の開けた空間に向けて、簡潔な一言で一連の魔法動作を試してみた。

ゴンッ！　っと音がして、等身大に近いサイズの立派な氷柱が現れた……魔力放出量の調整を間違えたらしい……

「ちょっ！　なにこれ！！」

リードが現れた氷柱を見て驚いている。どうやらやりすぎてしまったようだ。

「あ、あはは……ちょっと失敗しちゃった」

驚くリードを笑ってごまかしつつ、鉄兵はぬるい水が入ったコップの上に小さな氷を三つほど作ってみた。今度は無事、イメージ通りに成功した。魔法を使ってみたところ、別に無詠唱でもできそうだなと思ったのでやってみたが、それも成功だった。どうやら無属性の精霊と相性がよかったようだ。

氷のおかげでよく冷えた水を一気飲みして一息つく。さてどうしよう……

店内で派手に魔法を使ってしまったのだ。予想通り店長さんらしき人が出てきてこっぴどく怒られたが、なんとか追い出されないで済んだ。それよりも店長さんは目の前の氷柱に興味があったようなので「よかったら使ってください」と言ったら「いいの？　悪いね」と途端に機嫌が良くなって氷柱を店の奥に運んでいった。なんに使うんだろうか？

「はぁ……いきなり魔法を使うとは思わなかった。しかもあんなすごいの。鉄兵はまず常識を学ぶべきだと思うの」

「ごめんなさい……」

とばっちりを受けて一緒に起こられたリードの溜め息交じりの言葉に鉄兵は素直に謝った。正直穴があったら入りたい……

「それより、無属性の精霊としか契約してないのになんでいきなりあんな魔法が使えたの！」

「さてなんででしょう」

「それにさっき無詠唱で魔法使ってなかった？　なんでそんな事できるの！」

「いやそれは……どうしてですかね」

リードの目は完全に研究者のそれである。どうやら被検体として認識されてしまったようだ。

とまあそんな風に質問攻めにされていたら、店の中に人が入って

きた。外はそろそろ日が暮れる頃である。そろそろ客が増える頃なのかなと思って入り口の方を見てみたら、そこにはもはや見慣れてきた人物が立っていた。

「あれ、シロ？」

店に入ってきたのはシロだった。背中にはギターケースを担いでいる。こんなところで会うとは予想外だったが、食事は詰所で用意してくれるだろうし、何しに来たのだろうか？

「おや、奇遇だねぇ。ナンパかい？」

「ちげーよ」

シロもこちらに気がついたようで寄ってきた。シロの冗談にはジト目で返す。しかし先程もリードにナンパと間違えられたし、そんなに軽い男に見えるのだろうか？

「ところでシロ。どうしたの？」

「いや、暇なんでね。ちょいと本職で稼ごうと思ってね」

そう言ってシロはギターケースをちょいと持ち上げてみせた。なるほど、流しの営業だったようだ。

クイクイと服の裾が引っ張られた。見るとリードが背を伸ばして懸命にテーブル越しに鉄兵の服を引っ張っていた。口に手を当て顔を伸ばしてきたのでなんだろうと思いつつも耳を寄せる。

「ねぇ、この人は誰？」

リードがまだテーブルの上に食べかけで残っていた料理をひょいと手掴みでつまみ食いして、冷めていたので顔をしかめているシロを指差し、小声で囁く。

「あー紹介するよ。こいつは連れのシロ。本名は忘れた。こちらはリード。魔法の師匠」

リードを紹介すると、シロは「ほう」とちょっと驚いたような顔を見せたものの、すぐにいつものようにニッと笑顔を見せた。

「シロディエールだ。よろしくな」

「リードです。よろしく」

二人が笑顔で挨拶を交わす。その後ですぐさまリードがこちらを向き、話しかけてきた。

「ねぇ鉄兵。王都に行く件だけど、私もついて行って良い？」

「別に大丈夫だと思うけど、なんでまた急に？」

「だって竜人族が一緒なんでしょ？　これ以上安心な旅なんてないじゃない。鉄兵も面白いし」

なるほどと鉄兵は納得した。巡回保安官である竜人族の信用度は思った以上のものらしい。しかし面白いとは失礼な気もするが、まあ師匠なので弟子の扱いはそんなものかもしれない。ところでリードはシロが竜人族だとすぐに気がついたようだった。アリスもすぐに分かっていたみたいだし、見分ける方法でもあるのだろうか？

「おや、その嬢ちゃんも連れてくのかい？」

「駄目かな？」

「テツの師匠なら良いんじゃねぇか？　あれだ、平気だとは思うがアリスの嬢ちゃんには早めに言っておいた方がいいぜ」

「そうだな」

準備や調節もあるだろうし、さっさと話した方が良いのかもしれない。

「しかしあれだな」

なにやらシロがうんざりした顔をしている。どうしたのだろう？

「なに？」

「俺は一人旅が好きなんだがねぇ。鉄兵を拾った途端に次々と旅の連れが増えるな」

今回は自分とシロの他に、アリスとリード。それにイスマイルも着いてくるだろう。まだこの世界に来てから三日目だというのに随分と大所帯になったものだ。

「悪いな。まだ不安だからもうちょっと付き合ってよ」

「まあ落ち着くまでは付き合うさ。いつになるか知れたもんじゃないけどな」

苦笑交じりにシロが笑う。本当に面倒見が良い人である。

「それじゃ俺は戻ろうかな。師匠も明日一緒に出発するなら準備は平気？」

「そうね。はやくいかなきゃ店がしまっちゃいそうだし、鉄兵も手伝って」

どうやら荷物持ちをさせられるようである。まあこれも弟子の勤めであろうか。

「そんじゃシロ。この料理は任せた！」

「おいおい、そんな冷めた料理を押し付けるきかよ……」

呆れ顔でシロが言う。さりげなく余り物を押し付けようとしたのだが、どうやら失敗したようだ。

「暖かけりゃいいのか？」

そう言って、光のイメージをして料理に向けて魔力を放出する。光というか遠赤外線である。３０秒ほども暖めたら、料理は温かそうに湯気をあげはじめた。

「おや、もう魔法が使えるようになったのかい？」

「え？　いまなにしたの？　どんな魔法を使ったの？」

「光の魔法。どうだシロ。これなら文句無いだろ？」

「そういう問題でもないんだが、まあもらっとくかね。お嬢ちゃんには夕飯はいらないって言っておいてくれ」

「了解。そんじゃな」

「あいよ」

リードの追及がまたうるさくなりそうなので鉄兵はさっさと撤収する事にした。リードは色々聞きたがったが、強引に店を出ると諦めたのか何も言わなくなった。「まあ王都まで１５日もあるし、問い詰める時間はあるか」というリードの呟きは、精神衛生上の問題から聞かなかった事にする。

というわけで買出しである。案の定、鉄兵は荷物持ちをさせられた。１５日分の食料を買い込んだのだから結構な量である。

買い物によってリードの路銀は鉄兵が支払った銀貨４枚から１枚にまで減っているようだった。宿に止まれば一文無しになるわけで、ちょっと心配だったので「自分の泊まってるところで部屋を用意してもらおうか」という趣旨の事を聞いたのだが、返ってきた答えは「王都に戻れればお金は心配ないし、弟子の世話になるのはどうかと思う」という感じの言葉が返ってきた。見た目は小さい女の子なのにしっかりとした女性である。

買出しも終わり、リードの宿への道の途中。ある店が鉄兵の目にとまった。宝石店である。それを見て鉄兵はふと試したい事があったのを思い出した。

「師匠。闇玉って宝石店で売ってるの？」

「ん？　売ってるはずよ」

「ちょっと寄り道していいですか？」

「もう買い物は終わったし、別に良いけどどうしたの？」

「ちょっと試したい事があるので」と言いつつ鉄兵は店の中に入っていった。

「いらっしゃいませ」

中に入ると目の前にいきなり店員がいて声をかけられた。横にはいかつい見るからに歴戦といった感じの男が二人ほど立っている。随分と警備が厳重であるが、まあ宝石店なのだからそんなものだろう。

「本日は何をお求めですか？」

「えっと、闇玉はありますか？」

店員は少し緊張していたようだが、鉄兵の言葉を聞き、ついで遅れて入ってきたリードの姿を見て警戒を緩めたようだった。考えてみれば宝石とは縁がなさそうな格好の男が宝石店に入ってきたのである。警戒されても仕方が無いことだろう。

「闇玉でございますね。こちらでございます」

急に愛想の良くなった店員に連れられて売り場の隅に案内される。隅に置いてあった大き目の箱を店員が開けると、なるほどこれは闇

玉だなと納得できる。仄かに周りを暗くする石が詰まっていた。

「小さいのでいいんですけど、一ついくらですか？」

「はい。小さいのでしたら一つ１０オズになります」

銀貨一枚。宿一泊分の値段である。シロは安いと言っていたが、それでもまあ宝石なのでそこそこの値段はするようだ。ちなみに光玉はいくらぐらいかときいたところ。その１０倍の値段だった。

とりあえず小さいのを１０個ほど買って店を出ると、路地裏に入った。

「闇玉なんてどうするの？」といきなり路地裏に入ったのでちょっと不安がっているリードが聞いてきた。簡単に言えば闇玉を光玉にするにはどの程度の光力が必要なのかの実験なのだが、まあ説明するより見てもらった方が早いだろう。

「ちょっと試したい事があってね」

闇玉を地面に置いて、鉄兵は光の魔法を使ってみた。もう薄闇の中なので結構目立つがしょうがない。

手を闇玉に向け、そこから魔法の光を発する。眩いほどの光だが、闇玉に変化は無い。それに光の魔法は結構魔力を消費するようで、このまま光を与え続ければ光玉になるかもしれないが、効率が悪い。使用魔力量を考えれば一般的な方法とはなり得ないだろう。

なので鉄兵は光の方向性を収束させ、サーチライトのように光を集中させた。徐々に焦点を絞っていき、一つの闇玉に集中させる。

今度は成功したようで、闇玉から闇が薄れていき、徐々に光り始めた。だが、よし！　と思ってさらに光を集中させたところ、光玉は赤く変色し、解けて消滅してしまった。どうやら光が強すぎて強力なレーザーのようになってしまったようだ。

「え？　今なにしたの？」

驚愕の表情で、リードが勢い込んで尋ねてくる。そりゃまあ非常識な現象だったのだろう。どう説明しようかと思ったが、仕方ないのでありのままに説明する事にした。

「光を集中させただけ。光も熱量を持っているから、集中すると高熱を発するわけ。で、ちょっと調節に失敗したという話ね」

ありのままを説明したわけだが、いまいちピンと来なかったようでリードは？マークを浮かべて小首を傾げている。なので「太陽を浴びるとあったかいでしょ。それが集中したら熱いってわけ」と説明を少し付け加えたらなんとなく理解したようで、感心したように「ふーん」と息を漏らした。

「理屈はわかったけど、非常識ね。けど光にそんな使い道があったんだー」

すごいすごいとさらに原理を聞いてきたが、まあ明日以降にと話を逸らす事にした。明日から質問攻めになりそうだが、今は考えない事にする。

ともあれ実験を再開する。少し光を弱めにして試してみると、今度は上手く成功した。先程まで闇としかいえないものを放っていた

石が、結構な光量で光を放っている。

「へーこんな方法で闇玉を光玉にできるのね……あれ？　これって丸儲けなんじゃない？」

「そうですね。師匠なら出来そうだから路銀に困ったらやる価値はあるかな」

鉄兵の言葉は、逆に言えばリードくらいの魔力が無いとこの方法は使えないという意味でもあった。魔力消費が結構高いので、やはり一般的な手法とはなりえないであろう。ある意味失敗であるが、装置を用いて同じ事をすればいいのである。昨日は色々あって言えなかったけど、夕食の時にアリスに話してみようと鉄兵は思った。

ともあれ実験は終了である。他にも利用方法があるかもしれないしと考え、先程の店にまた寄って、大小さまざまな闇玉を小白金貨一枚分ほど買って帰ることにした。ちなみに光玉は商品の３割程度の値段で買い取ってくれるらしいが、下手に勘繰られても困るので先程作った光玉は売らないことにする。

リードを宿まで送り、帰宅の途につく。ちなみに明日の詳しい予定を聞いていなかったので、明日は王都方面の門の前で待ち合わせという事になった。

詰所に帰った途端に飛びついてきたリルと心ゆくまで戯れていたら、すぐに食事の時間になった。今日はイスマイルは席を外しているらしく、アリスと二人きりの食事である。

なにやら嬉しい事でもあったのか、アリスは上機嫌である。楽しく会話が進んでいたのだが、忘れないうちに鉄兵はリードの事を話しておく事にした。

「そういえば王都に行く件なんだけど、人が一人増えても大丈夫？」

「私は別に構わぬが、誰なのだ？」

「自分の魔法の師匠。今日知り合ったんだけど、王都に住んでて帰るところなんだってさ。もうシロには話してある」

「そうか。シロが信用しているようなら問題は無いだろう」

とリードの件は案外あっけなく話がついた。仮にもお姫様の一行なのでひょっとしたら捩れるかもしれないと思ったが、取り越し苦労だったようだ。

肩の荷が下りて気楽になったところで、鉄兵は闇玉を光玉に変換する方法について話す事にした。もとより話のネタにするつもりだったので闇玉を一つ持ってきている。説明した後にそれを目の前で実践してみせると、今回もやはり呆れられてしまった。

「覚えたばかりでもうそのような魔法が使えるのか。鉄兵はつくづく規格外だな」

まあこの世界に来ている時点で規格外である。多少の規格外は許してもらうことにしよう。それよりも今は魔石変換の技術について話したい。

「それでさ、多分これと似たような事を適当に機械を組み立てれば

出来るんだと思うんだけどさ、どこか使ってくれそうな人を知らない？　光玉が普及すれば経済的にも防犯的にも役に立つと思うんだけど」

この世界の基本的な照明はランプもしくは松明である。家の中ではランプだが、夜間の外の照明は据え置きの松明のようなアレである。火の照明も嫌いではないが、やはり電灯で育った鉄兵としては光度が低くて少し厳しい。それに外の照明は１０時過ぎには全て消されてしまうようなので防犯的にもあまりよろしくない気がする。光玉が安価に出回るようになれば、再利用できる光源なので非常にエコであるし、なにより光玉は明るいものなら電灯くらいの明るさがあるので鉄兵的には普及してくれると非常に助かる。

ちなみにランプに使っている油は胡麻油のようである。菜種油の方が簡単に作れて菜の花も栽培が簡単だとかきいたことがあるが、それも話した方がいいだろうか？　いや残念ながら作成方法までは知らないから黙っておくべきだろうか？

それはともかくとして、魔石の話である。鉄兵の話を聞いたアリスは珍しく少し考え込んでいた。やがて考えがまとまったのか、鉄兵の目を正面から見て口を開く。今までにないほど真剣な表情だ。

「一つ提案があるのだが、聞いてもらえるか？」

「なに？」

アリスの目が非常に真剣なのでちょっと緊張したが、それほどの話でもなかった。いや、人生が決まってしまいそうな話なのだが、いまいちピンと来なかっただけなのだが。

「その事業。自分でやってみる気はないか？」

「俺が？」

そうだ。とアリスは至極真剣にうなづいた。

「鉄兵は自分の事を頭が良いと言っていたが、実際にこういう新発想を思いつき、それを実現する手段も考案済みということで証明して見せた。正直なところ、これは利益の割合や普及の促進から言っても国家規模で行うべき事業だと思うし、それには一番原理を理解している鉄兵が陣頭指揮を取るのが一番適してると思える」

別に自分のオリジナルの発想ではないし、自分が事業の指揮を取る必要も無いと思うのだが、そういうものなのかな？　と鉄兵は首を捻った。が、理由はそれだけではなかったようで、続いてのアリスの発言に鉄兵は納得せざるを得なかった。

「……ここだけの話だが、王族として鉄兵の力と頭脳は他国に流出させるのは危険だと考えざるを得ないのだ。残念ながら私は父王に嘘をつく気がないので鉄兵の事はありのままに報告させてもらう。するとこの提案……まあ他にも提案はいくつかあるが、我が国に仕えてもらえない場合は最悪身柄を拘束せざるを得ない。我が国総力を上げても鉄兵を拿捕などできる自信はまったくないのだが、国としてそうせざるを得ないのだ。できるなら鉄兵には私の敵になって欲しくない。真剣に考えてはくれまいか？」

まだ知り合って三日目の短い付き合いだが、アリスの心の動きはよく分かると自分では錯覚している。分かりにくいが心底沈痛そうに、当事者である自分にそれを言っても良いのだろうかと思うような真実を語るアリスを見て、ああ、胸を痛ませながら話しているん

だろうなぁと見ている鉄兵のほうが胸が痛くなってきた。

このアリスの言葉に自分はどう答えるべきだろうか？　自分の胸に聞いてみたら、案外答えはあっさりとでてきた。前にも言ったがアリスの敵になどなれる気がしないのだ。

「なんか重い話だけど、俺はアリスの敵には絶対にならないよ。さっさと自分の国に帰りたいけど、その方法も分からないし、帰る方法が分かるまでは王都で働き口があるならお願いしたいかな」

「助かる……」

「助かったのはこっちだけどね」

深く息を吐いて感謝の意を示すアリスに、鉄兵はなんでもないことのように笑いかけた。鉄兵の笑い顔をみて、アリスも救われたかのような笑顔を見せた。

「できる限りの便宜は図らせてもらう。そうだな……恐らくは第三王女である私を自由に出来るくらいの権限は与えられるだろう。婚姻関係を結んでしまえば鉄兵を縛る事も出来るし、悪くないな。どうだ鉄兵。本気で考えてみないか？」

珍しくアリスが冗談交じりで挑発してきた。

「それは非常に魅力的な提案ですね……」

珍しいものを見たという以上に、今までの人生で心も外見も一番美しい女性に誘惑されて、冗談だとはわかっていても動揺を隠せずに鉄兵は赤面して小さくなってしまった。鉄兵はイケメンである。

だが、今までに女性と交際した事もない残念なイケメンなのである。最近ではヘタレ属性も付いてきて、真の意味で残念なイケメンになってきているが、彼を許してやって欲しい。

鉄兵は残念なイケメンである。とはいえちゃんと言う事は言う。

「けど、権力とかそんな力でアリスに無理強いはさせたくないよ」

「そうか。鉄兵は優しいな」

なにが優しいのかよく分からなかったが、アリスは非常に満足そうだったので何も言わないで置く事にした。

その後の夕食は終始楽しく過ぎて行った。今までの会話を聞いていたであろう、この前はものすごい殺気を放っていたお付きの兵士（ハンス）からもなぜか殺気を感じないし（というか非常に微笑ましく見られてしまった）、非常に平和な夕食であった。

ちなみに元の世界に帰る方法だが、実はもう帰る術はもう見つかっていたりした。断言は出来ないが、体内に宿る無属性の精霊と感覚だけで相談してみたところ、転移魔法も時空跳躍魔法も出来そうなので、後は元の世界に飛ぶイメージさえ浮かべて魔術を発動すれば帰れるはずである。だが、元の世界のイメージをしてみたところ、元の世界は魔力が限りなく疎な世界のようで、戻ればこちらには二度と戻って来れない可能性が高いようだ。それならば、一年留年したとしても、一年間異世界で暮らすという体験と引き換えるならばお釣りが戻ってくるだろうと考えて、鉄兵はもうちょっとこっちの世界にいる事にしたのだった。文字通り、人生で二度とないであろう体験の真っ最中なのだ。すぐに帰るのは勿体無い気がするのだ。

そんなこんなで夜は更け（ちなみにシロは酒臭い息をして１０時ごろに帰ってきた）、朝が来た。いよいよ王都へ出発する日である。

朝起きると、準備は殆ど完了しているようだった。詰所の前にはこれぞ王族が乗る馬車！　という感じの四頭仕立ての豪華な馬車と二頭仕立ての厩舎（ハルコさん用）兼積荷用の馬車があった。現在は急ピッチで荷物が積み込まれているところである。

「これは……すごいな」

「さすが王族ってとこかねぇ。ハルコさん用に馬車を用意してくれたのは嬉しいね」

シロは満面の笑みを隠そうともしてなかった。どちらかといえば厩舎用の馬車を見て御満悦のようではあったが。

「ようやく起きてきたな」

「おはよう、アリス」

馬車を見て感心していると、鉄兵に気がついたアリスが寄ってきた。

「もう出発するの？」

「そうだな。もうじき準備が整う。もう一人の同乗者というのはどうなっているのだ？」

「一応、王都方面の門のところで待ち合わせってことにしたんだけど、どうだろ……」

結構朝早いし、リードはもう門のところに来ているのだろうか？ちょっと心配になってくる。

「先に行って見て来ていい？」

「わかった。門のところで合流しよう」

というわけで荷物をシロに頼んで足早に門に向かう事にした。ちなみにまたリルが『つれてって！』と擦り寄ってきたので今回は連れて行くことにする。朝なら人通りも少ないかな？　と思って連れて来たのだが、王都方面の門の前は結構な混雑っぷりであった。

「これは……リルにはきついかな」

『リル、ちょっとこわい……』

人通りの激しさにリルもちょっと怯え気味のようだった。

「これはしょうがないな。リル。抱っこするけどいい？」

『だっこ？　だっこってなに？』

「こういうこと」

鉄兵はリルを持ち上げて腕の中に抱っこした。リルはちょっとびっくりしたようだったが、大人しい。

「リル、大丈夫？」

『これだっこ？　だっこきもちいい』

元の世界で犬や猫を抱っこすると結構嫌がられたのでどうかな？と思ったが、リルに関しては大丈夫だったようだ。心底安心している様子で鉄兵に身を預けている。

そのリルの様子が可愛らしかったので、ドサクサにぎゅっと抱きしめながらリードを探していると、リードはすでに門の前に来ていてすぐに見つかった。

「師匠、おはようございます」

「あ、おはよーってなにその可愛いの！」

挨拶を交わした次の瞬間にはリードが目ざとくリルに目を留め、怪しく瞳を光らせた。

「ねぇ、触っていい？　触っても大丈夫？」

「えっと……本人に聞いてみましょう。リル、この人はうちの師匠」

『ししょう？　ししょうってなに？』

「うーんと、なんていえば良いのかな……そうだな、恩がある人かな。それで師匠がリルを撫でたいって言うんだけど、リルは撫でられても平気？」

『リル、へいき。ししょうになでてほしい』

リルが地面に降りたがっていたので降ろしてあげる。するとリルはリードの方に走って行き、その足にすりよった。

「か、かわいい……」

いつぞやのように周りに花を飛ばしつつ、リードがリルを撫でる。怪しく目を光らせていたのでちょっと心配したのだが、リードのリルへの接し方は常識的なものだった。リルもリードが気に入ったようで、積極的にリードにじゃれる。見た目は少女のリードと子狼のリルがじゃれる姿は非常に眼福であった。

そんな光景を和やかに観察していたのだが、気がつけば結構な時間が経っていたようで、ふと道の方を見たらちょうどアリスの馬車がもうすぐこちらに来るところであった。

「師匠、連れが来たよ」

「連れ？　どこにいるの？」

リルを抱きしめて撫でながらリードがきょろきょろ辺りを見回す。多分シロを探しているのだろう。

「いや、馬車で行くんだ。あの馬車」

「え、馬車なんだ。それは嬉しい誤算だけど、どこにいるの？」

現在見える範囲にはアリスの馬車しか存在しない。それなのにリードはそれが見えないかのようにきょろきょろと辺りを見回している。一体どうしたのだろう？

「いや、あの馬車だって」

「あの馬車？　王族が乗る馬車しかいないけど、どこにいるの？」

リードの言葉に鉄兵は「あぁ」と納得した。鉄兵には分からないが、どうやらアリスの馬車は一目で王族の馬車と分かるものらしい。アリスについて説明しようとしたら、その時にはもう馬車は鉄兵達の前に着いて止まり、馬車のドアが開いた。

「鉄兵。そちらの者が同乗者か？」

「え？　姫様？」

ドアからはアリスが出てきた。そのアリスを見てリードが驚きの声をあげる。

「お初にお目にかかります。わたくしは宮廷魔術師長オスマンタス＝ウィードの子、リード＝ウィードにございます」

アリスを見て驚いたリードは、やや焦りながらも膝を突いて平伏し、名乗りをあげた。なにやら聞くにリードの親が王宮に勤めているようだ。

「なんと、鉄兵の師匠というのはオスマンタス師の娘であったのか。世間は狭いな。あぁよい。普通にいたせ」

アリスは多少驚いているようだったが、悪い感じではなかったのでほっとする。

アリスに普通にしろと言われたリードは「はい！」と一声きょどった声を上げると顔をあげ、アリスを見たと思ったら硬直し、硬直が解けたと思ったら光の速さで鉄兵の首をジャンプして掴み、強引に下げさせた。

「鉄兵、どういう事なの？」

見ればリードは泣きそうな顔をしていた。不謹慎だが結構可愛らしい。だが、本人にとっては本当に必死なのだろう。フレンドリーなので特に意識をしていなかったが、アリスはこの大陸の１／７を占める王国の第三王女様なのである。父親が王宮に勤めているとなればその威光は輝かしいばかりなのだろう。

「イテテテ！　すいません説明が遅れました。実はリルを飼う許可を王様にもらうためにアリスと一緒に王都に向かうところだったんです……ちなみにリルは街道封鎖の原因になったガルムだったりします」

耳を抓られて激痛のあまり鉄兵は事実をありのままにゲロった。鉄兵の言葉を聞いてリードが固まる。なにやら色々と重大な事実を聞いて混乱しているようだ。

「ついてに王宮にもスカウトされてますから自分の縁者だとしても特に不利益は無いと思いますよ」

恐る恐るリードに告げる。その言葉を聞いて、固まっているリードの表情にもやや血の気が戻ってきた。

「鉄兵。説明していなかったのか？」

「ごめんアリス。こんな驚かれるとは思わなかったから」

「鉄兵は常識が足りないからな」

アリスがふっと笑顔を見せる。その笑顔は今まで見たアリスの表情の中でも一番優しいものだったが、なぜだろう。

「リード殿。いや、リードと呼び捨ててよいか？」

「え？　は、ひゃい！」

かみまみた。とでも表現した方が良いくらい豪快にかみながらリードが返事をする。

「オスマンタス師の娘にこのような形で出会えた私としても幸福な事だ。出来れば友として親交を深めたい故、普段どおりに振舞っていただければ私としてはありがたい」

「恐れ多い事です」

アリスに直接話しかけられた事で逆に冷静さを取り戻したのか、リードは見た目とは似合わないしっかりとした態度でアリスに相対する。

「それに鉄兵の師匠ならば鉄兵の実力は知っておろう。これから鉄兵は王国の注目の的になろう。師であるあなたには鉄兵を守っていただきたい。」

「……！　はい。一命に変えましても」

リードが神妙に礼をする。いつのまにやら自分が重要人物に祭り上げられてしまっていたようだが、正直ついて行けない雰囲気だった。ちらりと馬車の方を見るとシロとイスマイルがこっちを覗いていたのだが、非常に生暖かい視線を向けられてしまった。二人は明らかにこの状況を楽しんでいるようだ。シロは分かるがイスマイルは神官の癖に生臭い気がするのだがどうだろう。

まあそんな感じで王都への旅は始まった。

リードはアリスを前にガチガチに固まっていたが、一日アリスと過ごしていたらアリスの人柄を理解したようで、次の日には元の性格を取り戻していた。

そして鉄兵がこれからの人生を変えるようなチートとも言える魔法を発見したのは、リードが元の性格を取り戻して鉄兵を質問攻めにする前のその日のことであった。

初日の馬車の中はアリスがリードに話しかけ、カチコチに固まったリードを楽しげにシロが弄くるという微妙に居心地が悪い空間であった。なので鉄兵はそこから目をそむけるように昨日買った本である「初めての魔法」に目を通してみていた。

「初めての魔法」はまさに空想小説の詳細設定のような本であったが、魔法という技術を使えるようになった今では基本的な単属性の魔法のテンプレート集としてそれなりに有用な本のようで、なかなか有意義なものであった。

鉄兵は無属性の精霊としか契約していないので無属性魔法のペー

ジを先に見ていたのだが、ある魔法の説明ページでピタリと動きを止めた。何の魔法かといえば、それは「解析」魔法のページであった。続いて少し考えた鉄兵は土属性の魔法のページをパラパラと流し見して、やがて一つの魔法項目のページで流し見をやめ、そのページをじーっと読み始めた。そのページは「金属加工」のページである。

「……イスマイルさん」

やがてそのページを読み終えた鉄兵は、少し遠い目をしながらイスマイルに話しかけた。遠い目というとおかしな印象を受けるかもしれないが、表現をソフトに言えば自分の考えに浸っている時の鉄兵の目の事である。

「はい。なんでしょうか？」

「なにかいらない金属とかってないですか？」

「金属ですか？　いらないものはありませんが、必要とあれば予備のナイフなどはありますが」

「もらってもいいですか？」

「はあ」

少し正気を失っているような鉄兵の目にイスマイルは少し躊躇したようだが、ややためらったもののイスマイルは予備のナイフを自分の荷物から取り出して鉄兵に差し出した。

鉄兵はそのナイフに向けて先ほど読んだ本の説明どおりに「解析」

の魔法を使ってみた。瞬時にそのナイフの構成式が頭に浮かぶ。

続いて鉄兵は「金属加工」の魔法をナイフに向けて使ってみた。鉄製のナイフがグニャリと曲がり、鉄兵の意思の通りに加工される。

「……これってチートじゃね？」

我知らず、鉄兵の口元がにへらとだらしなく歪んでいた。

てっぺいは「チート」をてにいれた（後書き）

１２／２９：指摘いただいた誤字修正
考案済みということで照明して見せた。
↓証明して

１２／２９：文章一部修正
「おや、嬢ちゃんも連れてくのかい？」
「駄目かな？」
「テツの師匠なら良いんじゃねぇか？　あれだ、平気だとは思うがお嬢ちゃんには早めに言っておいた方がいいぜ」
↓最初の「嬢ちゃん」を「その嬢ちゃん」に、二番目の「嬢ちゃん」を「アリスの嬢ちゃん」に修正

２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
＞同じ事をすれば同じ事をすればいいのである。
↓同じ事をすればいいのである。

＞最悪身柄が拘束
↓最悪身柄を拘束

湯煙旅情変

「……テツよ。おまえさんいよいよ化け物じみてきたな」

遠い目でにやにやしながら元はナイフであった金属の塊をグネグネと加工して遊んでいたら、当然といえば当然だが、シロに気持ち悪いものを見るような目で見られてしまった。見れば他のみんなもポカーンとした表情をしている。なにやらまたやらかしてしまったようだ。

「化け物って……単に金属加工の魔法を使ってみてるだけだけど、どうしたんだ？　初歩的な魔法なんだろこれ」

「いやまあ金属加工は初歩的な魔法だが、そいつは俺の知ってる金属加工の魔法じゃないな」

呆れ顔でシロが言う。鉄兵としては本に書いてあった魔法をそのまま使っているだけなのだが、なにか違うらしい。

「金属加工の魔法って、ものすごく魔力をロスするからそんなにグネグネ加工なんて出来ないはずなんだけど……」

首を傾げる鉄兵におずおずと説明するリードは、もはや驚くを通り越して怯えているようだった。

とはいえリードの説明で納得がいった。現在鉄兵は解析の魔法を併用し、金属の構成要素を操って金属加工の魔法を使用しているわけなのだが、解析を行わないで構成要素を制御する事無く強引に金属加工の魔法を単体で行えば、魔力の消費は半端無いのだろう。

というわけでその辺りの事を説明したら今度は逆にみんなに感心されてしまった。リードはその話に興味を持ったようで「それ貸して！」とやや興奮気味に鉄兵の持ってた元はナイフの物質を強引に持ってった。

「ほんとだ！　簡単に曲がるー」

なにやらぶつぶつとリードが呟いたとたん、金属がグネリと曲がった。リードがきゃっきゃと声を上げながら楽しそうに金属を加工し始める。

「……なあアリスの嬢ちゃん、こいつは技術革命ってやつじゃないか？」

「そうだな……鉄兵の発想は恐ろしいものがある」

「そんな大袈裟……でもないのか？」

鉄兵としてはそんな大層な事だとは思っていなかったのだが、どうもこの世界にはそういう発想を閃いて試してみた人はいなかったようだ。コロンブスの卵というものであろうか？　考えてみればどちらかといえば言語学者的な魔術師が金属加工技術に並々ならぬ関心を持つわけが無いし、技術者である鉄兵ならではの発想だったのかもしれない。

とまあシロとアリスがヒソヒソとなにやら話し合っているのを横で聞いていたら、１０分も経ったらリードがへばって倒れこんだ。慌てて駆け寄ってその身体を支えたらリードは「魔力がー」とうめきながら目を回していた。どうやら急激に魔力を消費すると精神的

にも疲労するらしい。とりあえず魔力を賦与してみたら、リードは途端に元気になった。

「あれ、今のって？」

「前もやったでしょ。魔力賦与。楽になった？」

「……ありがと。楽になった。けど鉄兵は大丈夫なの？　わたし普通の精霊族の１０倍くらいの魔力があるんだけど、今ので魔力半分くらいになってたはずだし、そんなに大量の魔力を消費して鉄兵は気分悪くなったりしないの？」

「あー大丈夫みたいですね」

さすが知的職業の方である。逆に冷静に心配されてしまった。面倒なので適当にごまかそうと思ったら横槍が入ってその企みは失敗に終わった。

「リードの嬢ちゃん。テツの野郎は最低でも人間族平均の２４００倍の魔力を持ってやがる化け物なのさ。心配するだけ無駄だぜ」

「わたくしの見立てでは軽く見積もってもその１００倍はあると思います。力が大きすぎて正確な力は分からないのですが」

シロとイスマイルが交互にいらん事を言う。というか１００倍とかなんですか？

「えっと、桁、間違えてない？」

シロとイスマイルを交互に見て、リードはちょっと困ったような

顔をして小首を傾げた。その気持ちは鉄兵にもちょっと分かった。

「私の戦闘力は２４０万です」とフ〇ーザさんに言われたようなものだ。インフレも行き過ぎてて我が事ながらあほらしい。

「イスマイルは魔見眼の持ち主だ。その言葉に嘘偽りは無い。リード、鉄兵は規格外だから驚くだけ無駄だぞ」

見兼ねたアリスが口を出す。相変わらず容赦の無い言葉でちと酷い。

「ごめん鉄兵。鉄兵はやっぱり化け物だと思うの。ちょっと怖いよ」

とうとう怖がられてしまいました。アリスやシロは魔術に疎く、イスマイルはサクヤの魔力を感じているせいでそこまで極端な反応はしなかったのだが、本職から見るとすごいを通り越して怖いらしい。

しかもリードは怖いといってるくせに真っ直ぐな目でこちらを見据えながら怯えてるので心理的に結構堪える。

「師匠、ひどい……」

「あ、ごめん」

なので本気でちょっとショックを受けてがっくりとうな垂れたら、リードに頭を撫でられてしまった。見た目からすれば立場が逆のはずなのだが、案外鉄兵の精神構造は単純だったようで不覚にもちょっと癒されてしまった。ついでに話もそらせられたみたいだからまあいいか。

「しかし、鉄兵の考案した金属加工の魔法もやはり膨大な魔力が必要なようだな」

「うん。随分楽にグネグネ加工できるようになったけど、やっぱり魔力のロスは半端ないやー。２つの魔法を併用するわけだから技術もいるし」

アリスの言葉にリードが鉄兵の頭を撫でるのを中断して答えた。ついでなので鉄兵も頭を上げて会話に加わる。

「そっか、やっぱ一般的にはなりえそうにないな」

鉄兵が魔力を賦与した感覚ではリードの魔力は半分程になっていた。６００秒で人間族平均１５０人分の魔力を消費するらしい。なら平均的な人間族は2秒使うと倒れる計算である。これはちょっと普遍的な手法とはなりえないかなとか思ったが、イスマイルに言わせればそうでもないようだった。

「いえ、そうでもありません。私の見立てではリード殿は人間族平均で言えば３００人分、一般的な魔術師の３０倍ほどの魔力の持ち主であります。それを元に計算してみたところ、一般的な魔術師でも２０秒は連続使用が出来るということになります。今の術を見たところ、例えば金属鎧のへこみや破損をなどをものの数秒で修復できるわけですし、魔法の使用に慣れればロスは減る事でしょう。十分に実用に耐えられる技術と思われます」

イスマイルの発言に鉄兵はなるほどと感心した。確かに1から全てを加工する技術としては一般的になりえないが、限定的に使用するには十分実用的なようだ。これもまた現場を知っている人間（巨人族だが）独自の発想なのだろう。

「ふむ。人材を育成する価値はあるという事か。これも父王に提案してみよう」

なにやら文明レベルに影響を与えてしまった気もするが、余り考えない事にしよう。それほどの発想でもないし、そのうち誰かが気がついたはずだ。

ともあれ、鉄兵的には最強のチートを手に入れた気分であった。簡単な蝶番程度はあるが、本格的な金属製のネジも工具も、ましてや旋盤なんて無い世界である。しかしこの魔法を使えば自在になんでも作成可能なのだ。これは技術屋の血が騒ぐ。

ちなみに肉体が強化されてたり、無限の魔力を持ってたりするのも十分チートだとは思うだろうが、その事に関しては、鉄兵的にはそんな風に考えてなかった。個人がそれらの事を出来たとしても、世界に一台しかない複製不可能な機械を手に入れたようなもので、誰もが使用できる普遍的な技術で無いと意味は無いという技術者的な発想がもはや根本に染み付いているためである。

とまあそんな事があったおかげで鉄兵が非常識だという共通認識をアリスと共有したようで、さきほどと比べてリードの緊張はやや解けたようだった。その日は特に何事もなく（あえて言えば馬車のマットが硬くて鉄兵がちょっとグロッキーになったぐらい）、夜が来て小川の横で野営となった。

ここで以前の鉄兵なら薪を拾いに行った後でぼけーっと役立たずの見本のように食事が出来るまで火を眺める作業をしていたのだが、今回は薪も十分に積み込んであったので、本当にただの役立たずであった。まあ今回は御者兼世話役の兵士が3人ほどついてきている

ので、他の４人も特に作業をする事無く、のんびりと過ごしていたわけであるが。

ちなみに兵士の一人はハンスである。未だ会話もした事がないがよくよく縁があるらしい。ここはアイダ領という事だし、王様の直轄地ではないようだが、そこの兵士を勝手に連れ出しても平気なのかなとか思ったが、誰も問題にしてないようだし大丈夫なのだろう。

というわけで鉄兵はぼけーっとリルを撫でながら食事の支度に奮闘する兵士の様子を眺めていたのだが、ちょっとした事を思いついた。

鉄兵は元の世界では夕食の前に風呂に入るのが生活習慣だったのだが（正確には部室棟のシャワー室を利用してシャワーを浴びていた）、こちらの世界の風呂はサウナが主流のようであり、旅の間はせいぜい濡れタオルで身体を拭くくらいのもののようだったので風呂桶につかる形式の風呂は諦めていた。だが、魔法を使えば結構簡単に風呂を作れるのではないだろうか？

というわけで試してみる事にした。

まずはそこら辺に転がっていた石を拾って解析の魔法をかけて見る。成功。石の構成式が頭に浮かぶ。

次に金属加工魔法を応用して石の構造を弄ってみる。これも成功。粘土のように石が加工できる。これならばどうにかなりそうだ。

「どうしたテツよ」

ニヤニヤしながら風呂桶の構造を考えていたら、シロに見咎めら

れてしまった。

「いや、ひとっ風呂浴びようかと思ってね」

「風呂？　こんな野外でか？」

「うちの国形式のをね。まあ見てなって」

鉄兵は立ち上がって小川の方に歩いていった。大き目の岩は無いが、幸いな事に川原には砂利がいっぱいある。鉄兵はこつこつと砂利を加工していってまずは石製のスコップを作った。次にそのスコップで砂利を一箇所に集め、こつこつとそれを加工して一つにまとめる。それなりの大きさの岩が出来上がったところでついでにスコップも取り込ませ、箱状に加工していくと、やがて縦横３ｍ、高さ８０ｃｍ、厚さ５ｃｍ程度の石製の風呂桶が出来上がった。

「なにこれ？」

作業をしていたらリードとアリスも寄ってきた。どうも何を作っているのかわからないらしく、二人とも首を傾げている。

「湯浴み用の桶だな。そういや古い友人がこんな風呂の事を話してたっけか。湯で身体を流すだけじゃなく、熱湯につかって汗をながすんだそうな」

どうやらシロは日本式の風呂の事を知っていたようだ。古い友人とはサクヤの事だろうか？　８００年前といえば鎌倉幕府の頃だろうか。この形式の風呂は一般的ではなかった気がするが、サクヤはいいとこのお姫様だったのだろうか？

「熱湯につかる？　なにやらスープの具にでもなる感じだな。あまり良い印象は受けないが……」

「入ってみりゃわかるよ。きっと病みつきになるぜ」

日本式の風呂がアリス達にも受け入れられるかは不明だが、まあ外国の人達にも日本の風呂はそれなりに好評のようだし、悪いようにはとられないだろう。

「しかしテツよ。風呂なら湯をいれにゃならんわけだが、どうやって湯を沸かすんだ？」

「それはまあ力技」

そう言って鉄兵は出来上がった風呂に手を突っ込んで魔法を使った。氷を出した時と同様に空気中の酸素と水素を集めて水にすると、すぐに水は溢れんばかりに風呂桶に溜まった。次に水に手を突っ込んで解析の魔法をかけ、水の構成を把握し、水分子の動きを加速させると水はすぐに温まり始め、程よい温度になった。

「おや、魔法ってのは便利だねぇ」

「こんな事出来る人は余りいないからね。誤解しないように言っておくと……」

この程度でもまだ十分非常識だったようで、リードの呆れた様子の視線がちょっと痛い。

それはともかく風呂である。

「そんじゃお先に」

鉄兵はさっさと服を脱いでトランクスいっちょになるとザブンと風呂に飛び込んだ。身体を洗わずに入るのも、衣服を身に着けたまま入るのもマナー違反だが、洗い場も無いしアリスやリードが側にいるわけで、この際は許してもらおう。

「あー生き返る……」

久々に入る風呂は格別だった。元の世界でもほとんどシャワーで済ませていたが、やはり風呂桶につかるのが一番である。自分はつくづく日本人だなぁと感じる一瞬であった。

「鉄兵は常識を学ぶべきだと思うの……」

「ん？」

なにやらリードが呟いたので見てみたら、リードは顔を赤らめていた。

「私は兵士の裸を見慣れているが、リードには刺激が強かったようだな」

アリスに微笑まれてしまった。家でも大学でもパンツ一丁でうろついても特に何も言われなかったのだが、考えてみれば妙齢の女性の前でパンツ姿になるのはあまり常識的とはいえないのかもしれない。

「そいつは失礼。リードやアリスはまずいけど、シロも一緒にひとっ風呂どうだ？　広めに作った事だし」

「そうだなぁ。試してみるかね。ついでにイスマイルも誘ってみるかね」

「あ、それなら身体拭く布と変えの服もついでに持ってきてくれる？」

「へいよ」

軽く手を上げてシロが去っていく。

「私達は食後にでも試させてもらうとするか」

「んー……そうね」

鉄兵があまりに気持ち良さそうに湯につかっていたので女性陣も興味が湧いたようだった。後で一回栓を抜いた後で洗い流して湯を張りなおさないとななどと考えながら、そういえば栓を作ってなかった事に気がついたのでちょいと魔法を使って風呂桶を加工する。

というわけで女性陣が去り、代わりにイスマイルが来て男三人の非常にむさい風呂模様が展開された。お食事中の方には申し訳ない光景である。

「これはなかなか良いものですな。筋肉がほぐれるような感覚を受けます」

「だろ？　疲労回復には風呂が一番らしいよ」

３ｍの巨体を横に倒し、肩までどっぷりつかったイスマイルが気

持ちよさげに息を漏らす。シロを見れば頭に布を乗せてヘリによっかかり、鼻歌を鳴らしている。どうやら二人とも日本式の風呂が気にいったようである。

「こいつは湯につかりながら一杯やりたくなるねぇ」

「露天風呂だしそういう楽しみ方もありかな？」

この世界には日本酒なんてなさそうだし、飲むとすればあのビールみたいなお酒かな？　けど温いビールは微妙だからよく冷やさないといけないけど、どうやって冷やそう。いや川があるならひたしとけば冷えるかな？

とまあそんな話をしながら三人はのんびりと食事が出来るまで風呂に使っていた。

その後食事になり、詰所で食べてたような夕食が出てここはどこのレストランだと心の中で突っ込みながら食事を済ますと、鉄兵はアリス達のために風呂の湯を張りなおすことにした。結構湯が汚れていたので湯を流した後で掃除する事にしたす。丸めた手のひらからホースのように水を出して流していたわけだが、これは傍から見ると結構間抜けそうだなとか思いながらしっかりと水で汚れを流す。

湯を張りなおした後、ついでにもう空も暗いので作っておいた光玉を１０個ほど湯船に沈ませてみたのだが、湯が波立つときらめいてなかなか綺麗だった。

「風呂沸いたよー」とアリスとリードに告げ、女性陣のバスタイムとなったわけだが、二人の入浴中の警戒は異常なまでに徹底されていた。

風呂の周りに天幕を張って隠したうえにその三方には少し離れた場所から兵士が護衛につき、鉄兵とシロは馬車に押し込まれてイスマイルによって監視される。鉄兵は随分と大袈裟だなとイスマイルに笑いかけたのだが

「万が一姫の肌を目撃してしまった場合は蛆の群れを一週間見続けさせ、目に焼き付けさせた後で目を抉りますので安全のための処置です」

と真顔で宣言されてしまって笑う気力も無くなった。覗きは随分と重罪になるらしい。残念ながらハプニング展開はなさそうだ。

「あがったよー」

その後たっぷりと二時間近く待たされて湯が冷めてしまっているんじゃないかと心配になってきた頃、ようやく風呂をあがったらしい満面笑顔のリードが馬車に顔を出した。

「果たしてどんなものかと思ったが、これは良いものだな。また頼む」

ついでアリスが顔を出す。こちらも満面の笑顔で顔が仄かに赤く上気していて色っぽい。

「あいよ。そういやこの形式の風呂は美容にもいいらしいぞ」

まあアリスもリードも十分綺麗なのであんまり関係ないなと思いつつ軽口を叩いたら、二人の顔が興味深げに輝いた。幼かったり男勝りだったとしても、女性は女性のようである。

とまれようやく馬車から開放された鉄兵は、兵士のためにまた湯船を洗って湯を張った。兵士も三人まとめて入ったのだが、評判は上々のようだった。

そんなこんなで夜も更けて就寝の時間である。夜の警戒は兵士が行うという事だったが、昼は御者をし、食事などの用意までこなす兵士ばかりを働かせるのも悪いので、3交代の夜番の真ん中の二時間を無理を言ってやらせてもらう事にした。

そんな訳で鉄兵は現在鋭意夜番中である。ちなみに現在の時間はシロと自分の二人が夜番だったのだが、シロはどうにも警戒心が薄いようでうとうととし始めている。まあシロは旅慣れているため少しでも異常があれば目を覚ますのは、リルと派手に戦った晩のその後に実証していたりするので問題はないのだが。

そういう事で実は夜番も必要なかったりするのだが、引き受けた以上はちゃんとやろうと思っているものの、闇夜の中を一人だけ起きているのは結構きつくて、気を抜くとうとうとしてしまう。

これはやばいなと頬を叩いて辺りを警戒する。と、未だ光玉を入れたまま放置しているので光っている風呂桶が目に留まった。

「シロ、風呂入ってきていい？」

「ん？　おう」

どうせ飾りの歩哨だしと、鉄兵は風呂に入って目を覚ます事にした。一応シロに声をかけたら目をつぶったまま返事が返ってきた。器用なものである。

身体を拭く布だけ持って風呂桶に近づく。栓を抜いて適当に水を流すと湯を張りなおして今度はすっぽんぽんになりザブンと湯に使った。やはり下着着用と裸では開放感が違う。

「あーやっぱ風呂だな」

などとわかるようなわからないような独り言を呟いて風呂を堪能していたら、なにやらがさがさ音がして近づいてくる者があった。

「やっぱり鉄兵だ。また入ってるの？」

「師匠。どうしたんです？」

近づいてきた人物は寝巻き姿のリードであった。

「おしっこ行ってきたの」

……どうやら花を摘むために起きたらしい。リードは２２歳の知的職業についている人物のはずなのに、たまに言動が幼いのはなぜだろう。やはり肉体が幼いために精神もそちらに引っ張られてしまうのだろうか？

「師匠、もうちょっと奥ゆかしい言葉遣いをした方が良いと思いますが……」

「ちょ、ちょっと寝ぼけてたの！」

鉄兵の発言に自分の失言を把握したのだろう。リードは眠気も醒めたように顔を赤らめた。

「まあいいや。師匠もどうです？」

「え……どうしよう」

冗談でリードを風呂に誘ってみたのだが、あっさりと断るときや、案外乗り気なようで少し考えているようだった。よほど風呂を気にいったんだろうか？

「うーん。入りたいけど裸になるのはなぁ……あ、このまま入っちゃえば良いか」

「へ？」

まさか。と思った次の瞬間には、えいっとばかりにリードが寝巻きのまま風呂の中に飛び込んできた。

「きもちいい……」

リードは肩までしっかりと湯につかり、幸せそうに花を飛ばしている。緩みきったその表情は小動物的可愛らしさを感じさせた。先ほどまでは鉄兵の裸にさえ顔を赤らめていたのにまさか混浴するとは……げに恐ろしきは日本風呂の魔力であろう。幸い横にいるので自分が下着すらつけてないのは気がついてないようである。このことに関しては言わない方がいいだろう。

微妙に困った状況になったが、鉄兵はもう開き直って風呂を楽しむことにした。

満天の星空の下、小川のせせらぎを聞きながら入る風呂はなかな

か乙なものである。水面は光玉が発する光で光輝き、空にはどちらが地上か分からなくなりそうな、吸い込まれそうなほど無数の星がきらめいている。上に下に光り輝き、その中で湯につかって感じる浮遊感はまるで天上の国にでも迷い込んだかのようなものだった。

「……鉄兵ってさ」

「ん？」

ゆったりと風呂を楽しむ中、リードがポツリと言葉を漏らす。

「鉄兵って何者なの？」

裸の付き合いは人を素直にする。多分それがリードの心底からの疑問なのだろうが、鉄兵には答えられる言葉は一つしかなかった。

「ただの学生……なんだけどなぁ」

それが本当の事なのだ。けどなぜか異世界に飛ばされて強大な魔力を持っている。使えるようになった魔法も併用してその原因を探っているところだが、今のところリードの問いに答えられる言葉はそれしか持っていなかった。

「そうなの？」

「そうなんです」

「そうなんだ」

「そうです」

「そっかぁ……」

嘘偽りのない言葉である。多少は鉄兵の心情が伝わったのか、リードはそれ以上言い返してこなかった。

「あ、替えの服持ってこなくちゃ。今行って来ちゃおうかな」

不意にリードが立ち上がった。リードの上半身が湯から離れる。

鉄兵も男なので、咄嗟に女性のそんな姿を見れば、対象が守備範囲外の幼女体形でもついつい胸元に視線が行ってしまう。

「……」

そこに見えたものに鉄兵がちょっと固まった。我に返った鉄兵は慌てて顔をそむけて見たものをリードに伝える。

「師匠」

「ん、なに？　急に横向いちゃって」

「透けてます。服」

慌ててリードが胸元を確認し、手で隠した。鉄兵の服は安物なのでそんな事は無かったのだが、リードの寝巻きは高級品の白い薄い生地だったので透けてしまっていた。ノーブラだったので幼い胸元の突起がばっちりと確認できてしまった。

来いよアグネス的な状況だが、彼女は２２歳なのであしからず。

もっとも肉体年齢は１３．５歳だが。

「き……」

「き？」

「キャー！！！！」

リードの悲鳴とともに鉄兵は身体に痺れを感じ、気が遠くなっていった。こういう時に咄嗟に雷魔法が使用されるというのは太古からの慣わしであろう。

リードは詠唱をしていなかったし、この雷魔法はリードの無意識魔法なのかもなとか割とどうでも良い事を考えながら鉄兵の意識はブラックアウトしていった。

ちなみに風呂桶に浸かっていたリードも自分の魔法で感電したわけで、二人仲良く感電して湯船にプカプカ浮いていたのだが、悲鳴を聞いて飛び起きたシロとアリスによって無事に救出されたというのは後日談である。

ついでに次の日の事。リードはけろっとしていて鉄兵を質問攻めを開始したわけなのだが、なぜかアリスは機嫌が悪く、その日は一日口をきいてくれませんでしたとさ。

湯煙旅情変（後書き）

９／１１：御指摘いただいた点を修正。水素（Ｈ）とヘリウム（Ｈｅ）を間違えるとか超恥ずかしい！

１２／１８：指摘いただいた誤字修正

ちなみに風呂桶に使っていたリードも

↓浸かって

クィーン・オブ・バンデッド（前編）

「いやーしかし、旅の最中だというのに最近は身体の調子が非常によろしいです。これもテツ殿の風呂のおかげですかな」

まさに絶好調といったイスマイルが機嫌良さ気に高らかに笑う。彼の言うとおり毎日風呂に入っているせいか、イスマイルは非常に血色がよく、肌には艶さえ浮かんでいる。

「それはよかったですね……」

それに対して鉄兵の返事はつれないものであった。別にイスマイルが嫌いだとかそんな理由からではない。リードから連日質問攻めに合い、さらには慣れない馬車に固いシートに座って揺られ続けた結果、体調が最悪なのである。

馬車の乗り心地は予想以上に最悪のものであった。これでも王家の馬車という事で他の馬車よりはましなのだろうが、現代っ子である鉄兵にはちょっと耐えられないものだ。なので旅路の三日目には我慢できずに馬車と並走して自分の足で走ろうかと思ったのだが、リードが質問できないからと却下されてしまっていた。

ちなみにシートが固いといっても電車のシートくらいの弾力性はあるのだが、車の座席のようにスプリングが効いているわけではないので長時間座るのには向いてない。馬車の車輪にしても一応ゴムでコーティングされているのだが、タイヤのようなチューブ構造をしているわけではないので衝撃吸収機能としては少し弱い。街道もそれなりに整備されてはいるのだが、アスファルトが敷き詰めてあるわけも無く、むき出しの固められた土の上を走っているわけで、

地面がデコボコとしていて馬車を揺らすし、たまに小石に乗り上げた時などは軽く車体が傾いた。

多分、この世界の馬車としてはこの馬車は最高の工夫を凝らしているのだろうが、元の世界の技術を知っている鉄兵としては稚拙なものである。なのでせっかく魔法で物質を加工できるようになったのだから改造したいところだったのだが、残念ながら材料が足りず、保留している状態である。

とはいえその苦労も今日で終わるかもしれなかった。旅に出てから五日目の今日は最初の中継地である村に到着する予定である。それほど大きな村ではないらしいのでわからないが、鉄と綿と布が手に入れば多少はマシなシートが作れるだろう。風呂や夜番の件もあって最近よく話すようになった兵士（ハンス）に聞いてみたところ

「それぐらいなら調達いたしましょう」

と承ってくれたので、多分何とかなるんじゃないかなぁと鉄兵としては祈るのみであった。

というわけで、あと少し我慢すればなんとかなると、グロッキーになりながらもリードにせがまれて光の波長やその色についての説明などをしていたら、急に馬車が大きく揺れて立ち止まった。

「え？」

「あ、ちょと！」

鉄兵の説明を立ち上がって身を乗り出し、食い入るように聞いていたリードがよろけて鉄兵に突撃する。リードの頭が鉄兵が顔面に

もろに激突し、グロッキーなところに止めを刺されたのはお約束というものであろう。

「きゅううう……」

「イテテ……どうしたんだ？」

鉄兵になだれかかって目を回しているリードを押しのけて状況を確認すると、御者の兵士が振り返り、報告をするところだった。

「村が山賊に襲われているようです！」

その報告にアリスの顔が引き締まる。

「全速力で救援に向かうぞ！」

「ハッ！」

アリスの指示を受けると御者の兵士が馬にムチをあて、馬車が急加速をはじめた。

馬車の揺れはさらにひどくなり、鉄兵の体調は危険水域に入り始めたが、なんとか気力を振り絞って立ち上がり、窓から状況を確認してみると、地平線の果ての方に村があり、そこから煙が立ち昇っていた。随分と距離があるが、今から向かって間に合うのだろうか？

がちゃっと後ろで音がしたので振り返ると、シロが馬車のドアを開けているところだった。

「先に行ってるぜ」

と一言残し、シロが馬車から飛び降りる。地面に着地したかと思ったら次の瞬間には全力疾走の馬車をも超える加速をし、畳んだ鉄傘を片手に猛然と走り去っていった。

「鉄兵、私も運んでくれ！」

「……了解！」

村では戦いか虐殺が起こっているはずである。そんなところに自分が行くのか？　と鉄兵は一瞬躊躇したが、非常事態と割り切って、とにかく何も考えずにアリスに従う事にした。

アリスをお姫様抱っこで抱き上げて馬車から飛び降りる。地面が足につくかいなかのところで加速をはじめ、猛スピードでシロの後に追随する。

見る間に村は近くなり、まずはシロが村へ飛び行った。続いて鉄兵達も村に入ったが、人影が無い。

村の人達はどこへいったのかと少し立ち止まって辺りを窺うと、煙が立ち昇っている辺りから掛け声のような怒声が聞こえてきた。急いで声のした方に駆け寄ると、そこには村人が集められて座らせられており、丁度シロがそれを囲むように立っていた１７－８人くらいの山賊に向かって突入しているところであった。

シロが傘を力任せに振り下ろす。山賊は手に持った斧の柄でそれを防ごうとしたが、推定７０ｋｇの鉄傘は受け止めた斧の柄をぐにゃりと曲げて、そのまま山賊の男を直撃して地面にしたたかに打ち据えた。

「囲め！」

突然の乱入者に山賊は動揺したようだったが、リーダーらしきフードをかぶった馬に乗った人物が手を振って指示を出すと、山賊は山賊らしからぬ統率力でリーダーの命令を実行し始めた。

シロを囲むように山賊たちが動く中、それよりも早くアリスが鉄兵の胸の中から飛び降りて、シロの背を守るべく突撃する。アリスが剣を抜き、シロと背中合わせに構えた直後に山賊達の包囲網は完成した。

一方鉄兵はというと、正直なところ出遅れて、どうしたものかと手をこまねいていた。適当にそこらの農具でもパクレば身体能力が強化されている事もあり山賊に遅れを取る事はなさそうだが、多対多の争いに慣れているわけではないので下手にあそこに突っ込めばかえって足手まといになりそうな気がするのだ。山賊の数は多く、本来なら多勢に無勢というところなのだが、いざとなればシロが白竜になればそれで終わるだろう。というか下手に村人を人質に取られないようにわざと囲まれた気がする。多分、下手に動くより見物していたほうが良い気がする。

そんな風に迷っていたら、派手に燃えている一軒家が目に移った。恐らく山賊が脅しとして火をつけたのだろう。他に燃え移ったら危険だし、山賊達はシロ達に任せて鉄兵は消火作業をする事にした。

風呂でやったのと同じように、ただし出現箇所は燃える一軒家の上になるようにして水素と酸素を集め、水を作る。２５ｍプール一杯分はありそうな水を瞬時に浴びせかけられた火事になっていた一軒家は、一瞬で酸素と熱量を奪われて鎮火した。ついでに水に押し

つぶされて倒壊してしまったが、まあ仕方が無いことだろう。

鉄兵としては火事を鎮火しただけなのだったのだが、ついでに山賊ＶＳシロ・アリスの戦いの火も鎮火してしまったようだった。火事が鎮火したのでやれやれと思いながら火の消えた一軒家を見ていたのだが、なにか強い視線を感じたのでシロ達の方に視線を戻したら、山賊や村人は愚かシロとアリスの二人までこっちに注目していた。ちなみに内訳は山賊と村人は驚きの、シロとアリスはいつもの呆れ視線である。

今のはそれほど魔力を消費する魔法ではなかったのだが、何がいけなかったのだろう？　一度リードに標準的な魔法を教わった方が良いのかもしれない……

沈黙の視線が痛い中、すっと山賊のリーダーらしき人物が手をあげた。

「撤収！」

リーダーの掛け声とともに、山賊たちが動き出した。あくまでシロとアリスの出方を警戒しながら、見事に撤収を開始する。その統率力はとても山賊のようには思えないのだが、この世界の山賊はそんなにレベルが高くなければやっていけないのだろうか？

山賊たちがシロ達とにらみ合いながら、交互に警戒役を交代し、馬に乗っていく。やがて全ての山賊が馬に乗り終えると、リーダーの掛け声とともに一斉に撤退していった。

「お嬢ちゃん、深追いはいらねぇぜ。巣に帰ったところを一網打尽にしてやればいいさ。一人置いてったしな」

追撃しようとするアリスを呼び止め、シロが足元を指差した。確かにその山賊はアジトを知っているだろうが、そんなに簡単に場所を吐くものだろうか？

……いや、韜晦はやめよう。多分拷問してでも吐かせるのだろう。基本的人権とかがある世界なのかは知らないが、山賊が普通に村を襲うような世界なら期待薄だろう。ならば自分が人権を訴えるのかと言えばそんな義理はない。因果応報。郷に入っては郷に従え。そんな精神である。

山賊の撤収を見て村人達は喝采を挙げていたが、地に倒れ付している山賊の運命を思うと鉄兵はどうにも複雑な気分であった。

クィーン・オブ・バンデッド（前編）（後書き）

２０１１／５／４：指摘いただいた誤字修正
「山賊達はシロ達に任せて鉄兵は消化作業をする事にした」
→「山賊達はシロ達に任せて鉄兵は消火作業をする事にした」

幸いな事に村人に大した怪我人は無く、一番の重傷者はシロがぶっ叩いた山賊Ａであった。

「これは酷いな……」

「死なれちゃ困るからこれでも手加減したんだが、ちとやりすぎたかな」

村人に感謝され、事情を聞くために代表者数人を残して解散してもらった後、山賊に関する情報源である山賊Ａの姿を確かめて、そのあまりにも凄惨な状態に思わずうめいてしまった。もろにシロの一撃を受けた鼻はへしゃげ、鉄傘を受けた斧を持っていた両腕は折れ、ついでに地面に叩きつけられた衝撃でだろうか、アバラも何本か折れているようだった。折れたアバラで内臓もどこかいかれたのか、血反吐も吐いている。

これでも手加減したと悪びれもせずにシロは言っているが、どう見ても瀕死の重傷だった。それにしても人型形態でさえシロはこの強さなのだ。こんなのが何人もいればそりゃあ強引に国も取れてしまうのも納得というものだ。

「しかし、アジトの場所を吐かせるにしてもまずは少し治療をしないと死んでしまいそうだな。イスマイルが到着するまで持つ気がせんが……鉄兵、治癒の魔法は使えるか？」

「どだろ？　やってみる」

血など見慣れていない鉄兵は山賊Ａの惨状を見ているだけでも気分が悪くなっていたのだが、人命に関わる事なので何とか気力を振り絞り、山賊Ａに近づいた。山賊Ａの身体に触り、身体の中の無属性の精霊と相談してみる。何とかなりそうだった。

魔力を山賊Ａの患部に展開させ、治癒の魔術を発動する。基本は自然治癒の促進だが、骨が折れた状態で治癒してしまうと具合が悪い。なので念動の魔法も併用して治癒と同時に骨の位置を正常な位置に戻す。

それにしてもこの念動の魔法。悪用すればかなりエグイ事もできそうで余り気分がよろしくない。そんな鉄兵の後ろ向きな気持ちが現れたのか、はたまた鉄兵は治癒の魔法と相性が悪いのか、山賊Ａの怪我の治りはのろのろとしたものだった。

「……これで大丈夫かな？」

それでも治癒はどうにか終わり、苦しげだった山賊Ａの寝息が安らかなものに変わった。

「見事なものだ。イスマイルにも引けを取らん治癒の術だ」

「そうなの？　結構てこずったんだけど」

鉄兵的にはあまり出来の良いものではなかったのだが、アリスから見ればそうでもないらしい。

「そりゃ生物なら自分に魔法をかけられりゃ抵抗するからな。起きてて治療を受け入れる意思がありゃあそれなりに楽らしいが、意識が無い奴にかけるにゃ結構大変らしいぜ」

なるほどそういうものらしい。今までの魔法はほとんど魔力をロスする事無くかけれていたのだが、今回は初めて魔力のロスというものを味わったようだ。それでどうにもてこずった印象を受けたのだろう。

「さて、こいつの口を割わらせにゃいかんが、俺は尋問がそんなに得意じゃない。お嬢ちゃんは得意かい？」

「得意というほどではないが、一応は嗜んでいる」

「そっか。そんじゃまイスマイル達が到着するまでにサクサク済ませちまうかねぇ」

いまだ意識の戻らない山賊Ａをシロがひょいと担ぎ上げる。どんな尋問をするのかはわからないが、山賊Ａは傷が癒えたかと思ったらまた痛めつけられるわけなので、ちょっとかわいそうだった。あんまり強情張って酷い事にならないと良いのだが。

「村長さん。どっか人目につかない家を借りれないか？」

「それなら村の外れに猟師小屋があります」

まだ残っていた村人にシロが話しかけると、モミ手でも始めそうなくらいニコニコしながら村長さんが答えた。そりゃ山賊に襲われて絶体絶命かと思いきや、突然助けが現れ、なおかつ無料で山賊を退治してくれるというのだ。諸手をあげて喜びたくなるのも当然だろう。

シロもアリスも随分とお人好しな気もするが、よく考えてみれば

シロはこうやって竜人族の信用を高めているわけだし、アリスは王女様なので領民の安全を守る義務があるのだろう。そう考えれば二人の行動は当然ともいえるのだが、それでも特に疑問を持つ事も無く自然とそういう行動を取れる二人は結構尊敬できるのではないか？　とか鉄兵はちょっとそんな事を思った。

村長に連れられてシロとアリスが山賊Ａを連行していく。尋問の現場になど立ち会いたくなかったのでここに残ったのだがさてどうしよう？　そう思って周りを見ていたら火事の現場を片付ける人達が見えたので、鉄兵はとりあえずそれを手伝う事にした。ちなみに特に手伝う義理も無いのに自然とそういう行動に移る鉄兵も随分とお人好しなのだろうが、まあ本人は気がついていないようである。

「手伝ってもいいですか？」と途方にくれながらも火事で焼失した家を片付ける人達に声をかけると結果的に自分が山賊を追い払った事もあり、辟易するほど感謝されてしまった。だが、ちょっとやりすぎてこの家を倒壊させてしまったわけで、あまり感謝されるのも良心が咎める。なので「まあ、困った時はお互い様という事で」と軽く流して強引に作業に入る事にした。

焼け落ちた家の残骸を取り去って焼け残っていたまだ使える家具類を発掘する。大部分は燃えてしまっていたが、幸いにも焼け残った服や食器などがそれなりに発掘できた。ついでに家の残骸を取り去る時に結構大き目のものを率先してひょいひょいと片付けていったら予定調和のごとく驚かれてしまったが、もはやお約束になってきたので割愛する。

そんな作業をしていたら、やがてイスマイル達の馬車が村に到着した。

「鉄兵、大丈夫なの！？」

「あー師匠。見ての通りです」

馬車が到着したと思ったら、馬車のドアがバタンとあいてリードが飛び降りてきた。抱きつかんばかりの勢いで走ってきたのだが、呑気な鉄兵の様子を見て馬鹿らしくなったのか、脱力して地に伏せる。

「テツ殿。姫はご無事ですか？」

「アリスならシロと一緒に山賊Ａを尋問中。村の外れの猟師小屋だっていうから場所はそこら辺の人に聞いて」

続いて馬車を降りてきたイスマイルと兵士達に詰め寄られたが、アリス達の状況を言うと一目散に走り去って行った。

さらに続いてよく状況を理解していないらしいリルが馬車から降りてきて

『あるじ、どうしたの？』

と擦り寄りながら聞いてきたので

「ちょっと人助けしてただけだよー」

と撫でていたら、ようやくリードが復活した。なぜか機嫌がよろしくないようで、なにやら納得のいかない様子をみせている。

「……うーん。結構心配したのにな。なんでそんなにピンピンして

るの？」

「えーっと……すいません？」

真正面から対応に困る台詞を吐かれてしまった。怪我の一つもしてた方がよかったのだろうか？

『機嫌の悪い女性には逆らわない』が鉄兵の基本方針なのでとりあえず謝ってみたが、それにしても毎回傷つく事を目を見据えて真正面から言ってくれるなぁと鉄兵はちょっと傷ついたりした。素直なのはいいのだが、もうちょっと手加減してくれるとありがたいなとか思ったが、今言うのは怖いので止めておく。

ちょっと対応に困ったので「師匠も手伝ってくれませんか？」と火事の残骸を指差して話を逸らせて見たら「服が汚れるからやだ」とにべも無く断られてしまった。『触らぬ神に祟り無し』も鉄兵の基本方針なので、気にはなったがリードを放っておいて火事の後始末に戻る事にしたら、リードは面白くなさそうに作業に没頭する鉄兵をじっと睨んでいたのだが、気がついたらいつのまにか作業に参加していて、焼けた家に住んでいた子供と思しき少女と笑いながら作業していた。女性の心はよくわからないが、基本的にリードは良い子だなぁと思う。

やがて家の残骸を片付ける作業も一段落着いた頃、アリス達が戻ってきた。こういうと結構時間が経っている様に思えるだろうが、実際は鉄兵がひょいひょいと軽く残骸を片付けていたのでそんなに時間は経っていない。割かし早かったが、例の山賊Ａはそんなにあっさりとアジトの場所を吐いたのだろうか？

「首尾はどう？」

「上々だ。アジトの場所がわかったからこれから襲撃をかける予定だ」

どうやら山賊Ａはあっけなくゲロったらしい。山賊Ａが気弱だったのか、はたまたアリスの攻めが過酷だったのかはわからないが、山賊Ａの冥福を祈る。いや多分死んでないだろうが。多分。

「ずいぶんあっさりだったね」

「そうだな。ひょっとすると罠かも知れねぇが、まあ行かん事にはわからんさ」

飄々とシロが言う。なんとなくの印象だが、シロは「罠はかかって潰すもの」といったタイプなのだろう。

「ってなわけで出かけてくるが、おまえさんも来るかい？」

「むりむり」

微塵の躊躇も無く鉄兵は首を振った。何度も言うが鉄兵は戦士ではなく技術者なので率先して戦いに赴く気などさらさら無かった。敵がリルくらい脅威ならば鉄兵も無理して戦うが、山賊相手ならシロとアリスで十分だろう。というか今回は人間同士の戦いである、戦場なんか経験した事の無い鉄兵が行って首の一つも刎ねる光景を見たとしたら、その光景に腰を抜かす自信があった。

「んじゃま、リードの嬢ちゃんにもお留守番してもらって予定通り馬で行くかね」

「そうだな。馬なら半日ほどの距離と言っていたから今から行けば夜襲には丁度良いだろう」

どうやら二人も鉄兵がそう言う事は予想済みだったらしく、とんとん拍子に話が進んでいっている。

「しかし山賊が相手か……人間同士の殺し合い、か」

何気なく呟いた鉄兵の言葉にシロの眉がぴくっと動いた。

「鉄兵は人殺しを嫌悪する質なのか？」

しかし言葉を発したのはアリスであった。その顔はどことなく悲しそうだ。

どうやら失言してしまったようだ。アリスの悲しそうな顔は見たくないので取り繕いたいところだが、どうにもそれだとアリスを騙すようで気が引ける。嘘はつきたくないので、鉄兵は今までそんな事を考えた事がなかったが、少し真面目に考えてみる事にした。

さて難しい話題である。様子からするにアリスは人を殺した事があるのだろう。シロだって８００年以上生きて巡回保安官のような事をしていれば一人や二人どころではなく殺しているはずである。

正直なところ、人殺しという行為には嫌悪を覚える。だが、シロとアリスに嫌悪は感じない。

人殺しを好きになれるかと問われれば、好きにはなれない答えるだろう。でも、シロとアリスを嫌いかといえばむしろ好きである。

そこにどんな違いがあるのかと考えれば、まずは知り合いであり、人となりをそれなりに知っている事。ひいてはシロとアリスが快楽目的に人を殺すような事はしないだろうと知っている事だろうか？

ならば例えば戦争など一応は大義名分があり快楽目的以外の殺人行為なら嫌悪を感じないかと言えば、経験した事が無いので実際はわからないが、自国ひいては味方の国が戦争をしていて、自国・味方国の兵隊が敵国の兵隊を殺す事なら嫌悪を感じず、自国とは関わりの無い国が戦争をしているのを見れば、殺人行為に嫌悪を感じるだろう。

結論としては大義名分があろうと人殺しには嫌悪を感じる。でも知り合いが自分に属する側の利益になる殺人行為なら嫌悪は感じない。と言ったところであろうか？

これはまた随分と自分勝手で乾いた結論が出てしまったが、取り繕ってもしょうがないだろう。さて、これらの事を言葉にすればまあ大体こんな感じであろうか？

「なんていえば良いかな……俺の国は平和だったから、人殺しの知り合いはいなかったし、人を殺した事がある人を見た事もない。だから人殺しに嫌悪を感じるかと聞かれれば嫌悪を感じるのは確かかな。

うちの国だとどんな犯罪者でも出来る限りは生きたまま捕らえて法律に則って罪を償わせるのが基本だから犯罪者だと言っても問答無用で殺すというのには抵抗がある。

けどうちの国にも軍隊はあったし、仲の良い国では危険な犯罪者は問答無用で殺されることもあるから、アリスが山賊と戦いになった時に山賊を殺す、という行為には異論はないよ。

まあ、できれば生きたまま捕まえて法の下に裁いて欲しいし、ア

リスやシロに人を殺して欲しいとは思わないけどね」

随分と長い台詞になってしまったが、アリスはしっかりと聞いてくれたようだった。アリスの表情からは悲しみのエッセンスが消えていたが、代わりに寂しさのエッセンスが色濃く現れていた。

「鉄兵の国は随分と優しい国だったみたいだな」

何で寂しがられたのかはわからないが、ここは正直な自分の意見を言うより他に鉄兵は方法を知らなかった。

「優しいかどうかは知らないけど、結構平和な国だったよ。注意して普通に暮らしてれば犯罪に巻き込まれる事も無いし、ちゃんと頑張れば結構不自由なく暮らせる国だったからね。少なくとも山賊なんて出たら笑い話になるかな」

日本に山賊が現れたらまず間違いなく新聞の三面記事に載るような馬鹿話だろう。それに変わるような犯罪はあるのだろうが、少なくとも自分は知らないし、一般的では無いという時点で平和な国だと思う。有名な小話としては外国だと自動販売機はすぐに壊されてしまうからあまり設置されてないとか聞いた事がある。実際のところどうなのかは知らないが、そんな事があれば下手すれば全国区のニュースになるような国なのだ。そんな点を一つ取ってみても十分平和な国だと思う。

「テツはなんとも平和ボケした国に生まれたようだな。ま、平和ボケなら俺達竜人族だって負けちゃいないがな」

軽く鉄兵をからかいながらシロがニッと笑う。言われてみれば竜人族はまさにスイスのような方法で永世中立国を保っている。つま

り難癖つけられたら銃口をつきつけて「お引取りを」と言う平和だが、確かにそれも平和ボケの一形態……ではないよな。とまあさすがに自分を騙せなかったが、自国の平和ボケを自慢したところで何も始まらないので黙っておく。

「いや、しかしそれぐらいが理想というものだ。うらやましい話だな」

なぜか今度は寂しげな表情が消えて羨望の色がアリスの顔に浮かんでいた。日本を考えるにそれほど羨ましがられる国とは言えない気もするが、山賊が跋扈する世界においては、結構な理想郷。まさに御伽噺の国のようなものなのかなぁとも思えてきた。とにかくアリスの負に繋がる気が削がれたなら鉄兵としてはそれで満足なので余計な口は挟まない事にした。

「鉄兵が山賊とはいえ殺す事を好まぬというのなら、ここは生け捕りにすべく努めるとしよう。もっとも、結果は変わらないのだが」

「あー……山賊は問答無用で縛り首だからな。見せしめのために」

なんともまあ過激な法律である。だがしかし、きちんと法に則り裁く事が重要だと思うのだ。他の法律については知らないが、山賊行為は死罪と明言されている上で山賊行為を行うならば、それなりの覚悟があってのことだろう。覚悟も無く違法行為を行い結果として死罪となるのなら自業自得であるし、覚悟があっての事ならば捕まった場合は言うまでも無い事である。

「アリス、気をつけてな」

とはいえ自分の我侭でアリスを危険な目に合わせたくない。所詮

他人の命よりも、知り合いの命が鉄兵には大切だ。しかもここに来てようやく実感が湧いてきたが、洒落や冗談ではなく今からアリスは命を的に戦いに出るのだ。山賊相手にシロも付いているアリスが遅れを取るとは思えないが、万が一の事もあるし、もしも自分のちょっとした思い付きによる我侭で危機に陥ったとしたら耐えられない！（ちなみにシロに関しては我侭で危険な目に合わせてもどうせ傷一つ無く帰って来そうだからスルーである）

そんな激情に駆られて鉄兵は我知らず身を乗り出し、アリスの手を握っていた。

「山賊の命より、アリスが傷一つ無く戻ってきてくれる方が俺は嬉しいからな。無理はしないでくれよ」

約束をするアリスに果敢ない何かを感じたのか、はたまた血生臭い狂気に満ちた危うさを感じたのか、どうにも鉄兵は気が落ち着かなくて、アリスの瞳を真摯に見つめ、心の底からアリスの無事を祈った。

鉄兵の本気の眼差しにアリスの顔が一瞬で茹蛸のように赤く上気する。

「はい……あ、いや、うむ。心配せずとも一つの事にこだわって身を危険に晒すほど馬鹿ではないぞ。鉄兵は私を見くびっていると思うのだ」

動揺を隠せずにきょどった心で台詞を吐くアリスの態度はそれはもう信用が置けないものだった。

「それはどうかなぁ……シロもそう思うだろ？」

「ん？　ああそうなんじゃねぇか？」

見ればいつの間にか取り出したのか、シロは煙管を取り出して魔法で火を点けているところだった。酷く投げやりな口調に鉄兵はちょっと気を損ねたが、読んでいる方々にはなんとなくシロの気持ちが分かってくださるだろう。

「ともかく、気をつけてな」

「うん、気をつける」

少し嬉しそうにアリスが答える。それは印象まで変わってしまいそうな素直な返事であった。

年相応のアリスの声を、鉄兵は初めて聞いたような気がした。

クィーン・オブ・バンデッド（中編）（後書き）

９／１６：文章修正
「はたまた血生臭い」→「はたまた血生臭い狂気に満ちた危うさを感じたのか、」
重複削除
１２／１８：指摘いただいた誤字修正
うちの国だとどんな犯罪者でも出来る限りは生きたまま取らせて
↓捕らえて

クィーン・オブ・バンデッド（後編の上）

あれからすぐにアリスとシロはイスマイルと兵士三人を引き連れて馬車を引いてた馬に乗って村を出て行き、鉄兵とリード（とリルとハルコさん）はお留守番となった。さて、みんなが出撃してしまったので少なくとも明日の昼間では暇である。今日の宿も決まってないからどうしようかなとか考えつつも、鉄兵はとりあえず火事の後始末を手伝う事にした。

火事の残骸はとりあえず片付いたのでさて次はなにをするべきだろうと一緒に作業していた村の人に聞いてみたところ、家をつくるには材木が足りないので調達してきて欲しいとの事だった。エコ戦士な鉄兵としては木を切る事には少し抵抗があるのだが、これも人が生活していくには必要な事なのである。そう割り切って斧を借りて森に出て、カコーンカコーンと斧の一振りで木を倒していく。ほどなく村人兼建屋設計者の人からＯＫサインをもらったので、今度はそれを運ぶ作業に入ることにする。

まずは余計な枝を刈り、丸太を作成する。水の魔法かレーザーでも使って一気に加工してしまおうかとも考えたが、範囲を絞れる自信が無かったので今回は自重する。まあどうせ一撃で枝も切れてくれるので、そんなにたいした労力ではない。

肉体能力が強化されている事もあり、刈った木材を運ぶのはそれほど苦ではなかったのだが、重量的には気にならなくても自分の腕は二本しかなく、木材を運ぶにはそれなりに時間を要する。なのでそういえば魔法で物質を加工することが可能になったのだし、生命体ならば魔法に対して抵抗するとの事なので、これも実験、一石二鳥とばかりに木材を一つに加工すべく例の金属加工の応用で魔法を

つかってみたのだが、それは意外と思えるほどに厳しい経験になった。

簡単に言えば、生命体に対して解析と加工の魔法を同時施行することは、並々ならぬ苦痛を感じる事がわかった。

もう切られている木とはいえ、切ったばかりの木は生命体として生きていた。その生命体として生きている木を加工して二つの生命体を一つにするという言わばキメラを作成するという行為は、魔力のロス以前に耐え難い苦痛を鉄兵に与えた。何が起こったかといえば、感情がフィードバックしてきたのだ。

鉄兵には木の気持ちなど分からない。それにも関わらず、自分とは違う精神構造の生命体が発する拒否感。恐怖心などがもろに伝わってきてしまったのだ。

解析という魔法は触れている対象の構造を理解する魔法である。その中には感情といわれるものまでもがある程度は含まれているらしく、その事を理解していない状態で不用意に魔法を行使した鉄兵は、なんともいえない拒絶感をもろに受けてしまった。酸素や水素、無機物の気持ちなどはあるはずもなく、そこは従順なものであったが、生命体にかけた際に伝わってきたそれは、精神的には常人である鉄兵には耐えられるようなものではなかった。

とはいえ解析の魔法を使わなければ問題はない。魔力のロスがそうとう酷くなるだろう事は予測できるが、鉄兵的にはそこはなんの問題もなく、それこそ一瞬で加工できるだろう。だが、あの感覚を一度経験してしまった鉄兵としては今すぐにそれを実行する気にはなれなかった。

魔法を使っていてそういえばと思い出したので、火事を消化した時にそれほど魔力を消費する魔法じゃないのに驚かれた事を、ちょうど良いのでリードに聞いてみることにした。大きな丸太を両肩に担いで火事現場に戻ると、リードは子供と一緒に細かい残骸を払いのけて更地にする作業をしていた。

「師匠。そういえばこの火事を消す時にちょっとした魔法を使ったらまた驚かれてしまったんですけど、なんでかわかりますか？」

「ふーん。どんな魔法使ったの？」

「そうですね。簡単に言えばこの家の火事を一気に止めるくらいの水を出したくらいですけど」

「……さすが魔法力２４０万の人は違うわね」

なにやらその事実を知った時の恐怖が蘇ったのか、リードは少しそわそわして隠れる場所を探すようにちらっちらっと周りを確かめる。

「あー……いや、そうじゃなくて。消費魔力としてはそんなに大した事じゃなかったと思うんだ。多分リードなら楽勝くらいの魔力しか使ってないし、だからなんでなのかなって」

鉄兵の言葉を聞いたリードは思い当たる事があったようだ。しばらく興味深げに腕を組んでなにやら考え込んだ後、鉄兵はリードにしげしげと顔を見られてしまった。

「鉄兵ってホントに化け物なのね……あ、ごめん。規格外？　なのね？」

などと非常に失礼な事をリードが言う。ちなみに言葉を言い直したのは『化け物』という言葉を聞いた時に少し傷ついた鉄兵の表情を察しての事だろう。リードの言葉は素直なために鉄兵としては結構傷つくのだ。

「もう規格外でいいです。で、なんなんですか？」

原因が不明な要素で差別されるのはなどと多少投げやり気味にリードに尋ねると、なかなか興味深い答えが返ってきた。

「あのね。魔法は規模が大きくなればなるほど魔力のロスが大きくなるの。だから確かに減衰を考えないでそれくらいの魔法を使えたとすれば消費魔力はそんなでもないんだけど、減衰を考えると雪ダルマ式に消費魔力は大きくなるからそんな大魔術は私のパパくらいじゃないと使えないの。でも、鉄兵は消費魔力についてそれほどでも無かったって言うし、それはその減衰を感じてないってことなんでしょ？　やっぱり規格外だと思うの」

それは確かに規格外な話である。実際、鉄兵は生命体に干渉する魔法以外にはほとんど魔力のロスというものは感じていない。無詠唱でも体内に宿る精霊にイメージが伝えられる翻訳機能の副産物だろうかとも思ったが、それなら生まれ持って魔力に干渉する能力のある精霊族にしても魔力のロスはないはずである。これは聞いてみるべきか？

「精霊族なら自分と同じくらい魔力のロスが少なくて済むとかないの？」

「精霊を介さないで魔法が使えるからその分減衰は少なくて済んでるみたいだけど、やっぱり大きな魔法だと結構減衰が激しいみたい。私のパパは精霊族だけど、たまに王様に大きい魔法を使わされるとしんどそうに帰ってくるし」

宮廷魔術師長さんは結構こき使われているようだ。自分も王都で働くようになったらこき使われるのだろうか……

それはともかく、ならばイメージの問題なのかな？　と鉄兵は思考する。自慢ではないが鉄兵は高校時代からの工業漬けで設計も加工も叩き込まれているから三次元的構造のイメージ力に優れている。なのでそこら辺が関連しているからかなと思いつつも、現時点ではこれ以上は不明なので理由については保留する事にした。推測に推測を重ねるのはあまり宜しくないだろう。

丸太を運び終わったら、次の仕事は材木への加工である。作る家は丸太小屋なので両端を平らに削る。切断面はなるべく平らな方がいいので、ここはレーザー加工を行うことにした。丸太の両端を木片で固定して、まずは弱い赤色レーザーでポイントを確かめ、ずれていない事を確認してから出力を上げ、さっくりと両端を削っていく。さすがにそんな事をしたら村人に怖がられるかなと思ったが、今まで散々火事を消火したり一撃で木を切り倒したり両肩で丸太を持ち運んだりと驚異的な事を軽々とやっていたので村人達も慣れたらしく、特に何も言われなかった。

両端を平らに削った後は組み合わせられるように溝を掘っていく。とまあ延々と機械的にそんな作業をしていたらやがて日が暮れてきて、今日のところはこれで終了という事になった。宿の事など考えずに火事の後始末に没頭してしまったのでさて宿はどうしようかリードと困っていたところが、すでにアリスが手配してくれていたら

くし、村長さんが迎えに来てくれて、そのまま村長さん宅に案内されて滞在する事になった。

村長さんの家は国のお偉いさんが村に滞在する事になった時の宿も兼ねているらしく、かなりでかい家だった。内装などもそれなりに気を使っているようで居心地の良い家だったが、住んでいるのは村長さん夫婦と娘さんだけで、お手伝いさんなどはいないようだった。１０部屋くらいある家なので常に部屋の状態を維持していくのは大変そうだったが、家政婦さんの一人も雇っていないという事は、村長だからといって得をしているわけではなく、むしろ厄介事を一任されている気がする。事実がどうかはわからないが、だからこそ村長を任されているのかなとか鉄兵は思った。

家に着いて部屋に案内されるとすぐに夕食となった。山賊を追っ払った事もあるが、多分王女様の知り合いという事もあり、食事の時には村長さん夫婦と娘さんには当初激しく接待をされてしまってやや辟易としたが、あまりそういう接待を好まないと理解してくれたのか食事は徐々に穏やかな感じになり、村長さんの話術が巧みだった事もあり、なかなか楽しい食事となった。

その夕食の席で先ほどの山賊の話が出てきたのだが、なかなか有名な山賊のようだった。今頃アリス達はその山賊達のアジトに乗り込んでいる頃だろうか？　そう考えるとどんな山賊だったのか気になったので少し話を聞いてみる事にする。

「山賊について、詳しく聞いてもいいですか？」

「はい、私も詳しいわけではないのですが、噂によれば十数年ほど前に滅んだ国の騎士団崩れのようでして、今の頭目は騎士団長の娘が率いていると聞いております。頭目が女性の山賊というのも珍し

いので恐らく間違いは無いでしょう」

なるほど騎士崩れというならあの統率力も頷ける。それにしても自分が見た時にはフードをかぶっていたのでわからなかったが、リーダーは女性だったらしい。二代目とはいえ元騎士、それも現山賊を率いているという事は腕も立つのだろう。どんなごつい女性なのだろうか？

「あ、その話わたしも知ってる。それって噂の山賊姫でしょ？　あれ、でもこんな王都の近くにいるんだっけ？　もっと辺境の方で活動してるって聞いた気がするけど？」

「それは、どうやら王国に仇なすつもりらしく、先遣隊が向かっているという情報は入っておりましたが、まさか山賊姫その人がその先遣隊を率いているとは思いませんでした」

リードの口調を聞くに、かなりの有名人のようだ。それに王国に仇なすという事はかなりの勢力なのだろう。その頭目が先遣隊に混ざっているのはどうかと思うが、それだけ自信があり、行動力もあるという事なのだろう。

と、そこで気がついたことがあった。つまりは山賊姫の先遣隊というのは強行偵察兵といったところなのだろうが、そんな集団がアジトなど持っているのだろうか？　この世界の常識はわからないが少し不自然に思える。

「あのさ、そんな辺境に拠点を構えてる集団の偵察部隊がアジトなんて持っているもん？」

「「え？」」

村長さんとリードから間抜けな声が漏れる。どうやら二人ともその事に思い至っていなかったようで、少し考え込む。

「言われてみればそんなわけないよね」

「そうですね。考えもしませんでしたが少しおかしいですね」

どうやら二人とも鉄兵と同じ結論に至ったらしい。という事はやっぱアジトなどないのだろう。アリス達は罠にはめられたようだ。アリス達は敵が山賊姫だという事を知っていたのだろうか？　知っていたとなればシロ辺りはそれぐらいの事、気がつきそうなものなのだが。

「アリス達は敵が山賊姫だって知ってるの？」

「いえ、そういえばお話しておりません」

やはり知らなかったらしい。少しアリス達の事が心配になったが、まあシロもイスマイルもいるのだし、どうにでもなるだろう。今からではどうにもならないのであまり気にしない事にする。夕食はそこで興が削がれてしまい、歓談はそこまでとなり、鉄兵は腹ごなしに少し外に出ることにした。

『あるじ、かまって！』

「あは、こらこら」

外に出ると、待ち構えていたかのようにリルに襲撃されて押し倒された。ちなみに村長さんはリルを家に上げていいといっていたの

だが、リルは家の外の方が良いらしく、トイレの事なども考えるとやっぱり外のが良いよなと思い外にいてもらうことにしたのだ。

しばらくリルをかまっていたら、突然リルが小首を傾げた。耳をひくひくさせ、やがて一声吼えた。

『あるじ、うまがいっぱいくるよ』

「あれ、アリス達が帰ってきたのかな？」

おかしいなと思いつつ、鉄兵は聴力強化の魔法を使ってみた。確かに馬がいっぱいこちらに迫ってきている。だが、アリス達が帰って来たにしては数が多い。続いて視力強化の魔法を使って音のする方を見てみたところ、その正体に鉄兵は愕然とした。

こちらの向かってくる一団の正体は例の山賊達であった。

冷静に考えればわかったことである。アジトの情報は嘘であり、捕らえた山賊はこの村にいる。しかも脅威となる戦力の大部分が罠にひっかかっているとなれば、襲ってこない方が嘘であった。

山賊の一団は恐らく後１０分もしないでこの村に到着するだろう。

冷静に状況を考える。結論はすぐに出た。これはまたも蛮勇を奮わねばいけない事態のようである。

追い払うだけならばリルを巨大化させて脅威を感じさせればいい。でも、それだと鉄兵達が出て行った後で山賊達はこの村を襲うだろう。そういった方法で追い払ったならば、相手が手練れの山賊だという事もあり、鉄兵達がこの村を出て行くまで姿を現さないだろう。

だが、鉄兵達はいつまでもこの村にいることは出来ない。そして、鉄兵達が去った後で山賊達はこの村を襲うだろう。

なら、どうしなければいけないかと言えば、ここで確実に山賊達を取り押さえなければならないのだ。しかも、自分の手で。

山賊達は一つミスを犯している。昼間の件で自分が魔術師である事は分かっているであろう。恐らく偵察もしていて自分がこの村に滞在している事は知っているはずである。にも拘らず村を襲いに来たと言う事は、いくら強力な魔術師であろうとも多勢に無勢であるならば勝てると思っていることだ。

ちょっと身が震えた。

この世界に来た初日の頃ならいざ知らず、この世界に来て８日目の今日では自分の能力も十分に理解している。だからこそ確信が出来る。自分は負けないと。

小中学校とひらすら剣道をしていた。高校時代には変態な先輩につけ回されて無駄に実戦も経験している。だからこそ自分の今の力を図れるが、冷静に解析して、今の自分は最強である。別に荒事が好きなわけじゃないが、いざ戦うとなったら覚悟もあるし、例え技術で大幅に上回る相手を敵に回そうが負けるはずが無い。

そう、まず負けるはずは無い。負けるはずはないのだが、でも、怖いのだ。

なにが怖いかといえば、ここで人を殺してしまうかもしれないという事だ。と言えれば少しはかっこいいのかも知れないが、実際には自分が死ぬかもしれないということだった。

多分負けない。いや、絶対に負けない。それでも現実には確定が無く、自分の知らぬ要因により自分の身に死が訪れる事はどんな場合であろうと有り得る事なのだ。

鉄兵は戦士ではない。だから自分が絶対に死なないと思い込んで戦いに赴く事なんてできない。

鉄兵は技術者である。だからどんな小さな可能性であろうとそれは無ではなく、有り得る事だと思ってしまう。

だが、それでも覚悟は決めた。覚悟を決めた以上はやるべき事をやるだけである。

情報を整理する。どうすれば山賊達を一人として逃がす事無く捕らえる事ができるだろうか？

作戦はすぐに整った。またもやかなりの力技だが自分の性格的にこれが一番合っている。

「リル。お願いがあるんだ。今から言う事を良く聞いてね」

作戦の実行にはリルの手助けが必要だった。リルを穏やかに撫でながら役割を伝えていく。

『あるじ、しぬの？』

鉄兵の説明を聞いたリルは、世界の終わりと言わんばかりの悲しげな声で一言鳴いた。

「死なないよ。でも死ぬ事も考慮に入れてるだけだよ。だからもし死んだら頼んだよ」

『りる、わかった。でもしないで、あるじ』

「リルを置いて死ぬ気はないよ。だから、お願い」

クーンと一声鳴いてリルが鉄兵に擦り寄り、鉄兵の命令を実行すべく去っていった。鉄兵も準備をすべく行動を開始する。

バタンと急いでドアを開け、用意された自分の部屋に直行する。自分の部屋に入ると鉄兵はいつぞや作った出来の悪い木刀を手に取った。フンと気合を入れて魔法を行使し、記憶にある自分の木刀と同じものに加工する。

「鉄兵、どうしたの？」

ドタバタとやっていたせいでリードが異変に気がついたらしく、鉄兵の部屋に入ってきた。

「リード。落ち着いて聞いて。あと１０分足らずで昼の山賊がこの村を襲いに来る」

「……え？」

途端に絶望の色がリードの表情に現れた。魔法使いとはいえリードはただの学者なのだ。死の予感を感じてリードが立ち竦む。

鉄兵にしろ魔法使いでただの学生だが、それでもリードを守る力がある。リードの表情を見て改めて悟ったが、だからこそ鉄兵は戦

いの地に赴こうと思ったのだ。そこは得意な戦場ではない。でも、リードを守る力が自分にはある。

がたがたと震えだしたリードの手をそっと掴む。鉄兵も恐怖を感じているが、リードほどではない。だから自分は戦えるし、リードを守りたいと思った。

「リード。リードは僕が絶対に守る。僕が守れなくてもリードが大丈夫なように手は打ってある。だから、安心して」

震えるリードに鉄兵は優しく微笑んだ。内心はそれどころではなかったのだが、不思議と自然な演技が出来た。それでもリードの表情は緩まなかったが、震えは止まった。

木刀を持ち、リードに背を向け部屋を出る。

「鉄兵！」

と、部屋を出ようとした時、背後からリードの絶叫にも近い声で呼び止められた。

「無事に帰ってきてね。絶対だよ！」

やはり完全に不安は取り除けなかったようで、リードは再び不安そうな顔で震えていた。なので鉄兵はもう一つ演技をする事にした。

「あっはっは！　大丈夫。僕が規格外なのを忘れたの？」

指を立て、無詠唱で巨大な炎を一瞬出した。それを見てリードは少し安心したのか少しだけ表情が緩んだ。

「それじゃ行ってくる」

リードの緊張が解けたのを確認し、鉄兵は素早く家を出た。

家から出ると鉄兵は山賊の進入経路に当たるポイントに急ぎ足で駆けつけ、山賊たちが来るのを待った。やがて山賊が現れ、鉄兵が待ち構えていた事を確認すると馬を止めた。戦いの開始である。

山賊達は無言で鉄兵を警戒している。その沈黙を受けて、鉄兵は作戦を開始すべく口を開けた。

「リル、大きくなって」

鉄兵はリルに合図を送った。途端に指示通り山賊達の背後に回り込んでいたリルがフェンリル形態になり、山賊達を圧倒する。さすがに丘のような大きさのリルを見て山賊達は怯んだようである。それはそうだろう。もしかすると山賊は鉄兵を殺す手段を考え付いているかもしれない。でも、リルを倒す事ができるものなどこの中にはいないだろう。この時点でこの村とリードを守るという目標は達成された。

「そのガルムは僕の従者です。あなた方が逃げ出そうとしたり、村人に危害を加えようとしない限りは貴方方を襲う事はありませんので安心してください」

それがリルに指示した内容であった。逆にリルに指示した内容はあともう一つしかない。

鉄兵は身体が震えるのを感じながらも、作戦の第二段階に移行す

ることにした。

「僕は貴方達に決闘を申し込みます」

脅迫のような絶対的に逃げられない状況を作り、元騎士というプライドを揺さぶり1対1に持ち込み、誰も殺す事無く納得して縄についてもらう事。それが鉄兵の作戦だった。

もし、山賊を皆殺しにするという選択肢を鉄兵が選択できたなら自分の魔法でもリルに任せてもそちらの方が簡単に片がつくだろう。でも、鉄兵には自分が人を殺せると思わなかったし、リルにも人を殺して欲しくなかった。だから考えた末に出た作戦がこれだったのだ。

「先に言っておきます。僕の身体にあなた方の剣が届く事はまずありません。ですからこれは僕個人の能力を使うと言ってもフェアではありません」

鉄兵はそう言うと己が身を守る魔術を展開した。魔力コーティングによる分厚い物理防御の魔法。試してはいないが体内の精霊の説明を聞くに、例え今の本気のリルに踏み潰されたところに傷一つつかない強度だという。

続いて鉄兵は右手に持った木刀に魔力コーティングを施し、思い切り地面を叩いた。軽い擬似的な地震が起こり、地面に小さなクレーターができる。

「見ての通り、僕の力は常人を逸しています。ですから僕を力ずくで取り押さえようとしても無駄です。それを考慮のうえ、僕に剣が届かない事を試してみてください」

鉄兵の派手なパフォーマンスにも山賊達は動揺した様子はなかった。元騎士であり、現山賊である彼らの肝はそうとうずぶといようだ。

山賊のリーダーが仲間の一人に手を向け、鉄兵を指差した。手を向けられた山賊はつかつかと鉄兵の前に歩み寄り、剣を抜き放ち「ふんっ！」と一声あげて渾身の力で鉄兵に剣を振り下ろした。

ガキーンとまるで金属同士がぶつかったかのような音が鳴り、山賊の剣は鉄兵を切り付けてしっかりと振り下ろされた。だが、その剣の先には刀身が無く、少し遅れて折れた刀身が落ちてきて地面に突き刺さる。

「貴方方が生き残る道は唯の一つです。つまりは僕と決闘をし、僕を殺す事です。その場合のみ、ガルムには手を出さないように指示してあります。ただし、もし僕が死んだ場合はこの村を守るように指示してありますのでこの村の事はあきらめてください」

リルに指示した最後の命令。それはもし自分が死んだ時はこの村を守って欲しいという事だった。死ぬ気はないが、これでこの村は確実に安心である。リルにしても野生に帰るならいずれは討伐されてしまうかもしれないが、一つの村の守護者としてならば生きながらえていけるだろう。

後は相手の出方を待つだけである。

それが長かったのか、それとも一瞬の事かは緊張感から時間の感覚が麻痺した鉄兵にはわからなかった。

だがやがて頭目の指示も無く一人の男が前に出た。

「ヨハネ＝アウルス。私は貴方に決闘を申し込む！」

「香坂鉄兵。貴方の決闘を申し受ける！」

決闘の作法を鉄兵は知らなかったが、相手が名乗りをあげ、剣の平を向けて目前に構えるのを見て、鉄兵も同じように木刀を構えた。

そして決闘が始まった。

クィーン・オブ・バンデッド（後編の上）（後書き）

１２／１８：指摘いただいた誤字修正
多分リードなら楽勝くらいの魔力しか使ってないし、たからなんでなのかなって」
↓だから
宿の事など考えずに家事の後始末に没頭してしまったので
↓火事の後始末
しばらくリルをかまっていたら、突然リルが小首を傾げた。耳をひくひくさせ、やが一声吼えた。
↓やがて一声吼えた。

２０１１／２／２：指摘いただいた誤字修正
小中学生とひらすら剣道をしていた
↓小中学校とひらすら剣道をしていた

クィーン・オブ・バンデッド（後編の下）

決闘は始まった瞬間に勝負がついた。

技量の差は圧倒的で、鉄兵は何一つ反応する事ができずにヨハネの剣をその身に受けた。だがヨハネの剣は鉄兵に届かず、鉄兵の肉体の皮の上で刃を止めていた。

ヨハネは剣が届かなかったと悟るや、動かぬ鉄兵を見て元の位置に戻り、再び剣を構えた。

精霊の説明の通り、物理防御は完璧だ。相手の剣をその身に受けても自分は死なない。いくら切られても自分は死なない。そう、死にはしない。だがそれでも、打ち込まれる剣は怖く、鉄兵は心が折れそうになった。

なんとか心を立ち直らせ、剣を構えなおす。再び決闘が始まった。

やはり次も一瞬で勝負がつき、淡々とヨハネが元の位置に戻る。

次は萎縮している心を奮い立たせ、鉄兵は攻撃に転じた。触れるだけで一撃必殺になる刃を基本通りに振り下ろす。

しかし、その刃をヨハネは一歩横に動くだけで軽く避け、剣を振るった。やはりヨハネの剣が鉄兵に触れ、ヨハネが元の位置に戻る。

決闘が始まり、勝負が着き、ヨハネが元の位置に戻り剣を構える。何度と無くそれを繰り返すうちに、鉄兵は自分が山賊達の策略に乗ってしまっている事に気がついた。

鉄兵の狙いは、敵の心を折ることにある。圧倒的な力を見せつけ、勝てないと思い込ませ、1対1の戦いにおいて完膚なきまでに叩き潰して抵抗しないよう心を折る事が目的なのだ。

だが、この計画にはどうやら無理があったようだ。この作戦で心を折るには、山賊の心は強すぎたのだ。漫画に出てくるような下っ端山賊であったならこの作戦で良かったかもしれない。しかし敵は元騎士。さらには十数年の年月を山賊に身を落としてまで団結し、生き伸びてきた生え抜きである。あっという間に鉄兵の甘い考えは見透かされ、どうやら対応されてしまったようだ。

鉄兵の狙いに気がついた山賊は、それを逆に利用してきた。山賊も狙いを鉄兵と同じ、相手の心を折る事に定めたようだ。圧倒的な技量差を見せつけ、力だけでは勝てないと思い込ませて心を折り、自滅を待つ。そのために、まず倒れない戦い方をする事にしたのだろう。

ヨハネが決闘の決着が着く度に元の位置に戻って仕切り直しをするのは、恐らく騎士道精神とかフェアプレイの精神からとかではないだろう。勝負が決まった後もむきになって切り付けてくれたならば、鉄兵でもなんとか一度くらいは相手の身体に刃をかすらせる事ぐらい出来るはずだ。そして今の鉄兵の力なら掠っただけで戦闘不能にできるだろう。しかし、仕切りなおせば偶然は無くなる。さらには仕切り直す度に鉄兵は自分の未熟を思い知らされ、心にダメージを蓄積していく。元騎士を相手に決闘という形をとってしまった以上、もはや戦法を変えることは出来ないし、つまり鉄兵は圧倒的優位な状況で戦いに挑んだにも関わらず、考え一つで状況を操られ形勢を完全に五分以上にされてしまったのだ。

こうなったからには1対17の戦いだった。鉄兵が17人の山賊からなんとか一本を取るか、山賊が鉄兵の心を折るのが早いかの戦いである。技量以外では圧倒的に優位なはずなのに、絶望すら覚えてきた。だが、今鉄兵がそう思った事すらも、相手の考えのうちかも知れない。鉄兵は覚悟を決め、無心で敵に相対する事にした。

ヨハネとの決闘は果てしなく続いた。いくらやっても鉄兵の剣はヨハネに届かない。だが、可能性が0%でないならば、それはいつかは成功するという事を証明するように、何十と戦闘を重ねた結果、ようやく息が上がってきたヨハネの身体に木刀を掠らせる事に成功した。

それだけでヨハネは吹っ飛び、意識を失い戦闘不能となった。

「アンドレア＝オルキス。私は貴方に決闘を申し込む！」

ヨハネが倒れるやいなや、二番目の挑戦者が名乗りを上げた。

「香坂鉄兵。貴方の決闘を申し受ける！」

そしてまた無間地獄のような戦いが始まる。死にはしない。でもどうにもならない技量差に鉄兵は数秒に一度剣を叩きつけられてまたそれを繰り返していく。

それでも相手の体力は有限であり、こちらの体力は無限である。息の上がったアンドレアの一瞬の隙を突いて放った鉄兵の一撃がわずかにアンドレアに振れ、なんとかアンドレアを降す事に成功した。

「ゲハルト＝イリアム。私は貴方に決闘を申し込む！」

三人目との戦いが始まる。ゲハルトは先の二人と比べると少し技量が落ちるようで、そうなると剣筋が見えてきた。それでも十回近く剣を打ち込まれたが、鉄兵はゲハルトを下す事が出来た。

「アルマ＝ファイ。私は貴方に決闘を申し込む！」

休むまもなく四人目との戦いが始まる。精神的に疲れてきた鉄兵は動きが鈍くなってきたが、逆に動きに無駄が無くなってきた。それが功をそうしたのか、十数回の決闘の繰り返しの末になんとかアルマに勝利した。

「ルイ＝ベロー。私は貴方に決闘を申し込む！」

五人目との戦いが始まる。そこで鉄兵はふと新たな戦法を思いついた。敵は鉄兵の身体に直接切り付けなければ一本取ったと証明できないが、鉄兵はなにも相手の身体に直接攻撃を当てる必要はないのだ。攻撃してくる相手の武器にぶつければ、そこから力が伝わって武器か相手の身体が吹っ飛ぶはずである。考え付いた戦法を即座に実行する。攻めるのではなく敵の武器の動きを察してそこに一撃を叩き込む。狙いは見事に的中し、敵の武器は砕け、ルイの身体が吹っ飛んだ。

「シャルル＝ルーズ。私は貴方に決闘を申し込む！」

六人目との戦いが始まる。続いて同じように武器を狙おうとしたのだが、鉄兵の戦法は即座に対応されてしまった。狙い落とそうとした一撃はフェイントで、空振りしたところに剣を突きたてられた。その後も何度と無くフェイントに躍らせれて苦戦したが、何十という勝負の末になんとかシャルルを降すことに成功した。

「エンド＝オーガスタ。私は貴方に決闘を申し込む！」

七人目との戦いが始まる。今度は先ほどさんざん苦しめられたフェイントを、逆にこっちが試してみる事にした。今までが一直線な戦い方だったのが功をそうしたのか、敵は見事に引っかかり、もろに一撃を与える事に成功した。

加減の無い一撃を与えてしまったので慌てて鉄兵は彼の容態を確かめた。生きてはいるものの、衝撃で全身の骨が折れていて虫の息になっていた。即座に治療をしなければ命が危ういので、決闘の一時中断を山賊のリーダーに申し込むと許可された。急いで治癒の魔法でエンドを癒すとなんとか間に合ったようだった。

「ロラン＝アイズ。私は貴方に決闘を申し込む！」

八人目との戦いが始まる。今度もフェイントを試してみたが、鈍りまくっていた鉄兵の剣術の腕前では簡単に癖を読まれてしまったようで、もはやフェイントは通用しなかった。それでもやや敵の動きを鈍らす事が出来たので、数回程度の勝負で鉄兵はロランの肉体に木刀を掠らせる事に成功した。

「フランツ＝ビート。私は貴方に決闘を申し込む！」

九人目との戦いが始まる。フェイントを混ぜて敵の動きを鈍らせる事に成功した鉄兵は、少し余裕が出来たのか、ふと思いついた事があった。どうも剣道の時の癖でフットワークを小回りにしてしまっていたのだが、そこにこだわる必要が今は無い事に気がついたのだ。間合いを取り、強化された脚力で縦横無尽に動き回り敵を撹乱する。鉄兵の余りの速さに目がついていけず、ふと隙を見せた瞬間を狙い突進し、体当たりを食らわせて吹っ飛ばす。突進を受けたフ

ランツは車にでも轢かれたかのように吹っ飛び、意識を失った。

「ジョセフ＝トインビー。私は貴方に決闘を申し込む！」

「グリエル＝マルコー。私は貴方に決闘を申し込む！」

十人目、十一人目との戦いは楽勝であった。敵はまだ鉄兵のフットワークに対応できずにいたので、なんなく一撃を与え、ジョセフとグリエルを降す事に成功した。

「ウィリアム＝ドラクロワ。私は貴方に決闘を申し込む！」

十二人目との戦いが始まる。今度もフットワークを使って敵を翻弄しようとしたのだが、どうしても直線的になってしまう鉄兵の動きはもはや読まれてしまったようだった。それでも他に手はないので、鉄兵は全力でフットワークを使ったが、いくら動き回っても敵は隙を見せない。そこでふと思いついてフットワークにもフェイントを織り交ぜて見たら敵に一瞬の隙が生まれた。その隙を逃さず全力で突っ込み、なんとかウィリアムを吹っ飛ばす事に成功した。

「サミュエル＝シモンズ。私は貴方に決闘を申し込む！」

十三人目との戦いが始まる。今度もフットワークとフェイントを使用して一気に勝負を決めようかと思ったのだが、早くも対応されてしまい、敵に隙は生まれなかった。敵は至極冷静で、フットワークを最大限に使用して動き回っているにも拘らず、少しでも隙を見せたら剣を突きたてられてしまう。連続して動き回るのは肉体的にも精神的にも苦痛であり、あまりの苛立ちに魔法で皆殺しにしてしまおうかという考えがふっと咄嗟に浮かんでしまったが、それをやらかしたらこれまでの苦労が水の泡、敵にも自分にも負けた事にな

る。垂れ流しのアドレナリンを抑えるべく、魔法の代わりに鬱憤晴らしの意味も込めて思い切り蹴りを入れたら、今まで武器でしか攻撃していなかったため想定外だったのか、意外な事にもろに敵は蹴りを喰らい吹っ飛んだ。

今度も手加減無しの一撃だったので、生きてはいたもののサミュエルの状態は酷いものだった。山賊のリーダーの了解を取り、決闘を一時中断して慌ててサミュエルを癒す。

「オリバー＝ヒューズ。私は貴方に決闘を申し込む！」

十四人目との戦いが始まる。肉体的にも疲れ果ててきた鉄兵は、もはや切られるという事を考えない事にした。死なないとはいえ、剣を打ち込まれるという恐怖は並大抵のものではないが、それによる筋肉の萎縮が肉体的にも精神的にも疲労させる。なのでもはや開き直り、休憩の意味も込めて武器だけ構えて棒立ちになり、しばらく相手の動きを見る事に徹する事にする。そうなると不思議なもので、敵の美しい動きが良く見えるようになってきた。十数度ほど敵の動きを見据えた鉄兵は、次第に自然と身体が動き、ふとした敵の攻撃の準備動作の癖に反応し、頭になぞった攻撃の起動の要となる部分に木刀を突っ込んだ。起動の要点を抑えられ、動けなくなったオリバーは、剣を地面に突き刺し負けを認めた。

「ダンテス＝ラッセル。私は貴方に決闘を申し込む！」

十五人目との戦いが始まる。オリバーとの戦いで何かコツを掴んだ鉄兵は、敵の身体全体の動きに注目する事にした。強化された動体視力はダンテスの筋肉の動きの一つ一つを詳細に捉える。技を繰り出す時の身体の動作を見て盗んだ鉄兵は。とにかくそれを真似てみる。付け焼刃の技は何一つとして通用しなかったが、それでも良

くなった鉄兵の動きに反射的に反応してか、ダンテスは鉄兵の攻撃を避けるのではなく剣で受け止めてしまった。ダンテスの剣が砕け、砕けた大きな刃の破片がダンテスの顔を直撃した。幸いな事に致命傷にはならなかったが、衝撃で倒れたダンテスの顔から念動魔法で破片を取り除き、跡が残らぬよう治療する。

「マーティン＝ヒューリー。私は貴方に決闘を申し込む！」

十六人目との戦いが始まる。相手はこの戦いが始まる前に鉄兵の物理防御を試した山賊だった。剣は折れていたためにオリバーが地面に突き刺した剣を引き抜き、構えている。

今までの十五人ですら鉄兵の剣道の師匠を超えていると思えるような実力の持ち主だったが、この男はさらに別格だった。動作には無駄が無く、剣技は荒々しくも美しく、全てが必殺の威力を秘めている。繰り出してくる技には何一つ同じものが無く、鉄兵はひたすらその動きを見て学習し、真似ていった。

やがては一撃を与えられなくても、ついには敵の動きを先読みして攻撃を受け流せるほどまでにはなった。受け流すついでに力を込めて体勢を崩そうとしたのだが、敵は巧みにその力を受け流し、隙を出してはくれない。

傍から見たらほぼ互角、しかし実際には敵は『受け』を封じられているために実力差は圧倒的な勝負が延々と続く。そして勝負はまさに延々と続く戦闘の時間によって決着が着いた。

鉄兵の体力は無限だが、常人はそれほど長時間、激しい戦闘を続ける事など出来ないのだ。

積み重なる疲労と足りなくなる酸素。さらには掠るだけで勝負が決まってしまうという緊張感のためか、とうとうマーティンの動きに致命的な隙が生じた。

すかさず鉄兵はそこに木刀を叩き込む。それでも敵は流石なもので、致命的な隙を突いたというのに防御を間に合わせる。さらには上手く力を逸らし、鉄兵の木刀を払い落としたが、逸らし切れなかった力が剣の耐久度を越えてボキリと根元から折れた。

「……負けました」

刀身の無い剣を見て、マーティンは溜息を吐きつつ負けを認めた。

「申し訳ございません、お嬢様」

「いいさ。よくやったよ」

とぼとぼと下がり、膝をついて謝罪の言葉を告げるマーティンの肩を軽く叩き、いよいよ頭目が鉄兵の前に出てきた。

「どうやら心を摘むつもりが貴様を鍛え上げてしまったようだね」

苦笑交じりに頭目はそう呟くと、顔と身体を隠していたフードとマントを取り払った。

その頭目の正体を見て、鉄兵はこんな状況にも拘らず、不覚にも和んでしまった。

頭目の正体は、可愛らしい少女であった。確かに体つきはがっしりとしていて豊満で、短めの明るい茶毛に褐色の肌はいかにも活発

そうで山賊には相応しいが、可愛らしい容姿は右頬に薄く長い傷跡がある以外は山賊というには相応しくない。

それよりもなによりも鉄兵が注目し、思わず和んでしまったのは、少女の耳に付いていたのがネコ耳だったからだ。

褐色の肌とは対照的な真っ白なネコ型の耳。恐らくこれが半獣人というものなのだろう。だが、こんな緊迫した場面でまさかそんなものをお目にかかるとは思わず、そのギャップに緊張感が吹き飛んだ。さらには今はリルを飼っているので犬派だが、鉄兵は元々猫派である。なのでネコ耳を見て思わず和んでしまい、ちょっと気持ち悪く口元が緩んでしまった。

「俺に惚れたか？　なら見逃してくれればやらしてやるぜ」

口元が緩んだ鉄兵を見て勘違いしたのか、意地悪そうに少女が言う。シナを作ったりしているが、からかうようなその表情を見る限り、馬鹿にしているのだろう。

「そっちこそ、女性とは戦いたくないんだけど、出来れば降参してくれないかな？」

馬鹿にされたので鉄兵は少しカチンと来て、何を勘違いをしているやらと言わんばかりに軽く溜息を吐いてジト目でそんな事を言ってみた。

「見縊るなよ。俺は女を捨てている」

想像以上に少女は激昂し、両腰に挿していた剣を同時に抜き去った。少女は細剣の二刀流のようである。

「そっか。なら遠慮は無用だな」

鉄兵も木刀を握り締め、互いに剣を目前に構える。

「アルテナ＝ヘル・ガイナ。私は貴方に決闘を申し込む！」

「香坂鉄兵。貴方の決闘を申し受ける！」

剣を構えた瞬間、先ほどまでの浮ついた気持ちなど一瞬で吹き飛んだ。目前で構えるアルテナの脅威度は、アリスと互角にも思えるほどのものだった。

アルテナが攻めてきた。

二本の細剣を巧みに操り、まさに猫のようなしなやかな動きで鉄兵を急き立てる。今までの相手とはまるで別系統な剣術に鉄兵は翻弄され、あっという間に首元を掻き切られた。

今までの相手と同じように元の位置に戻って仕切り直すのかと思いきや、アルテナの対応は違っていた。ぼけっとしていた鉄兵の腹を思い切り蹴っ飛ばし、油断していた鉄兵を吹き飛ばす。そのまま細剣を捨てて馬乗りになるや、腰に挿していたナイフを抜いて鉄兵の首を掻ききった。

無論、物理防御が聞いている鉄兵は傷一つ無い。だが、それは今までで一番リアルな死に様を鉄兵に想像させた。

「……この！」

鉄兵は激情に任せて木刀の柄で殴りかかった。アルテナはひらりと綺麗にバク転してナイフを捨てて地面に着地する。

鉄兵は立ち上がった勢いで少女に突進した。怒りに任せた力任せの攻撃が無論アルテナに効くはずも無く、アルテナはひらりと軽くかわして鉄兵の後ろに回りこみ、器用に右腕を首に回して蛇のように首を締め上げた。アルテナが力を入れた瞬間に首に力を入れたから良かったが、もし遅れていたら首の骨を折られていたかもしれない。

首絞めが効かぬと見るや、アルテナは思い切り良く鉄兵から離れ、地面のナイフを拾って鉄兵の顔面めがけて投げつけた。視界をナイフに集中させられた鉄兵が慌ててナイフを叩き落すと、その後ろにはいつの間に拾い上げたのか、鉄兵の目を狙って細剣を突きつけられた。無論、物理防御に守られた鉄兵には刃は届かない。だが、まさに文字通り目の前に刺し出された細剣は恐怖そのもので、そのまま頭蓋骨まで突き刺されて死ぬリアルな死の想像を鉄兵にさせた。

アルテナが離れ、再び軽業のような徹底的に致命的な攻撃を繰り広げる。何度も繰り返される真に迫った死の想像を掻き立てられるアルテナの攻撃は鉄兵の精神をこれまで与えられたダメージと同等以上に削っていった。

「チッ！」

だが、思わず口走ったのだろう。アルテナの小さな舌打ちが鉄兵を冷静にさせた。落ち着いてくれれば状況が見えてくる。

アルテナは焦っていた。それはそうだろう。いくらアルテナが攻撃したところで鉄兵が死ぬ事はまずない。そしてアルテナが倒れれ

ばこれで勝負は終わりなのだ。その後は部下ともども、無残な縛り首が待っている。だからこそ徹底的に鉄兵をいたぶり、一刻も早く心を折らせようとしているのだが、そう考えれば対処方法も思い浮かんだ

アルテナは心理効果が大きいように死角から急所を狙ってくる。そこを突いて、鉄兵は冷静にアルテナの細剣を打ち払った。

さすがは山賊の頭目であり、細剣に木刀が当たる直前にアルテナは細剣から手を離し、致命傷を免れた。

しかし、種が分かれば負ける気がしない。それが鉄兵の目にも表れていたのか、アルテナは鉄兵を見て最早これまでかと憂いの表情を映し、されど気力を振り絞り鬼のような表情を浮かべ、気合の言葉とともに細剣一本で鉄兵に切りかかってきた。

卓越した技術があっても投げやりになれば意味が無い。冷静なアルテナの一撃だったら鉄兵には受けられなかったかもしれなかったが、今の無駄な力が入りまくったアルテナの攻撃は、鉄兵には手に取るようにその軌道が見えた。

鉄兵は木刀をしっかりと握り、冷静にアルテナの攻撃を叩き落とした。やはりアルテナは咄嗟に細剣から手を離したが、少しタイミングが遅かったのか、剣風に引っ張られるように地面に叩き落された。

「お嬢様！」

地に伏したアルテナにマーティンが駆け寄る。鉄兵もそこに歩み寄ってアルテナの具合を見た。見た感じではたいした怪我は無かっ

たが、頭を打ったのか、額から血を流して意識を失っている。

鉄兵がアルテナに治癒の魔法をかけると、アルテナはすぐに意識を回復した。

「俺の勝ち、でいいよな。満足してないならまだ相手になるが」

「いや、俺達の負けだ。これでも元騎士だ。決闘に負けたなら潔く負けを認める」

アルテナが気丈に言い放つ。後に待つ運命を思えば恐怖も感じているのだろうが、その表情は誇り高いものだった。そんなアルテナを感極まったようにマーティンがそっと抱きしめる。

「そっか」

長い長い戦いが終わった。そう悟った鉄兵は最後の気力が抜けていくのを感じ、そのまま意識を失った。

クィーン・オブ・バンデッド（後編の下）（後書き）

９／２０：御指摘いただいた部分を修正
「鉄兵には火を見るより明らかにその軌道が見えた」→「鉄兵には手に取るようにその軌道が見えた」

１０／２４：ご指摘いただいた誤字修正
「いくらやっても鉄兵の件はヨハネに届かない。」→「いくらやっても鉄兵の剣はヨハネに届かない。」（件→剣）

１２／１８：指摘いただいた誤字修正
怒りに任せた力任せの攻撃が無論アルテナに聞くはずも無く、
→効くはずも無く、

２０１１／９／１１：ご指摘いただいた誤字修正。
フランツは車にでも引かれたかのように
→轢かれた

戦の始末

不意に目が覚めてむくっと身体を起こし、寝ぼけ眼で横を見ると、そこにはテーブルに向かって座るシロの後姿が見えた。

「おう、起きたか」

「あれ、シロ？　おはよう……」

振り返るシロを鉄兵はやや寝ぼけながら首を傾げた。確か山賊のアジトに乗り込みに行ったはずだがいつの間に帰って来たのだろう？

そんな事を考えながらぼけーっと見ていたら、シロはなぜか苦笑気味に笑ってなにやら作業をし始めた。気になったのでベッドから降りてテーブル越しにシロの正面に回りこむと、シロはいつぞやのように茶を立てていた。

しばし茶筅を回して満足がいったのか、できあがったそれをシロが無言で差し出す。とりあえず椅子に座って受け取って飲んでみると、それはいつぞやのような紅茶ではなく、ちゃんとした緑茶だった。少し苦かったが、懐かしい味に心が和む。

「……なに？」

仄かに幸せな気分になりながらうっとりと緑茶を飲んでいたら、なにやら茶を飲む自分を見て、シロがニヤニヤと意地の悪そうな顔で笑っている。

「随分と柄に無い事をやらかしたようだな」

……思い出してしまった。途端にお茶がまずくなった気がする。

「お前さんはそういうタイプじゃないと思ってたんだがなぁ」

少し真面目な声がした。気分が沈んでしまって顔をうつむけたためシロの表情は分からないが、なんだろう、心配されているというか、いたわるような声だった。

「もう懲りた。もう絶対にやらない……」

うつむきながら鉄兵は声を振り絞って答えた。あれはもう、なんというか鉄兵的には自分の人生に残るような汚点だったのだ。

さて鉄兵を弁護するようだが、少し彼の心情を考えて欲しい。突然異世界に飛ばされて心細いと思った時には近くにシロという心強い旅慣れた仲間がいた。直後には王女様という元の世界ではお目にかかれないような高貴な人物と交友を深め、さらにはリルという可愛らしくも最強のペットを従えた。なぜか原因不明に肉体能力は強化されていたし、むさいイスマイルには神に等しい魔力があると言われ、リードによってチートといえるような魔法の才能を開花させ、鉄兵は自分ではそんなつもりは無かったのに、調子に乗ってしまっていたのだ。

鉄兵の魔法使いとしての能力も肉体能力も間違いなくこの世界では最強クラスのものだろう。でも、それは自分が努力して手に入れた技術ではなく、いわば借り物の力なのだ。それなのにそれを自分の力と勘違いし、自分は何でも出来ると思ってしまった。

いくら小中学校と剣道少年で初段の段位があったところで、文字

通りその道で何十年と生きてきた人間に技術で勝てるはずが無い。なのに誰もが納得できる最高の形で解決したいという傲慢な考えをして自分に制限を置いて考えた結果が例の決闘騒ぎだ。蓋を開けてみればあの悪夢のような17連戦。おまけにそんな酷い目にあったのに傷どころか疲労も筋肉痛もないのだから、鉄兵的にはまさに悪い夢でも見た気分であった。いや、多分今後、時々ほんとうに夢に出てきてうなされるだろう。

大学も三回生だというのにまさに厨二的な行動に、思い返すだけで嫌気が差す。けど次に同じ事があったらどうするだろうと考えた結果、多分同じ事をするんだろうなと思うと我が事ながらなかなか救いがたかった。けど、無論の事ながら冷静に振り返ると肉体強化やアホみたいな魔力が無ければ違う作戦を考えたはずである。自分は戦闘職ではなく技術者なのだ。ならばもうちょっとこんな脳筋っぽい作戦よりましな作戦を考えるべきだったろう。

うな垂れて、自責の念に駆られつつ次回の対策に没頭して、ついにはテーブルに突っ伏した鉄兵の姿を見て、シロはのんびりと煙管を取り出すと一服つけ始めた。

「ま、その甲斐はあったようだけどな」

煙で輪っかを作りつつ、そんな事をシロはぼそっと呟いたのだが、羞恥心に身を焦がす鉄兵の耳には届いていなかった。

「あれだ。とりあえずリル公をどうにかした方が良いと思うぜ？」

ひとしきり鉄兵の狂態を楽しんだシロはひょいと窓の外を指差した。なにか嫌な予感を感じた鉄兵がぴくっとその言葉に反応し、恐る恐る立ち上がって窓から外を見る。残念ながら（？）この世界に

来てから鉄兵の嫌な予感が外れた事は無い。今回も御多分に漏れずなかなか壮大な光景がそこには広がっていた。簡単に言えばフェンリル形態のリルが盛大にあくびしながら耳を掻いていたのだ。

「……」

思わず鉄兵は絶句した。真昼の太陽の下で見るフェンリル形態のリルは中々迫力があった。全長１００ｍと言われて１００ｍ走の距離を思い浮かべると大した事がなさそうに思えるだろうが、建物で言えば３３階建てのビル。スポーツが好きな人なら野球場やサッカー場、学生ならば２００ｍトラックの校庭をまるまる占拠している狼の姿を想像して頂ければなんとなくその大きさを想像していただけると思える。そんな大きさの狼があくびしながら耳を掻いているのだ。正直なところの鉄兵の感覚としては最初に思ったのが『可愛い』だったのだが、一般の人にとってはそんなわけにも行かないだろう。

「……リル！」

我に返った鉄兵が思わず叫ぶと、リルは敏感に反応してシュルシュルと小さくなり始めた。その姿を見てほっとしつつ、鉄兵は慌てて部屋を出て行った。

一人部屋に残ったシロはやれやれといわんばかりに苦笑しつつ、鉄兵が飲み残した緑茶を一口飲んでうんと頷くと、ぷかぷかと煙管をふかし続けた。

「リル！」

『あるじ！　あるじ！』

家から出ると、早くも駆け寄ってきていた子狼姿のリルが鉄兵の胸の中に飛び込んだ。リルは甘えるように鉄兵の胸に擦り寄って匂いを嗅いでいたが、やがて鉄兵の胸の中ですやすやと穏やかな寝息を立て始めてしまった。

考えてみればあの決闘騒ぎの後で鉄兵は気を失ってしまったが、いくら勝負に負けたとはいえ、山賊が素直に大人しくしているとは限らなかったのだ。あの場には山賊と鉄兵。それにリルしかおらず、リルがいなかったとすれば気を失った自分がどうなったか分からない。だからきっとリルは一晩中フェンリル形態のままにらみをきかしていたのだろう。まだ子供だというのにそんな健気で忠実なリルの行動に、鉄兵は無茶なお願いをしてしまったなと多少罪悪感を感じつつも誇らしくて、胸の中で眠るリルの毛をそっと優しく撫でた。

「鉄兵！」

その場に座ってしばしリルを撫でつつ和んでいたら、恐らくリルが小さくなった事で鉄兵が起きた事に気づいたのだろうリードが息せき切って走ってきた。どうやら走る事には慣れていないらしく、やがて鉄兵の前までたどり着くと、膝に手をついて荒く息を整え始める。

「おはよう、ししょ……う？」

そんなリードに鉄兵はのんびりと挨拶をしようとしたのだが、不意に顔を上げたリードの表情を見て鉄兵は戸惑いを隠せずに語尾が疑問形になってしまった。明らかにリードは怒っているようで、ま

さに怒れる小動物という題が似合いそうな表情で口元をへの字に曲げている。可愛らしい少女であるリードが怒り顔を見せたところで怖いどころか微笑ましくしかないのだが、それにしても怒られるような事はしていないはずだがどういうことだろう？

不意に手を上げたリードが、しっかりと腰に力を溜めて振り下ろす。開いた状態で振り下ろされた掌はこのままだと頬へ強烈にミートするだろう。俗に言うビンタという奴を食らおうとしているわけだが、昨日の戦闘の後遺症か、動体視力が強化されている鉄兵にはその動きが良く見えてしまう。避けると後が怖そうなのであえて食らおうと思ったのだが、ふと寝ているリルを起こしたくないなとか鉄兵が思ってしまったところ、その結果はリードにとって非常によろしくないものとなった。

「いっっっったぁぁぁぃ！！！！」

鮮やかな平手を放ったリードは、しかし逆に手を腫らして悲鳴を上げた。それはそうだろう、リルを起こしたくなかった鉄兵は無意識に絶対防御の魔力コーティングを展開してしまったのだ。衝撃すら通さない魔力コーティング時の鉄兵を叩くと言う事は、鉄の壁にしたたかに平手を打ち付けるようなものだ。それが会心の一撃ともいえる見事なものだったのだから、リードには逆に痛恨の一撃となって返ってきた訳だ。

「こら鉄兵！　なんで防御するのよ！」

「あー……すいません。けどリルが寝てるから今は勘弁して。後でちゃんとくらいますから」

手を痛そうにぶんぶん振りながらリードが怒り狂う。その様子は

あらぶるリス辺りの形をもったオーラでも背に浮かせそうな勢いだ。なんとも理不尽なリードの言い様だったが、とにかく謝りつつも腕の中のリルを視線で指すと、リードは可愛らしいリルの寝姿に「うっ」と怯み、頬を膨らませた後ではぁっと溜息を吐いた。

「後で三倍にするからね……けど、わかった。そんな物理防御結界が張れるからあんな無茶したのね」

どうやらこの魔力コーティングによる防御魔法は物理防御結界という立派な名前のある魔法らしい。それはともかく、リードの怒っている原因がなんとなく分かった。

「えっと……怒ってるのはその事ですか？」

「そうです」

ちょっとそこに座りなさいとでも言わんばかりにリードが腕を組んで胸を張り、鉄兵を睨みつける。どうやら説教モードに移行したようだ。もう座っているので座れないが、思わず鉄兵は背を正す。

「鉄兵は魔術師でしょ？　それなのになんで魔法を使って戦わないの！

山賊が来て鉄兵が出てった時は心配だったけど、なんだかんだで鉄兵は化け物だから大丈夫かなーと思って楽観してたのに。

なのに様子を見に行ったら山賊は結構ぴんぴんしてるのに鉄兵は倒れて寝せられてたし、リルちゃんはものすごくおっきくって山賊なんて一捻りできそうなのにそんな状況だっていうのにじっと山賊を見張ってるだけだし、状況がぜんっぜん分からないから勇気を振り絞って出て行ってあの山賊さん達に聞いたら、魔法使わないで一騎打ちの決闘なんてしたっていうじゃない！

鉄兵は戦士じゃなくて魔術師でしょ。だから決闘だとしても魔法は使って良いの！
それなのに魔法を使わないであんなぼろぼろになるなんてバカじゃないの！
っていうか騎士でもないのに決闘なんてバカじゃないの！
もっとスマートに戦いなさいよ！」

魔術師でも無く技術者なんだけどなぁとか鉄兵は思ったが、言うと今度は本物の雷を落としてきそうなので黙っておく。それにしてもなんとも酷い言われようである。一言言われるたびに古傷が抉られるようだ。なおもリードは雷を落としそうな気配をしていたが、これ以上は耐えられそうになかったので鉄兵は慌ててリードの説教に口を挟むことにした。

「まあまあ！　魔法を使わなかった事には事情がありまして……」

「どんな事情？」

「いや、一応肉体強化の魔法は使ったんです。でも俺は人を殺す魔法なんて使う根性が無いし、無傷で対象を捕縛する魔法とか知らなかったもので無茶をしてしまいました。今度教えてくれませんか？」

「お願いします。師匠！」と調子良く熱心に頼み込むと、リードは満更でもないように怒りを解いたようだった。

「そうね。考えてみればここのところ鉄兵には聞くばかりで何にも教えてなかったし、たまには師匠っぽい事もしないとね。……あれ、って事は魔法を使わなかったのはわたしのせい？」

途端にリードはばつの悪そうな顔をしたが、その件についてはお

互い様なので軽く流す事にする。それよりもリードの怒りが落ち着いたところで気になることが頭をもたげてきたのだが、そういや山賊はその後どうなっているのだろう？　リルが見張っていたから逃げられはしてないだろうが、そのままあの場所にいるのだろうか？

「ところで師匠。あの山賊はどうしたの？」

「山賊？　あぁ、あの人達ならアリス様に連れられて昨日の火事にあったとこの家を建て直させてるみたい。わたしはリルちゃんとずっと一緒にいたからあんまり知らないけど」

自分のしでかした事に対する始末は、本人につけさせようというわけなのだろう。なるほどアリスならそうするだろうと鉄兵は思った。それにしてもリードはずっとリルと一緒にいたという事だが、昨夜からずっとあそこにいたのだろうか？　アリス達が戻ってくるまでリルはずっと山賊を見張っていたのだろうが、リードはそんなリルの健気な姿を見て自分だけベットでのんびり出来る性格じゃないのはここ数日でわかっている。眠そうな気配は無いからきっとリルにもたれつつ寝てたりしたのだろうが、そこには山賊がいたはずで、なかなか根性が座ってるなとか思った。

それはともかく、山賊達が大人しくしているかは気になるところであった。リルが元の大きさに戻ったのは今頃あっちでも気がついているだろう。今山賊達と一緒にいるのは恐らくアリスとイスマイル。それに兵士三人だろう。対して山賊達は17人いるわけで、悪い事態になっていなければいいのだが……

「様子を見に行ってみようかな」

「あ、あたしもいくー」

ヤバイ事態になってたらアレなのでリードを連れて行くのはどうかと思ったが、考えすぎだろうという事で、あまりそこを深く考えない事にした。自分はあまり物騒な事を考える性格じゃないと思っていたのに、どうもまだ昨夜の興奮が抜け切っていないようだ。

リルを起こさないように慎重に立ち上がってゆっくりと火事現場に向かう。現場に着くと、山賊達は大人しく従っているようで、見覚えのある顔がイスマイルに指示されて働いている。あれだけ数が揃えば作業もはかどっているようで、はやくも壁の半分以上が完成しているようだった。

「おや、これはテツ殿」

現場に近づくと鉄兵の姿に気がついたイスマイルが声をかけてきた。

「昨晩は見事な御活躍だったそうですな」

「その件については触れないで下さい……自分の行動を恥ずかしく思っているので」

いきなり痛い話題に触れられて、鉄兵はイスマイルの言動を遮るようにイスマイルに掌を向けた。伏せ目がちに言った言葉は我知らず尻すぼみに小さくなっていく。

「恥じる事など無い立派な行動だったと思いますが、鉄兵殿にとってはそうでもない……という事ですか？」

事実そういう事なので頷くと、イスマイルは思うところがあるよ

うで「ふむ」と腕を組んでしばし考えた後で説教を始めた。

「テツ殿。無礼を承知で言わせていただきますが、あなたは自分の取った行動を誇らねばなりません。この山賊達がなぜこのように従順に使役されているかといえば、それはテツ殿との名誉ある戦いに敗れたからこそ敗残兵としての責務を全うしているのです。それなのに、彼等を打ち破ったテツ殿自身がその事について恥じていると知れば、彼等はどう思うと思いますか？」

鉄兵にとって、イスマイルの話は思いがけない事だった。山賊を倒した事でもう自分の役目は果たし終えたように考えていたが、行動には責任がついてくる。例え軽率な考えからした行動でも、後始末までしっかりと責任を持って行わなければならないのは言われてみれば当然の事だ。

自分がなんであんな行動を取ったかを改めて考える。誰もが納得できる形で事を終わらせたいと考えて取った行動であり、それがいかに不本意な工程で達成したとしても、それで相手が納得して従っているという事ならば、自分には彼等を納得させた自分である義務があるのだ。

ふと視線を感じて振り返ると、たまたま近くにいた山賊の一人が会話が聞いていたようで、値踏みするかのように鉄兵の事を薄睨みしている。確かヨハネという最初に戦った山賊である。

鉄兵はしばし考えた後でヨハネに向かって真剣な顔で頷きかけた。するとヨハネはそれで良いと言わんばかりに軽く微笑みかけて作業に戻っていった。

「そうですね。浅はかな考えをしてしまい申し訳ありません」

神官という事もあり説教になれているのだろうか。鉄兵のまだまだ足りぬ思慮を正す説教をしてくれたイスマイルには自然と敬意を持って頭が下がった。

「いえ、御無礼の程をお許し下さい。テツ殿のお役に立てたのならば私にとっても光栄というものです」

あくまでも丁寧なイスマイルの言葉には大人の貫禄が感じられた。イスマイルの丁重さを見ていると、毎度の事ながら鉄兵は自分がまだまだ子供なんだなと思えてくる。色々見習うべきところは多そうだった

「イスマイル様の言う事はもっともだけど、鉄兵はやっぱり無茶しちゃ駄目だと思うよ。鉄兵は頭が良いくせに思慮が浅いところがあるからそのうち酷い目に会うと思うの」

と、良い話で終わろうとした会話の最後に突っ込みを入れてきたのはリードである。相も変わらず痛いところを真正面から言ってくれるが、自分でもそんな気がするので何も言い返せなかった。

「鉄兵か？　起きたのだな」

ちょうど会話が終わった頃に、小屋の中の作業を見ていたらしいアリスが作りかけの玄関から出てきた。こちらにすぐに気がついたようで駆け寄ってくる。

「アリス……ごめん、心配かけた？」

いつも冷静なアリスが珍しく慌てたように駆け寄ってくるのを見

て、鉄兵は思わず自分から謝った。他の人と話してもそんな事は思わなかったのだが、なぜだろう?

ちなみにその横では「私の時と全然対応が違うんですけど、どう思います?」「ふむ、そうなのですか。それはそれは」等とリードとイスマイルが小声でやり取りしていたのだが、鉄兵の耳には届かなかった。

「そうだな。心配したぞ」

アリスは鉄兵の無事な姿を見て安心したように息を吐くと、やはり少し怒っているようで、口をへの字に曲げている。

「えっと……ごめんなさい。謝るから機嫌直して欲しいな」

なんともボキャブラリーに欠けた謝罪の言葉だが、どうにも言葉が出てこない。人間真剣になればなるほどそんなものである。

「ふむ。そうだな、心配をかけさせた罰として一つ説教をさせてもらおうか」

アリスは思惑有り気に微笑むと、すっと鉄兵に近づいた。事も無く他人の間合いに踏み込んでくるアリスに鉄兵はやや戸惑う。

「鉄兵、手を出してくれないか?」

どうにも逆らう気が起きず、言われるままにリルをリードに預け、両手を前に出す。すると、アリスは鉄兵の手をそっと両手で包んで握ってきた。昨日は自分が握ったわけだが、今日は逆の立場である。アリスの手は剣を握る手なので少しゴツゴツしていたが、それでも

思った以上に柔らかかった。

アリスが真剣な眼差しで鉄兵を見つめてくる。吸い込まれそうなほど深い真紅の瞳を向けられて、否応も無く鉄兵の鼓動が上がっていく。

「鉄兵は私に山賊の命より私が傷一つ無く戻ってきた方が嬉しいといってくれたが、それは私だって同じ気持ちだ。私からも改めて言うぞ。私は他人の命より鉄兵の命の方が大事だ。無茶な事をしないでくれ」

「え、あ……はい」

アリスの言葉は真剣そのもので、鉄兵は真摯なアリスの言葉にやや意識が朦朧としてきた。

なんだろう。これは愛の告白をされるよりもきっと恥ずかしい。自分も同じ事をしたんだと思うと鉄兵は消えてしまいたいほど恥ずかしくなってきたが、不思議と嫌ではなく、妙にこそばゆい感覚だった。

ちなみに二人の横ではイスマイルが「うむうむ」と頷き、他の山賊達やリードは口から砂でも吐きそうな表情をしていたが、無論二人はその事に気がついてはいなかった。

戦の始末（後書き）

９／２６：文章修正
「アリスは思惑有り気に微笑むと、すっと鉄兵に近づいた。間合いに踏み込んでくるアリスに鉄兵はやや戸惑う。」→「アリスは思惑有り気に微笑むと、すっと鉄兵に近づいた。事も無く他人の間合いに踏み込んでくるアリスに鉄兵はやや戸惑う。」
　他多数細かく文章修正（内容は変わってません）
　イスマイルの台詞の「鉄兵」を「テツ」に修正……

１０／２４：ご指摘いただいた誤字修正
「その件についてはお互い様なので軽く流す頃にする。」→「その件についてはお互い様なので軽く流す事にする。」（頃→事）

１２／１１：ご指摘いただいた誤字修正
「茶杓」→「茶筅」

１２／１８：指摘いただいた誤字修正
なんとも理不尽なリードの良い様だったが、
→言い様だったが、

責任者の憂鬱・その1

さて鉄兵はアリスに手を握られつつじっと見つめられているわけだが、残念なイケメンである鉄兵にはこのシチュエーションは初めてのものである。ゆえに羞恥心は溢れ出てくるものの、なんとも言えぬ朦朧とした心地良い気持ちになってしまってアリスのなすがままにされていたし、それに抗うどころかこの瞬間がずっと続けば良いのに等と恥ずかしい思考が過ぎったりもしていたのだが、しかし、とある事情により我に返らざるを得なかった。

何が鉄兵を我に返らせたのかと言えば、それは強烈な視線であった。どうにも昨日の戦闘の後遺症がここにも表れているようで、他にも視線はそこかしこから感じはしているのだが、その中の一つがじーっと粘つくような不躾な視線で、こんな状況にも拘らず、無視できそうにもなかったのだ。

それでもこのなんとも言えない奇妙に心地良い感覚をまだまだ味わいたいという気持ちはあったのだが、やはりどうしてもその粘っこい視線を無視することが出来ず、鉄兵は少しイラッっとしながら視線の先を見た。

するとそこには足をべったりと地につけて大股を開いて座り、両膝に肘をしっかりと乗せて、がっつりと両手で頬を支えながら興味津々にこちらを覗き込む少女の姿があった。ズボン姿だから良いものの、非常にはしたない格好である。さらにはポカーンとだらしなく口を開けてこちらをガン見しているその姿は、識者なら眉をしかめそうな姿だが、しかし少女の正体を考えるならそれは逆にある意味相応しい姿なのかもしれない。確かアルテナと名乗ったその少女の一般に通った名前は山賊姫であり、山賊の頭なのだから。

少女の方も鉄兵に見られた事で我に返ったようで、なんでこっちを見るんだ？　と言わんばかりに首を傾げ、むしろ続きをやれよと言わんばかりに目で訴えている。女は捨てたとか言っていたような気がするが、それでもやはり女の子なのだろう。恋の告白より恥ずかしいと思える先ほどの一幕に向ける好奇心の強さは、まさに猫のような強さのようだった。

そこでアリスもみんなの視線に気がついたのか、すっと鉄兵から手を離し、コホンッとわざとらしく咳払いをして遠くの空へと視線を逸らした。

それに合わせてこちらに注目していた他のみんなも目を逸らして作業に戻っていき、リードでさえ落ち着かない様子でなぜかわたわたとリルをあやす真似をして誤魔化していたというのに、アルテナだけはなんだ終わりなのか？　といわんばかりに鉄兵に目で訴えかけてきていた。

端的に言って、この手の類は最初が肝心だ。というのは部活に入っていた頃に培った鉄兵の教訓である。アルテナは半獣人であるからなのか、どうにも野性的な部分が強いようであるが、そういう人物には最初に格付けを行って上位に立たなければ後々舐められてしまうだろう。

というわけであまり得意ではないし、女を捨てているとは言っていたが女性に対してこういう事をするのもどうかとも思ったが、後々面倒になるのも嫌なので、鉄兵は内心で溜息を吐きつつもそれを実行に移すようにした。

猫に接するかの如く、ちらりと目を合わせた後にすぐ逸らし、直

線的ではなく楕円的に、たまに目を合わせながらアルテナに近づく。

注意を向けられながらも敵意を感じさせぬ鉄兵の行動に、アルテナは逆に動く事が出来ずに目の前まで鉄兵の侵入を許してしまう。

地にべたっと足を付けて半ば金縛り状態になっているアルテナに向けて、鉄兵は何気なくさりげなく腕を上げて拳を作り、ゆっくりと頭の上に動かし、最後に気合を入れる事無くあくまで冷静に、ただしそれなりに力を込めて尖らせた拳の先をアルテナの頭頂部に振るった。

ゴツンッ！　と結構良い音がした。

「イッテェ！　なにすんだよ」

まるで同じ行動をされた時の猫のように無防備に鉄兵の鉄拳を受けたアルテナは頭を抱えて吼えていたが、これは鉄兵なりの優しさである。女性に手を上げるのは趣味ではないのだが、どうしても体育会系に身を置いていた鉄兵としては必要な行動だと思えてしまうのだ。

さすがに山賊の頭目に対してこの行動はまずいかもしれないなーとか今更ながらに考えてチラッと辺りを見回すと、ちょうどアルテナのお付きの従者のような位置に控えている、確かマーティンという名前の山賊は、怒るどころか逆に少し感心したような顔つきをしていた。

なんとなくそんな気はしていたのだが、多分首領以下の山賊達はアルテナの行動に少し思うところがあったのだろう。そう考えると勇気も湧いてきたので鉄兵はあまり深く考えずに強気で押す事にし

た。

「人の事をジロジロ見るからだ。行儀が悪いと思わないのか？」

「おいおい、行儀が悪いも何も、俺は山賊なんだぜ？　そんなん思うわけ無いじゃんか」

頭を抱えて抗議するアルテナの姿はまさに威嚇する猫のようである。なんで俺が怒られてるんだと言わんばかりに耳をピンと立てて、今にも唸り声をあげそうな勢いだ。まあアルテナは確かに山賊なので言っている事はもっともなのだが、しかし昨日のあの山賊達の振る舞いを見る限り、どちらかと言えば今も彼らは騎士寄りに見える。ならば団長の娘であるアルテナはそれなりの教育を受けていそうなものだがどうなのだろう？

「親父さんは騎士団長だったんだろ？　そういう風に躾られなかったのか？」

「うっせぇなぁ。親父の事は言うなよ。おまえは俺の親父かってんだ」

やはり痛いところを突いた様で、アルテナは顔に苦味を走らせてプイッと横を向いてしまった。さてここで二三説教を受け入れさせれば格付け成功であるが、それにしても見た目通り猫っぽい性格をしているからもうちょい反撃があると鉄兵としては思っていたのだが、アルテナは予想以上に静かである。思わずふとそんな事を考えてしまって鉄兵は畳み掛けるタイミングを失ってしまったのだが、その結果、なぜアルテナが大人しいのか鉄兵は理解出来てしまった。

「……ありがとな」

しばし無言でいたら、アルテナは不貞腐れながらもそんな台詞を口にした。なんの事か分からずにクエスチョンマークを頭に浮かべつつただ立ち尽くしていたら、アルテナがこっちをチラッと見たので首を傾げてみせる。するとアルテナは心底苦みばしった表情をしつつもなぜか泣きそうな顔をして、がっつりと頭を下げて大声で次の言葉を放った。

「エンドとサミュエルを助けてくれてありがとうございました！」

アルテナの言葉は鉄兵の耳に届いた。しかしそれでも鉄兵は何の事かわからずにアルテナの動向を窺うしかなかった。やがて頭を上げたアルテナにどういう事なのか目線で尋ねると、アルテナはうんと頷いてその理由を説明してくれた。

「昨日の決闘でエンドとサミュエルはあんたの治療が無ければ死んでた。俺達は敵対してたんだぜ？　だから見捨てたって誰も文句を言わないのに、なのに治療してくれて、ほんとに感謝してるんだ」

そこでようやく思い出したが、エンドとサミュエルとは昨日の決闘で鉄兵の攻撃をもろに受けてしまい、瀕死の重傷を負ってしまった二人の事である。人を殺したいとも思わずむしろ生かしたいと思う鉄兵としては当然の行為だったのだが、アルテナにとっては違ったようだ。

思いがけない言葉に鉄兵が固まっていると、鉄兵が戸惑っているのを察してか、まるでその場をほぐす様にアルテナがあっけらかんと次の言葉を口にした。

「ま、どっちにしろ縛り首だけどな。それでも俺はあんたにゃ感謝

してるんだ。ありがとうな」

不意にアルテナの口から出た言葉に鉄兵は酷く動揺してしまった。

そうなのだ。鉄兵が取った行動の結果、いずれにせよアルテナ達は死ぬ事になる。今は目の前でこんなに親しげに話している人物が自分の行動の結果、数日の間に死ぬ事になるのだ。それは酷く非現実的で、実感が湧かないまでも気分の優れぬことであり、先ほどイスマイルにその行動に誇りを持つように諭されて決心したにも拘らず、心が揺らいでしまいそうになった。

「おいおい。俺達に引導を渡した奴がなんて面してるんだよ。おれたちゃそれなりに満足してるんだぜ。なあ？」

「はい」

アルテナの言葉に応えてマーティンがすっと前に出た。オールバックの茶髪の中にかなりの割合で白髪が混じっている渋い執事のようなその男は、鉄兵の心を解すように穏やかな目線を鉄兵に向け、語り始めた。

「山賊としての暮らしも悪くはありませんでしたが、皆やはり死に損ねたという感を持っておりました。山賊として死ぬのではなく、騎士として決闘の行く末の死刑を与えてくださり、感謝しているというのが昨日あの後話し合った結論です。惜しむらくはお嬢様をそれに巻き込んでしまう事ですが……」

「おいおいバカにするなよ、山賊が御法度の国で山賊やってるんだぜ。捕らえられたら死ぬ覚悟くらい俺だって持ってる」

強がってはいるものの、マーティン達年配の山賊と比べ、アルテナは少し怖いのだろう。首領として毅然とした態度を取っているが、茶化すようなその表情には固いものが残っている。

二人の会話は、まさに鉄兵が思い浮かべた理想の結果だ。だが、それを本人の口から言われると、天地が引っ繰り返ったような酷い違和感を感じて、鉄兵は強い吐き気を感じて押し黙ってしまった。

「おいにいちゃん。大丈夫か？」

「……なにがだ？　しっかり働けよ」

どうやら心情が表情に表れていたようで、自分が死の宣告をした当の相手に心配されてしまった。これ以上無様なところを見せられないと考えた鉄兵はなんとかそんな言葉だけを口にし、アルテナ達に背を向けた。

振り返ると、アリスもリードも心配そうな表情を見せていたが、それに応えられる余裕は今の鉄兵にはなかった。

リードからリルを受け取り、仮宿の村長宅へと足を進める。

家に入り、部屋の扉を開けると、そこにはまだシロが煙管をプカプカふかしていた。椅子を窓の前に移して窓縁によっかかり、窓の外に身を乗り出して煙の輪っかを吐き出している。

わざわざ声をかける気にならなかった鉄兵はリルをベットに横たえて、その横に自分も寝転がった。そっとリルの身体に触れて毛を撫でると、眠っていながらもリルは気持ち良さそうに首を伸ばす。いつもなら癒される寝顔なのに、今日に限ってはそんなリルの寝顔

も意識のうちに入らない。

「情が移っちまったのか？」

不意にシロの声が聞こえた。

多分、その通りなのだろう。

何も間違ってはいない。誰もが納得している理想の結果だ。だが、先ほどのアルテナの目を思い出すと、本当にこれで良かったのかと思ってしまう。

鉄兵はシロの言葉に応えられず、無言で眠るリルの毛を撫で続けた。

責任者の憂鬱・その１（後書き）

１２／１０：ご指摘いただいた誤字修正
「男を捨てている」→「女を捨てている」

責任者の憂鬱・その2

結局その日の鉄兵は起き上がれる気になれなくて、夜になるまでずっとベットの上で過ごしていた。昼間まで寝入っていた上に、さらにはベットの上でごろごろしているというのはなんだか駄目な人間の見本のような一日の過ごし方という気もしたが、事実駄目な人間だという気持ちに苛まれているのでどうしようもない。

どうにも割り切れない、今まで感じた事が無い類の感情が心の大半を占めていて、うまく思考がまとまらない。いや、自分がどうしたいのか、状況はどうなっているのか、本当のところは理解できている。でも、理想とする結果と現実の規則と倫理が噛み合わなくて、どう考えても導き出せない答えをなんとか解こうとして頭がショートしてしまっているようだ。

考えすぎて知恵熱でも出ているのか、身体がだるくて気分が悪い。無意識魔法の治癒能力は肉体的な不具合ならばすぐに治してくれるというのに、精神的な困憊はまるで役に立ってくれない。それでもずっと横たわりながらリルをなでていたらなんだかんだで癒されていたようで、気持ち良さそうに眠るリルの姿を見て心が和む程度には心に余裕が出てきていた。

そうやって精神的な引き篭もりから現実に戻ってみると、外はとっくに日が暮れていたようで、部屋の中は真っ暗だった。これまた無意識魔法で暗視能力がついていたため気がつかなかったが、かなりいい時間のようだ。

ふと無意識に時間を調べようとポケットを探って携帯を探している自分に気がつく。無論そんなものがあるわけは無い。この世界に

来てから半ば意識してそんな行動はしないようにしていたのだが、ここに来てとうとう無意識にそういう行動が出てしまったのは、我ながら弱い心だが、精神的に参ってしまって里心がついているのかも知れない。

元の世界には帰ろうと思えば帰れる。現状は、相容れない思考の違いに今更ながらに触れてみて、解決できない問題に逃避してしまいたい現実にさらされている状態だ。言わばホームシックのような感情も心の募ってきているし、このまま元の世界に帰ってしまうのも悪くは無いかもしれない。

でも、それでも『元の世界に帰るのか?』と問われれば、やっぱりまだこの世界にいたいと思う自分がいた。それがなぜかと問われれば、中々返答に困る問いであった。

それでも少し考えてみる。まず、アルテナ達山賊という言わば死刑囚を捕縛した自分として、あまり感じなくてもいい責任を果たすべきためであろうかと問われればそれは違うだろう。

アルテナ達には正直なところ情が移ってしまった。真実を見極めてより良い選択と行動をすべきだろうとは先ほどからも考えていた事だが、それがこちらの世界に残る決め手にはなろうはずも無い。

ならばシロやリードのような仲間と離れたくないという感情が原因なのかと問われれば、それは少し違うだろうとはっきりと言える。会えなくなるのは寂しいかもしれないが、だからといって死に別れるわけではない。むしろ寿命の関係から言って自分の方が先にくたばるだろう。とまあ生き死にはともかく永遠に会えないという状況は一種の死であり、死を悲しむのはもう故人と会って感情を交える事が出来ぬ自分を哀れむ故だというのはなかなか歪んだ元の世界の

友人の説ではあるものの、彼らと二度と会えなくなったとしても自分はそんなに悲しまないだろう。情が薄いのではなく、こんな短い期間しか一緒に過ごしていないというのに魂にでも刻まれたかのごとく、傍にいなくても身近に感じられる気がしているからだ。

ではアリスの姿を見れなくなるのが嫌なのかと問われれば、それは今のところきっと一番真実に近いのだろう。でも、それが決めてかといわれればやはり違う。

近頃アリスの姿を目で追い、行き過ぎているような気もする行動を共有するたびに感じる仄かな見知らぬ心地の良い感情は、まさに自分が残念だと言われている由縁を晴らす感情なのかもしれないが、もしそうなのだとしてもそれはまだまだ淡いものであり、自分の一生を決めるようなものには育っていない。

さてならばなぜ確固とした意思でまだこの世界にいたいのかと思うのかを自分の胸に聞いてみれば、理由は非常に単純であった。簡単に言えば、ただの知識欲である。前にも思った事ではあるが、この世界の全てが鉄兵にとって知識欲を動かされるものであった。元の世界とは物理法則が違うので、恐らくはこの世界の知識をいくら修めても無駄な知識にしかならないであろう。だが、無駄だから意味がないと興味を失うかといえばそれは別の問題なのだ。今現在、こうしてこの世界ではこの世界の法則に則って自分が見知らぬ知識と法則が動いている。自分の知らぬ事を知りたいと思う知識欲を鉄兵は抑え切れぬし抑える必要性も感じていないが故に、今自分はここでこうしてこの暗い部屋のベットの上に寝そべっているのだ。

その基準が変わる事もあるのかもしれない。ただ、今はそれだけのことであり、それで十分な条件であった。非常に利己的な感情だが、それゆえに自分らしいなとも鉄兵は思った。

さてさてそう考えながらもこう思う。この世界には時計は必要が無いかもしれない。でも現代人である鉄兵にはなんだかんだ言って時間という概念は重要なものなのだ。これまではこの世界に馴染もうと無意識的にそういう習慣を忘れていたが、今では少しは余裕が出てきている。ぶっちゃけた話チート的能力を手に入れたわけなのだし、時計くらいは作っても良いのではないだろうか？　まあ狂いの無い物を作るのはちょっと無理かもしれないが。

部屋の中を見回す。自分がベットに横たわる前にはシロが窓際の椅子に座っていたわけだが、自分が臥せっている間にいつのまにかシロは部屋を出て行ったようで部屋の中には誰もいなかった。

ベットから起き上がり窓に近づく。昼間シロが座って外を眺めていた椅子に座り外を見る。外は、本当に綺麗な世界が広がっていた。元の世界とは違いこちらの世界はほとんど照明というものが存在しない。故に夜空はどちらが天か分からぬ程に砂利のような密度で星空が広がっている。ここは元の世界とは違う。でも、多分元の世界と同じようにあの星空の一つ一つは太陽であり、何万年という年月を経て今この空に煌いているのだろう。この星空と同じような夜空が元の世界でも見れたとしたら自分は何を思っただろうか。

この世界でも月は一つであり、今日は満月であった。残念ながら月ではウサギが餅をついてはいなかったが、満月は怪しいほどに青白い光を発していて、のどかなこの村の風景をまばゆいばかりに照らしていた。遠くには一面の山の影が、近くにはまばらな木の家と野原が広がっており、その景色が妙に神秘的であり、静かに心を癒してくれている気がした。

それは畏怖を感じるほどの静寂の世界である。でも、その畏怖で

すら鉄兵にとっては心地よく、なんともいえない湧き立つような好奇心を呼び起こされるようなものであった。

さていわばリルによるアニマルセラピーと月光浴に似たムーンセラピーを受けてほとんど完全に復活した鉄兵の胸に再び昼間から鉄兵を苛む得も知れぬ感情が蘇ってきた。

とはいえ、心に整理がついた今の鉄兵は、その感情を冷静に対処ができるほどに脳内の処理が完了していた。

その感情は、簡単にまとめれば以下の事に収束される。つまり、間接的にとは言え人を殺めたくないというのが結論である。

無論、自分とは相容れ無い危険な人物を自分の手で捕まえ、死刑に処されるという話ならば鉄兵は何も感じないどころかむしろ誇らしさすら感じるだろう。だが、実際に捕えてみた山賊どもは自分の世界にすらほとんどいなかっただろうような気持ちの良い連中であったのである。

自分が好ましいと思う人物ならば犯罪者であろうとも助けたいと思うのは、道義から言えば外れているかもしれないが、しかし個人の意見としては決して間違ってはいないと思うというのが今日一日悩みに悩んで得た答えである。無論、鉄兵はアルテナ達の所業を知らないので、死刑になるのも仕方ないような犯罪を重ねてきた人物達であるかも知れないのだが、どうしてもそうは思えなかったのだ。

昨日は誰もが納得できる最高の形で解決したいと願い、それは叶った。

だが、今日は誰もが納得できるだけではなく、誰もが救われる道

は無いのかと探り、見つけたいと思っている。

それが達成できる器量が自分にあるのかは分からない。

でも、ただ手をこまねいて成り行きに任せるという道だけは完全に鉄兵の選択肢から消えている事だけは確かなことであった。

責任者の憂鬱・その3

さてとりあえずの結論が出た事で精神が完全に通常運転を再開し始めたようだった。正常に動き始めた精神が肉体の状態を素早く探査し、状況をかんがみて脳からある信号を送る事を決めたようである。その結果、なにが起きたかといえば、まあ腹が鳴ったのである。

考えてみれば昨日の夜から何も食べていない。腹が減るのも当然の事だった。さて今は何時くらいなのだろうか。精神的に引きこもっている間に夕飯が終わってしまっていなければ良いのだが。

腹が減ると考える事も即物的になる。先程までは神秘的な光で心を癒してくれてた月も、今ではそのまん丸い満月が大福のように見えてきた。よく買っていたデパート8時過ぎセールの大福が懐かしい。こちらの世界には砂糖はあったが小豆はあるのだろうか？　それともち米があるならば、大福作りに挑戦してみるというのは中々価値のある挑戦なのではないだろうか？

などと見事な月を見ながらそんな色気より食い気的な事をボケーっと考えていたら、不意に横のベットに眠っていたリルが目を覚ましたのが見えた。鼻を上にして耳をピクピクし、ピョンとベットから飛び降りてトコトコとドアの方に歩いていく。

ドアの前にちょこんと座ったリルを見て、外に出たいのかな？と思い、リルの元に歩いていってドアを開ける。すると、そこは意外な事に無人ではなく、人の姿があった。

「え？　あ……」

ドアの前にはリードが立っていた。多分急にドアが開いたので驚いたのだろう。ちょうどノックをするところだったのか、握ったこぶしを首筋辺りまであげた姿勢のまま、ビックリした表情で固まっている。

そのリードの足元にリルがちょこちょこ歩いていって擦り寄る。なるほど急に目を覚ましたのはリードが部屋の前に来たのを察知しての事だったらしい。と、考えすぎて疲れていた頭でややボケッと冷静にそんな風に状況を分析をしてみたわけだが、そこでリードの様子が少しおかしい事に気がついた。急にドアを開けて驚いたのはわかるが、もうドアを開けて１０秒くらい経っているのに、未だに片手をあげた状態で硬直しているのだ。

「……どうしたの？」

「へ？　あぁ、えーと……」

さらに様子を窺ってみたがリードの硬直が取れる気配は無い。なのでこちらから声をかけてみたらようやくリードは硬直状態から抜け出したようだった。

「えっと、ご飯だよ？」

なぜかリードが疑問系で首を傾げる。

「ご飯ですか？」

つられて鉄兵も首を傾げて答えてみる。どうも未だに様子がおかしいように見える。なぜかじーっとこちらの様子を観察しているみたいだし、いったいどうしたというのであろうか？

そう思ってこちらからも繁々とリードを観察してみたら、今度は急にリードの顔が怒り顔に変化した。どうやらじっと見すぎたようだ。

「うぉっと、ごめんなさい」

これはやばいと最早定番となった謝罪の言葉を反射的に口にする。女性を怒らせたらひたすら謝るのが鉄兵の行動方針ではあるが、どうも最近このパターンを多用しすぎている気がしてきた。こちらの世界に来る前までは、年に何度も会わない姉達くらいにしか使わなかった行動なのだが、こちらに来てからは終始女性が近くにいるのだから、まあ仕方ないといえば仕方が無い。にしても最近多すぎだし、急激にヘタレになってきたのもこれが原因のような気がする。どうにかした方がいい気がしてきた。

とまあそんな事を瞬時に考えながら謝ったわけなのだが、そうしたらリードの怒り顔が今度は一転して呆れ顔に変化した。よくまあこれだけコロコロと表情を変化させられるものだなとか思ったが、無論そんな事を言ったらまた怒られそうだから口には出さない。

「別に良いわよ……」

なぜだか酷く疲れた様子でリードが盛大に溜め息を漏らす。もしや自分が引きこもっている間になにか疲れるような出来事でもあったのだろうか？　様子が変だった事もあるし、少し気になるところである。

「なんか疲れてるみたいだけど、なんかあったの？」

というわけで素直に聞いてみたのだが、リードから返って来たのはさらなる呆れ顔だけであった。

「べーつーに。なんにもなかったわよ。さ、はやくご飯食べましょ。ね、リルちゃん」

良く分からないがなぜかリードの機嫌は治ったようだ。足元のリルを抱え上げ、気持ち良さそうにその頬に擦り寄っている。リルも『ご飯！　ご飯！』と嬉しそうにリードの頬に擦り寄り返しているのだが、言葉は通じてないはずなのになぜ通じているのだろう？

そんなどうでも良い事を考えていたらさっさとリードは歩き始めてしまったので慌ててその後に続く。食堂に着くと、ちょうど配膳が終わったところの様で、良い匂いが漂っていた。

何気なく面子を確認する。すると、そこには意外な人物が混じっていた。

「あれ、なんでおまえがここにいるんだ？」

村長さん一家にアリス、イスマイルがいるのはわかる。だが、そこになぜかアルテナが混ざっていたのだ。

「なんだよ。いちゃ悪いのかよ」

思わず本音が口から出てしまったのだが、アルテナはその言葉に酷く気分を害したようだった。途端にむすっとした表情になり、猫耳をピクピクさせている。

「いや、別に悪かないけどな」

また女性を怒らせて謝罪するというパターンに陥るのはごめんなので軽くスルーする。とはいえ犯罪者と一緒に食卓を囲むのは常識的に考えておかしいと思うのだが？

そんな疑問を抱きながらもちょうどアルテナの横の席が空いていたのでそこに座ると、その疑問にアルテナ本人が答えてくれた。

「まああんたの疑問も分かるけどな。どうやら俺は人質らしいぜ？」

あっけらかんとアルテナが言う。さばさばとした口調には似つかわしくない内容だが、人質とはどういうことだろう？　良く分からないので前の席に座るアリスに目だけでたずねると、アリスが疑問を察して説明してくれた。

「アルテナの山賊団は人数が多いからな。今日一日見て可能性は薄いと見たが、万一反抗されたら少し骨だ。なので人質を一人取って反抗を抑制する事にしたのだ」

なるほどと鉄兵は納得した。だが、実際のところはそれは建前で、その台詞の次に出た言葉が多分アリスの本音なのだろう。

「それに、年頃の女性を一人だけ他の兵士や山賊どもと一緒に野営させるのも問題だろう」

アルテナの配下である山賊達は無論のこと、アリスの兵士達がアルテナに手を出すとは思えないが、まあ確かにそんな配慮も必要なのだろう。だが、微かに頬を崩しているアリスの表情を見る限り、それ以上にアルテナに好意を抱いているからという気もする。犯罪者に対して甘すぎる気もするが、まあアリスも年頃の女性なので何

か思うところがあるのだろう。

何はともあれ全員のグラスにワインが注がれて食事が始まった。鉄兵は腹が減っていたのでアルテナと競争するように料理を貪っていたのだが、一通り食べて腹が落ち着いてきたところで、ようやくこの食事風景になにかかけているものがある事に気がついた。今更なのだが食卓にシロの姿が無いのである。

シロの事なので行動の予想はついたが一応「そういやシロは？」と聞いてみたら、その疑問にはイスマイルが答えてくれた。

「シロ殿でしたら村の酒場に赴いているようです。なにやら良い詩が出来たので披露しに行くといっておりました」

「良い詩ですか。なんだ、ここで聞かせてくれれば良いのに」

酒場に本職の流しをしに行ったのは予想内だったが、新作が出来ていたとは予想外だった。というかシロが作詞作曲もするシンガーソングライターだったのも予想外だったが。ともあれシロの歌唱力は折り紙つきなので聞いてみたいところだ。後でちょっと酒場を覗きに行ってみようかな？　などと間抜け面をさらしつつ少しボーっと考えていたら、ある意味そのおかげでもう一つの違和感に気がつけた。

非常に分かりにくいが、みんなの視線がちらちらとこちらに向いているのだ。というか分かりにくいとか言ったのだが、一度気がついたら案外あからさまにその傾向はあるようだった。特に目の前のアリスはそれを隠す気も無く自分に注目しているようで、じーっとこちらを見つめていたりした。

いったい何事なのだろうと戸惑いの目をアリスに向けてみたが、アリスはそれでもこちらをじーっと測るように見詰めていた。そんなに見つめられてしまうと照れてしまう。事実耐え切れずに照れてひるんだところでアリスの視線が優しいものに変わり、表情が綻んだ。

「どうやらもう大丈夫のようだな」

その言葉の意味を、一瞬鉄兵は理解できなかった。だがどういう事なのか視線でたずねようかと口を開けかけた寸前にその言葉の意味が理解できてしまい、鉄兵は先ほどアリスに見つめられた時以上に恥ずかしくなってしまい、慌てて顔を下に向けた。

なんて事はない。自分が落ち込んでいたことなどバレバレだったのだ。だから皆気を使ってこちらに注目していたのだろうし、思い返してみれば、先ほどリードの様子がおかしかったのもそれが原因だったのだろう。

顔を下に向けたのは、自分の顔色を見せたくなかったからだ。はっきり言えば、今までの人生でこんな自分では些細とも言える事で心配などされた事などない。だからこそ恥ずかしく、申し訳が無く、正直嬉しくて、鉄兵の顔は瞬時に真っ赤に染まってしまっていた。

「その……心配をおかけしました……」

気を使ってもらった事が嬉しくて、だけど心配をかけた事が非常に申し訳なくて、うつむきながらもそんな言葉が自然に口からこぼれていた。

ちらっと視線を上げてみると、なぜかアルテナを含めて暖かい目

で見られてしまっていて、居心地が悪い事この上がない。なんとも居た堪れなくなった鉄兵はワイングラスを手に取り一気に煽った。途端にアルコールが身体に回り、身体が火照る。願わくばこれで顔の赤みが増し、羞恥心による顔の火照りをごまかしてくれればいいのだが。

「お、兄ちゃんいける口なのか？　俺と勝負しようぜ！」

「おう、勝負だ！」

ワインボトル片手に嬉々として挑んでくるアルテナに、これ幸いと勝負に乗る。多分アルテナは空気を読んでいないだろうが、今の鉄兵にはこれ以上無い申し出だ。

「その勝負、私も乗せてもらって良いか？」

「では僭越ながら私も」

こちらは空気を読んでのアリスとイスマイルの言葉である。だが、空気を読ませてしまって申し訳ないと思う以上に、こうして乗ってくれる事が嬉しいと思う。

ちなみにリードは「私はお酒弱いからごめんね」とちょっと申し訳なさそうにリルを膝に乗せて観戦モードであるが、付き合ってくれるだけで御の字である。

ただ家主である村長さんに迷惑をかけるかな？　とちらりと様子を伺ってみたところ、村長さんはひたすらニコニコと、その奥さんは娘さんに声をかけて慌しくワインの在庫を取りに行くところのようだ。どうやらこの程度は想定の範囲内らしく、勝手に盛り上がっ

てくれれば村長さん的にも楽なのかもしれない。ならば気にかける事はないかな？　と思い、鉄兵はアルテナの手からワインボトルを奪い、みんなのワイングラスに並々とワインを注ぎ込んだ。

いつもなら悪酔いしたとしてもこんな風に他人を巻き込んで羽目を外す事は無い。だが、今日だけは皆の好意に甘えて羽目を外したいと思う。自分だけでは到底抱えきれない重い現実も、意図はともかくみんなが心配してくれるなら少しは軽くなる気がするのだ。

「それじゃ、改めて。かんぱい！」

グラスを高く上げ、重なり合わす。明日はきっと二日酔いだろうなと思いつつ、鉄兵は今を楽しむ事にした。

責任者の憂鬱・その３（後書き）

２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
落ち着いてきところで
→落ち着いてきたところで

責任者の憂鬱・その４

一夜明けて次の日の朝。

鉄兵は馬車置き場へと来ていた。というか正確には馬車置き場の近くの野原に寝転がってぐったりとしていた。

昨夜の食事の席では早くもアルテナ達が火をつけた家の再建は終了したと聞いていた。なので今日はもう王都へ向けて出発するのかと思っていたのだが、今日の朝に聞いたところではまだまだ懲罰が足りないとの事で、もう四五日ほど山賊達は無料奉仕をする事になったらしい。

当然それを監督するアリス達もここに残る事になり、アリスの一行である自分達も同じ日数だけこの町に拘留される事になる。ならば暇になる事だし、前々から馬車のシートをもうちょい座り心地の良いものに改良したいと思っていたので色々材料を担いでここまで来たのだが、いかんせん二日酔いがきつすぎてシートの改良に着手する前にへたばってしまったのだ。

昨日の勝負では他の面子の酒量がおかしい事になっていたので、鉄兵はどう考えても勝ち目は無いとみて途中から観戦モードといわんばかりにちびちびと飲んでいた。だが、それでも他の面子につられてかなり飲んでしまい、具体的にはワインをボトル三本程も空けてしまったのだ。確かワインのアルコール度は１２％くらいだったから、１６％の日本酒に換算すれば７５０ｍｌのボトル三本でだいたい８合くらいのものだろうか？　二日酔いになるのはまあ当たり前の事である。

ちなみに昨夜の勝負は酒に関しては底無しと評判らしい巨人族のイスマイルを制してアルテナの勝利に終わったりしている。どうやって腹に押し込めたのやら、大騒ぎしながらイスマイルと並んで１０本２０本とワインボトルを並べていく姿は空恐ろしいものがあり、果てには酔い潰れたイスマイルの上に腰掛けてワインをボトルごとラッパ飲みで飲み干してた様子には畏怖すら感じられた。それでいてアルテナもイスマイルも今朝は何事も無かったかのようにケロリとしているのだから、あれは正直詐欺である。これが種族差というものなのだろうか。いや、アリスも鉄兵より多い5本のボトルを空けて昨夜はほんのりと怪しい様子になっていたにも関わらず、今朝はしゃっきりとしていたので、単純にこちらの世界の人間は酒に強いだけなのかもしれない。

そんなわけで午後から本気出すといわんばかりに草っ原に寝転がって体力の回復を試みていたのだが、そんな鉄兵の元に予期せぬ客が訪れた。

「もしや、ひょっとしてあなた様はテツ殿ではございませんか？」

ぐったりとしていたら、そんな声をかけられた。知らない声だったので体調の悪さにかこつけて無視してしまおうかとも思ったが、不意に知らない声の持ち主がなんで自分の名前を知っているのだろうかという好奇心がもたげてきてた。なので起き上がって声の主を確認してみると、そこにはやはり見覚えの無いおっさんが立っていた。中々立派な身なりの人の良さそうな推定４０歳くらいのおっさんだが、はて誰なんだろうか？

「そうですけど、どちら様でしょうか？」

誰なのかは分からないが、反応してしまった以上は話をする他無

いだろう。鉄兵は立ち上がって服についた土を払い、おっさんに応対したら見知らぬおっさんはニコニコと近寄ってきて右手を差し出してきた。

「これは申し遅れました。私、王都で綿を商っておりますニコライと申します」

「はぁ」

ニコライと名乗った人物がニコニコと近寄ってきて右手を差し出してきたので何の考えも無くこちらも右手を差し出してみる。するとニコライは鉄兵の右手を両手で握り、熱烈に握手を交わしてきた。良く見れば少し興奮気味のようで、顔がほんのり上気しているし、姿勢が前のめりである。ちょっと気持ちが悪いなと思ってしまったのはここだけの話であるが、良い年したおっさんに興奮気味に攻め寄られればそう思うのは無理が無い事だと思って欲しい。

どうやらこのニコライさんとやらは王都の商人のようだが、その商人が何で自分を知っていて、何の用があるのやら。というかなんでこんなに興奮しているのだろうか？

「あぁ、これは失礼いたしました。噂の人物とこうして出会う事ができて、年甲斐もなく興奮してしまいました。お見苦しいところをお見せしてしまい申し訳ございません」

そこでニコライも鉄兵が辟易している事に気がついたのか、鉄兵の右手を解放して一歩下がり、胸に手を当て一礼した。どうやらさっきのは素の行動だったようで、本気で照れている様子を見せているが、おっさんが照れても気持ちが悪いだけである。とはいえ良い人なんだろうなぁと鉄兵に思わせる事で鉄兵の緊張感を解くだけの

効果はあったようだが。

「はあ……噂、と言いますと？」

多分一昨日の山賊騒ぎの事なんだろうなぁと思ったが、話の流れ上、鉄兵は聞いてみる事にした。一昨日の昼に山賊によって広間に集められていた人達の中にはこんな身なりの人はいなかったはずなので、多分昨日か今日この町に到着した人なのだろう。別に口止めをしているわけじゃないので、多分村の人にでも聞いたのだろう。

「はい。幽鬼族をも上回る腕を持ち、魔力は大魔道士級。仁義に厚く、何の見返りも無く弱者に手を差し伸べる慈愛に満ちた人物。さらには庶民派で親しみやすいお方だと聞き及んでおります」

最高にむず痒くなる噂である。最初の能力についての事と、最後の庶民派云々はともかく、仁義に厚い慈愛に満ちた人物だとか、いったいどこからでてきたのやら。

むず痒さに悶えそうになる鉄兵とは裏腹に、話し始めた事で再度興奮したらしいニコライは、どうやらなんかのスイッチが入ってしまったらしくてぺらぺらと聞きもしない事を語り始める。

「実は私、昨日の昼前にはこの村の近くまで到着していたのですが、フェンリル……と申しましたか？　あの巨大な魔物が村に居座っている様を見て恐れおののき逃げ帰ろうかとも思っておりました。ですがこの村は大事な友人とも言える商売相手が住む場所です。せめてその友人達の安否を知りたいと遠巻きに魔物を観察していたところ、魔物は特に暴れる様子も無く大人しく、果ては欠伸までして毛繕いをしてくつろいでいるようにも見えました。そこで意を決して護衛の中から隠業に長けた者にこの村を探らせたところ、村人達は

魔物を気にした様子も無く普段通りの営みを送っているというではありませんか。

とにもかくにも危険は無さそうだという事でこの村に入り、商売相手に事情を聞いたところ、あの魔物は村を山賊から救った英雄の使い魔であり害は無いと、俄には信じられない事実を聞きました。

そうこうしている間に魔物は忽然と消えてしまい、半信半疑のまま夢でも見ていたのかと思っておりましたところ、酒場にてテツ殿の英雄譚をお聞きして、ただただ感動するばかりでした。

商業都市カディスに迫るフェンリルの脅威を見事な知略を持って打ち払う知恵と勇気。果てはあのような巨大な魔物を手懐けて使い魔にしてしまう器量。いやぁ話を聞いていて痺れてしまいました。

さらにはこの村であの山賊姫の軍勢を魔法一つで撤退させる手際、被害にあった村の人に救いの手を差し伸べる優しさ、再度襲ってきた山賊姫の軍勢に一人で立ち向かう雄姿！　聞いているだけで私もその場にいるような気がして身が震えました。

そして魔法一つで全てのかたを付けられるというのに、元騎士である山賊姫の配下達の心を慮って正々堂々の一騎打ちを申し込み、怒涛の１７連戦を勝ち抜いたあの名勝負！　いやぁ興奮いたしました。

山賊にすら気を配り、心の救済を図ろうとは、その慈愛に満ちたお心はもはや人の為しえる事とは思えませんでした。これはもう、聞いていてただただ感服するばかりでございました。

いやいや英雄というものは本当にいるのだなと心底感服いたしました。その英雄にこうしてお目にかかれるとは、感動する事しきりです！」

とまあニコライは自分の話に興奮してこれ以上ないほどにエキサイトしていたのだが、鉄兵のテンションはそれに反比例していた。

「いや……なんというか……恐縮です。そんな大層な事じゃなかっ

たのですが……」

ニコライの話が終わる頃には、鉄兵はむず痒いを通り越して薄ら寒くなってきていた。確かにこうして話を整理して並べられてみれば大層な事をやっているようにも見えるのだが、実際のところは成り行き上なんにも考え無しにやった事なので反応に困る。そんな美談になるような内容じゃなかったと思っていたのだが、どうしてそんな噂になったのやら。基本的には小心者なので、どんだけ話が大きくなっているんだと内心ビクビクと怯えてしまいそうになる。

「これほどの事を成したというのに大した事ではなかったとは！その器の大きさ、謙虚な心にますますファンになってしまいそうです」

「いやぁ……恐縮です」

そうしてまたニコライの賛美の言葉が始まったりしたのだが、鉄兵にとっては予想外の出来事なのでただへこへこと縮こまって頭を下げる他はない。いったいなんでこうなったやら。というかなんでリルの一件まで知っているのだろうか。

と、そこまで考えて、鉄兵は噂の出所がどこなのか分かったような気がした。非常に嫌な予感がする。そして毎度の如くいうようだが、この世界に来てから鉄兵の嫌な予感が外れた事は一度も無い。今回も多分当たる気がした。

「ちなみにその話は誰から聞いたんですか？」

「はい、シロ殿です。あまりに見事な詩でしたので席にお招きして詳しく話をお聞かせもらいました。テツ殿の容姿についてはシロ殿

の詩にありましたのですぐに分かりました。ここらでは珍しい黒髪の美少年だと聞いておりましたので」

やはり。と、鉄兵は予想通りの答えを聞いてがっくりと肩を下ろした。そういや昨日、なんか良い詩が出来たから酒場に歌いに行ったとか聞いていたが、どうやらリルの時と今回の一件の詩だったようだ……別にやるなよとは言ってないので文句は言えないが、なにを考えているのやら。というかリルの一件の時に一番派手に活躍していたのはシロだった気がするのだが、どんな詩にしているのやら。案外シロはナルシストなのだろうか？

ってか美少年って……少年という年でもないのだが、考えてみればここらの人は大体白人種っぽい人達なので年より若く見られているのかもしれない。いったい何歳に見られているのやら。

とまあそんな風に呆然と話していたら、話している間にニコライの出発の準備が出来たようで手代っぽい人がやってきてニコライにその旨の報告に来た。そんなわけでニコライは名残惜しそうにしていたが、「王都にお越しの際は是非我が商店にもお寄りくださいませ」と言い残して去っていった。

残された鉄兵は草原に座り、しばし尾びれがついてしまっていそうな自身に関する噂についてどうしようかと呆然と考えていた。が、拡散した情報を収束させる事の難しさは元の世界の経験から知っていたので、もう開き直って気にしないようにする事にしてなんとか自分を立ち直らせる。ただし、とりあえずシロに会ったら一発はたいて酒場で歌うのは止めさせようとは思ったが。

まあ考えてもしょうがないと、鉄兵は当初の予定通り、馬車シートの改良に着手する事にした。今回の件で唯一の幸いは、あまりに

衝撃な話を聞いた事によって二日酔いが吹っ飛んだ事だろう。何かを作ってればあまり他の事を考えずにすむのでさっさと取り掛かる事にする。

さて馬車シートだが、当初は自動車の後部座席のようなシートを作ろうと思っていたのだが、色々考えた結果、スプリングが効いたベットマットのようなシートにする事にした。残念ながらゴムが調達できなかったので、車輪から伝わる衝撃はどうにも吸収できそうにない。なのでシートの方の衝撃吸収性能を高いものにして、ついでに長時間座っていても尻が痛くならないものにしようという魂胆である。

材料はといえば、スプリング部分に使う金属は武装解除したアルテナ達山賊団の剣やらをもらえたのでそれを使う事にする。一応元騎士の剣なので業物でも混ざってるんじゃないかと思ったが、今朝マーティンに聞いてみたところ、アルテナの細剣以外はそれほど大したものでもないとの事なので、折れたものから遠慮なく使っていく事にする。

中身に詰める綿については、これってご都合主義なんじゃね？と思うくらいに都合が良い事に、この村は綿の産地だったので山賊退治のお礼としていっぱいもらえた。シートのカバーは村長さんに何か良いものがないかと聞いたところ、フェルトっぽい厚手の布とでかい牛革をくれたのでそれを使う事にする。ついでにシートカバーを縫う針と糸に関しては、なぜかシロが持っていた。なんでこんなものを持っているのか聞いてみたら、傷を縫う時に使うものだそうな。言われてみれば針も糸もなかなかごついものだったが、麻酔がない時代にこんなもので人の身体を縫うわけで、なかなかグロイ話である。とはいえ今はそのごつさが好都合ではあるのだが。

とりあえず折れた剣を何本か手に持ち加工魔法で不純物を取り除いて鋼の塊にする。ついでそれを大きなコイルバネ状にしてその上に台座を作り、上に乗って試してみる。すると、案外簡単にしっかりバネとして働いてくれた。後は座席の高さなどを考えて、揺れや弾力性などを考慮に入れてコツコツと形状を調整していく。加工魔法というチートを手に入れたわけだが、だからといって理想的な完成品がすぐさま出来るはずも無い。ゆえにトライ&エラーを繰り返す非常に地味な作業が続くわけだが、ある意味それが一番楽しい時間である。

とまあそんな作業に没頭していたわけなのだが、ふと何かに見られているような気がして顔を上げてみると、なぜか目の前にアルテナがいた。例の非常にはしたない姿勢でものすごく興味津々に自分の作業を見つめている。半獣人のアルテナには獣耳はあるが尻尾は無い。けれどももし尻尾があったらものすごい勢いで振っていそうな雰囲気である。いや猫の半獣人だからピーンと立てていそうというのが正しいのか。

猫の半獣人だからだろうか、どうも好奇心が半端無いようである。鉄兵はすでに作業を止めてアルテナにじーっと注目しているわけだが、アルテナは未だにこの後どうなるのだろうかと言わんばかりに鉄兵の手先に注目している。

やがてアルテナも鉄兵の作業が止まった事に気がついたようでこちらに眼を向けてきた。続きはまだか？　といつぞやのようにこちらに首を傾げてきたわけだが、さてどうしよう。

「……なんか用か？」

なんでここにいるのかとかその他色々と聞きたい事はあったが、

正直対応に困ったので無難な事を聞いてみる。そうしたらアルテナは「あぁ」と言わんばかりに自分の用事を思い出したようではしたない姿勢を止めて立ち上がった。

「飯だってよー。早く食いに行こうぜ！」

「あぁ。もうそんな時間か」

言われて空を見上げてみたら、太陽は中天よりやや西に傾きかけていた。元の世界にいた時も作業に没頭して食事を抜いてしまう事は良くあったが、どうやらそんな状態になっていたようだ。どうやらアルテナはそんな自分に声をかける任務を受けてここに来たようだが、自分の作業に好奇心の虜になっていたようである。そんなに面白い作業をしていたかといえばそうでもないのだが、多分加工魔法で金属がグネグネ変化する具合が面白かったとかそんなところだろう。

それにしても……鉄兵としてはアルテナの運命を思うと色々遠ざけてしまいたい衝動に駆られてやや対応がぎこちなくなってしまいがちなのだが、アルテナといい盗賊団の面々といい、なんでそんなに屈折する事なく健やかに日々を過ごせているのだろうか。これが文化の違いなのか？　とも思ったが、にしてもどこか違和感……というか危機感の欠如というものを感じる。先ほど食事の時間だと告げた時のアルテナの様子はまさに天真爛漫そのものの態度だった。なんで近い将来に死ぬ事が分かっていてあんな顔が出来るのだろうか。

とはいえ理由が分からない以上、これがこの世界の常識的な考えと受け取るしかないのだろう。いや本音ではあからさまに異常だと思うし、思い切ってアルテナに聞いてみれば理由が分かるかも知れ

ないが、残念ながらこの世界に来て以来、勇敢かヘタレかの天秤があったとしたらヘタレに傾いてしまっている鉄兵には正面切ってそれを聞く勇気が無い。

色々モヤモヤとしながらも、そんな表情をされてはどうにかして助けたい衝動に駆られてしまう。いや、アルテナ達は死刑囚になるほどの重罪人なので、ただそれだけの理由でそう傾いてしまうのは危険なのではあるが。

ちなみにそんな鉄兵をアルテナは不思議そうに見てたりするのだが、やはり余裕が無い鉄兵はそれに気がつかない。

「ところで、さっき俺の作業を見てたみたいだけど、興味あったりする？」

結局のところ、鉄兵はまたもや結論を先送りにして無難な会話をする事にした。

「ん？　よく分からなかったけどなんか面白そうだったな。あれってなにやってたんだ？」

「あぁ、あれはな……」

こう気持ちよく興味を示されては鉄兵としても気分がいい。変な雰囲気になるのも嫌だったので鉄兵はそれに乗ることにした。

アルテナは鉄兵の説明をよく理解できていないようだったが、意外な事にアルテナは理解できないなりに理解しようと努力する聞き上手なようで、真剣に鉄兵の言葉に聞き入っている。正直この展開はありがたかったので、それを好都合だといわんばかりに鉄兵は説

明に没頭する事にした。

そんなこんなで村長宅に入ると椅子に座って背中を向けるシロの姿が見えた。朝の件もあり、とりあえず問答無用でその頭をはたこうと鉄兵は背後から平手を見舞ってみたわけだが、ある意味予想通りにすいっと避けられてしまい平手は空を切った。まあシロの事なのでなんとなくこうなる事は予想できていたわけだが、なんとなく悔しい。

「随分と御大層な挨拶だが、一体どうした？」

なおも背中を向けたままシロが言う。

「どうもこうもないだろ！　なんか酒場で俺の事言い触らしてるようだけど、恥ずかしいから止めてくれ！」

こう言えば鉄兵としてはシロがこれ以上自分の事を触れ回るのを止めてくれると思っていた。だが、残念ながらシロの口から出てきた台詞は鉄兵の予想とは１８０度異なるものであった。

「そいつは残念だが受け入れられないなぁ」

そんな冷たいシロの台詞を聞くのは初めてである。しかも、そう言いながら振り返ったシロの目には、心なしか敵意すらも混ざっている気がする。

こんなシロは初めてである。一体どうしたというのだろうかと戸惑う鉄兵に、シロは宣言を行った。

「俺は、自分を曲げる気はねぇよ。止めたかったら全力でかかって

きな」

そう言って、シロは不意打ちのようににいつものよう笑顔でニッと笑った。

「……望むところだ。あくまでシロが歌うって言うなら、俺は正々堂々と止めてやる！　本気で行くから覚悟しておけよ」

ニッと笑うシロの姿に、つられて鉄兵は同じようにニッと笑って挑発を返す。

なんだかもう、ほんとどうでもいいところで感情的に盛り上がってしまって勝負する事になってしまった。とはいえ最後にシロが笑顔で宣言したために戦意を挫かれお遊び的な展開になったわけだが。

とまあそんな一幕があり、勝負は夜の酒場に持ち越された。ちなみに昼飯はそれほど感情的な衝突がなかったので案外和気藹々とした雰囲気の中で進んで終わったようである。

責任者の憂鬱・その４（後書き）

１１／２０：報告いただいた誤字修正
「自愛」→「慈愛」
１１／２２：冒頭の一文が抜けていたので修正……
１２／１８：指摘いただいた誤字修正
これってご都合主義なんじゃね？　と思うくらいに都合良が良い事に、
↓都合が良い事に、
２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
ラッパ飲で飲み干して様には
↓ラッパ飲みで飲み干してた様子には
応対した見知らぬ
↓応対したら見知らぬ

２０１１／７／１１：指摘いただいた護持修正
例の非常にはしたない姿勢でものすごく興味心身に
↓興味津々

責任者の憂鬱・その5

昼食を食べ終わった鉄兵は、うんうんとうなりながら馬車置き場への道を歩いていた。その場のノリでシロと勝負っぽい事をする事になってしまったわけではあるが、どうにもシロに勝利するための良いアイデアが出てこないのだ。

情報を整理する。まずは条件を並べてみよう。

鉄兵の勝利条件はシロに歌う事を断念させる事で、敗北条件はシロが酒場で詩を歌ってしまう事である。

今更ながらの話ではあるが、この勝負は鉄兵にとって大いに不利な勝負に思えた。鉄兵は長時間シロを拘束する必要があるが、シロは酒場でステージに立ってしまえばいいだけなのだ。

鉄兵としては他人の顰蹙はあまり買いたくないので、歌い始めたシロの妨害をするような行為はあまりしたくない。つまり実質シロがステージに立った時点で手出しはできなくなるので、鉄兵はそれまでにシロを捕まえて酒場が閉まるまで拘束するか、演奏を断念させるかしなければいけないのだが、シロ相手にはどちらもかなり厳しい条件である。

比べた事は無いが、シロの肉体能力は強化されている鉄兵よりやや弱い程度だろう。技量はシロが圧倒的に上なわけで、肉体言語で語り合ったら恐らく鉄兵はシロに触る事すら出来ずに3カウントを決められてしまうと予想ができる。要は魔法を使って戦う以外に鉄兵には勝ち目が無いわけだが、それにしたって制限がつくので悩ましいところである。

魔法ありで見境の無い単純な戦いをするのなら、今の鉄兵は白竜形態のシロにも負ける気がしない。だが、まさかこんなあほな勝負で大怪我をするような魔法を炸裂させるわけにはいかないので、小細工に頼るしかないだろう。

というわけで条件としては中々に最悪である。こんな条件の中、良いアイデアが無いかとさっきからうなっているわけだが、どうにも思いつかない。こっそりギターを壊してしまったり、一服盛って眠らせてしまったりしてしまえば話は早いわけだが、それはなんというか、人として駄目だろう。

そんなわけでうんうん唸りながらあーでもないこーでもないと歩いていたら、あっという間に馬車置き場まで着いてしまった。

なんとなくここに来てしまったが、考えてみれば別に馬車の改造は後回しにしてもいい事である。なので今はシロ対策を考えるべきなのだろうが、正直このまま考えていても良いアイデアが出るとは思えない。

それならば身体を動かしてた方がなにか思いつくかもしれないというわけで、鉄兵は午前中の作業を再開する事にした。とはいえ、午前中で大体スプリングの調整はあたりがついていたのですぐに終わってしまったのだが。

というわけで実用的なバネが出来上がったので次の工程に入ろうかとも思ったが、シロ対策のアイデアは出なかったものの、馬車に関しては一つアイデアが浮かんだのでちょっとそちらについて考えてみる事にした。

そのアイデアとは、サスペンションである。簡単に言えば衝撃を吸収する装置の事であるが、元の世界の乗り物には大体付いているものなので、今まで思い浮かばなかったのはある意味不覚である。まあきっと久々にモノづくりをしたのでようやく頭が本調子になってきたのであろう。

サスペンションの種類は色々あるが、今回想定しているものは簡単に言えばコイルバネとダンパーをセットにしたものである。ダンパーとは文字通りダンプ（ｄａｍｐ－減衰）させるものの事で、まあバネで振動は吸収できるけど、その後バネが伸び縮みしてうっとうしいからその伸び縮みを少し早く終わらせてしまおうぜといった感じの趣旨の装置である。

今回想定しているダンパーについて軽く説明すると、先端に針穴の無い注射器みたいなものである。薬の代わりに中にオイルを入れて、筒を完全に密封しない程度のピストン（注射器で言えば押す部分）をつければ、ピストンを押すとピストンが液体の中を動く時に先端の面に液体の抵抗が働き、液体がエネルギーを吸収してくれるという仕組みである。

なのでこれをコイルバネと組み合わせれば、バネが振動を吸収して、さらにバネが吸収した振動をダンパーがゆるやかに吸収する事によりあまり揺れが生じなくなるという寸法である。

さて、サスペンションの材料は金属とオイルである。ダンパーの性質上、粘性と沸点が高い油でも欲しいところであるが、この近辺で手に入れる事は不可能だろう。ダンパーは振動という運動を吸収する装置であり、それを吸収すれば熱エネルギーが発生する。熱が発生すれば沸点の低い油を使用した場合は発火してしまうわけで、普通の油はちょっと使いたくない。なのでどうせ短期間しか使わな

いものだからと水で代用しようかとも思ったが、鉱物油はぶっちゃけ炭素と水素の化合物なので、水が空気中から作れるなら鉱物油も作れるんじゃないか？　と気がついてみた。

残念ながら鉄兵は化学系にはそれほど詳しくないが、工学に関係がありそうな素材の原材料については興味を持って化学式等を調べた事がある。鉱物油はなかなか複雑な構造の式なのだが、擬似完全記憶能力を誇る鉄兵の頭の中にはばっちりとその知識が残っていた。水の化学式を思い浮かべて魔法を作れば水が出たのだから、理屈の上では化学式さえ分かっていれば、オイルだって作れるはずである。

というわけでさっそく試してみる。とりあえず実験とばかりに折れた剣を一本つまんで引き伸ばしてバケツ状にし、その中に空気中から炭素と水素を集めて化合するイメージをしてみた。すると、ほんとにどんな仕組みなのやら、バケツの中にそれらしき物が出来た。元の世界なら総ツッコミどころか本気で怒られそうな光景だが、まあ魔法なんだなーって事で現実には目をつぶる事にする。

とまあ実験は成功したが、勢いで作っては見たものの、純度１００％の鉱物油を潤滑油として使っても良いものなのか？　となるとちょっと疑問が残る。知識としてはこれで良いはずだが、実際使われている製品にはその他にも色々混ぜているはずなので、このまま使うのは危険な気がするのだ。今回作った鉱物油は、簡単に言えばアスファルトの材料に近い感じの燃えにくくて粘性の高い鉱物油なわけだが、ガソリンなどと同列の物なので下手をすれば爆発する。物理防御を張って実験してみれば良いだけの話だが、村の外れとはいえ爆発物の実験をするのはさすがに非常識な事だろう。

というわけで、せっかく作ったものだが鉄兵はこれを破棄する事にした。バケツの中に意識を差し伸べて、空気中にゆっくり還元し

ていく。無駄に二酸化炭素やらを増やしてしまった気がするが、まあまだ環境汚染が問題になっているような世界ではなさそうなので気にしない事にした。

それにしても無から油ができるとは……魔法とは改めてとんでもないものだな。と、鉄兵は今更ながらに実感した。火やら水やらが無から出てくるのも十分非常識ではあるのだが、元の世界でもコンロのスイッチ入れたら火が出たり、蛇口を捻れば水が出たりしていたものだから、そこまで実感は無かったのだ。

だが、同じ原理ではあるものの、油となるとちょっと勝手が違く思える。同じ原理なのだから当たり前といえば当たり前のことなのだが、それでもどこか違和感を感じて改めて異常な事なのだと感じてしまうのは、なんとなく納得していただけるとありがたいところである。

と、ここで気がついたがゴムも基本は炭素と水素の化合物である。それに硫黄を加えて弾性や強度を増したりしているわけだが、硫黄も微量ながら空気中に含まれているはずなので作れるんじゃないか？　と思いついてみた。

思い立ったが吉日と言わんばかりにさっそく試してみる。天然ゴムの化学式を思い浮かべ、空気中から広げた掌の上に材料を集めて重合するイメージをする。すると、掌の上に消しゴムのような真っ白な天然ゴムが作られた。これはまあ……元の世界の研究者達から本気で殺意を向けられかねない光景のような気がしたが、出来てしまったのだから仕方が無い。硫黄の方も近くに火山でもあるのか、案外簡単にできたので、そこそこ本格的なゴムタイヤが作れそうである。

というわけで炭素を混ぜたり硫黄を混ぜたり色々調整したところ、タイヤに近い感じの硬くて黒い、弾力性のあるゴムが出来上がった。サスペンション、鉱物油、ゴムとつくってきたわけだが、なんだかこのまま頑張れば材料さえあれば自動車の一台くらい作れてしまいそうである。簡単なエンジンの仕組みや基本的な車の構造は知っているので、多分ほんとに可能であろう。まあ出来たとしても説明に困るので作る気はさらさらないが。

それにしても、こんな事がほいほい出来てしまうのならもうちょい文化的に発展してもよさそうなものである。それなのに、今までの体験を見返してみたところ、こんな風に魔法が利用されているところを見た事が無い。なんでこんな便利な技術があるのに使わないのかと考えてみたら、その疑問の回答には結構簡単に行き当たった。ついでに魔法を使う際の魔力のロスについてもこれが原因であろう。

その原因を一言で言えば、恐らくこの世界には元素なんていう発想はないからだというのが鉄兵の推測である。

リードに聞いた魔法についての説明を思い返してみたが、火に関するものは火の精霊。水に関するものは水の精霊と、その属性に特化した精霊を使役する事によりロスを少なくしているという話である。つまり火の精霊やら水の精霊やらその分野に特化した精霊はその理をなんとなーく理解していてそれを具現化させているのじゃないかと思われるが、精霊といえども元素レベルの世界を理解しているわけでは無いのでロスが生じているのではないだろうか。一方、鉄兵は元素という存在がある事を理解して、そのイメージを精霊に伝える事によって魔法を使っている。なので発動がスムーズであり、ほぼロスが生じないのではないかという理屈である。

なんでこの技術を使わないのかという疑問に関してはさらに簡単で、元素を知らないという事は、物体が何で構成されているかを知らないという事である。なので要はこんな事が出来るとは考え付いてないのだろう。もしくは試された事はあっても複雑な構造体はロスが大きすぎて実用化されていないのかもしれない。

少し乱暴な理屈だが、鉄兵としては結構的を得た理屈のような気がした。確かめるためにリードに元素について教え込んでみたら面白そうだなぁとかゴムをニギニギと握りながらそんな事をぼけっと考えていたら、不意に今考えていた事とはさっぱり関係の無い、シロ対策のアイデアが天啓のように鉄兵の脳裏に浮かび上がった。関係が無いとは言ってもこれまでの理屈を総合した結果として生まれたアイデアではあるのだが。

「これは……いける……」

顔をうつむかせ、鉄兵が邪悪な笑みを浮かべる。

というわけで鉄兵はそのアイデアに必要な材料を用意するために、さっさと村長宅へと走り出したとさ。

時は過ぎて夕方頃。

「……みなさん、なにしてるんすか？」

秘密兵器を無事に作成し終えた鉄兵は、意気揚々とシロとの決戦に挑むべく酒場へと向かったわけなのだが、酒場の前に見えた光景

にちょっと呆れながらそこにいた人物達にそう尋ねた。

「見ての通り、勝負の観戦に来たのだ」

鉄兵の問いには、群集代表としてアリスが応えてくれた。そう、群集代表である。

酒場の前にはどこから湧いて出たのやら、群集が出来上がっていた。アリスにリードにイスマイル。それにアリスの部下達三人はともかくとして、アルテナ以下山賊連中までいるし、そこに少し距離を置くようにして村人達も多く混ざっている。

これから酒場でいっぱい引っ掛けようと酒場が開くのを待っている連中もいるのだろうが、小さな子供やエプロン姿の主婦なども混ざっている。ざっと１００人近くはいるんじゃないかと思う群集が出来上がっているわけだが、どうやらこれは鉄兵とシロの勝負を見物に来た人々らしい。村の人がほぼ総出で見に来ているような気がするのだが、これはどういうことなのだろうか……いやまあ理由はわかるのだが。要するに態の良い娯楽なのだろう。

「……まあいいや。民衆は娯楽に飢えている。と、そういうわけね」

持ってきた秘密兵器の入った大き目の段ボール箱サイズの石製の箱を地面に下ろしながら、鉄兵は少し達観した気分で呟いた。

「まあ、早い話そういうことだな」

やや苦笑気味にアリスが答える。苦笑を浮かべてはいるものの、アリスのその表情の裏には、この状況を明らかに楽しんでいる様が見て取れる。見世物になるのは気に食わないが、まあアリスが楽し

んでるなら悪くも無いかな。と、鉄兵は村の娯楽のために余興にされる事を受け入れる事にした。せいぜい良いところを見せる事にしよう。

「ねえ、この玉はなに？　なんか柔らかいけど」

そんな声がしたからそちらの方を見てみれば、早くも興味津々と言わんばかりにリードが箱の中身を突付き、リルが鼻先を突っ込みクンクンと匂いを嗅いでいた。

「あー師匠。その玉に触っちゃ駄目ですよ。特にリルは噛んだり爪立てたりすると酷い目に遭うから駄目だよ」

鉄兵の言葉に両者はビクッと身体を震わせすごすごと身を離した。その様子が妙にシンクロしていて非常に微笑ましい。ちなみに中に入っているものは手のひらサイズの白い球状の物体である。これが鉄兵の用意した今回の秘密兵器であるわけだが、詳細はまだ秘密である。

「その箱の中身はそれほど危険なものなのですか？」

そう質問したのはイスマイルであった。危機管理のしっかりとした大人としてはその脅威度がどれほどのものか気になるようである。

「いや、危険というか……怪我するようなものじゃないですけど、下手に触ると酷い目に遭うのは確かですね」

「そうですか」

鉄兵の言葉に危険性はないと見て取ったイスマイルはほっとした

ようだった。リードとは間逆な大人な対応である。危機感が薄い現代日本人の鉄兵としては見習いたい姿勢である。

「どうやら策はできたようだな」

「まあね」

アリスの言葉に鉄兵は自信満々に答えた。自慢ではないが策どころか新技をいくつか考えてきた。多分みんなに良いところを見せられると思うので、自信の程はばっちりである。

「私はシロの応援に回るが、鉄兵も頑張るのだぞ」

が、アリスの口から出たのはそんな言葉であった。その言葉を聞いて鉄兵は心底がっかりしてしまったのだが、周囲の様子を見ると、どうやらみんな同じ意見のようでうんうんと頷いている。なぜかは知らないが、完全にアウェー（敵地）のようである。

「なんだよ。誰も応援してくれないのか？」

「すまないが私もシロの詩を聞いてみたいのでな。今回ばかりは応援ができん」

澄ました表情でアリスが言う。鉄兵としては非常にがっくりな話ではあるが、なんとなく納得してしまったのでこれ以上は何にもいう事が出来ない。自分が主役の話で無ければ自分だって聞いてみたいと思うのだからこれは仕方が無い。とはいえ、理由がどうあれ悔しいのは確かなので、絶対にシロに一泡吹かせてやろうと半ば八つ当たり気味に気合を入れなおす。

と、鉄兵がそんな風に気持ちを新たにしていたところ、不意に観衆の間でざわ…っと動きがあった。観客の注目する先を見る。すると、視線の先には予想通り、シロの姿があった。いつものように赤い傘を差し、ギターケースを背負った黒い着流し姿のシロは、観衆の視線に微塵も怯まず悠々と闊歩している。

やがて程よい位置まで来たシロは歩みを止め、いつものように煩悩さえ吹き飛ばすような爽やかな笑みをニッと浮かべた。

「よう、準備はいいかい？」

「ばっちりさ」

シロの言葉でスイッチが入る。鉄兵は用意していた箱の中へ魔力を運び、中の玉を自分の周囲に浮かべた。治癒魔法の時に使った念動魔法と物理防御術の応用である。魔力を一つの力場として、その上に物体を乗せて操っているだけの術である。鉄兵としてはそれほど大した魔法を行使しているとは思っていないのだが、魔法の理屈を考えればそれはやはり派手な魔法だったらしく、ざわ…ざわ…っと観衆がざわめく。

「こいつぁまた、相変わらず化け物じみてやがるなぁ」

シロはからっからと笑いながらひょいと地面に手を伸ばしたかと思うと、手の中で何かを弾いた。

途端に鉄兵の真横にあった玉が破裂して中身が派手に飛び散り鉄兵の顔に付着した。

「ほう、男前があがったんじゃねぇか？」

「……」

観衆から爆笑が上がる。鉄兵を見れば、青い液体に塗れてプルプルと震えていた。ニヤニヤ笑うシロを無視して、鉄兵は青く染まった顔に手を当て魔力を込める。途端に鉄兵に降りかかった青い液体が蒸発していき、観衆からおおーと歓声が上がる。ちなみに先程何が起きたのかといえば、どうやらシロが石を拾って指で弾き、球体に当てたようである。

というわけで鉄兵の秘密兵器とは絵の具入りの水風船だった。その意は非常に単純明快。一張羅を絵の具で台無しにしてしまえばシロも諦めるだろうという作戦である。無論一張羅が汚れても着替えれば良いだけの話であるが、和風のスタイルにこだわりがありそうなシロがそこまでして歌うというなら、鉄兵もその意気に免じて諦めようという結構適当な作戦である。

ちなみに絵の具は水彩絵の具である。元の溶剤はそこそこ簡単に出来たのだが、顔料はさすがに化学式が知識の内に無かったので、近所を訪ねまわって原料を解析するのに結構苦労したというのはここだけの話である。

恥をかかされた以上、もはや遠慮をする必要は無い。鉄兵はさらに魔力を込めて箱から水風船を取り出した。

その様子を見て、シロはニヤっと笑って歩みを進め始める。

不敵なそのシロの様子に鉄兵はやや逆上気味に水風船の集中砲火を浴びせかける。

襲い来る水風船の脅威にも、シロはあくまで冷静である。どんな筋力をしているのやら、不規則に着弾するように操っているはずの絵の具入り水風船を、開いたままの金属製の傘を鞭のように操り迎撃していく。

日褪せした赤色の傘はみるみる派手な色に染まっていくものの、シロ本体には被害は全く無い。まるで散歩でもしているかのように悠々と足を進めるシロの姿に観客がやんややんやと歓声をあげる。

まるで勝負になってないが、ここまではまだ鉄兵の予測のうちである。実戦経験が無いは無いなりに作戦は練っていて、今は仕込みの段階である。

多少不規則性を入れてはいるものの、念動魔法にそれほど慣れていないので鉄兵が操る水風船の軌道はパターン化してしまっている。当然シロはそのパターンを見つけ出し、対応がやや単調になり始めた。この瞬間こそが鉄兵が待っていたタイミングである。頃合を見計らって、鉄兵は次なる技を繰り出した。

「くらえ！」

鉄兵の気合の言葉とともに、シロの身体がぴたりと動きを止めた。この時のために考えておいた鉄兵の新魔法が見事シロを捕らえたのである。

その技とは簡単に言えば物理防御の応用である。ただし、鉄兵が自分に使っている物理防御は全身タイツを纏っているように自分は自由に動けるイメージで身体を覆っているのだが、今回は金属のようにガチガチに固めて対象を覆っている。この結果、どうなるかといえば、こめられた魔力の力場が衝撃を吸収し終えるまで対象は動

けなくなる。

鉄兵は動きを止めたシロに向け、１８０度の包囲網で一斉に水風船を射出した。

いわば強制アス〇ロンとでもいうべき魔法で動きを止められたシロに水風船が襲い掛かる。もはや絶体絶命かと観衆は悲鳴を上げたが、しかしそこは流石のシロであった。

「ふん！」

常人なら一週間は抜け出せそうもないような量の魔力を込めておいたのだが、シロはそれを瞬時に砕き散らした。続いて傘を突き出し盾にして、襲い来る水風船の群れに突っ込むように宙に飛び上がった。

見事水風船弾幕から脱出したシロは、傘で空気抵抗を受けているであろうに、５m程も浮かび上がっていた。そのまま宙でひらりとトンボを切り、余裕綽々で傘を閉じて降下する。その着地予想点は酒場の入り口どまん前である。

シロが無事着地を決めれば勝負はほぼ決まりである。

が、ここまでが鉄兵の計算のうちであった。

「そこだ！」

シロが悠々と酒場の前に降り立とうとする着地のその瞬間。鉄兵は水風船を追尾させながらも更なる新魔法をシロの着地する地面へと向けて放った。無事に地面に着地を決めたシロ。だが、地面に足

をつけた途端に姿勢を崩し、転びそうになる。種を明かせば鉄兵はシロの着地点に滑りやすい油を精製したのである。非常にせこい手ではあるが、効果は抜群であった。

シロは、それでもなんとか傘を地面に突き刺し転倒だけは免れた。が、その背中に無慈悲に水風船が着弾する。

とはいえそこからのシロは流石であった。着弾したのはただの一発で、他は間一髪で横にごろごろと飛び転がってかわす。

「どうだ！」

これ以上無いドヤ顔でガッツポーズを決める。途端に惜しみない拍手が湧き起こり、鉄兵は調子に乗って歓声に応えた。

「こいつぁ一本取られたね」

立ち上がってパンパンと埃を払ったシロは、塗料と埃にまみれた背中を見てしかめっ面をした。結局これだけ苦労して一発だけしか被弾させられなかったわけだが、シロのその表情が見れたので鉄兵はよしとする事にした。

「で、こいつで終わりかい？」

「まあな。その格好でステージに立つって言うなら俺は止めないよ」

シロはふと一瞬空を見上げてすぐに鉄兵へと向きかえった。どうやら何かを思いついたようだ。

「テツよ。確認しておくが、こいつぁ後でしっかり落とせるんだよ

な」

「落とせるよ。ただし、この村を出るまでは落とす気は無いけどな」

「そうだな。それなら、ちょいとその箱の中身を貸してくれないか？」

「別にいいけど、どうするつもりだ？」

やや警戒しながら問う鉄兵に、シロは不敵にニッと笑った。

「俺がここからどう挽回するか、見てみたくないか？」

そう言われてしまっては、ものすごく見たいと思わざるを得なかった。

ってなわけで好奇心が猫を殺しそうな気がしたが、鉄兵は水彩絵の具をシロに分け与える事にした。シロが箱を持って酒場に入っていく。ちなみに群集はそのまま酒場の外の窓から覗き見している。

「ようマスター。ちょいと皿を何枚か貸してくれねぇか？」

出てきたマスターがシロの要求に「いったい何をおっぱじめるんだ？」と笑って皿を持ってくる。

「まあ見てなって」

と軽く片目をつぶって応えると、シロは皿の上で水風船を割り、絵の具を皿の上に移した。

塗料で汚れた着流しを脱ぎ去り、テーブルの上に広げる。ちなみに和服といえば下には下着くらいしかつけないものだが、シロは着流しの下に丈の短いズボンを着用しているのでそこはご安心を。まあ上半身は裸なので、鍛え上げられた筋肉を見てキャーと恥じらいながらも嬉しそうな声をあげるうら若い観衆が何人かいたようだが。ちなみにズボンの下は褌かと疑問に思う方もいるかもしれないが、残念ながら正解はトランクスである。

それはさておきシロは着流しに思い切りよく白絵の具をぶっかけて下地を作ると、直接指で絵の具を掬ってなにやら着流しに描き始めた。さっささっさと指を動かし、１０分程経った後で満足そうに指を止めた。

「ふむ。こいつでどうだ？」

やがて出来上がった作品をシロが外の観客に向かって広げると、観客からはおおーっと歓声と拍手があがった。

「おぉ、かっけー！」

「なかなか見事だな」

と、アルテナやアリスにも大好評であったが、鉄兵は出来上がったそれを見て、少し呆れてしまった。いや確かに大したものなのだが、その構図には見覚えがあったのだ。

「こいつは……」

豪快な飛沫をあげる荒波の海に、そこから昇る旭日旗のようにさんさんと輝く真っ赤な太陽。さらに真ん中に活き活きと描かれた跳

ね飛ぶ鯛のその構図は、どう見ても大漁旗であった。いったいどこでその構図を知ったのかはわからないが、鉄兵としてはそれを着て歌うのかと思うとドン引きである。

「さて、もう一戦やらかすかい？」

「いや、もういいよ……」

得意顔で聞いてきたシロに、鉄兵は疲れた表情で負けを認めた。呆れてしまってやる気が無くなってしまったと言うのが正しいのだが、わざわざ指摘するような事ではないだろう。

試合に勝って勝負に負けたような感じだが、残念ながら今の鉄兵にはもう一戦する気力はなかった。

さてその後。山賊連中もあわせ、鉄兵達は全員酒場で夕食を取る事になった。無論シロの詩をみんなで聞くためである。

とりあえず食事を取って軽く一杯引っ掛ける。そして酒場全体の場が盛り上がってきた頃の事。

「そんじゃそろそろ行ってくるかな」

満を持してシロが座席から立ち上がった。鉄兵としては死刑宣告をされたようなものなのだが、鉄兵達の席からだけでなく、他の席からも歓声が上がる人気っぷりを目の前にしたら、もはや黙って成り行きを見守るほかは無い。

というわけで歓声に応えつつ、シロが悠々とステージに上がった。ちなみに酒場で旅の吟遊詩人が一曲歌っていくのはこの世界では一般的なことのようで、どこの酒場でもステージのようなものが設置されているのが普通であり、この酒場にも簡易ながらもしっかりと小さなステージが用意されていた。

ちなみに着ているものはいつも通りの黒い着流しである。例の大漁旗柄はこちらから頼み込んで消させてもらったのだ。観衆には概ね好評だったので残念がられたが、あの柄の着物で真面目に歌われては、鉄兵の笑いのツボ的に耐えられそうに無かったのだ。なんといえばいいだろう……多分、欧米の人達が漢字シャツをクールだと思うように受け入れられたのだろうが、鉄兵としてはその漢字シャツの漢字に恥ずかしい勘違いを見てしまったような感覚で見るに耐えられなかったといったところであろうか。

歓声に応えつつシロがギターっぽい楽器を用意して弾く体勢を見せると、途端に酒場にはあるまじき沈黙が訪れた。

そしてシロが歌い始める。語られ始めた物語は例のリルとの戦いの話であった。

それは異国から飛ばされてきた少年の物語。竜人族に拾われた少年は異文化に戸惑いつつも元の国に帰る方法を探すために旅立ち、旅の途中で戦女神と称されるこの国の王女と出会い、そして商業都市カディスに迫る脅威へと挑む……とまあそんな感じの趣旨の話が展開されていっているわけだが、シロのギターテクは伊達にン百年のキャリアを誇っているわけじゃなく、比喩ではなく神業である。さらにギターテクと同様にン百年鍛え抜かれた喉は歌う事にも特化していて、包み込むような圧倒的な存在感を持ったその歌声は、これ以上無いほどに客の心を惹きつける。

前に聞いた時は旅の座興のようなものだったが、本気で歌う今のシロは、本気で洒落にならないくらいの腕前だった。聞いているだけで物語にのめり込み、鳥肌が立っているのに気がつかないような有様である。

シロの歌は本物である。たった一本のギターとマイクも使わぬ歌声だけで、これほど人を惹き付けられるのだなんて鉄兵は今まで知らなかった。紛れも無くシロの腕は最高峰のものだ。これは鉄兵だけじゃなく、この場にいる誰もが認める事実だろう。

シロの歌は凄い……だが、上手いだけに……これは恥ずかしい！

「だめだーー！！！！」

結局のところ鉄兵は羞恥心に耐え切れなくて、奇声を上げてシロに襲い掛かった。顰蹙を買いたくないだとかなんだと散々思った記憶はあるが、いざとなればまあこんなものである。

さて襲い掛かられたシロはといえば、どうやらこの展開を予測していたらしく、ニッと笑ってひょいと鉄兵の突撃をかわした。それでも諦めずに突進してくる鉄兵を、シロは楽しそうに歌いながらひょいひょいかわしていく。ただでさえ技術レベルに差がある鉄兵は、逆上した状態では勿論シロを捉える事が出来ない。目にもとまらぬスピードでひょいひょいと激しく立ち回る姿はまるで曲芸か高速ダンスのようで、観客の度肝を抜いてさらに盛り上げる。

やがてシロの語る物語はリルとの対決に及び、シロは時に宙を飛び、時に鉄兵の肩にまたがったりして、まるで物語の中の鉄兵の活躍を再現するかのような演出が目の前で繰り広げられ、観客は大い

に酔いしれる。

そして物語は終焉を向かえ、鉄兵はシロに軽く足を引っ掛けられた。

転びそうになりながらも、そこは強化された肉体能力でくるっとトンボを切って着地する。

ここでシロの語る物語は完結し、鉄兵の背後で大歓声が巻き起こる。

「若き英雄に杯を！」

一曲語り終えたシロはここで腕をあげ、客をさらに煽って盛り上げる。

シロの言葉に反応して、客は更なる盛り上がりを見せた。客がこぞって鉄兵に一杯おごろうと、俺が俺がと名乗りを上げる。

大盛り上がりを見せる中、酒場のマスターが杯を二杯持ってきて鉄兵とシロに手渡した。

「若き英雄に乾杯！」

突然の成り行きに鉄兵がおろおろする中、シロが杯を高々と掲げ、手に持った杯の中身をゴクリゴクリと一息に飲み干した。観客も大盛り上がりでシロに続き、盛り上がりは最高潮を見せる。

そんな盛り上がりの中、どうしていいか分からず半ば放心状態の鉄兵にシロの挑発的な目線が突き刺さる。どうやらこれは罰ゲーム

のようである。もう一度チャレンジしたかったらまずはそいつを飲み干しな。と口元の笑みが語っていた。

「上等だあぁぁぁぁ！！！！」

鉄兵は酒場の主人が用意した杯を高々とあおり、それを一気に飲み干した。

ガンッと杯を手近なテーブルに叩きつけ、鉄兵は再度シロに突撃を開始する。

そしてそいつを待っていましたといわんばかりにシロは次なる曲を開始した。

曲の題材は、無論山賊姫と鉄兵の決闘の話である。

シロの良い声が素晴らしい物語を物語る中、もはやシロは手加減を捨てたようで、ポンポンと鉄兵の足をすくって一般席に退場させる。観客は落ちてきた若き英雄に我先に一杯奢ろうと杯を突き出してくる。鉄兵は転げ落とされるたびに罰ゲームに甘んじて、突き出される杯から身近な一個をかっさらって次々に一気飲みを繰り返して場を盛り上げる。

さてどれくらい鉄兵が一気飲みを繰り返したかはここでは語らない。

だが、この村が創立して以来、この酒場はこれ以上無い盛り上がりのうちに閉店したとだけ言っておこう。

責任者の憂鬱・その5（後書き）

注：一気飲みは本当に危険なので絶対に真似しないで下さい

１１／３０：大小いっぱい文章修正

［鉄兵の言葉に危険性はないと見て取ったイスマイルはほっとしたようだった。リードとは間逆な大人な対応である。危機感が薄い現代日本人の鉄兵としては見習いたい姿勢である。］と［「私はシロの応援に回るが、鉄兵も頑張るのだぞ」］

の間に以下の文章を追加

「どうやら策はできたようだな」

「まあね」

アリスの言葉に鉄兵は自信満々に答えた。自慢ではないが策どころか新技をいくつか考えてきた。多分みんなに良いところを見せられると思うので、自信の程はばっちりである。

１２／１８：指摘いただいた誤字修正

どうやらみんな同じ意見のようででうんうんと頷いている。

↓同じ意見のようで

責任者の憂鬱・その6

「ほう、こいつは随分と快適になったな」

「だろ？」

「このシートの座り心地にも驚いたが、馬車自体の揺れもほとんど感じなくなっているな」

「まあね。結構苦労したんだぜ」

「このシート、ふかふかでなんだか眠くなる……」

「あ、師匠。それにリルも。よだれ垂らさないでくださいね」

「おぉ！　見て見て、すっげー跳ねるぜこれ！」

「こら、暴れるなって！　うっ……気持ち悪くなってきた」

さて、いきなり何事かと思われたかもしれないが、上の台詞は完成した馬車に乗った一同の感想である。

酒場の一件から三日という時間が瞬く間に過ぎ、ようやく鉄兵達は王都へと向けて出発した。そこで改造した馬車の初御披露目となったわけだが、評判は上記の通りなかなか好評のようで、鉄兵としても鼻を高くしているところであった。

ここで馬車がどういう仕様になったのかについて一応触れておくと、タイヤはしっかりとチューブタイヤにして溝を入れ、サスペン

ションは結局シリコーンオイルを使って仕上げている。オイル式のサスペンションの作成にはμm単位の精密な精度が要求されるので多少苦労はしたが、解析魔法で分子単位の把握まで出来てしまう今の鉄兵にとってはまさに多少の苦労であった。

シリコーンオイルとはなんぞやと問われれば、簡単に言えばケイ素と酸素の化合物である。熱に強く、粘度が調整しやすいオイルで、グリースやらが一般的であろうか。ケイ素はそこらの鉱物の中に含まれている物体なので、魔法の原理に気がついた今の鉄兵には作るのは簡単であった。ついでにシリコーンオイルからの派生でワックスも作って磨いておいたので、馬車はピッカピカである。

ちなみにシートの牛革は、どうにも構造が複雑で上手く加工魔法が働かなかった。なので手縫いで仕上げたわけであるが、出来は上々である。裁縫なんて出来そうもなさそうな鉄兵であるが、意外な事にこれがかなり得意だったりする。

なぜ得意なのかといえば、父親の町工場に放り込まれて作業に注意を要する機械を操ってからは直ったものの、それ以前の鉄兵は結構なドジ属性の持ち主だったりしたからである。それ以前はしょっちゅうそこらに服を引っ掛けてほつれさせては母親に縫ってもらっていたのだが、あまりにもしょっちゅうの事だったので、不意に母親が見せた穏やかな顔でイラッと青筋を立てた顔色が子供心にトラウマになり、自分で縫うようになって無駄に裁縫の腕が上がったというわけである。

とまあ馬車に関してはこんなところである。なんだか今回は完全に趣味に走ってしまって自分にしか再現できそうに無いものを作ってしまったが、まあ技術力のデモンストレーションになるし、王都に着いたら元に戻せば良いだろうということで、鉄兵は思わず調子

に乗ってしまった自分をごまかす事にする。これが若さゆえの過ちというやつであろうか。

さて馬車の説明が長くなってしまったが、前述の通り、鉄兵達は王都へと向けて再出発をした。

気がついた人もいるかとおもうが、その馬車の中にはアルテナも乗っている。他の山賊達はといえば、武装解除こそされているものの、各自馬に乗っての同行というこれまた比較的緩いと思われる措置を取られているわけだが、その中でもなぜアルテナだけがさらに緩く馬車に乗って楽をしているのかといえば、やはり人質だからという理由だそうである。一応。

なぜ一応が付くのかといえば、なんだかもう訳が分からないくらいアルテナは一行に馴染んでしまっていて、そんな感じがしないからである。作業を監督しているうちに仲良くなったのか、アリスは妹（というか弟）が出来たようにアルテナを可愛がっているし、リードにしても同世代の友人と接するようにかしましく話している。王都に着けば処刑台直行のはずの囚人とここまで仲良くなるというのは鉄兵としては異常な事の様に思えるのだが、それが正常なのか異常なのかはこの世界の住人として日が浅い鉄兵にはまだまだ計り知れぬところであった。いやどう考えてもおかしいとは思うのだが、変に厳しく扱われるよりは気が楽だったので鉄兵としては深く突っ込まない事にしていたりする。

ちなみに村での三日間については、鉄兵としてはあまり思い出したくない思い出なのかといえばそうでもない。あの酒場の一件以来、次の日も、その次の日も、あの手この手でシロに挑んでは試合に勝って勝負に負けるという勝負を繰り返したりしたのだが、勝負の後に罰ゲームのように聞くシロの歌う恥ずかしい詩も何度も聞けば慣

れてしまい、仕舞いには酒場のおっさん達と杯を片手に仲良く肩を組んで盛り上がったりと、なかなか良い思い出になっていたりする。

さらにちなみに結果的に鉄兵はシロに良い様に遊ばれたわけだが、それで鉄兵の評判が下がったかといえばそんな事は無い。竜人族は誰もが文字の通りの一騎当千の強者で、千人の人間族を相手にしても負ける事が無いような種族である。そんな人型形態の時でさえタイマンで人間族が勝つ可能性は皆無と言われているような種族を相手に、魔法を使えば一泡吹かせ、生身の状態でも見劣りしない肉体能力を示した鉄兵は、シロの歌う詩が誇張されたものではないのだと自ら裏付け、さらには一緒に盛り上がる事で親しみやすい庶民派である事を印象付けたりと、むしろ評判はうなぎ登りのようである。

さてさて、ここでようやく冒頭の場面に戻るが、鉄兵達の旅は非常に順調に進んでいた。

武装が解除されている状態とはいえ一見して２０人近い護衛のような一団に守られた王家の馬車を襲撃するような命知らずは現れなかったし、自然動物も人の気配の多さになりを潜めて出てくる事は無かった。とはいえ人数が増えたので足がやや遅くなったのだが、そこはどうしようもない事である。

そんな訳で非常にのんびりとした旅になったわけなのだが、その馬車旅の間中、馬車の中で鉄兵が何をしていたかというと、まずはのんびりと時計作りをしていたりした。作りたいなとは思っていたのだが、それよりは（個人的に）緊急性が高い馬車改造にかかりっきりになってしまっていて延び延びになっていたのだが、ようやく作業に入れるようになったというわけである。

というわけで鉄兵は鼻歌を歌いながらのんびり時計を作り始めた。

ちなみに作るのは腕時計ではなく懐中時計である。なぜ懐中時計かといえば、それは高校時代の時にばらして遊んだ思い出があり、一番構造的に慣れ親しんでいたからというだけである。

時計といえば、大雑把に分類して機械式とクォーツ式があるわけだが（簡単に言えばアナログとデジタルの違い）、クォーツ式の時計は水晶振動子という水晶の圧電効果（圧力をかけると電気が、電気を通すと圧力が発生するという原理）を利用したものである。そして水晶といえば思い当たるのは闇玉・光玉である。圧電体と闇玉・光玉の特性はあまり似てはいないものの、そこら辺が関係あるのかもしれないなどと思いながら鉄兵は鋼を粘土のようにちぎって時計の部品をこしらえていく。闇玉・光玉については時計を作った後で解析してみようかなと思った。

揺れる馬車の中ではさすがに時計を組み立てる事は出来ないので、とりあえず材質を調整したりしながら部品だけを作っていく。組み立ては昼夜の休憩時間のお楽しみである。とはいえ時計を作る上での一番の問題はこの世界の一日の正確な時間が分からない事なので、正確な時計は正直出来上がりそうに無い。正確な正午の時間でも分かれば二つほど時計を作って調整していけば正確な時計が作れるのだが、さてどうしたものだろうか。

と、そんな事を考えていたら、その横で耳をひょこひょこさせながら興味津々に鉄兵の作業を見入っているアルテナの姿が眼に入った。現代人である鉄兵と違ってアルテナは野生児である。獣も混じっているわけだからひょっとしたら野生の勘でわかったりしないかな？　などと失礼な事を思ってしまった。

というわけで一応聞いてみる。

「ところでアルテナさん」

「……ん？」

相変わらず集中力は抜群のようで、やや遅れて自分が呼ばれた事に気がついたアルテナは鉄兵を見て不思議そうに首を傾げる。

「太陽が一番上に来る瞬間ってわかったりしないか？」

「ん？　まあ大体なら分かるけど……」

どうやら正確には分からないらしい。

まあそりゃそうですよねーと思ってコツコツやるかと諦めかけた鉄兵だが、その視線の脇に今度はすーすーと穏やかな鼻息を立てて寝入っているシロの姿が映った。なんだかんだで万能なシロの事である。ひょっとしたら分かるのではないだろうか？

「んじゃシロは？」

「ん……呼んだか？」

というわけで聞いてみると、寝入っていたはずのシロは鉄兵に呼びかけに機敏に反応し、何事も無かったかのように眼を覚ました。ちなみにシロとアルテナ以外の面子はシートの座り心地の良さのためか、すっかりと寝入っている。試しはしないが、この面子ならリード以外なら話しかけたら何事も無かったかのように起きそうな気もする。

まあそれはともかく本題である。

「シロは太陽が一番上に来る瞬間って分かったりしないか？」

「分かるが、そいつがどうかしたのか？」

ひょっとしたらと思ったが、本当に分かるらしい、さすがはシロである。伊達に長生きしていない。

「ちょっとね。今度協力してくれないか？」

「よく分からんが、まあ了解しとくかね」

やや不審そうな顔を見せたものの、無駄に探りを入れたりしないよく出来た大人であるシロは用件が終わった事を悟るとさっさと目をつぶって夢の世界へと帰っていった。ともかくこれで時計完成の目処は立ったようである。

そんな感じで時が過ぎ、昼の休憩を終えた後も鉄兵は耳をひょこひょこさせながら見物しているアルテナの横でコツコツと時計の材料を作っていたわけだが、ここでちょっと問題が発生した。いや問題というと失礼なのだが、午前中一杯は寝て過ごしていたリードの眠気が完全に覚めてしまったらしく、暇を持て余してなんか面白い事教えろーと迫ってきたのだ。

別に勉強を教えるのは良いのだが、正直なところ鉄兵の興味は時計に向いている。なので今日一日くらいは放っておいて欲しかったのだがさてどうしたものか。と思案を凝らしていた鉄兵は、ふと良い事を思いついた。鉄兵はこの前、元素からのイメージが魔力のロスを減らすのじゃないかという推測をした。これは自分では試せない事なので、丁度良いしリードに試してもらおうという話である。

「それより師匠。ちょいと実験に付き合ってもらえませんか？」

「実験？　なにするの？」

「上手くいけば、魔法使用時の魔力のロスが限りなくゼロになるかもしれない方法を思いついたんです」

「！？　なにそれ、ほんとなの！！」

「ほんとかどうか確かめて欲しいんですよ」

なかなか胡散臭い話ではあるが、いままでも常識外れな事をやっている鉄兵を見てきたリードである。やや半信半疑ながらも興味津々のようで、実験に付き合ってもらえることになった。さて、どんな事を試してもらったのかといえば、手始めに水は酸素と水素という極小の物質で構成されている事を教え、後はひたすら水を解析魔法で解析してもらい、その存在を確認してもらっただけである。

最初は半信半疑のリードだったが、解析魔法の下りを聞いたところで顔色が真剣なものに変わり、真面目に取り組み始める。どうやら解析魔法一つをとっても鉄兵はこの世界とは違う常識で魔法を行使していたらしく、通常の解析魔法は鉱石の中になにがどれくらい含まれているのかとか、この水に毒素は含まれてないかとかの表面的なものを調べるためだけの魔法だったらしく、そこまで詳細に解析するという発想は無かったようである。

というわけでリードはコップに注いだ水に手を突っ込み真剣な表情でムムムと唸るちょっと滑稽な作業に没頭し始め、鉄兵は時計の部品作りに戻る事にした。

やがて夕暮れが差し掛かり、野営の準備のために馬車を止めた頃には鉄兵の作業も終わり、リードも何かを掴んだようだった。

「それじゃ師匠。試してみましょうか」

「うん……」

山賊達や兵士ＡＢＣがてきぱきと野営の準備を進める中、鉄兵とリードは完全に仕事も無くやる事が無いので、若干後ろめたさを感じながらもさっそく実験の成果を確かめる事にした。

「その前に、師匠は水の魔法はどれくらいのが使えるんですか？」

「んー……この前鉄兵がやった家一軒の火事を消しちゃえる魔法の半分くらい？」

人より随分と多い魔力を持っているのにその程度とは意外であるが、大規模魔法を使うにはそれほどロスが大きいという事なのだろう。

「んじゃ、とりあえずその１０倍くらいを目標に試してみましょうか」

「１０倍！！　ちょっとハードルが高くない……？」

「大丈夫、ロスが無くなってるならそれくらい出来るはずですよ」

「えーと……わかった。やってみる。倒れたら助けてね」

倒れるというのは魔力が枯渇すると気を失うという事なのだろう。前にもやったが魔力賦与で魔力を分け与えれば意識は戻るはずである。

「了解。それじゃ、かるーく試してみてください」

「う、うん……」

なぜだか気後れしているリードだが、ようやく意を決したようで目を閉じてイメージ作りに集中し始める。

「水の精霊、水をいっぱい作り出して！」

やがて集中を終えたリードはカッと目を見開き、森に向けて指差し、高らかに叫んだ。やや間抜けな言葉に聞こえるが、これが体内の精霊に意思を伝える言葉なのだろう。自動翻訳が働いている鉄兵にはそう聞こえたが、本来これは精霊語で詠唱されているはずである。

途端に森を覆わんばかりの巨大な水の塊が宙に生まれ、地面に落ちて森を濡らした。地に落ちた水が森と地面に吸収され切らずにこちらまで跳ね飛んできて足もとを濡らしたのは誤算だったが、どうやら実験は成功のようである。

「お見事！」

自分の理論が実証されて鉄兵は上機嫌だった。やっぱりそういう事だったのかなどと鉄兵はのんきな感想を漏らしたのだが、周囲の反応は鉄兵の予想を遥かに超えて深刻なものだった。

まず鉄兵が気がついたのはリードの変化だった。

「どうですか師匠。魔力のロスの感触は」

その状況に気がついてない鉄兵は、軽い気持ちでリードに話しかけた。が、リードは反応をしない。そこで少し様子がおかしい事に気がつきリードの顔を覗き込むと、そこには鉄兵の予想だにしない反応が起こっていた。

「……師匠？」

リードの表情を見て鉄兵が戸惑いの声を上げる。リードは泣いていたのだ。

放心したように水が生まれ出た場所に目を彷徨わせ、声も出さず、身体をピクリとも動かさず、両の眼の端から静かに一筋の跡を作っていた。

なにが原因か分からず戸惑う鉄兵は、助けを求めるように周囲を見回す。

すると、そこでも鉄兵の予想とはやや違う反応が起こっていた。

周囲はシーンと静まり返っていた。皆一様に動きを止め、こちらに驚いた様子で注目している。そこまでは分かる。いきなり大魔法を使ったわけだから驚くのは当然だろうが、それにしても反応がおかしい。なんというか、剣呑な雰囲気なのだ。

「姫様……」

「わかっている」

そんなやり取りをイスマイルと交わしたアリスがこちらに寄ってくる。なにやら表情が酷く硬くて鉄兵に不安を呼び起こさせる。

「鉄兵。今のはどういうことなのだ？　なぜリードがあのような魔法を使えるのだ？」

「それは……」

詰問口調のアリスに鉄兵はたじろいだ。これほど怖い表情を見せるアリスははじめてである。なにやらやばい事になっているようだが、鉄兵としては他に対応の仕様も無いので素直に実験の内容を話す。

「そうか……鉄兵。すまんがこれは緘口令を出させてもらう。皆の者もいいな！」

話を聞いたアリスはやや憂鬱そうに宣言した。兵士達は敬礼し、山賊達も厳しい表情で頷いている。

場の雰囲気。そしてアリスのその一言で、鉄兵はようやく大体の事情を察した。

「早すぎる知識……って事か」

「……そうだな。そういう事だ。リードがオスマンタス導師の娘でよかった」

鉄兵は山賊すら無傷で捕らえ、その結末を思って心を痛めている

ような人畜無害な人物である。この世界ではある意味ヘタレの代名詞のような人物ではあるのだが、だからこそアホみたいな魔力を持ってたり常識外れの大魔法を使ったりしてもこの国にとって問題は無いと思われ、許容されている状態である。もし鉄兵がアリスの国に害するような存在であったならば、当然アリスは容赦しないだろうし、国を挙げて討伐すべき敵対者として扱われていただろう。

とはいえアリスも以前認めた通り、今の鉄兵は国を挙げても討伐できるかどうか定かではない力を持っているのである。そして鉄兵ほどではないが、魔法を使えるものなら誰もが大魔法を使えるようになってしまってはどうなるだろうか？

魔法を使える人物が全て善人というのはありえないだろう。そして悪人が力を手に入れれば、そこに待っているのは世の混乱というやつである。

力というものは制御できなくては意味が無い。力を持つ者の暴走が予想され、治安を預かる国にそれを制御する術が無い現状では、鉄兵の見出した魔法の真理の一部であるこの知識は早すぎたというわけだ。ましてやコップ一杯の水に手を付けて数時間ウンウン唸ってればいいだけという、誇大広告も真っ青な非常にお手軽な方法で魔法の威力が何倍にも跳ね上がってしまう真理など、危険過ぎて一般に開放など出来るはずが無い。

研究者としての性か、どうにも理論の真偽が気になってしまい、後の影響を考えない早まった行動をしてしまったようである。反省する事しきりである。

「ごめん、ちょっと考え無しだった……」

「過ぎた事だ。次からは事前に相談するのだぞ」

アリスの表情から強張りが取れ、労わるような笑顔が現れた。

実感はないが、鉄兵はあわや世の中を大混乱させるかもしれない失敗を犯したのだ。そんな人物にかける言葉としては優しすぎて、逆に鉄兵はその笑顔にますます落ち込んでしまった。

落ち込む鉄兵を置いて、呆けたリードを連れてアリスが去っていく。リードの様子も気になったが、鉄兵はそれ以上に自分の失敗に落ち込んでしまい、とても動けそうにはなかった。まだリードの魔法でぬれている地面に頭を抱えてへたり込む。

「よう。頭が良いのも大変そうだな」

どんよりと落ち込んでいると、アリスと入れ違いにシロがやってきた。背中越しに話しかけられる。

「……頭が良いどころか、今回は間抜け過ぎた」

「あっはっは。なんとかと天才は紙一重ってやつか。今回はなんとかの方に偏っちまったようだな」

慰めに来たのかと思ったら、どうやら止めを刺しにきたらしい。睨んでやろうかとシロの方を見たら、そこにはいつも以上にわざとらしくニッと笑っているシロの姿があり、単純な鉄兵はなんだか毒気を抜かれてしまった。怒ろうとしていただけに、湧きだしたその気力分が空元気へと変換されて少し元気が出てしまい、再び落ち込めなくなってしまう。

仕方ないので鉄兵は落ち込む事をやめ、仰向けに寝転がって空を見上げた。空には先程の魔法の影響か、薄く虹がかかっていて、ますます癒されてしまう。地面は濡れていて、背中は酷い事になっているだろうなぁとは思ったが、それすらも大地の感触が心地よくてなんだか何かに満たされていくような感覚を受ける。

というわけで基本的に落ち込むのが下手な鉄兵は、早くも復活してしまった。アルテナの問題はまだ未解決なので頭が痛いが、今回は今後気をつければ良いだけのことである。

元気が出たら、次に気になったのはリードの事だった。

「リード、泣いてたな」

「そうだな」

「なんで泣いてたか、シロにはわかる？」

「さてな。俺はリードの嬢ちゃんじゃないからわからないさ」

シロの言葉はつれない。シロはその言葉を最後に鉄兵に背を向け宿営地の方に歩いていく。このままツンだけで終わるのかと思ったら、シロは最後に少しだけデレた。

「ただまあ、リードの嬢ちゃんの親父さんは精霊族の宮廷魔術師長なんだろ？　その娘は半精霊族でいくら頑張っても父親の足元にも迫れない実力しか持っていなかった。

それが親父さんを超えるような魔法を使えるようになったんだから、泣きたくもなるんじゃねえか？」

背中越しにシロが語る。その発想は鉄兵の中には正直なかった。だが、言われてみるとそんなものなのかもしれない。そうであれば良いのだが。いやそうであって欲しい。

「そんなもんかなっと」

その言葉にますます元気が出てきた鉄兵は、足を高く上げて振り下ろし、その反動で起き上がった。魔法で濡れた服を乾かし、染み込んだ土を分解して払う。

「さてな。ま、そのうち分かるさ」

まあとりあえずはリードの様子を見てみない事には何もわからないだろう。鉄兵はその言葉には何も応えず、シロと並んで歩き始めた。

責任者の憂鬱・その６（後書き）

１２／１０：ご指摘いただいた誤字修正
「依然認めた通り」→「以前認めた通り」

責任者の憂鬱・その7

結論から言うと、シロの推測は正しかったようである。

やや心配しながらシロと一緒に宿営地に引き上げたら、そこにはにへら～っとこれ以上無いくらいに表情を緩ませて恍惚の笑みを浮かべているリードの姿があったのだ。宙をぼーっと見つめていたと思ったら、その様子を心配して擦り寄るリルをガシッと捕まえて思いっきり頬擦りしたりと非常に楽しそうである。可愛らしくはあるのだが、薄気味悪い事もこの上ない。

捕獲されてキャンキャン吼えるリルには悪いが、鉄兵としては今のリードには正直近づきたくなかった。というわけで心配した事すらアホらしくなった鉄兵がさっさととんずらこいて時計作りに戻ったのは余談である。

翌日にはリードの様子は元に戻っていた。いや元に戻るどころかパワーアップしていたという表現のが正しいだろうか。

具体的に言えば、

「もっと元素っていうのについて教えて！！」

と断るのが非常に難しいと感じさせるキラキラとした目で迫ってきて鉄兵を悩ませたのである。

とはいえ昨日の一件があったのでこれ以上教えて良いものかは自分の判断では下せない。そこでアリスに聞いてみたところ、許可は意外にもあっさりと下りた。あまりにもあっさりアリスが「構わな

いぞ」というものだから、鉄兵としては逆に驚きである。なので理由を聞いてみたところ、答えは以下のようなものであった。

「今更というのが一番の理由だな。リードはすでにその真理を知り、学習法を学んでしまっている。遅いか早いかだけの違いならば大差はなかろう。

ただし、くれぐれもリード以外にその真理を教えてくれるな。リードはオスマンタス師の娘で、次期宮廷魔術師長として迎えれば問題は無い。だが、もしリードがオスマンタス師の娘でなかったら、私はあの時その場でリードをこの手にかけねばならなかった。

その事実は忘れないで欲しい」

とまあそんな理由らしいのだが、理由のついでに今更ながらに薄氷の上を渡っていたという事実を思い知らされてしまったりもした。まだ見ぬリードの親に感謝である。

そんなわけで鉄兵は黒板モドキとチョークをそこらの物体から作り上げ、それを使ってリードの家庭教師に専念する事になった。もはや師弟関係が完全に逆転しているわけだが、毎度の如くそこは気にしたら負けだろう。時計も組みあがり後はシロに協力をしてもらって一日毎に微調整をするだけなので、そろそろ闇玉・光玉の構造の研究をしたいとも思っていたのだが、これがリードの出世に繋がるとなれば、まあそっちの優先順位は下げても良いだろう。

ついでにアルテナが興味津々にリードの横で鉄兵の話を聞いているのだが、なぜかその様子をアリスも見ているというのに気にしていない様子なのでそれも気にしないでおく事にした。アルテナは魔法を使えないし、怖い話だが墓の下に直行する予定なので良いということだろうか。それにしても何にでも興味を示す娘である。

そんな感じに時は過ぎていき、三日後の正午。昼の休憩時間には無事正確な時間を刻む懐中時計が二つほど出来上がった。

「ありがとシロ。助かったよ」

さっそく出来上がった懐中時計を昼飯を摘みながらニマニマと眺める鉄兵であったが、それを見る周りの反応は少し冷めたものである。良く分からない丸い物体を眺めてにやけているのだから当然といえば当然ではあるが。

「まあそれは良いんだか、そいつは何なんだ？」

冷めた集団の代表として、シロが問う。

「ん、こいつ？　これは時計だよ」

「時計？　これがか」

鉄兵の言葉に反応したのはシロではなくなぜかアリスだった。

「そう時計。ほら、ここの長い針と短い針と細い針で今の時間を表してるんだ」

自分の気に入っているものに興味を持ってもらえれば嬉しいものである。というわけで鉄兵はちょっと前のめり気味にアリスに説明しはじめた。とはいえただの時計なので説明はすぐに終わったが。

「ふむ。これは便利だな。私も一つ欲しいところだ」

説明を聞いたアリスは大いに興味を持ったようだった。この世界

の時計と言えば日時計くらいしかなく、王都でも日の高さに合わせて教会が鐘を鳴らす程度のサービスしかないようである。なので機械が太陽の代わりを果たし、天候に左右されないこの機械式の時計は、考えてみれば画期的なものなのだろう。しかも一日の８６４００分の１という単位で正確に時刻を知る事ができるわけだから、アリスが興味を持つのは当然と言えば当然なのかもしれない。

それはさておき時計は二つある。鉄兵は一つあれば十分なので、一つは余っているわけである。余っているという事はいらないと言う事とニアリーイコールなわけで、欲しいならあげようと思うのが自然の発想であろう。

「いるならあげるよ？」

「いいのか？」

というわけで非常に気軽にそんな事を言ったのだが、鉄兵の言葉はアリスにとって予想外の事であったようだ。王族であるわけだし、プレゼントなどもらいなれていそうなので結構意外な反応である。

「いいよ。二つあるし」

「そうか。これはありがたい」

口調こそ固いものの、アリスは鉄兵の眼を見て本当に嬉しそうに微笑んだ。そんなアリスを鉄兵は思わずぼけっとみつめてしまったりする。こうも素直に喜んでくれるとこちらまで嬉しくなってきてしまった。女性に貢ぐ男の気持ちがちょっとだけ分かってしまったのはここだけの話である。

「しかし、これは商人達に需要がありそうなものだな。大量生産はできないのか？」

少し見つめ過ぎたようで、恥ずかしそうにアリスが話題を逸らした。鉄兵も慌てて話題に乗る。

「大量生産か。出来ない事は無いだろうけど時間がかかるかな？」

いまだこの世界の加工技術に触れていない鉄兵には少し予測は立て辛いが、なかなか厳しそうな気もする。とはいえ加工技術が低かろうとも工夫次第で引き上げる事は可能だろう。元の世界には時計職人という職業もあったわけだし、案外面白い産業が発達するかもしれない。

「商人で時計……ねぇ」

そんなことを考えていたら、不意にボソッと呟くシロの声が聞こえた。シロにしては珍しく、遠い眼で思い出し笑いをしている。

「どうしたシロ。なんか気持ち悪いぞ」

「ん？　あぁ。いや、ただちょいと昔の連れを思い出しちまってね。あいつもネズミだ蛇だと変な言い方で随分時間を気にしてたなってな」

鼠や蛇で時刻を表すとは、十二支による不定時法のことだろうか？　なんとも時代を感じる話であるが、間違いなく東洋系の時間表示である。昔の連れとは噂のサクヤさんのことであろうか？

「そういやあいつも最初に会った時は川を流れてやがったな。サク

ヤ嬢といい、あいつといい、テツといい、川を流れてくる奴は変な奴ばっかだねぇ」

これもシロにしては珍しく、楽しそうに昔話をポロリと零した。

「変な奴言うな……って、ん？」

ツッコミをいれようとした鉄兵は、思わずスルーしそうになったシロの台詞を拾い上げ、その違和感の意味を考えた。

シロは今、サクヤと自分の他に『あいつ』といった気がする。という事は川を流れてシロに拾われたという奇特な人物が自分とサクヤの他にもいたということではないか？　しかも、その人物は東洋系の時間表記を主としていたという話である。

不意に砕けたパズルの最後のピースが集まったような感覚を受けた。

言われてみればおかしなところは色々あった。サクヤが現れたのは八百年前と言われているが、八百年前といえば鎌倉幕府の時代である。シロが着ている着流しは江戸時代の商人文化が発祥のはずであるし、茶道が誕生したのは安土桃山時代のはずだ。あとついでに大漁旗も江戸時代くらいからだったはずである。

考えてみればすぐに気がついたことなのだが、サクヤが教えたにしてはシロの知識は時代にあっていない。そして先程のシロの発言から予想できる答えは一つだろう。

つまり、自分とサクヤの他に、日本人的な人物がもう一人いたのではないだろうか？

「シロ、あいつって誰の事なんだ？」

好奇心を抑えきれず、それでもなんとか感情を抑えて鉄兵はシロに聞いてみた。

「ん、キヘイの事か？」

「キヘイ……？　シロはキヘイ・アーカシャとも知己であったのか？」

シロの口から漏れた名前に一番に反応したのは鉄兵ではなくなぜかアリスであった。

「昔ちょいと世話した事があってな」

シロの返したそんな返事にアリスだけではなくその場にいる全員が感心しているようだった。どうやらかなりの有名人らしい。それにしてもキヘイは日本人っぽい名前だが、アーカシャといえばどことなくインド圏っぽい気がする。ひょっとしたら勘違いだったのだろうか？

「有名人なの？」

とにもかくにも聞いてみたら、その問いに答えたのはアリスではなくイスマイルであった。

「キヘイ・アーカシャといえば２００年ほど前に大陸外から流れ着いた人物であり、竜人族により隔てられた６つの領土の一つを統一した国・アマテラスの建国者です。独特の文化を持った国とだけ噂

は流れてきておりましたが、なるほど。シロ殿のその流儀はアマテラススタイルだったのですな」

「まあな。そういう事さ」

説明を聞くに、キヘイという人物はかなりの人物だったようである。余所者が一国を統一してしまうとはもはや御伽噺のような話にしか聞こえないが、それよりも神様になった人やら一国の建国者やらを世話してるとか、シロは一体何者なんだと突っ込みたくなってしまったのはここだけの話である。

それにしても……

「アマテラス……ねぇ」

アマテラスと言えば日本人の鉄兵の頭に浮かぶ漢字は天照しかない。天照大神といえば日本の土着信仰である神道の主神である。まさに日本由来の名前だが、その国名を付けた建国者の名前がアーカシャとはこれいかに？

と、そこまで考えたところで一つ思い浮かぶ事があった。シロに自分の名前を教えた時、シロは香坂鉄兵をコサカテヘイと訛って発音していた。つまり、キヘイ・アーカシャというのも訛った発音なのかもしれない。アカーシャだから明石屋とかだろうか？　シロの着流しや時計の話からの流れを考えるに、どうも元商人だったっぽいし、ありそうな話だ。

さて確かめてみたいところだがどう聞いてみたらいいものだろうか？

「ところでその名前、発音あってるの？」

他に聞きようも無かったので単刀直入に聞いてみる。妙な食いつき方をする鉄兵になんとなく事情を察しているシロ・アリス・イスマイルの三人以外はやや不審なものを感じたようだったが、そこは努めてスルーする事にした。

「多分あってねぇな。キヘイもテツと同じように最初は難しい発音の名前を名乗ってたからな」

事情を察しているシロがなんでもない事のようにさらりと返事を返す。こういう時のシロの空気を読む能力は本当にありがたい。

それはともかくやはり訛っていたらしいが、てそれならばどうやって本当の名前を特定したものか。

少し考えた結果、ものは試しとばかりに鉄兵は黒板を持ってきてそこに自分の名前である『香坂鉄兵』という字を書いてみた。

「これ、俺の名前。これで香坂鉄兵ってのが正しい発音と文字なんだけど、こんな文字に見覚えは無い？」

この世界の文字は英語のようなアルファベットに近い文字で形成されている。ただし文字数は２４文字とアルファベットより少しだけ少ないのだが。ともあれ今重要なのはそこではなく、漢字は明らかにこの国では使われていない文字と言う事である。そして一度でもそのキヘイとやらが漢字を書いたことがあるならば、シロならそれを覚えているんじゃないかなと思っての行動だったが、それは狙い通りの効果を表した。

「そいつはアマテラスの皇族文字に似てるな」

ダメ元だったのだが、シロの反応は鉄兵の思っている以上のものだった。どうやら漢字はアマテラスとやらの国の皇族専用文字になっているらしい。

「ほんとに！？」

「ああ。皇族文字で書くならあいつの名前はこうだったかな？」

とシロが鉄兵から黒板を受け取りささっとそこになにやら書き込んだ。

そして書き終わった後にひっくり返してこちらに向けられた黒板に妙に流暢に書かれた文字は……

『赤井桔平』

であった。これは、間違いなく日本人だろう。

「やっぱり……」

思わず熱中してその正体を探ってしまったが、こうして事実を目の当たりにすると逆にちょっと頭を抱えたくなってしまった。シロが会った一人目の日本人っぽい人が神様になり、二人目は一国の建国者にまでなっているとはある意味出来の悪いジョークである。

「で、テツよ。説明してくれる気はあるのか？」

苦悩する鉄兵の耳にそんなシロの言葉が聞こえた。気がつけば一

人苦悩する鉄兵に皆の注目が集まっている。シロ達三人以外の人達も事情が分からないなりに何かを察したようで、じっと鉄兵の動向を窺っている。

さて、サクヤもキヘイもほぼ同じ日本からこの世界に来た事は確定的である。それは薄々みんな……少なくともシロとアリスとイスマイルは感づいている事であるが、ここで公表して良いものであろうか？

「……そのキヘイって人も、やっぱりすごい魔力を持ってたの？」

その問いに答える代わりに、鉄兵は質問でそれに返した。とはいえその問いは答えを言っているものと同義なのだが、すでにほぼ見破られている身としては大差が無いだろう。

「いや、キヘイは普通の人間だったな。人間としちゃ優れてたと思うが、少なくともサクヤやテツのような能力は持っていなかったな」

シロの答えは中々鉄兵を迷わせるようなものだった。ここで桔平という人物が強大な魔力を有していたとなれば、原因は分からないものの事象としてはほぼ確定的にこの世界に迷い込んだ日本人が強大な力を手に入れていたという事実を証明した事になる。だが、それが違うとなれば話は別だ。

「……それなら、俺に言えることは無いかな」

色々考えた結果、鉄兵は推論を自分の胸のうちに押し留める事にした。少なくともサクヤとキヘイの二人が日本圏から来ている事は確定的だが、状況を考えるにそれが自分と同じ世界から来たとは確定が出来ない。それをカミングアウトする事により自分にかかる影

響が大きいと思われる以上、そこはまだ判断を保留するべきであろう。というのが鉄兵の判断である。

「そうか」

鉄兵の言葉に対するシロの対応はさらっとしたものだった。他の面子はそれでも話を聞きたそうな感じであったが、シロのあっさりとした態度に制されて言い出せないでいるようである。ここは自分の考えを押し通すべきだろうし、せっかくのシロのさりげない態度というアシストを無駄にする手はないだろう。

「それより、キヘイってどんな人だったんだ?」

というわけで鉄兵は話題を逸らす方向に行動する事にした。

「キヘイの事ねぇ……まあ、良い奴だったぜ」

すかさずシロが鉄兵の話に乗り、昼食の話題はシロが語るキヘイの話へと無事にシフトした。

シロが語ったキヘイの話は簡単にまとめると以下の様な話だった。

川に流れていたところをシロに救われたキヘイは今の鉄兵のようにしばらくシロに助けられて旅をしていたらしいが、やがて商売で成り上がり、その傍らで孤児院などを経営していたらしい。そんな風に地に根付いて暮らしていたらしいのだが、人柄の良さと腕っ節、ついでにお人好しが高じて自警団的意味合いのマフィアのボス的存在にしたてられてしまったらしいのだ。そこから色々あって軍を起こす事になり、三国志の劉備を地で行くような微妙な活躍をしつつもあれよこれよと知略を巡らし、ついには一国を平定してしまった

という話である。ちなみにキヘイの好物は文字焼きとやらだったそうな。鉄兵の知識の中にその食べ物の名前はなかったが、語感からするともんじゃ焼きみたいなものであろうか？

そんな小話を交えつつも鉄兵の旅はまだまだ続く。

さてそれからの旅は順風満帆と言ったところであった。問題があったとすれば、以前一度会った綿商人のニコライさん辺りが噂を言いふらしたのか、鉄兵は行く先々で顔が知られてしまっており、熱烈な歓待を受けてしまった事くらいであろうか。特に山賊に襲われた村から三つほど行った村からは、これは飯の種になるだろうと敏感に察した吟遊詩人がシロの詩を覚えて先回りして演奏して回っているらしく、奏者のシロと英雄扱いの鉄兵はアリスをも凌ぐＶＩＰ扱いをされてしまい、注目される事になれていない鉄兵は辟易としてしまった訳である。

王都が近くなれば村や町は次第に増えていくわけで、最後の方はほぼ毎日のように演奏を願う人々によって足止めされてしまったのが弊害といえば弊害であろうか。気分はもはや歌手のツアーをやっているような感じである。

さらには恐れ多くも王家の馬車を護衛代わりにしようと企む商人やら旅人やらが鉄兵達の馬車の後ろからぞろぞろ着いて来て騒がしい事この上ない。それによる弊害は少ないし、アリスも特に気にしていないようだったが、問題は風呂に入る時であった。どんだけ人がいようとも鉄兵達野郎勢は裸で行水しようが問題は無いが、アリス達女性陣にとっては大問題である。

流石にそんな状況ではアリスを天幕一枚隔てただけで入浴させるわけには行かない。というわけで鉄兵は毎日コツコツと石造りの軽

い掘っ立て小屋を作る羽目になったのが弊害と言えば弊害だろうか。その作業自体はめきめきと力を付けてきているリードが手伝ってくれたりとそれほどでもないのだが、そのために早いうちから野営の準備を始めるわけでますます足が遅くなってしまうというわけである。

そして鉄兵的に一番の弊害は、アリス・リード・アルテナの三人が入浴している最中の事であった。

取り巻きが増えたために石造りの掘っ立て小屋まで作っているわけだが、それでも安心ができないと言うわけで、いつもは馬車に押し込められて見張られていた鉄兵達も護衛に駆り出され、山賊達に混じって数時間ぼけーっと歩哨の真似事をするはめになったわけである。

それだけなら鉄兵にとっては苦労でもなんでもないのだが、取り巻き連中には３００m内は立ち入り禁止にしているのでそれほど聞こえないだろうが、５０m内という範囲で警備している鉄兵には入浴中の三人の会話や物音が聞こえてきてしまってなんとなく恥ずかしいのだ。何度も言うようだが鉄兵も年頃の男の子なのでそこは理解していただきたい。

それにしても、人質のはずのアルテナもアリスと一緒に風呂に入っているわけで、もはや人質と言う言葉の影も形もありはしない。風呂場から聞こえる楽しそうな三人の声を聞くと非常に微笑ましい気分になるわけだが、それだけに鉄兵としては色々と悩ましいところであった。

簡単に言えば、重罪人というイメージと山賊達のイメージが本気で重ならなくなってしまったのである。

これまで一人でどうにかしたいものだと悩み続けていた鉄兵だが、そんなかしましい三人の声を聞いているとなんだか馬鹿らしくもなってきてしまった。今日の護衛のお供は山賊達の副頭領的存在。オールバックの執事的紳士、マーティンさんである。そんな事も働いて、これまで我慢していた質問を鉄兵は思わず聞いてしまった。

「マーティンさん……一つ聞いていいですか？」

「なんなりと」

これから言う言葉はある意味非常に失礼な事である。だが、今まで悩み続けていた鉄兵にはその疑問がどしても押さえつけられなくて、思わず聞いてしまったのだ。

「アルテナはほんとに罪も無い人を殺すような悪人なんですか？」

鉄兵の言葉を聞いたマーティンは「ふむ」と一声だけ漏らし、深いため息をついた。

「テツ様。どうやらあなたは少し勘違いをされているようですね」

やがて呼吸を整えたマーティンが口にした言葉は、鉄兵の予想とはかなり違っていた。

「私ども山賊は確かに国の法に従えば重罪人ですが、あなたが想像しているものとは少し違います。

具体的に申し上げますれば、我々は確かに無辜の民から搾取をしておりますが、罪無き堅気の方々に手をかけたことはございません」

青天の霹靂とはこの事であろうか。マーティンの台詞は、これまでアルテナたち山賊団に対して持っていたイメージを１８０度変えてしまうものであった。

「それって……」

「我々は確かに生きるために脅迫に近い形で日々の糧を手に入れております。

とはいえ我らは腐っても元騎士。我らが生きながらえるために民衆を苦しめるとするなればそれは本末転倒と言うものでございます。

ゆえに普段は民の平穏を守ると言う条件と引き換えに対価をいただいているのですが、今回の件に関しましても、やむ無く村を襲ったまでなのです」

なにやら難しい言葉で言われてしまったが、簡単に言えば『俺達は堅気に手を出したりしないから誤解しないでね。ただあの時は緊急事態だったから徴発したけど』ってところであろうか？

とりあえず一つ一つ解決していく事にする。

「えっと。それはつまり、普段は用心棒的な事をして報酬をもらってて、無闇に略奪行為はしていないって事？」

「さすがは聡明なテツ様で御座います。仰られたように我らは本来、領主どもの手が回らぬ地を非合法的ながら収める事により対価を戴いております。我らは元騎士であり、慕われていた民衆に匿われつつ生きながらえている存在と言うのが正しいでしょう。

ならば、罪無き民から無法に略奪を行えば今まで生きながらえていなかったと言うのは分かっていただけると思います」

これはつまり『国が敗れてゲリラ的になってるけど、元領民の好意によって生きながらえてます。だからその人達から略奪するような馬鹿な真似をするわけないじゃん』ってとこだろうか？　自由気ままな山賊家業が繰り広げられているのかと思ったら、なかなか世知辛い話である。なんだろう。アルテナ達の組織は山賊と言うよりか、日本的に言えば戦国時代的にいえば野武士、現代風に言えば昔気質の任侠集団のようなもののようである。

「それじゃ、なんであの村を襲ったの？」

「それにつきましては……申し上げにくい話ではありますが、我ら１８人はアルテナ様を保護に参った部隊なのです」

「はあ」

いい加減長いのでここからは要約をまとめる。保護というから少し緊張したが、マーティンの話を聞くに、アルテナがただ単に家出をして王都見物にきたのがそもそもの話らしい。そこで親馬鹿な山賊団の元首領兼アルテナの親父さんが親馬鹿っぷりを発揮して山賊団で最強の１８人もの集団を送り出してアルテナの捜索に当たらせたらしい。

マーティンはアルテナを無事確保して説得にも成功し、本拠地に戻るところだったらしいのだが、そこで一つ問題が発生した。その問題が何かと言えば、山賊団精鋭の一人であるゲハルトが病にかかってしまったのだ。

ゲハルトは例の決闘の時に一番簡単に鉄兵が倒した相手であるのだが、その事実になるほどと頷く。結局ゲハルトの病は何とか治ったのだが、治療費や滞在費などで路銀がそこを尽き、手っ取り早く

稼ぐためにあの村で山賊家業を働いたと言うのが事の事実であったようである。

話を聞いてみれば納得できる部分も大いにある。あの村の住人に怪我人はいなかったし、家を一軒燃やしたのは最小限で最高の恫喝効果が得られるためであり、むしろ下手に被害を出さないための配慮であったらしい。

１８人分の旅費と言えば大層なもので、生半可な脅しで下手な事をすれば却って隠したがるほどのものらしい。とはいえ農民に限らず、どの階級でも蓄えというものは隠しているもので、あの襲撃はそのへそくりを出させるためのものだったとの事である。

まあ略奪を徴発と言う言葉に変えれば、この文明レベルの世界なら普通にやってそうな話である。とはいえそれでも罪は罪だが、鉄兵の世界の法で言えば銀行強盗を働いたものと同じようなレベルであろうか。この世界では死罪かもしれないが、元の世界では人が死なない限り死刑になるようなものではない。まあそれでも重罪だが。

ここで一つだけ分かったのは、この山賊団は鉄兵の基準で言えば死罪にあたるような事はしていないと言う事である。そしてそれは鉄兵を悩ませる最後の呪縛を解くものであった。

確かにアルテナ達は罪のある行為をした。だが、この世界の法ならともかく、鉄兵の倫理的にはぎりぎりセーフで助けても良心の呵責には囚われないものなのだ。

この結論に達するまで、長い間時間がかかってしまったものである。ここでやはり一人で問題ごとを抱えていてもろくな事が無いと悟った鉄兵だったが、そのあとで色々と思考を巡らしアルテナ達山

賊を助ける筋道を考え込み、その道筋を見出した結果、本当に問題ごとは一人で抱えるもんじゃないなという事実をしみじみと考えさせられてしまったりした。

アルテナ達を救うには法を破って脱走させるか、特例を作らせるしかない。特例を作るには主に二つの方法があり、一つは権力者の腕力である。だがそれは民衆に不満を残し、後の争いの種になるものだ。つまりは、いつの時代でも平和的な解決方法はもう一つの方法しかない。それはつまり、民衆の支持を得る事である。それには色々と工作が必要なわけであるが、気がつけばそれはすでに用意されていたのだ。

そんな訳でいよいよ明日は王都に到着するというその日の夜。鉄兵は自分で考え付いた山賊救済プランの答え合わせのためにとある場所を訪れた。

青く包み込むような月の光が落ちる丘の上。涼やかな風が草を揺らしてささやかなお喋りを囁くその場所に、穏やかにギターを鳴かせ、月見に興じるシロの姿がそこにあった。

「よう。どうした？」

静かに近づく鉄兵に、振り返りもせずにシロが問う。

「ちょっと相談があってね」

「ほう。相談ねぇ」

鉄兵はシロの横に並んで座り、持ってきた杯を一つ差し出した。ちらりとそれを見たシロはそれを受け取り、鉄兵が持ってきた瓶を

傾け杯を満たす。酒の種類はワインではなく、とっておきであるアルコール度の高いスピリッツとでもいうべき蒸留酒である。

シロに返礼をもらい杯を満たした鉄兵は、軽くそれを口にあて、滑らかになった口を開く。

「実は俺、アルテナ達を助けたいと思ってるんだ」

「そいつは難儀な事を考えたもんだな」

シロはちびちびとを飲みながら、いかにも他人事と言わんばかりに軽い調子で相槌を返した。

やがて互いに杯が乾き、瓶を傾け互いの杯を満たす。

「どうしたらいいと思う？」

「さてね。お願いでもしてみりゃいいんじゃねえか？　王様によ」

「そんな簡単にいくと思うか？」

「簡単かどうかはわからんが、やってみなけりゃなんだって始まらないさ」

くいっとシロが杯を空け、無造作に差し出す。

その杯に、鉄兵は無言で瓶を傾けた。

「テツよ。一つだけ言っておくぜ。

人を本当に助けるなら、それは助けたやつの人生をそのまま背負

い込む覚悟を持つべきだ。おまえさんにはその覚悟があるのか？」

「……あるって決めた」

シロはその答えを聞くと、再びくいっと杯を干した。干した杯を地面に置き、そのまま立ち上がり背を向ける。

「ならば、後は進めばいいさ。他の事なんて気にするもんじゃねえよ」

背中越しに軽く手を振りシロが去っていく。

「シロ。ありがとう」

その背中に、そっと鉄兵は呟いた。

責任者の憂鬱・その7（後書き）

国名「アマテラス」は公募からでゅら様にいただきました。
なお、今回分かる人しか分からないお遊びを入れておりますが、この作品はフィクションであり実在の団体・名称及び他作品との関連性は（以下略

１２／１４：指摘いただいた誤字をいっぱい修正
１２／１８：指摘いただいた誤字修正
鉄兵は自分で考え付いた山賊救剤プランの答え合わせのためにとある場所を訪れた。
↓山賊救済
１２／２９：日時計が不定時法という誤った記述を修正

決断の時

シロが去った丘の上。

鉄兵は一人月を眺めながら静かに、だが目まぐるしく頭を働かせていた。内容は無論アルテナ達山賊を助けるための方法である。

シロとの会話で自分の考えの方向性に自信は持てた。自分の立てた計画も悪くないだろう。だが、その計画が上手くいくという保証はどこにも無い。

残念ながら鉄兵は頭は良くとも社会経験というものが全然足りていない。おまけにここは異世界で、自分の考えがこちらの世界で通じるかなどさっぱり分からないのだ。ゆえにいくら計画を描き出したとしてもそれはまさに絵に書いた餅というもので、実現させるには少し心許ない。シロの背中には勇気をもらったが、改めて考えると自信がなくなってくる。

とはいえ、自信が無いなどといっている場合ではないのである。

思考の迷路に迷い込みそうになった鉄兵は、すくっと立ち上がって両頬を思いっきり掌で叩いた。

バチーンと良い音がして、アルコールが入ってほんのり赤く染まっていた頬が真っ赤に染まる。

「よし！」

景気付けに気合を入れた鉄兵は、即座に行動に移る事にした。明

日の昼には王都に到着する予定なのだ。うだうだ悩んでいる暇があったらともかく行動あるべきだろう。

「アリス。話があるんだけどいいかな」

というわけで宿営地に戻った鉄兵は、焚き火を囲んで皆と談笑していたアリスに声をかけた。一人で考えていてもろくな事にならないのは経験済みである。こうなったら恥も外聞も無くアリスに自分の考えを打ち明けて知恵をもらおうという狙いである。

「なんの話だ？」

声をかけられたアリスが鉄兵に微笑みかける。

「できれば内密に話したいんだけど……」

ここにはアルテナや山賊連中も揃っている。アルテナどころか山賊連中も、もはや仲間といっても違和感が無いほどに馴染んでいる。だからこそ、ここでそんな話はしたくない。

「……ハンス。アレを持ってきてくれ」

鉄兵の言葉を聞いたアリスは何か勘付いた表情を見せ、なぜか兵士にそんな命令を下した。兵士Ａが「ハッ！」と敬礼し、馬車の方に走っていく。アレとはいったいなんだろうか？

「話を聞くのは良い。だが、それはここでは言えないような話なのか？」

兵士Ａが走っていく様を見届けたアリスは、鉄兵に向き直ってそ

う言った。その顔からは微笑が消え、何の感情も読み取れない。これは……なんだろう。なぜか分からないが、試されているような気がする。

ふと周りを見れば、思い思いに談笑していた他の連中も話を止めてこちらに注目していた。その誰もが、こちらを窺うような視線を投げかけている。無論、その中にはアルテナを初めとする山賊達の視線も含まれている。

不意に鉄兵は金縛りにでもあったような感覚を受けた。そんな目で見られて初めて、鉄兵は自分が軽い気持ちで考えていたのかも知れないという事実を自覚したのだ。

心では助けたいと思い、シロの前では実際にそれを口にした。でも、それは、なんの責任も伴わない無責任な立場だったからこそ言えた、思えた事だったかもしれない。今はまだ、何の責任も無い。だが、ここで口を開き、その一言を吐き出せばもはや後には戻れないのだ。

当事者達の前で「助ける」等と口にすれば、責任は生じずとも、実行できない限り無責任な言動となる。ましてや人の生死がかかっている話なのだ。無責任では済まされないだろう。

だが、責任を恐れて怯んでいては何も出来やしない。

「いや、そんな事はないよ」

ここで揺らいだりしたら、多分一生後悔する事になるだろう。鉄兵は全身に気合を込め、呪縛を絶った。

覚悟を決めて、口を開く。

「俺は、アルテナ達に死んで欲しくないと思っている。だから皆に力を貸して欲しいんだ」

とうとう口にした言葉に返って来た反応は、しかし鉄兵の予想のうちにないものだった。

ふー……

鉄兵の言葉に対する反応は、重い重い溜め息だった。

「え、なんで！？」

色々反応は考えていたが、総溜め息はさすがに予想外だった。何かまずい事を言ったのだろうか？

「決断が遅いのよ！　馬鹿！！」

いち早く溜め息の渦から抜け出したリードが、感情的な言葉とともに手に持っていたコップを鉄兵に投げつけた。その言葉の意味に最悪の展開を思い浮かべた鉄兵は、リードが放ったコップを避ける事も受ける事も出来ずに顔面で受けてよろけて倒れる。

決断が遅いとはどういうことだろうか？　もはや手遅れという事なのか？

そんなネガティブな思考が鉄兵の脳裏を過ぎる。

だが、そんな鉄兵の不安は次の瞬間にはきれいさっぱり取り払わ

れる事となった。

地面に横たわり、最悪の事態を想起して硬直する鉄兵の耳に届いたのは、間の抜けた格好でひっくり返った鉄兵を笑う、爆笑の声だったのだ。

「ごめん、大丈夫？」

慌てて駆け寄ってきたリードの手を借りて身体を起こす。

「ごめんね。避けるか弾くかすると思ったから……」

「いや、それはいいけど、どういうこと？」

申し訳なさそうなリードに質問すると、リードはきょとんとした顔を見せた。いやきょとんとしたいのは鉄兵の方である。歓喜の声すら混じっているこの喧騒を見るに、どうやら手遅れという最悪の事態ではなかったようだが……いったいどういうことなのやら？

「不思議そうな顔をしているな」

声のした方を見ると、アリスが立っていた。手に丸めた一枚の紙を持って、なんとなく悪戯を企んでいる子供を思わす微笑を浮かべている。

「状況がさっぱり理解できないんだけど……」

「その答えは、これを読めば分かる」

そう言って、アリスは手に持っていた丸めた紙を差し出した。さ

きほど兵士Aに取りに行かせたのはこれだろうか？

とりあえずそれを受け取り、中を確認する。

「……なるほどな」

そしてその紙の内容を理解した鉄兵は、この騒ぎの理由を理解して思わず苦笑した。

鉄兵が渡された紙は、減刑嘆願書であった。署名欄にはあの村の村長に続き、村人達の署名がずらりと並んでいる。この書類が取り上げられればアルテナ達山賊は死刑を免れる事ができるだろう。

とはいえ、それは甘いだけの話でもないのだが。

「こんなもの、いつのまに？」

とりあえず気になったのはそこである。いや内容を考えればあの村にいる時以外には考えられないわけだが、その時の鉄兵はまだ自分の考えを外にもらしてはいないのである。どうしてこんなものを用意する気になったのだろうか？

「あの事件の次の日にシロに頼まれたのだ。鉄兵の性格ならいずれ必要になるだろうと言われてな。私もそう思ったから用意しておいた」

どうやら本当に何から何までシロの掌の上だったらしい。見透かされたのは癪であるが、今はシロに感謝である。

「って事はこの条件もシロのアイデア？」

「そういう事だ。この書類も鉄兵が言い出すまでは隠しておくように言われていた」

「決断が遅いってのはそういう事か……」

「そういう事。ほんとにアルテナ達が処刑されちゃうんじゃないかってドキドキしてたんだから！」

怒るリードに苦笑しつつ頭を下げる。なんというか、全くもってシロらしい話である。

ついでに先程話題に上った条件というのもシロらしい。

減刑嘆願書にはそのための交換条件も書かれていた。それはすなわち四日間の無料奉仕と多額の賠償金である。ここでなぜアリスがあの村での奉仕を三日程延ばしたのかという理由がわかったわけだが、問題はその次の項目である多額の賠償金についてである。

その賠償金は鉄兵が払うと記述されている。人を助けたいなら最後まで責任を負えと言うシロからのメッセージであろう。まあ、金で済むのなら楽な話といえるだろう。問題はその金がない事であるが。賠償金の金額は、具体的に言えば鉄兵の所持金の3倍程の値段である。

「えーっと、アリスさん。借金する事は……」

「もちろん、出世払いで相談に乗ろう」

「ありがとうございます……」

アリスに非常に良い笑顔を向けられてしまった。その言葉に鉄兵はほっとしたが、同時に甲斐性の無い自分自身にちょっと凹む。選択肢がなかったから仕方なかったものの、他の人ならさておきアリスに借金をするのは気分的に非常によろしくない。王都についたらバリバリ働いてさっさと返そうと心に誓う。

「にいちゃん」

凹む鉄兵の耳にアルテナの声が届いた。見れば、いつのまにかアルテナを中心に山賊達が横一列に並んでいる。

山賊達は片膝を立てて跪き、頭を垂れて騎士の礼を示した。

突然の山賊達の行動に躊躇う鉄兵を他所に、アルテナの凛とした声が響き渡る。

「我らの命を救っていただいたこと、心より感謝いたします」

普段はおちゃらけているアルテナの口から出たそんな真摯な言葉に、鉄兵はアルテナ達が本当に元騎士なんだなぁと少しずれた感想を思い浮かべた。目の前で繰り広げられている光景は、もはや元の世界では映画の中くらいでしか見られない光景なのだ。それが目の前で、しかも自分に向けられている。そうなると少し現実味が無い気がして、言葉の内容よりも鉄兵はその光景に圧倒されてしまい、そんな感想を思い浮かべてしまった。

「この嘆願書を出せば、罪一等が減じられて懲役１０年で済むだろう。よかったな」

その光景に圧倒されてしまい、反応出来なかった鉄兵に代わり、アリスがその言葉に応えた。

が、そのアリスの一言が鉄兵を冷静に引き戻した。

とにもかくにもアルテナ達は処刑を免れる事が出来るだろう。しかし、どうやら嘆願書が通ったとしても、懲役１０年と言う裁定が待っているらしい。それは非常に真っ当で素晴らしい話なのだろうが、鉄兵としてはそれだけで終らせるつもりは無いのだ。

正味な話、減刑嘆願書の存在は鉄兵の頭の中に無かった事なのだ。これにより鉄兵の目指すところには到達しやすくなったが、山賊達を１０年間牢獄に閉じ込めるという結末は鉄兵の思い描く結末には存在していない。

鉄兵が嫌がっていたと言うのに鉄兵と争ってまでシロが鉄兵の英雄譚を歌い続けたのは、恐らく鉄兵の名声を高めるための情報工作だろう。それは減刑嘆願書を通りやすくするためという理由もあったのだろうが、それだけではないだろう。本当の目的は、鉄兵が思い浮かべた計画を実行に移しやすくするためのアシストのはずである。

そして鉄兵は、そのシロのアシストを無駄にする気はさらさら無い。

「感謝のついでに、俺に忠誠を誓ってくれないか？」

だから、鉄兵は一歩前に踏み出す事にした。ここまではグダグダとしてしまったが、ここから先は自分の行動を揺らがす気はないし、一歩だって引く気はないのだ。

鉄兵の言葉に、マーティンをはじめとする山賊達一行からざわめきが起きる。

「どういう事なんだよ。にいちゃん」

流石は頭目と言ったところだろうか。幼いながらも一団を率いる立場にあるアルテナは、鉄兵の言葉にも動じずに質問を返してきた。その眼は非常に鋭い。予想はしていた事だが、忠誠を誓えというのは重大な事なのだろう。

「まずは話を聞いてくれ。正直なところ、俺はあなた達のために借金を負う気は無い」

「つまり、にいちゃんは俺達を助ける気なんて無いって事か？」

冷静なアルテナの声が静まり返った宿営地に響く。裏切られたと思ったのだろうか、アルテナの眼には殺気すら浮かんでいる。

とはいえ殺気だけなら問題はなかったのだ。鉄兵はアルテナ達を助ける気持ちに満ちていたし、次の一言で格好良く決めれば誤解は解けて全ては上手くいくと思っていた。

でも、問題は発生した。

その問題とは、アルテナの目から殺気だけではなく、焚き火の揺らめく炎によって光る液体まで滲み出て来てしまった事である。

「違う違う！　助ける気満々だって！　だから泣かないで！」

鉄兵は慌てて弁解を始めた。なんというか、女性の涙だけ頂けない。こちらまで泣きたくなってしまうし、心底申し訳ない気分になってしまうのだ。

「な、泣いてなんかないぞ！」

鉄兵の言葉に自分が泣いている事を自覚してしまったのだろう。気丈にもそれを否定したアルテナだったが、自分の言葉と相反するように、それを契機に嗚咽の声が大きくなり、やがて泣き出してしまった。

山賊の頭目をしていたとはいえアルテナも年相応の女の子という事だということだろうか。いや、部下を助けたいと願う頭目だったからこそか……いやそれも違うのかもしれない。そういえば昔の人は感情や感受性が非常に豊かで大の大人や武将でさえ感情のままに号泣する事もあったとかいう話を聞いた事がある。メディアに囲まれた現代人の鉄兵は鈍感になり過ぎているだけで、これがこの世界では普通なのかもしれない。

ともかく、泣き出してしまったアルテナをマーティンはじめ山賊達に混ざって必死になだめる。アリスやリードの眼が非常に寒いがこれは自業自得というものだろう。それに裏切られて泣いたと言う事は、アルテナは自分をかなり信頼していたと言う事なのだろう。その事自体は嬉しいが、それで傷付けてしまった事は非常に申し訳ないように思えた。

「それで、どういう事なのだ？」

嗚咽交じりながらも、ようやくアルテナが泣き止んだところですかさずアリスが鉄兵に話を向ける。

「……ようするに、自分の借金は自分で払えって事だよ」

どうにも決まらないが、格好付けてもったいぶった言葉を口にする愚を今回の件で学習した鉄兵は、単刀直入に自分の計画を皆に説明する事にした。

説明をする鉄兵の言葉を聞いて、アルテナの表情に見る見る生気が戻っていく。鉄兵の説明が終る頃にはアルテナはすっかりいつもの笑顔を取り戻していた。

「なんだよ、そういう事なら先に言ってくれよ。恥ずかしいところ見せちゃったじゃんか！」

さっきまでの泣き顔が嘘のような満面の笑顔でアルテナが鉄兵の背中をバシバシと叩く。多分照れ隠しなのだろう。本気で叩いてくるので背中が痛いが、これで機嫌が戻ってくれるなら御の字である。

「で、アリス。この計画は上手くいきそう？」

「そうだな。先に私から父王に話を通しておけば問題は無かろう」

アリスが神妙に頷く。どうやら鉄兵の計画は的外れではなかったようであるが、流石に事前の根回しはしておくべきだったようである。相談して正解だったようだ。

「頼める？」

「任せてもらおう」

「皆もそれで良い？」

鉄兵の言葉に山賊達は一斉に頷いた。

「それじゃそういう事で。一応この話は他に漏らさないようにね」

再び今度はその場の一同全員が頷き、この場は解散となった。

「アリス」

恐らく何がしかの通信機で王様に話をつけるために馬車へと向かうアリスの背中に声をかける。振り向いたアリスと眼が合った。

「ありがとう」

心からの一言が通じたのだろうか。アリスは歯まで見せて口元を綻ばせ、再び背中を向けた。

「にいちゃん」

アリスの背中を見送っていた鉄兵は、アルテナに声をかけられてそちらを見た。

「ありがとな」

今さっき自分がアリスに投げかけた言葉。その言葉になんともむず痒くなる。アリスが先ほど口元を綻ばせた気持ちが理解できたような気がした。

「なにいってんだよ」

照れ隠しに鉄兵はアルテナの頭に手をやり、ガシガシと撫で回した。

「なんだよ。やめろよー」

そういいつつもアルテナは鉄兵の手を振り払おうとはしなかった。そのまま焚き火を囲む皆の輪の中に入り込み、前祝いとばかりに盛大に騒ぐ。

良い仲間と出会えたな。と、ふとそんな考えが自然に浮かんできた。

シロにはじまり、アリス、イスマイル、リード、アルテナ、そして兵士と山賊達。その誰もがこの世界に来ていなければ出会えなかった人々だ。原因も分からず異世界に来たと分かった時には絶望したが、今ではそれも遠い過去の記憶に思える。

鉄兵は焚き火によって赤々と照らし出される皆が繰り広げる騒ぎを眺めながら、この世界に来れた事を感謝した。

王都にて

小高い丘を越えると、そこからは王都が見渡せた。

「これは……すごいな」

馬車から顔を出し、丘の上から王都を眺めた鉄兵は、絶景ともいえるその光景に感嘆の溜め息を吐いた。

オズワルド王国の王都は、鉄兵が思っていたよりもずっと壮大な都市だった。王都は三重に覆われた城壁に囲まれた城塞都市で、都市の端から端まで歩いて移動すればゆうに2～3時間はかかりそうなほどの規模を誇っている。とはいえそれは最初から想定されていた規模ではないようで、後から拡張して大きくなったようである。城を中心とした一重目の城壁の内側はやや変則的ながらしっかりと設計されたらしい碁盤目状の家々が立ち並んでいるが、二重目、三重目の城壁の内側にある家は雑多に並んでおり、計画性は感じられない。三重目の城壁の外にさえスラムのようなテント小屋に混じってしっかりとした家が建っているところを見ると、外から流れ込んできた人がそうやって城壁の外に家を建て、それが次第に町の態を為して拡張されていっているのだなと推測できる。このままで繁栄していくなら、四重目の城壁が建つのも時間の問題なのかもしれない。

遠目から見ても城門から王城に通じる大通りは夥しい人の流れを確認する事が出来、遠く離れたこの場所でさえその喧騒が聞こえてきそうな錯覚がするくらいである。今まで通ってきた村や町が比較的小規模だっただけに、あれは早くも過疎化現象が起こってしまっていたのではないかと心配してしまうくらいの繁栄ぶりである。実

際にはそれとは逆で、国が統一されたおかげで王都が繁栄し、そこから安全になった街道に新規の開拓村を作る人達が現れて小規模な村々が乱立されているのだろうが。

「どうだ。たいしたものだろう我が王都は」

感動する鉄兵にアリスが誇らしげな表情を見せる。

「ああ、ほんとたいしたもんだ」

誇るアリスに鉄兵は素直に賞賛の声を上げた。

眼下に広がる王都の光景は高層ビルが乱立する元の世界に比べれば貧弱といってもいいものだろう。だが、ここは元の世界ではなく機械文明がほとんど発達していない世界なのである。つまり目の前の光景に移るもの全てが人力による製作物ということであり、国を覆う城壁の石一つ一つを取ってみても全て人力で積まれたのかと思うと、気が遠くなるような労力の果てに生まれたであろうこの光景には身が震えるような荘厳さすら感じられた。気分としては万里の長城かピラミッドを見ているような感覚だろうか。

そしてなによりも鉄兵が素直に賞賛の声を上げた理由は、強化された視覚の先に見えた一般市民達の顔が一様に活き活きとしていた事にあった。

正直なところ、三重の城壁は鉄兵の眼から見るとやりすぎに見える。リルのような魔物が跋扈する世界なので防壁は不可欠なものなのだろうが、町の規模から考えるにこの城壁を建てるにはかなりの資金が必要だったはずである。必要経費とはいえ、町が発展していくたびに城壁を建てているとすれば、それは相当国庫を圧迫してい

るはずだ。それこそ増税もやむなしと思われるほどに。

にも拘らず大通りの商人からスラムの子供に至るまで王都は笑顔で溢れている。商人が活き活きしているという事は景気が良く、税率も低いのかもしれない。スラムの子供すら何者にも怯える事無く笑顔で過ごしているという事は、スラムを含めてそこそこに警備兵らしき姿が見える事からもわかるように治安が良いのだろう。

国庫が潤沢なのか、はたまた政策が上手く回っているからかなのかはわからないが、そこに住んでいる人々の姿を見る限り、王都は非常に住みよい町なんだろうなと思い、鉄兵の顔は自然と綻んでいった。

鉄兵はしばし興味深げに王都を眺めていたが、感動ばかりもしてられない事を思い出して我に返った。これからあの国を治める王様に拝謁をしてアルテナ達の件と自分の処遇について交渉をしなくてはならないのである。すでに昨晩のうちにアリスを通じて話を通してあるとはいえ、特に台本があるわけではない。自分の話術でしっかりと話を転がせられるかは中々に不安なところである。

正直なところ大勢の人々の前に晒されて問答をする謁見など勘弁して欲しいところなのだが、事が事だけに公の場で行わなくてはならないらしい。アリスの父親ならばさぞかし高貴で公正な人物であろうと想像が出来るので上手く話を合わせてくれるだろうが、よく知らない目上の人間に直訴するわけなのでどうしても緊張してしまう。

不意に、鉄兵の手を何かが触った。

「鉄兵。あまり心配をするな」

鉄兵の手を触ったのはアリスの手だった。

鉄兵を安心させるためだろう。アリスがそっと微笑む。緊張が顔に出ていたのだろうか。なんとも情けない話である。

だが、同時に自分の手に重ねられたアリスの手の温もりを感じて心が落ち着いてくる自分がいる事も自覚する。

「大丈夫。心配なんてしてないよ。相手はアリスの親父さんだもんな」

「そうか」

アリスに言われて鉄兵は改めて意識を切り替えた。そう、相手はアリスの父親なのだ。いくら一国を治めるような人物であろうとも、友人の父親に少し話をあわせてもらうだけなのだ。何を緊張する事があろうか。

それに、なにをするにしても緊張して声が出ないのが一番よろしくない。講義かディスカッションでもするつもりで気軽に臨むが吉だろう。そう思い込んで鉄兵は努めて気持ちを切り替える。

王都はもう、すぐそこである。恐らく数時間後にはアリスの父親と対面しているであろう。

鉄兵は深く息を吸い、改めて覚悟を決め直した。

かくして鉄兵はようやく王都入りを果たしたのだが、それは素晴らしいまでに華々しい王都デビューとなった。

鉄兵がどぎついまでに注目されて王都デビューを果たす事になった発端は、城門の外に並ぶスラムの最周縁部に住んでいるらしき少年が目敏く王都に近づく王家の馬車を発見した事である。

「姫様だ！　姫様が英雄を連れて帰って来たよ！」

王家の馬車を発見した少年は、まるで宝物でも発見したかのようにキラキラとした目を見せ、大声で捲くし立てた。

「なに、姫様が？」

「あら、噂の英雄テツ様が？」

道端でお喋りをしていた主婦も、忙しなく仕事をしていた男も、少年の言葉を聞いた者は誰も彼もが即座に反応して、少年のもとに集まり始めた。

「本当だ。あれは王家の馬車。姫様が帰って来たぞ！」

「おい、若き英雄テツ様も一緒なのか？」

「そりゃそうだ。そうにちげぇねぇ！」

次第に集まり始めた民衆が、王家の馬車とその後ろに続く大規模な商団の姿を確認して騒ぎ始める。徐々に近づいてくる王家の馬車を見つめる民衆の熱気はかなり高い。

それもそのはずである。この世界における大衆の一番身近な娯楽は歌なのだ。各地を流離う吟遊詩人が集めてきた物語は各地の酒場で歌われ、人気の詩は大人から子供まで口伝いに語られ、歌い広められる。時には酒盛りで合唱され、時には子供のゴッコ遊びの題材にもなるその歌の中に出てくる登場人物は、まさに物語の中に出てくるヒーロー・ヒロインそのものなのだ。

若くして王宮を飛び出し世直しの旅をしていたアリスはもはや馴染まれている物語の中に出てくるヒロインであり、鉄兵はそのアリスの物語を遥かに上回る冒険活劇に出てくる最新のヒーローなのだ。その二人が王都に帰ってくるという噂は、シロが作詞作曲をした鉄兵の英雄譚とともに広められており、国民は全て二人の帰国を今か今かと待ち侘びていたのである。

王家の馬車をいち早く見つけた少年は、自分の言葉に反応して熱気を帯びる群集を見て興奮の絶頂にあった。少年も無論アリスと鉄兵の大ファンなのだ。そしてその王女と若き英雄が帰って来たところを一番に発見した。その事実が誇らしいやら興奮するやらで居ても立ってもいられなくなり、少年は城門に向かって走り出した。

「姫様だ！　姫様が帰って来たぞー！　若き英雄テツ様も一緒だよー！」

少年が走り声をあげるたびに人々はざわめき、熱狂の様相を表す。

普段は真面目な働きぶりで良くも悪くも名高い検問の兵士達さえもその一報に顔を綻ばせ、思わず少年が検問を突破するのを見逃してしまう。

かくして少年はアリス姫一行帰還の報を触れ回りながら王城の前

まで走り抜け、その情報は瞬く間に王都全体へと広まっていった。

とまあそんなわけで、鉄兵達の一行は王都に入るなり熱烈に歓迎されてしまった。

それはもう、心底から恐ろしいと思うほどにである。

「あっはっは、びびってやがるのかい？」

鉄兵を見て、シロがニヤニヤと笑みを浮かべている。

「そりゃびびるさ！　ほどってものがあるだろ！」

やや逆ギレ気味に鉄兵が叫ぶ。もっとも叫んでいるのはあまりの歓声の大きさに、それぐらいしないと自分の声すら聞こえないからでもあるが。

状況は鉄兵にとって過酷なまでに緊張をともなうものであった。左右どころか前を見ても後ろを見ても人人人の騒ぎである。しっかり警備されてるおかげで一定距離から離れてくれてはいるが、ここからでも見える王城の入り口まではずらっと人が並んでいて、その全てが熱狂的に自分達に向かって声援を送っているのだ。びびらない方が無理というものだろう。仕事はどうしたと言いたい所である。

「リルやら山賊団やらを相手に立ち回ってきたってのに、だらしねぇなあ」

カラカラと笑いながらシロは言うが、全く持って数とは恐ろしい

ものなのである。

熱狂とは敵意と同じように一種の指向性がある感情の発散なわけで、悪意が無いとは分かっていても、こんなにも大勢による感情の荒波のただ中に置かれてしまっては、こんな状況に慣れていない鉄兵は本能的に警戒心が働いてしまい、腰が引けてしまうのだ。

しかもさらに恐ろしいのはアリスを称える声と同じくらい自分の名前を呼ぶ声が聞こえてくるところであろうか。なんというか、いきなり優勝パレードの主役にでも立たされてしまったかのような気分である。しかも規模はきっとこっちの方が遥かに大きい。

アリスとイスマイルは慣れたもので民衆に向かって小さく手を振り笑顔で対応しているものの、リードとリルは鉄兵と同じように歓声に怯えてしまい、馬車の中央で一緒に丸くなっている。アルテナはといえば囚人のくせになぜか群集に向かって手を振っているし、馬車を護衛するかのように馬車の周囲に固まって馬に乗る山賊達も堂々としたものである。これではどちらが囚人か分かったものではない。

「ま、これから世話になる国だ。しっかり顔を売っときな」

そう言って立てた親指でシロは窓の外を指差した。自分は矢表に立つ必要が無いから気楽なものである。

とはいえ、シロが言うとおり顔を売るのは必要な事だろう。深く溜め息を吐き覚悟を決めた鉄兵は、仕方なくアルテナの横から顔を出した。

すると、その途端に群集から爆発的な歓声があがり、その歓声を

もろに浴びた鉄兵はちょっと腰が抜けそうになった。若き英雄と呼ばれる今最も注目度が高い人物がようやくしっかりと顔を出したわけだから一気に盛り上がって歓声がわっと集中したわけだが、それはちょっとばかし鉄兵には刺激が強かった。

「おー兄ちゃん大人気だな！」

歓声を受けて興奮したアルテナが鉄兵の背中をバンバンと叩くが、鉄兵の頭は真っ白である。本能的に逃げてしまいそうになるが、ここでの鉄兵は文武両道の英雄という役どころなのでそこはぐっと我慢する。だが、情けないところは見せられないと思ってはいても、無意識のうちに腰が引け、窓から遠ざかってしまいそうな自分がいる。

どうにも一人では及び腰になってしまうと考えた鉄兵は、ここでも仲間を頼る事にした。

「……アルテナ、一つ頼んで良いか？」

「ん？　なに？」

「肩組んで身体を支えてくれ。ちょっと腰が砕けそうで……」

「あは、なんだよ情けないなぁ」

そう言いつつもアルテナは笑いながらがっしり鉄兵と肩を組み、上機嫌で窓の外に手を振った。鉄兵も顔面蒼白になりながら弱々しく手を振る。

そんな二人の仲が良い様を見て、群衆がざわっとどよめきを起こ

した。なにやら仕切りに興奮しながら周りと会話している様子が見えたので強化された聴覚で指向性を高めて聞いてみると、歓声に混じって

「あれは山賊姫なんじゃないのか？　なんでテツ様と肩を組んでいるんだ？」

とか

「囚人がテツ様と肩を組むとはなんと馴れ馴れしい！」

とか

「いやテツ様は心優しい気さくな方だという話じゃないか。囚人といえど対等に扱う、まさに詩通りの素晴らしいお方なんのだろう」

とか、そんな話をしているのが聞こえた。自分が後退してしまわないようにアルテナに押さえつけてもらっただけだったのだが、どうやらそれは意外な効果を生んでいるようである。

丁度良いので鉄兵はここでも少し工作する事にした。簡単に言えば世論を味方に付けておきたいのでアルテナと仲の良いところをこのまま世間に印象付けたいわけだが、元気良く手を振るアルテナと弱々しい鉄兵という今の姿では、アルテナの方が上位に見えて変に勘繰られてしまうかもしれない。

「うわっ！」

というわけで鉄兵は無造作に左手をアルテナの頭に乗せ、少しばかり頭を下げさせた。いきなり押さえ込まれたアルテナは「なんだ

よぅ」と少し不機嫌そうに口元を歪めたが、鉄兵が「これも作戦のうち。いいから笑顔で手を振っとけ。少しだけ控えめにな」と言うと、心得たといわんばかりに大人しく控えめに人が良さそうな笑顔を振りまき手を振り始めた。勘が良いというか機転が効くというか、アルテナは馬鹿っぽく見えるが基本聡明なのでこういう時は非常に聞き訳が良くて助かる。

ともあれ、これで傍目には退治した山賊とさえ親しく接する英雄と、その英雄に心底から服従する山賊の親分の像に見えるだろう。いや見えたら良いなという鉄兵の個人的考えではあるが。

そんな感じで王都入りしてから一時間後。歓声の中にいるだけで満身創痍になりながらも鉄兵達はようやく王城へとたどり着いた。

「疲れた……」

ようやく群集から開放された鉄兵は心の底から呟いた。まさかここまで歓迎されるとは思ってなかったので不意打ちを食らって根こそぎ体力を持っていかれた感じである。まあ、あの群集に囲まれたおかげでこれから王様に会おうともそれほど緊張しないだろう。

「しっかりするのだ鉄兵。本番はこれからだぞ」

「うぇーい。分かってます。でもちょっとだけ休ませて……」

仕方ないなと言わんばかりにアリスがちょいとばかし活を入れるように激励の言葉を吐いたが、それですら立ち上がれない程に鉄兵は疲れ果てていた。

何度も言うようであるが精神的疲労だけはいくら魔力があろうと

も癒せるものではないのである。というわけで鉄兵はだらしなくばててていたのだが、すぐに馬車は停車してしまい、外側から馬車の扉が開かれた。

「では行きましょう」

イスマイルに呼びかけられ、鉄兵は疲労感に苛まれながらもしぶしぶと馬車を降りた。ここで弱みを見せるわけにも行かないのである。

「姫様、お帰りなさいませ！　皆様もようこそお越しくださいました！」

馬車を降りると両手を広げて全身で歓迎の姿勢を露わにする少年がいた。

「ホーリィか。久しいな」

「姫様。お元気そうでなによりです」

なにやら親密な感じにアリスとホーリィと呼ばれた少年は言葉を交し合った。

ホーリィと呼んだ少年は、さらさらとした金髪のものすごい美少年であった。年のころは１４－１５歳位であろうか。一見少女と見間違いそうになるくらいの華奢で女顔の少年で、唯一その少年が少女ではないとわかるのは、変声期が過ぎているらしく、少女と言うには少しばかりだけダミ声が混ざっていたからである。

少年と言いはしたが、よく見ればホーリィの耳は非常に耳が長か

った。目に特徴が無いところを見ると、彼は多分半精霊族なのだろう。とすると見た目よりもっと年を取っているのだろう。それにしても、どこかで見たような顔である。というかここ最近良く見ている気がする。

「あ、お兄ちゃん」

群衆のせいで人酔いして馬車の中でうなだれていたリードが不意に馬車の入り口からひょいと顔をだした。と同時にさらっとそんな言葉を口にした。

「リード？　どうして君が姫様と一緒にいるんだい？」

ホーリィがリードの姿を見て驚いている。が、びっくりしたのはむしろこっちである。

人酔いも忘れたようにリルを抱きしめたリードが軽やかに馬車を駆け下りてきた。リードとホーリィが対面する。こうしてみてみればなるほどと思えるくらい一目瞭然なのだが、リードとホーリィはまるで双子かと思えるほどに顔立ちが瓜二つであった。

兄と再会したことが嬉しいのだろう。甘えるような表情でリードが兄に話しかける。

「路銀が無くなっちゃって困ってたところを鉄兵に助けてもらったの。あ、この人が鉄兵。お兄ちゃんも噂は聞いてる？」

「そうだったのか。もちろん噂は聞いてるよ」

ホーリィは優しくリードに微笑みかけると不意に鉄兵の方に身体

を向けた。そのまま右腕を曲げて突き出し、きっかし、ホーリィは３０度の角度で腰を曲げて礼をした。

「妹を助けていただきありがとうございました。リードの兄のホーリィ・ウィードと申します」

「これはご丁寧に。香坂鉄兵と申します。リードにはいつもお世話になっております」

急に話を向けられて、鉄兵は慌ててぺこぺこお辞儀を返した。なんというか、不意を突かれて日本人としての気質が出てし待っている感じである。

「実はわたくし、これより当分の間テツ様のお傍に仕えさせていただく事になっております。妹の恩人に仕えさせて頂けるとは、どうやら私は相当に運が良いようですね」

その鉄兵の様子を見てなんとなく鉄兵の人柄を理解したのか、ホーリィは少しばかり気を緩めて鉄兵に当たる事にしたようで、少し悪戯っぽく微笑んだ。

「そうなんですか。これからよろしくお願いします」

ホーリィが気を緩めた事を察知して、鉄兵も肩の力を抜いた。地の笑顔でホーリィの言葉に返す。

何があったわけでもなく、お互いに微笑みあう。なんだろう、リードの兄という事で親近感もあるのだろうが、鉄兵はホーリィととても波長が合いそうな気がした。この人が傍にいてくれるなら、王都での生活も悪くないものになりそうだなと思える。

「それではそろそろ行きましょう。鉄兵様とシロ様は私に着いてきて下さいませ。リードは……姫様にお願いしてもよろしいでしょうか？　囚人の方々は私の部下について行ってください」

鉄兵とのファーストコンタクトを終えたところでホーリィが仕事モードに復帰した。予想していた事ではあるが、ここで一時みんなとは別れ別れになるようである。ちなみにイスマイルは神職なので完全に別行動であり、リルは鉄兵と一緒である。

「兄ちゃん！」

ホーリィの部下に山賊達が集まる中、アルテナがこっちに寄ってきた。

「ガツーンとかましてくれよ！」

「おう、任せとけって」

アルテナが思いっきり殴るようなポーズをとったので、鉄兵は顔の前に力瘤を作って応えてみた。イスマイルとかと比べればまだまだだが、鉄兵もそれなりにムキムキなので様にはなる。

軽い言葉に聞こえるかもしれないが、鉄兵にしてみればそれこそ言われるまでも無い事である。今の鉄兵は、ただそれだけを考えて動いているのだ。

「そんじゃまた後でな」

「信頼して待ってるぜ」

そのままハイタッチしてそのまま分かれる。

「では私の後にお進み下さいませ」

ホーリィに導かれ、城の中へと入っていく。

さてここからが本番である。

鬼が出るか蛇が出るか。

どちらが出ても関係が無い。

鉄兵はただアルテナ達を助ける事だけを考えて入城を果たした。

王都にて（後書き）

２０１１／１／１４：指摘いただいた誤字修正
「感が良いというか」
↓「勘が良いというか」
２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
スラムを含めてそこここに
↓スラムを含めてそこそこに
よく見ればしホーリィの
↓よく見ればホーリィの
ホーリィとても
↓ホーリィととても

秘密の会合

「ホーリィさん。この後の予定はどうなっているんですか？」

城の中に入り、リルを抱えてシロと二人でホーリィの後を着いていく最中、鉄兵はホーリィに今後の予定を聞いてみた。ろくに旅行をした事も無い鉄兵にとって初めて入る城という建物の構造は非常に興味のあるものだったが、何はともあれまずは今後の予定の確認である。

「まずお二人には着替えていただき、二時間ほど後にシリウス王と謁見していただく手筈になっております」

今の鉄兵の格好は白シャツにジーパンである。考えてみれば当たり前だが、どうやらこの格好ではカジュアルすぎて公式の場ではNGのようだ。謁見という舞台の格調に相応しい格好に着替えさせられるようだが、これから採寸して在り物の服を手直しするだけでも結構な時間がかかることが予想される。つまり2時間後というのはほぼ鉄兵の着替え待ちの時間のためであり、今日王都に着く事を連絡済だったという事実を考えに入れても、待ち時間も無く謁見に臨めるという事は、それなりにこの謁見が重要視されていると推測ができた。

その事実に鉄兵はちょっと胸を撫で下ろした。一応シロのお膳立てで自分を英雄におだて上げてもらい、国王といえども鉄兵を軽くは扱えないような舞台を整えたわけだが、それでも重要視されないような事態であれば上がりに上がっている名声や鉄兵の力がこの国にあまり快く思われていないという事である。そうなれば自分の提案に難癖を付けてくる輩も現れるだろうから、面倒な事になるんじ

ゃないかと思ったのだが、まずは第一関門突破のようである。王族であるアリスの肝いりなのでそれほど心配はしていなかったのだが、こうして実際に予定を聞いてみてようやく一安心といったところである。

ちなみにシリウス王とは言わずもがなアリスの父親の事である。正式にはシリウス・クレイグ・ダルトリー・オズワルド2世という長ったらしい名前らしい。１０年ほど前に7つに分けられた大陸の領土の一つであるこの地域一帯を統一した王様で、世間からは統一王と言われているらしい。今まで旅をしてきた中で見てきたものを考えるに、１０年でこうも治安と流通を安定させている事を考えると相当優秀な王様のようであるが、さてどんな人物なのだろう？楽しみでもあるが不安でもある。怖い人物じゃないと良いのであるが……

「まずはこちらでお着替えいただきます」

ホーリィに連れて行かれて着いた先は、どうやら衣裳部屋のようだった。そこそこ広いスペースに所狭しと様々な衣装が飾られている中に、４人の職人と思わしき人達が恭しく頭を下げていた。

「では皆さん、よろしくお願いします」

ホーリィが声をかけると職人の人達がメジャーと思わしき布を手に駆け寄ってきた。あっという間に囲まれて、気がつけば採寸が始まっていた。腕の中に抱えていたはずのリルがいつの間にか地面に下ろされていて、いつ下ろされたのか理解できずにいるリルがきょとんとしているほどの手際の良さである。恭しい態度ではあるものの、時間もそれほど無いので職人としても急いでいるようである。

「おっと、俺は良いぜ。謁見の場には出ないからな」

あまりの手際の良さに鉄兵が思わず硬直していると、横からそんな声が聞こえてきた。採寸の邪魔にならないように身体を硬直させながらも頭だけをそちらに向けると、そこには手を前に出してやんわりと断りを入れているシロの姿があった。

「あれ、そうなの？」

「堅苦しいのは苦手でな。勘弁してもらうぜ」

「そっか。まあしゃあないか」

何も言わずにここまで着いてきてくれたが、シロには本来関係の無い話なのである。シロはあくまで善意で鉄兵を見守ってくれているだけなのだ。そしてここから先は、鉄兵が一人で挑む必要のある戦いなのだ。そんな場所に同席するとなれば、それはいうなれば過保護すぎて試験会場の中にまで入ってくる親のようなものだろうか。これまでの行動も十分過保護といえたかもしれないが、さすがにそこまで過保護になる気はないようである。

「シロ様はテツ様とご一緒なさらないのですか？」

その会話を聞いたホーリィが横から話しかける。

「先方もそんなこたぁ望んじゃいないだろうしな」

「でしたら、別室にて終わるまでお待ちなさいますか？　ここにいても退屈でございましょうし」

「そうだな。そうするかな」

「それでしたらバルコニーなどにお茶とお菓子を用意させましょう。王都を一望できるこの城のバルコニーはこの国で二番目の絶景といわれております。できますれば休憩中の侍女達に曲など奏でていただければ勤めの励みにもなるのでございますが」

「それもいいな。頼めるか？」

曲を奏でて欲しいと言われたシロが、明らかに乗り気でホーリィの言葉に頷く。

「かしこまりました。それではテツ様、しばし中座させていただきますがよろしいですか？」

「了解。このまま人形になってればいいんですよね？」

特に異論がない鉄兵は軽く頷いた。これから堅苦しい席に臨む鉄兵に比べ、かたやシロは侍女と戯れに行くと考えると微妙に不公平な気もしたが、仕事というのはそんなものである。

「はい。こちらにもお茶とお菓子をお持ちしますので、採寸と衣装決めが済むまでしばしご辛抱下さい」

鉄兵の言い回しにホーリィがくすりと笑う。

「ではシロ様。こちらへ」

とまあとんとん拍子に話は進み、シロは一言「頑張れよ」と言い残してホーリィとともに出て行ってしまった。

ところで話は変わるが、不意打ちというものは簡単に言えば相手の虚を突く事である。その効用は相手の防御を崩す。または素の対応を計る事にある。

さてなぜこんな話をしたかといえば、だいたいの察しはつくであろうが、リル以外の仲間と引き離され、単身となった鉄兵はここで不意打ちを食らう事になったのだ。とはいえそれは前者のような戦いのそれではなく、後者のような人の真価を計る形のものではあるが。

一人になってやや不安になりつつも、鉄兵は謁見の準備のために職人にされるがままになっていた。やがて採寸が終わり、続いて服を何着か持ってこられ、それに着替えさせられる。

三着ほどとっかえひっかえ着替えさせられた後に職人達がうんと頷いた服は、紺に近い青色のスーツであった。袖口と襟元に少し派手な飾りが施されていたりシャツの袖にややひらひらとレースがついてたりするが、それなりにシックなものである。ネクタイ代わりの黄色いひらひらしたネッカチーフがネクタイに慣れてない鉄兵には少し息苦しかったが、着心地はそれほど悪くない。

どうやら衣装はそれに決まったようで、そのまま寸法を合わせるために職人が服に針を入れ始める。そしてもう少しで作業が終わり、ようやく解放されるかと鉄兵が気を抜き始めた頃、不意に背後で扉の開く音がした。

扉に背を向けている鉄兵には誰が入ってきたのかわからない。ホーリィが帰って来たのかとなとも思ったが、針を入れられている最中なので下手に動く事も出来ずにそのままでいると、不意に職人の

作業が止まった。

どうしたのかと思い、ちらっと目だけで職人を見てみると、職人はなぜか扉の方に向かって平伏していた。

「よい。普通にいたせ」

背後から聞こえた澄んではいるがやや枯れた声は、どう考えてもホーリィの声ではなかった。よく見知った人物を思い出させるその口調に、はっとした鉄兵は慌てて振り返る。

鉄兵が振り返ると、その人物はちょうど床で眠っていたリルを抱えあげているところだった。

「この子がリルか」

寝ぼけ眼のリルがクンクンと匂いを嗅ぐ。どこかで嗅いだ事があるような匂いだったのだろう。警戒心も無くリルがその人物の頬をぺろっと舐める。

「はは、人懐こいのだな」

リルに頬を舐められたその人物は、朗らかに笑みを浮かべた。

ようやく目が覚めたのだろう。嗅ぎ覚えのある匂いながらもそれが別の人物だと気がついたリルがきょとんとした様子を見せる。

『あるじ、このひとだれ?』

キャンと一声鳴いたリルの、その問いに対する答えを鉄兵は持っ

ていた。

まだ３０の半ばといったところだろうか。その体格は勇ましく、歴戦の戦士達の横に並んだとしても決して見劣りしないだろう。

燃えるような赤い目強い意志を感じさせ、燃え上がるような情熱を映し出している。

高貴さの中にしかしどこか野性味を感じさせる整った顔立ちは、神々しいまでの美を感じさせながらも、それが決して張子に書かれた虎などでは無く、この世に在ると強烈に印象付ける重厚な存在感を醸し出している。

そしてそれらにもまして、その人物が鉄兵の思い当たった人物で間違いないだろうと思わせる特徴は、その身に纏うオーラとも呼べる雰囲気にあった。王者の風格、あるいは覇気とでもいうのだろうか。どこまでも駆け上がって行く上昇気流を思わせるような気風がその人物からは吹いているように感じられるのだ。

その人物の容貌、風格、言動の全てが一つの事実を伝えている。想像していたよりもかなり若々しいが、リルを抱え上げたその人物の正体を、鉄兵は間違えられる気すらしなかった。

今目の前に立っているこの人物の正体。それは他でもないアリスの父、シリウス王その人だろう。

「ガルムの特異体。フェンリルとあれは名づけたそうだな。その身の丈は１００ｍにも達すると聞いたが真か？」

「はい、本当です」

王様がこの場所に現れるなどとは夢にも思わず、まさに完全な不意打ちを食らった鉄兵は、しかしそれでも気を強く保ち、なんとかシリウス王の言葉に応える。

「そのような恐ろしげな魔物の正体がこのような可愛らしい子供の狼とは。愉快な話だな」

シリウス王が穏やかな笑みを見せた。その微笑の中にアリスの面影を見た気がした鉄兵は、少しだけ緊張が解けたような気がした。

「馬車の細工を見せてもらった。まずは見事と言っておこう」

「……あ、ありがとうございます」

思いがけない言葉に鉄兵はきょとんとしてしまったが、それでもはたと思い出して返事を返した。改造馬車は元の仕様に戻す時間も無かったので無論そのままである。そのうち技術力のデモンストレーションにでも使えるかなとは思ってはいたが、ここでその話題が出るとはちょっと想定外であった。

「この子を手懐け、山賊を捕縛した事も見事だったな。それによりそなたは力と知識と人徳を示したわけだ」

「はぁ……」

一応褒められているようであるが、どうにも先行きの見えない会話に少しだけ不安になる。いったいこの人は何をしにここにきたのだろうか？

「まず国を動かす人材としては優秀と言っておこう。だが、その後の対応はいただけないものであったな」

なにやら不穏な話題になってきた。胃の下の辺りが重くなってきたような気がする。

「そなたの提案はまあ良いだろう。だがその提案を出したタイミングはよろしくない。元よりそなたはその腹案を持ちながら、行動に移すべきかぎりぎりまで迷っていたと聞く。その話を聞くに、決断力には問題があるように思える。いくら優れた施策を思いつこうと、時期を逸すれば意味はないというのは理解しておるか？」

「はい……」

自覚しているだけに痛いところである。それにしてもさらに不穏な会話になってきたが、もしや決断が遅くなったせいで問題が発生しているのだろうか。

「さて、そなたに聞こう。力はある、知恵もある、人望も厚いが、だが決断力の無い青二才の小僧。お主ならそんな人物を国の要職に付けれると思うか？」

明らかな挑発の言葉が鉄兵の胸を打つ。羞恥心に思わず血が上りそうになる。

だが、鉄兵は努めて自分に冷静である事を強要した。

ようやくシリウス王がこの場に訪れた理由が分かった。今この時こそが決戦の時なのだ。

「確かにそのような人物に重要な事は任せられないと思います」

霧散しそうになる集中力をぐっと歯を噛締めて呼び戻す。

「ですが、青二才の小僧だからこそ昨日と今日では違います。その小僧も自分の欠点に気がついたのならば同じ過ちは繰り返さないでしょう」

シリウス王が何を求めているかは分からない。だからこそ、鉄兵は自分の心意気を率直に伝える事にした。

確かに自分は無様だったかもしれない。だが、自分はいつだって成長しているつもりである。同じ間違いは二度と起こす気など無いし、同じ間違いをする自分を許す気も無い。まだ未熟な小僧かもしれないが、そんな自分でいる気なんてさらさらないのだ。

ありったけの思いを込めて、そんな自分の心情を言葉とともに眼力でもってシリウス王に応えた。

「ふむ。世間擦れもせず、向上心も上々のようだな。ま、及第点としておくか」

鉄兵の言葉を聞いたシリウス王が、急に砕けた口調になった。

「え……」

厳格そのものの表情がぱっと今にも舌でも出しそうな悪戯が成功した子供のような表情に変わるのを見て、鉄兵は思わず顔を引きつらせる。

「服の方はもう良いか？」

「はい、後は詰めるだけでございます」

シリウス王の言葉に職人が応える。鉄兵がシリウス王と話している間にも職人の人達は針を動かしていたようである。

「よし。ホーリィ、そっちも準備はいいか？」

「はい、整っております」

ぱたりと扉が開き、ホーリィが顔を出す。どうやら扉の外に控えていたようである。

「では移動するぞ。さっさと着替えろ」

「え？　は、はい！」

なにやら急展開であるが、急に人が変わったシリウス王にさっさとしろと目で促されて慌てて服を着替えなおす。

ホーリィの先導で慌ただしく案内された先は、テーブルと数個の椅子だけ用意された窓も無い小さな個室であった。

「あれ、イスマイルさんと……ひょっとしてオスマンタスさんですか？」

部屋の中には二人の人物が先に席についていた。一人はイスマイルだが、もう一人は見た事の無い人物である。とはいえホーリィを先に見ていただけに、リードとホーリィをそのまま大人にしたよう

なその人物が噂に聞く宮廷魔術師長のオスマンタス師である事は容易に推測できた。

「はい、オスマンタス・ウィードです。娘がお世話になったようで、感謝いたします」

「あ、いえ。そんな大した事はしてませんので……」

やはりリードの父親だったらしい。これが精霊族というものなのだろう。事前にシロから聞いていた情報どおりに耳が尖っている他にも眼がやや大きくアーモンド形をしているが、肉体構造からして人間族とはやや違うらしいが、こうしてみてみると思ったよりも違和感は感じられない。なんというか、はじめて見る外国人的特徴といったところであろうか。精霊族の特徴として寿命が長いために老いが遅いらしく、はた目にはホーリィやアリスの少し年の離れた兄としか見えないのだが、多分こう見えてン百歳とかなのだろう。その口調はなんとなく老成している印象を受けた。

さて状況を整理しよう。ホーリィは入室しなかったのでここにいる人物は王様、宮廷神官長、宮廷魔術師長。それに鉄兵とリルの４人と１匹である。場所はこじんまりとした小さな部屋で、この部屋にはなんとなーく魔法がかかっているような気がする。多分防音とかそんな感じの魔法だろう。

なにやら秘密の首脳会議でも始まりそうなシチュエーションだがどういう事なのだろうか？　いや、きっとそういう事なのだろうが。

「挨拶は後だ。台本は出来ているか？」

「はい、こちらに」

オスマンタスが手に持っていた紙の束を皆に回す。軽く目を通すと、なにやらト書きでこの場にいる人物の台詞が書かれているようである。

「えっと……これは？」

状況がいまいち読み込めない鉄兵がシリウス王に尋ねる。

「イスマイル。説明いたせ」

「はっ。まずは先に要点を説明いたします」

シリウス王がイスマイルに話を振る。とりあえず説明はしてくれるようなので一安心だ。

「昨夜のアリス様からの報告の後、城で協議した結果、テツ殿の提案は最優先で処理されるべき案件として採択されたとの事です。

具体的には通称・山賊姫、ようするにアルテナ殿ですが、これを処刑・服役させた場合、南方に拠点を置くアルテナ殿の山賊団が反乱及び奪還のための軍事行動を起こす可能性が高く、それを回避するにはテツ殿が昨夜提案した内容を実行するのが一番的確だろうとの結論に至った次第です。

アルテナ殿率いる前身が元ワイヤール王国の騎士団である山賊団は、代替わりはしましたが前頭領は健在。現頭領と１８名の精鋭を捕らえはしましたが未だその勢力は侮れず、前頭領を主導とした反乱を起こされた場合、地方経済に大きな打撃を受けるものと推測されます。

ゆえに、アルテナ殿とその一味を処刑するでもなく服役させるでもなく、緊急時には人質として使用も出来るテツ殿の提案が最善の

手段として採択するとの事です」

……要するに、なんだかんだいってアルテナの山賊団は大勢力であり、その頭領を処刑したり監禁したりすると報復が面倒だったりするらしい。それでも国の体面としては処刑せざるを得なかったが、そこで差し出された鉄兵の提案は渡りに船というものであり、是が非でも成功させたいようである。

「あのな、分からないかもしれないが、俺は結構お前の提案に感謝してるんだぜ」

不意にシリウス王が横から口を出した。もはやアリスを思わせる口調は微塵も残っていないが、恐らくこちらの口調こそが本来のシリウス王の物なのだろう。

「俺がこの地域を統一してから１０年。今は上手く回っていて平和に見えるかもしれないが、まだまだ薄氷の上ってやつだ。俺に不満を持つ残存敵対勢力は少なくねえ。アリスやお前みたいな若い奴等にゃぴんとこねえのかもしんねえが、こんな一件でさえ国の崩壊に繋がっちまうかも知れねえんだ。別に俺が上に立っていたいからって頑張っているわけじゃねえ。そりゃ、王族と生まれたからにゃなんも考えずに領土を取る事に専念してきたさ。でもな、国を統一した今となっちゃ、新しい目標に向かってるんだ。今、俺が何で頑張っているかっていや、それは他の地域から聞こえて来るようなこの先って奴を見たいからなんだ。争いが起きれば容赦はしねえ。でも、俺はもう争いよりも平和な国が見たいんだ。それにはこの一件はなんとしても穏便に済ませたい。

だから、おまえにも力を貸して欲しい」

それに、とシリウス王の言葉が続く。

「俺が思うに、おまえは『この先』ってやつを作れる奴なんじゃないか？

……俺に、そいつを見せてくれないか？」

ズン。と腹に響くようなものを感じた。

ここで正直に言ってしまうと、鉄兵の『提案』というやつは、鉄兵にとって都合が良いように描いて書いた詐欺に近い提案である。だから、この世界に住みこの地域の事を一番に思うシリウス王の話を聞いて鉄兵は本当に自分が情けなくなった。

でも、ここでそれを漏らして楽になってしまおうなどと考えてはいけない。

「……話は分かりました。もちろん協力させていただきます。

でも、なんでそこまで話してくれたんですか？」

苦労話も理想話も酒でも入れば誰でもする話である。

でも、なんとなく分かってしまった。

今シリウス王がした話は、恐らく気心がしれた身内にしか漏らさないような内容なのだろう。王が戦いを避けたがっているなんて噂が流れれば、それこそ弱みに付け込んだ反対勢力が勢力を強めそうなものである。自分を引き入れるためだといわれれば一応は理解が出来るが、でもそんな話を自分に聞かせた真意を、鉄兵はそれ以外

にもあるように感じのだ。

「それを聞きますか……」

溜息に近い発音でイスマイルが声を漏らす。

「アリスは俺の娘だ」

「リードはわしの娘なんだが」

「アルテナ殿は南一番の権力者の娘です」

なんとも凍りつきそうな雰囲気がその場に流れた。なぜか一生が決められてしまいそうな雰囲気に鉄兵はガクブルする。

「あ、あーっと！　それはともかく、もう一つだけ聞いてもいいですか？」

「なんだ？」

起死回生の一言とばかりにぐるぐると頭を回転させた言葉に、なんとかシリウス王が食いついてくれた。

「シリウス王の地ってどっちなんですか？」

今のシリウス王が地だと先ほどは思ったが、今考えてみればアリスに口調が移るくらいに初対面の時の言葉遣いも使っているのだろう。どちらも自分を偽っているようには思えなかったし、少しだけ気になっていたのだ。

上手く誤魔化されてやると言わんばかりにシリウス王が微笑みを見せる。

「統一王の俺も武帝の俺もどっちも俺さ。俺は、どっちの俺も否定する気は無いぜ」

「武帝とは統一王になる前のシリウス王のあだ名です」

シリウス王の言葉にイスマイルが解説を入れる。

「……分かりました」

分かるようなわからないような言葉ではあるが、鉄兵はその言葉を正しく理解した。

国を統一した現在、格調やら様式やらがあり、そこで使うべき言葉と人格は統一王という名の仮面の一つなのだろう。そして、それ以前に使っていた言葉遣いは武帝という名の仮面である。

どちらが本当の自分かといえば、それはどちらでもない。統一王・武帝の両方をどちらか一方だけ捨てる気は無く、どちらも仮面ではあるが、どちらも同じ自分であるというのが回答のようである。

「それじゃ、話は戻しますがこの台本はなんなんですか？」

「それについては私から説明しましょう」

話がそれたところで話を本筋に戻すと、イスマイルがそれに乗ってくれた。

「見ていただければ分かると思いますが、これはこの後行われる謁見のための資料です。今回の件はなんとしても成功させなければいけませんが、これまでの経緯を鑑みるに台本もリハーサルも無しに謁見を行った場合、テツ殿がどこかで失言を生じる可能性が高いとみたようです。なのでオスマンタス殿が昨夜のうちに用意しておいてくれたようです」

「えーっと……すいません」

自分で話を戻したものの、いざ説明を聞いてみると的確すぎて羞恥心に顔が赤くなった。どれだけ信用が無いのだとも思ったが、謁見の場について散々不安に思っていた鉄兵には正直ありがたい話である。

「謝るなよ。おまえは俺に言ったよな。青二才の小僧だからこそ昨日と今日では違うってな」

シリウス王がにやりと笑う。最初というのは誰にでもある。だから最初は場を整えてやるが次はないぞ。と、そんな意思が否応もなく読み取れた。

「んじゃ、猿芝居の稽古を始めるぜ」

シリウス王の言葉に鉄兵は台本を手に取り目を向けた。

謁見の時間まではおよそ一時間。誰にとっても得になるか否かは鉄兵及びここにいる面子が台本通りに事を運べるかにかかっている。

とはいえ、鉄兵は擬似完全記憶というある意味チート的能力を持っているのでこの程度の台本ぐらい丸暗記するのも軽い事である。

全ては台本通りに事が進むとは限らない。

でも、少なくともここに書いてある台本の趣旨通りに話を運ばせればフォローが入るわけで、台本を覚えればもはや仕事は終ったも同然なのである。

ぱらぱらっと台本をめくり、一瞬にして内容を覚えた鉄兵は、もはや安堵を隠す事も無くほっと大きく息を吐いた。

秘密の会合（後書き）

オズワルド家のファミリーネームはＬｉｚｒｅｅｌさんから、シリウス王の名前は瀧江様から頂きました。ありがとうございました～。

２０１１／１／１３：指摘いただいた部分修正
「それを回避するためにはテツ殿が昨夜提案した内容を実行する事が一番可能性が高いという結論に至った模様」
↓「それを回避するにはテツ殿が昨夜提案した内容を実行するのが一番的確だろうとの結論に至った次第です」

「まだまだは氷上の上」
↓「まだまだ氷上の上」

「若い奴等にゃぱっとしねえ」
↓「若い奴等にゃぴんとこねえ」

「それもはいいな。頼めるか？」
↓「それもいいな。頼めるか？」

英雄の証明

秘密の会合が始まってからおよそ一時間ほど後の事。

これから始まる芝居の稽古を終えた鉄兵は、謁見の間にてじっと出番を待っていた。

片膝を立てた姿勢で出番を待つ鉄兵の横には、リルがちょこんと座っている。リルの首には真新しい黒い首輪が巻かれているのだが、どうにもそれが気になるらしく、リルは先ほどからしきりに首をかきむしるような仕草をしている。

『あるじ、これかゆい』

「ごめんねリル。でも、それは一緒にいるために必要な物なんだ」

クーンと弱りがちなリルの鳴き声に、鉄兵は周囲を気にして声を低くして侘びた。首を掻いてあげたい所であったが、残念ながら周囲に視線があるために下手に動く事は出来なかった。

鉄兵の左右には２０人を越える近衛兵と思しき兵が横一列に立っており、その兵の後ろには思い思いに集まってグループを作る国の重臣達の姿があった。今回の謁見は略式のために重臣達には出席義務が無いのだが、謁見を見学に来た重臣は少なくない。噂の新英雄の品定めといったところなのだろう、こちらを見てひそひそとしきりに話している。

話題の中心は間違いなく鉄兵の事についてだろう。意識を集中すれば何を話しているか聞き取れるだろうが、鉄兵はあえてその集中

力を逆に使用して勤めてそれを雑音としてそれを処理する事にした。あちらとしては得体の知れぬ新参者に興味津々なのかも知れないが、こちらは緊張でガチガチなのである。下手な事を聞いて集中は乱したくないのだ。

やがて鐘が鳴らされ、一同が静まった。いよいよ猿芝居の始まりである。

鐘とともに鉄兵は顔を俯かせた。コツコツという足音だけが謁見の間に響き渡り、やがて歩を止めた。俯いている鉄兵には見えないが、恐らくは１０ｍほど先にある階段の上の謁見用王座の前までたどり着いたのだろう。

「面をあげよ」

「はっ」

シリウス王の言葉に鉄兵は顔を上げた。シリウス王の右にはイスマイルが。左にはオスマンタスが控えている。

先程まで一緒に芝居の稽古をしていた相手がこうやって真面目な顔で高い位置にいるのを見ると、意味も無く滑稽なように思えて少しだけ表情筋が緩みそうになってしまう。が、オスマンタスに目で射抜かれてしまって慌てて真面目な顔を作る。

「魔獣及び山賊討伐の件、大儀であった」

「はっ」

「そなたの横にいるのが我が娘がフェンリルと名づけたその魔獣で

あるか？」

「はっ。名はリルと申します」

謁見の間に一瞬ざわめきが響いた。噂話を聞いていたであろう重臣達は、鉄兵の横にいるリルが噂の魔獣だと検討はついていたはずである。だが、こうして改めて肯定されるとわかってはいても驚きは隠し切れなかったようだ。

「して、そなたはそれを手懐け、飼育したいと申しておるようだな」

「はっ、仰せの通りです」

「しかしそのような魔獣、いかに手懐けてあろうとも、人の世で飼うには危険ではないのか」

「それについてはすでに対策を打っております。こちらの首輪をご覧くださいませ」

リルを手元に呼び寄せ、周囲に良く見えるように首輪を示す。

「この首輪は私が自作いたした物です。魔力を練って製作したゆえ魔獣といえども破壊する事適わず、魔獣としての力を現そうとすればたちまちに首が絞まり、自らの力によって倒れる事となりましょう」

今度はおおっ、という賞賛にも似た歓声が謁見の間に響いた。危険がないという確認が取れた事による安心感。首輪にかけられた魔法具の力に対する関心。さらには強大な魔獣を子狼の姿に封じ込めるという痛快さがその喜色の混じった歓声をあげさせたといったと

ころであろうか。

その歓声を聞いて、鉄兵はちょっとだけ申し訳なく思ってしまった。名目として、この首輪はそういうものだという事にしているが、実際のところはただのゴム製の首輪なのである。わざと脆く作ってあるので、リルが巨大化しようとすれば大した苦痛も無くぶちんと千切れて終わりだろう。

この小細工の発案者はオスマンタスである。いくらリルが鉄兵に慣れていて自分勝手に巨大化しないとはいっても、魔獣は魔獣である。危険性が無いといくら説明したとしても、万が一があると思えば無意識が働き危機感は消えないだろう。そんな状況では行動に制約をつけざるを得ないので、ならば嘘でも良いから力は封じてあるという事にしてしまえば周囲も無闇に怯えないだろうというわけである。

「ふむ。いかに凶悪な魔獣といえど、首輪を付けられてしまえばただの犬と変わらんか。よかろう。飼育を許可いたす」

「ありがとうございます」

これにて鉄兵が王城まで来た最初の目的は達成である。だが、まだまだ問題は片付いていない。

「では次の話に移る。反乱分子の首領を捕らえた功績は大きい。褒美をやろう。望むものはあるか？」

「陛下、それにつきましては先に伺っております」

横からイスマイルが一歩前に出て恭しくシリウス王に頭を下げた。

「ほう。して？」

「はっ、まずはこちらに目をお通しください」

イスマイルは懐から取り出した書類をシリウス王に手渡した。受け取ったシリウス王がじっと中身を検分する。

「嘆願書のようであるな」

「はい、テツ殿の望みは捕らえた反乱分子どもの減刑でございます」

再び謁見の間にざわめきが起こる。今度のざわめきはどちらかというと戸惑いのものが多いようである。

「ほう、それは異な事を申す。説明せよ」

「はっ。テツ殿は心優しいお方ゆえ、反乱分子といえども一人の人間であり、無闇に命を奪うは本意とせぬようでございます。

確かに反乱分子どもは山賊行為を働こうとしましたが、我らの手によりそれは未遂に終わり、捕縛した後に自らの手で後始末も付けさせております。なれば後は戦犯行為の賠償のみが残るというものであり、その賠償を自ら負おうとも、命ばかりは取らずにおきたいとのことです」

重臣達の間からは失笑の声と感嘆の溜め息とが漏れていた。割合としてはおよそ半々である。これについてはやはり賛否両論らしく、見事に意見が分かれているようである。

「ふむ。なんとも甘い事だ。

だが、英雄というものはそういうものかもしれんな。
よかろう。首領がこちらの手の中にあれば反乱分子どもも下手には動けまい。
嘆願を受理し、山賊どもは禁固１０年の罪に処す。
だが、それだけでは褒美としては小さいな」

シリウス王の鷹の目のような鋭い視線が鉄兵を射抜く。

「聞くに、そなたはこの国に仕官する意思があるというな」

「はっ、私は異大陸からこの地に参りました。異大陸にはこの地には無い技術があり、その知識を私は習得しております。
その知識をもってこの国に貢献できますればと考えております」

鉄兵がそつなく答える。さて、ここからが盛り上がりどころである。

「ならばこうしよう。そなたには男爵の爵位を与える。ノワールの家名を名乗るがよい。
魔獣から救ったのも何かの縁だろう。その地位を持って商業都市カティスの領主となるがよい」

ざわっ！　と今日一番のざわめきが謁見の間に響いた。

それはそうだろう。新興国ゆえ、功績をあげたものが爵位を得るのは珍しくともない事ではない。そちらはいいのだが、問題は与えられた領土である。

カティスは南方との流通の要であり、国防における要所でもある。重要性は非常に高く、直轄領ではないものの、治めているのはシリ

ウス王の姉、つまり王にとって一番信用が置ける者が治めている土地である。いくら国防を左右する存在とはいえ、たかだか魔獣と山賊を退治した功績として与えるには過分すぎる土地なのだ。

とはいえ、同時にその発言はここに集まった重臣達にとって一つぴんとくる話でもあった。

鉄兵の英雄譚が広まり始めた頃より、王都にまことしやかに囁かれている噂がある。王の言葉は、その噂を肯定するに足る発言でもあったのだ。

その噂とはつまり、新たな英雄とアリス姫が恋仲にあるという噂である。

片っ端から縁談を切って捨てるアリス姫はシリウス王にとって悩みの種である。自分より劣った者の元に嫁ぐ気は無いと散々公言しているアリスに王はなんとか貰い手をつけようと苦心しているわけだが、国内に該当者は無く、王ならずとも国民の誰もが、半ばアリスが嫁ぎ遅れるのは覚悟していた事なのである。

そこに、アリス姫が民草から英雄と呼ばれているような男を連れて国に帰ってきた。

期待とともにそんな噂が流れるのも至極もっともな話だろう。

そこをもって先程の王の発言である。アリス姫が自ら認めた男というのならば、王とて乗り気なのだろうという事は予想がつく。

とはいえ、王族を娶るためには体面としてそれなりの地位が必要だ。

そんな状況を知った上で過分なまでの褒美を与えるという発言を鑑みれば、つまり男爵位とカティスはいわば体面を整えるための持参金代わりなのではないかという考えは誰もが思いつく話であった。

しかし、だとしてもカティスを与えるというのはやりすぎである。アリス姫の婿候補として王の期待が大きい事はわかったが、それにしても直轄領でもない国の要を与えるのは理解の出来ない話であった。

それよりも他に適当な場所はいくらでもある。なのに王がなぜあえてカティスの名を出したのかが分からず、謁見の間のざわめきは増すばかりであった。

余談だが、台本はオスマンタスが作成したものである。なのでシリウス王達三人にとっては重臣達の反応は計算済みのものであったが、無論それは噂を知らぬ鉄兵の理解の外の話である。つまり、王と重役二人によって鉄兵は軽く罠にはめられているわけだが、まあそれはここでは置いておこう。

オスマンタスが片手を挙げ、周囲のざわめきを治める。

「陛下」

ざわめきが収まったのを見計らって、オスマンタスは険しい顔でシリウス王に呼びかけた。ここからが本格的な猿芝居の始まりである。

「何事か、オスマンタス」

「恐れながら陛下。たかが山賊を討伐した褒美としては、それは些か過分なものと思われますが」

「過分と申すか」

謁見の間にはオスマンタスに対する同意が色濃く現れている。王といえども無視の出来ない雰囲気である。

「余はすでにこの者の技術の一部を目の当たりにしておる」

仰ぐように重臣達を見遣ったシリウス王は、高らかに言葉を述べた。

「この者の知識と技術は目を見張るものがある。
それこそ音に聞く技術大国アルケンバインを遥かに凌ぐものと思われる。
この者がこの国に繁栄をもたらす事、疑いは無い。
その技術を存分に振るわすとするなれば、資材の調達は重大事であろう。
ならばその功績を先渡しとし、流通の盛んなカティスを与えるが好都合というものではないか」

謁見の間はさらにざわめきを増した。一応の説明はつく話であるが、残念ながら鉄兵に関する噂はほぼ武勇に関するものであり、鉄兵の技術とやらを重臣達はまだ目にしていない。ゆえに俄には納得が出来ず、ざわめきはいや増すばかりである。

「しかしながら陛下。いきなり財源の要であるカティスを譲渡されてしまっては、姉君のアイダ様も納得しかねるものと思われますが」

「なに、姉ならばこそ弟の頼みの一つも快く聞いてくれようぞ。ここは一つ、姉には弟とこの国のために泣いてもらう事とする」

「しかし陛下、それはあまりもに……！」

二の句を告げれなったオスマンタスが絶句する。なんとも迫真の演技であるが、感心ばかりもしてられない。

謁見の間は良い感じにざわめいている。さて、ここからが鉄兵の出番である。

ちらっちらっと瞬き多くシリウス王を見つめ、用意は整っていると合図を送る。

「ふむ。なにやらテツ殿には言いたいことがあるようだな」

鉄兵の合図を受け取ったシリウス王が鉄兵に話を振る。自然、ざわめきが止み注目が鉄兵に集まる。

「はっ。恐れながら陛下、もしよろしければ地位や領土ではなく、他のものを頂戴したいと思っております」

周囲がどよめく。地位も名誉も、これ以上望むべくもない代物である。それを断ってまで、何を欲するというのだろうか。

「ほう、何を望むのだ？」

「はっ、これより国のために職務にあたるにつき、私は大規模な事業を起こそうと思っております。ですが単身で大きな事を成すは適わず、私の手足のように働く部下を頂戴したくあります」

「ふむ。地位や領土ではなく人手をよこせと申すか。しかしそれならば他に用意しよう。褒美を断るには及ばぬ事だ」

確かに王の言うとおりである。そうでなくても人手など譲渡されたカティスで雇えばいい話である。いったい何を言っているのだという空気が謁見の間には広がっている。

周囲の人々が疑問に思う事は至極もっともな事だろう。

だが、鉄兵が望む部下とは、そんな事では雇えない人々なのだ。

「恐れながら陛下。人手を用意してもらうには及びません」

「ほう。手勢を望むが、しかし用意する必要が無いとは面妖な事を申すな。

それならば、誰をもって手勢と為すのであるか？」

「はっ、私が捕らえた山賊どもです」

ざわっ、と驚愕の声が一瞬だけあがった。

鉄兵の発言の奇抜さに、誰もが声を発する事が出来ず謁見の間が静まり返る。

シリウス王が眉を皺寄せ鉄兵を睨みつける。

「……わけを申せ」

「はっ、山賊どもを信用置けぬと申されましたが、それを言うなら

私も同じ事にございます。
ありがたい事に市中では英雄などと敬ってもらっておりますが、異大陸出身の私もどこの馬の骨か知れたものではありません」

鉄兵の言を聞いた近衛達が、俄に鉄兵が信用の置けぬ身の上である事を悟りに緊張を見せる。それはその後ろに控える重臣達も同様である。

そんな周囲の反応を無視するように、鉄兵が言葉を続ける。

「アリス姫に出会わねば、私は捕らえた山賊と同じような境遇に至っていたかも知れませぬ。
そんな事もあり、王都への旅路の最中、私は山賊達と接触を取りました。
すると、彼らは山賊に身を落としたといえども元は騎士という事もあり、私などより心根の爽やかなものでございました。
なれば、このまま朽ち果てさせるは惜しいと考え、私は説得を行ったのです。
無為に朽ち果てるより、国とそこに住まう民の為にあれと」

鉄兵はここで一度言葉を切った。いやがおうにも鉄兵の次の言葉への注目が集まる。

「この国に至る旅路の間、私が誠心誠意を持って行った説得により、山賊どもは心変わりをしております。
今、彼らの心にあるのは、この国のために働きたいという気持ちのみでございます。
そこで、まずは半年ほどお時間を下さいませぬでしょうか。
その期間をもってして、我らを見極めていただきたいのです。
地位も領土も不要。監視をお付けなさってくれても構いません。

ただ半年。

その僅かな時をもってして、私を含めた一同全てがこの国のために役に立つものであり、私が語った言葉に嘘偽りがなかった事を証明させていただきたいのです」

これにて鉄兵の出番は終わりである。鉄兵にとってはまさに猿芝居であったが、周囲の反応は劇的なものだった。

呻きにも似た感嘆の溜め息がそこかしこから漏れ聞こえてきた。

謁見の間に何か爽やかな風が流れた気がした。

近衛を含め、この謁見の間にいる誰もがこの作られた美談に感動を表していた。黙っていれば、鉄兵には一都市の支配者となり、何一つ不自由の無い栄光の道が開かれていたのだ。いや、そればかりではない。シリウス王に認められ、アリス姫と恋仲であるというならば、今後は国の主導者の一員になる可能性すらあったのである。

それを、高々２０人足らずの人間。しかも山賊などの命を救おうとするために投げ出そうというのだ。

俄には信じ難い、馬鹿げた話である。

だがそんな、まさに英雄譚の一節を再現したかのような一幕を目の当たりにした一同は、人それぞれに感銘を隠し切れずにいた。

政に関わる重臣達はその無私に基づく清らかなる志を。

武に生きる近衛達はその義心に基づく高潔な生き様を。

そうあれかしと願い正道を歩まんと常に欲しながらも、日常をすり抜けるにつれ藁よりも易く吹き飛んでしまいがちな人として善くあるための本道。

歩みやすいようでいて何よりも歩みがたいその本道を堂々と歩むその体現者を目の先に見つけた一同は、邪気を払われたかのように純粋な感動の念を示していた。

同時に、そんな彼こそ民草のために身を粉にする姫様の婿に相応しいという共通認識が生まれたりもしたのだが、まあこれは横に置いておこう。

「噂に偽りは無い……という事か」

ぽつり。とシリウス王が呟く。

「その言葉が真なら、よほど反乱分子どもはそなたに信服しておるようだな。

ふむ。名より実を取ると申すか。なれば確かにこちらが用意する手勢よりも遥かに動かしやすいであろうな。

よかろう。そなたの案を承認するものとする」

王の采配に惜しみない喝采が起こった。ここが謁見の間では無かったら拍手すら起きそうな雰囲気である。

「しかし、城に出入りするのに地位も無しでは動きにくかろう。民が英雄と呼ぶものが無位無官では都合も悪い。

よって、テツには一代限りの名誉騎士の称号を与えよう。

領土についても山賊どもの拠点がある地域のみを贈るものとする。元より弟も手を焼いている土地だ。否はなかろう。

自領の民なら罪人の裁量を委ねるに不都合はあるまい。罪を贖う為の奉仕を強要するものといたせ」

国王の名裁きに周囲から賞賛の溜め息が漏れた。

国の規範として、法は守られねばならない。それが法治国家として歩み始めたこの国の基本方針である。

だが、一方で民の賞賛を一身に浴びた英雄の頼みを無碍に断る事はできないと言うのも現状である。鉄兵が山賊を部下に置きたいと言い出した時、沈黙に包まれたあの時に、国の重臣達は誰もがそれを思い頭を痛めたのである。

だが、確かにその領土を与えるならば法の遵守という意味でも最適であり、誰からの文句も無く丸く収まるであろう。それにもっとも高貴な騎士に与えられる聖騎士の別称である名誉騎士の称号を授ければ、英雄と呼ぶに相応しい少年に対して非礼にもならない。

元の世界で言うならば大岡裁きと言ったところであろうか。シリウス王の一部の隙も無い采配に、さすがは我らの王だという気運が持ち上がる。

「オスマンタス。余の判断に異存はないな」

「ははぁ、見事な裁きでございます」

オスマンタスが膝を折る。これにて芝居は完成である。

「ではこれをもって謁見を終わる事とする」

鐘が鳴り、シリウス王が退席する。

それに続いて鐘が鳴る。

これ以上にない素晴らしい謁見を無事終えた鉄兵は、賞賛を帯びた視線を一身に浴び、リルを抱えて胸を張って退席した。

「お疲れ様でした」

謁見の間から出ると、ホーリィが待っていた。労いの言葉に能面のような表情でただ頷き、先に歩き出したホーリィの後に続く。

やがてホーリィに案内されて一室に通された鉄兵は、ドアが閉まる音を確認すると五体投地で床に突っ伏した。突如宙に投げ出されたリルがキャンと一言驚きの声をあげてガシッと四足を踏ん張り着地する。

「ごめんリルー。ちょっともう限界だったんだ……」

『あるじ、おつかれ？』

「うん、おつかれ」

とことこと寄ってきてリルが鉄兵の顔を舐め始める。そのリルの頭に手を乗せて、鉄兵はそっと優しく撫で始めた。

毛の感触に心を癒されながらも、鉄兵は先程までの事を思い返す。

鉄兵が提案した計画内容は、そのほとんどが今回の芝居では大規模に改変されている。

ようやくここで白状すると、当初鉄兵が提案した計画というのは非常に簡単な事である。

鉄兵は、自分の技術と知識はこの世界において非常に高い価値をもっていると自負しているし、それは事実である。そして鉄兵が提案した内容というのは、それを出来うる限り安く提供する代わりにアルテナ達を部下につけて欲しいという事であった。

実際の話、魔法をリミックスした鉄兵の工学を筆頭とした現代社会の知識を存分に発揮すればこの世界この地域において何倍も豊かな生活を全国民に供与するのは容易い事であり、破格の条件といってもいいだろう。

とはいえ、それはあくまで鉄兵だけが理解している事であり、シリウス王及び重鎮2人としては国民と重臣に対する説明が不足するところであった。

ゆえに今回の芝居は鉄兵が先に提案していた「もし名目が欲しいのであれば、地位や領土は諦めるのでそれと引き換えにして欲しい」という条件を元に作成されたものなのである。

あえて自分からへりくだる事により譲歩の姿を見せ、最初から期待していない価値を撒き餌にして適正より上の値段で商品を売り払うのはぼったくりの常套手段である。それを敏感に嗅ぎつけたオスマンタスが、どうせならそれを最大限に利用してしまおうという企みによって出来たのが今回の芝居の内容であった。

元の世界に帰る予定が先に立っている鉄兵にとって、正直な話、地位や領土とやらはもらっても邪魔なものであるのでそれは非常に好都合な話であった。この時、契約期間については当初オスマンタスの台本には無かったのだが、こうした方が訴えかけるものがあるだろうと無理やりねじ込んだものである。これならば、半年後にそれ以上の地位を提示されたとしても断る事が出来るだろう。

ちなみに鉄兵の当初の提案では領土も騎士の称号ももらう予定がなかったのだが、そこは後々山賊集団を吸収するのに都合が良いということで無理やり押し付けられたものだった。元より治世のための手が足りずに反抗勢力を討伐せずに黙認していたような土地である。いたずらに事を構えるよりかは段階的に既成事実を重ね、これを機に取り込んでしまおうという戦略のようである。まずは鉄兵の領土として委譲されたが、半年後には鉄兵の部下になったアルテナの手に委ねられる予定である。

経過はともかく、なにもかも上手く回って鉄兵としては一安心である。これから忙しくなるかもしれないが、ここでリルと戯れる事くらいは許されるだろう。

そんな風にまったりとリルとの時間を楽しんでいたら、不意に前触れも無くドアが勢いよく開かれた。

「鉄兵、おつかれさまー！　……って、なんで床に寝っ転がってるの？　汚いよ？」

思わず総毛だってドアの方を見ると、そこに立っていたのは妙にハイテンションなリードだった。床に寝転んでいる鉄兵を見て首を傾げているが、和んでいた鉄兵としては文句を言いたいところである。

「そりゃまあ……疲れてるからですよ」

「だらしないわね。立たないと踏んじゃうわよ」

「だー！　わかりましたって」

本気で踏まれかねないので鉄兵はしぶしぶ立ち上がった。残念ながら幼女に足蹴にされて喜ぶ趣味は無い。

「わかればよろしい」

足元にいたリルを抱えあげてえっへんと言わんばかりにリードが満足気な表情を見せる。なんとも２２歳には見えないそんなリードの態度に対して、兄のホーリィは少し困り顔であった。

「リード、テツ様に少し失礼ですよ」

妹の無礼は兄が諫めるものと言わんばかりに諫言したホーリィである。

「いいの。だって鉄兵は私の弟子なんだもん」

だが、思わぬ妹の発言に、ホーリィのその表情が固まった。

「……弟子、なのですか？」

「弟子です。はい」

ギギギっと音でも聞こえそうなほどに硬直したまま顔だけこちら

に向けて質問するホーリィに、鉄兵は苦笑しながら答えた。

そう言われてもどうやら噂の英雄が自分の妹の弟子であるという事実が上手く繋がらないらしく、頭にクエスチョンマークをたくさん浮かべている。ここまでそつのないホーリィだっただけに、鉄兵は不謹慎にもホーリィの狼狽振りを見てちょっと面白いなとか思ってしまった。

そんな事をしていたら、再びノックとともにドアが開いた。

「よう、うまくやったようだな」

「見事なものだったな」

続いてやってきたのはシロとアリスである。シロは相変わらず飄々としたものだが、アリスは妙に上機嫌で珍しいまでに笑顔全開である。王都に帰って来たことで何か良いことでもあったのだろうか？

と、それよりちょっと気になる発言があった。今、アリスが見事なものだったとか言ったが、ひょっとしてあの芝居を見ていたのだろうか？

「ひょっとして、見てたの？」

「うむ、王座の横の控え室から見させてもらっていた」

「あ、あたしとシロもだよ」

「マジで？」

助けを求めるようにシロを見たら、いつも以上に良い笑顔でニッと笑われてしまった。

急激に恥ずかしくなって鉄兵は頭を抱えてしまった。熱いほどに血が上って顔が赤くなる。別に恥ずかしがるような事ではないのだが、ノリノリで一人芝居をしていたら、いないと思っていた友達にその現場を見られてしまったような感覚である。いやちと違うがまあそんなところである。

そんな具合にいつものペースに戻って団欒していたら、扉がノックされ「失礼します」という声が聞こえてきた。その声にみんなは顔を合わせ、微笑みあう。

特徴のある渋い声。三番目の訪問者は間違いなく山賊団の副頭領、マーティンのものであった。

扉が開き、元山賊達が姿を現す。身だしなみを整え、黒の軍服に身を包んだ様は、どこから見ても一級品の騎士そのものだ。

ぞろぞろと、しかし足並み乱れず部屋に入ってきた18人の騎士達は、鉄兵の前に4列に並ぶとザッと息を合わせて跪いた。

「我ら一同、テツ様への忠誠を誓います」

「はい。半年ほどだけ頼みます」

マーティンの言葉に鉄兵はにこやかに微笑んだ。これで晴れて山賊姫の一団は鉄兵お付の騎士団である。マーティンは鉄兵の言葉になにやら言いたそうな表情をしていたが、事の成就に喜ぶ鉄兵はその事に気がつかない。

「あれ、そういやアルテナは？」

よく見ればここに現れたのは１８人だけであり、肝心のアルテナの姿が無い。

「はあ、あちらに」

マーティンに尋ねると、マーティンは苦みばしった表情をしてドアの方を手で指した。

手で指された方向を見る。すると、確かにそこにアルテナはいた。ドアの後ろに隠れ、なにやら顔の半分だけを出してこちらを睨んでいる。

「……えーと、どうした？」

「別に……」

アルテナはそう言ったが、そうは言ってもふくれっ面をしているのが半分しか見えていない顔の表情からしても分かる。

「とりあえず、入ってきたら？」

良く分からないので部屋に入るように促すと、なぜかアルテナは言葉に詰まったようだった。

なぜか伏し目がちにもじもじとした態度を見せた後にアルテナが決心したように鉄兵に向き直った。あくまでドアに隠れたままであるが。

「いいか、笑うなよ。絶対だぞ！」

それはなんのフリだと言いたくなる様な台詞を叫びつつ、ぴょんと飛び込むようにしてアルテナがドアの後ろから姿を現した。

その姿に鉄兵はフリーズする。

「……実はアルテナさまだけあれを着るようにシリウス王から命令がありまして」

フリーズする鉄兵にマーティンからの説明が入る。その瞬間鉄兵の脳裏に浮かんだ言葉は「あのおっさん、何を考えてやがるんだ？」であった。非常に不敬な言葉ではあるが、誰もが頷くところであろう。

アルテナが着ていた服は、侍女の着る服であった。俗に言うメイド服という奴である。現代で思い浮かべるようなひらひらしたメイド服ではないが、カチューシャまでつけているその様は、まさに噂に聞く猫耳メイドという奴である。

非常に可愛らしいのだが、普段は男のような格好をしているアルテナを弟のように思っていた鉄兵にはあまりにもギャップが強く、思わず顔が引きつってしまう。

「……ぷっ」

多分、アルテナの先ほどの言葉はフリではなく本気の言葉である。だが、ぷるぷると子猫のように震えるアルテナを見て、鉄兵はその仕草の可愛らしさにどうしても耐え切れず、思わず噴き出してしま

った。

「わ、笑うなー！！」

腰を折り、顔を真っ赤にして、腹の底からアルテナが叫ぶ。目元には涙が溜まっていて、またいつぞやのように泣き出してしまいそうだ。

「あはは、ごめんごめん。でも可愛いよ。やっぱ女の格好のがいいって」

「……！！！！」

慌ててフォローを入れたのだが、アルテナは鉄兵の言葉にさらに顔を真っ赤に染め、まるで猫そのものの敏捷さでドアを押し開け、風のように出て行ってしまった。

「……俺なんか悪い事言った？」

「私は知らん。本人に聞いてみるがよい」

フォローのつもりが極端なほどに避けられてしまった鉄兵が軽いショックを受けつつ聞いてみると、なぜかアリスは不機嫌顔でリードは呆れ顔であった。

わけがわからずホーリィやマーティンの方を見ても困ったように苦笑いをするのみである。

何か困った事態になっているような気もするが、とにもかくにもこれで大きな問題は全て片付いたはずである。まずは大団円といっ

たところであろうか？

せっかく異世界にきたのだから色々旅をしてこの世界を見て回りたかったが、魔法という新規の可能性を調べつつ国に居座り知識を振るってみるのも悪くは無いだろう。

知り合いがいて、知識を振るう場所があり、生活は保障されている。前途はこれ以上に無いほどに揚々だろう。

さーて何をしようかな。と、数限りなく目の前に広がる可能性の糸の束を見据えつつ、鉄兵はさっそく思考に耽り始めた。

英雄の証明（後書き）

アルケンバインの国名はいずむさんからいただきました。ありがとうございました～。

２０１１／１／１９：指摘いただいた部分修正
「芝居をして、いたらいないと」
→「芝居をしていたら、いないと」

「服頭領」
→「副頭領」

「困った自体」
→「困った事態」

「なんとも迫真の演技であるが、関心ばかりもしてられない。」
→「感心」

２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
そならの案を
→そなたの案を

ある朝の一幕

王宮のある一室。

開け放たれた窓からは少し冷たいが爽やかな風が流れ込み、朝日が燦々と部屋を明るく照らし出している。

窓の外では小鳥達が歌い戯れ、そこから見える家々からは煮炊きのための煙の柱が立ち並んでいた。

この部屋の外にはまさに平和な朝の始まりというに相応しい光景が広がっている。

「うう……だめだ死ぬ……」

だが、そんな爽やかな朝だというのに、部屋の中のベットに転がっている鉄兵は、いつものように二日酔いで死にそうになっていた。

最早、毎度お馴染みともいえるこの光景。こうも二日酔いが続くとだらしなく思われるかもしれないが、鉄兵の名誉のために言うならば、これには一応の理由のある事だったりする。

基本的にこの世界には娯楽が少ない。ゆえに酒を飲み、語り、歌って騒ぐのが一般的な娯楽なわけで、夕食ともなれば必ずといって良いほど酒が出る。そしてそんな環境のためか、この世界の人達は皆そろって酒に強いのだ。鉄兵も酒に弱いわけでは無いのだが、周りに釣られてついつい飲みすぎてしまい、毎度のように二日酔いになっているというわけである。

とはいえこの世界に来てから早一ヶ月。その間ほとんどがこの調子なのだからそろそろ学習しても良い頃かもしれない。なのに未だにこうして自分の酒量の限界を見極めて飲めないという事は、まあ本当に酒にだらしないだけなのかもしれないが。

それはともかく今日の鉄兵はいつもより二日酔いが酷い。いつも二日酔いになっているとは言え、普段なら多少頭痛がする程度のものなのが、今日の鉄兵はまるでいつぞやの魔法を覚えた日の朝のように酷い二日酔いに悩まされていた。

なぜそんなに飲んでしまったのかといえば、まあぶっちゃけてしまえば今回も似たような理由でこうなっているわけなのだが、とりあえず説明のために少し時間を遡る事にする。

時は戻って前日の夕食時。一芝居終えた鉄兵はシリウス王に命じられて晩餐の席を共にしていた。

いきなり王族兼アリスの家族に囲まれて食事をするとはハードルの高い話であったので誰かに付き合って欲しかったのだが、リードとイスマイルは自宅に帰り、アルテナは絶賛逃亡中である。なのでせめてシロぐらいは付き合って欲しかったのだが、そもそもシロは竜人族という事で一勢力に肩入れしていると思わせるような行為はご法度なのだそうである。ゆえにシロは昼は顔を出すといっていたが宿は城下で取るらしく、夕日がくれる前に城から出て行ってしまった。さらにはリルもどさくさに紛れてリードがつれて帰ってしまったらしく、鉄兵はある意味孤立した状態でこの席に挑んでいた。

王族の食事と言えば豪華な印象があるかもしれないが、オズワル

ド王家の食卓においてはそんな事はなかった。無論、専門の料理人がそれなりに質の良い材料を使って調理しているために味の方は最高なのだろうが、目の前の料理の種類についてはそれほど庶民と大差が無かった。テーブルも上座下座のない円卓であったりと、なんだか王宮っぽくないのだが、こちらの方が無駄に威圧感を感じないために鉄兵としては大助かりである。

食卓を囲むメンバーは6人ほどいるのだが、鉄兵と後はアリスの家族だけである。正面に座るシリウス王と鉄兵の右隣のアリスはともかく、シリウス王の左右に座る王妃と思しき女性と王子と思しき男性。それに鉄兵の左隣に座るこれまた王子なのだろう少年は知らない人物であった。

そんな状況の中、全員の杯にワインが行き届いたのを見てシリウス王が口を開く。

「まずは家族を紹介しよう。妻のアリア、次男のヒューバートと三男のガブリエルだ」

「……」

「ヒューバートだ。よろしくな」

「ガブリエルです。よろしくお願いします」

シリウス王の紹介に、ヒューバートは元気良く、ガブリエルははにかみながら挨拶をした。ちなみにアリア王妃が無言であるが、これは特に機嫌が悪かったり敵意があっての事ではないようである。その根拠はにこにことふわふわした感じの笑顔を見せている事だけであるが、まあ外れてる気がしない。

こうしてアリスの家族が一同に揃ったところを見てみると、なるほど家族だなと鉄兵は当たり前の感想を胸に抱いた。こうしてみるとアリスは父親似なのだという事が良く分かった。

アリア王妃は赤みを帯びた金髪碧眼のほわほわした感じの女性である。アリスの母でシリウス王の妻となればさぞかし美形なのだろうなと鉄兵は想像していたのだが、少し予想外な事にアリア王妃は美人というほどの美人ではなく、結構地味な感じの可愛らしい女性であった。

その代わりといっては何だが、アリア王妃には特筆すべき一つの特徴があった。事前にホーリィから仕入れた情報では、シリウス王は３６歳でアリア王妃はその３歳年上のはずである。つまりそういう年齢のはずなのだが、残念ながらというべきか、シリウス王の妻というよりかはアリスの姉……いや下手をすれば妹のようにしか見えないのだ。

６人の子持ちながら少女のような印象を受けるアリア王妃がシリウス王の妻であるといわれれば「このロリコンが！」という言葉しか浮かばなかったのは絶対に口には出せない鉄兵の感想である。ちなみに長男は２２歳という事で、シリウス王の年齢から逆算するとなにやら犯罪の匂いがしたが、そこは異世界という事であまり考えない事にした。まあ当時は戦乱期だったはずだから早いうちに跡取りを作るのは王家の義務だったのだろう。

次男のヒューバートは基本父親似のようである。燃えるような赤目赤髪は見紛う事無き父親譲りのものであるが、容姿については母親のものが少し混じっていて、鉄兵と同じ２１歳のはずなのだが、この世界では幼く見られている鉄兵よりもさらに幼い感じがあり、

どこか少年のような印象を受ける人物であった。先程の挨拶の感じからしても性格は基本父親譲りのようであるが、どこかのんびりした感じがするところは母親譲りのものだろう。

１３歳の三男のガブリエルは両親の良いとこ取りをしたような容姿である。髪は優しい夕日のような色で、目の色もそれとほぼ同じものである。顔のパーツの一つ一つを良く見れば父親譲りの美しいものなのだが、その配置が母親譲りの絶妙なもので、気品がありながらも柔和で可愛らしい印象を受けるものだった。性格は基本母親似のようでほわほわとしていてなるほど末っ子なのだなぁという印象を鉄兵は受けた。

ちなみにアリスの家族は他に兄が一人に姉が二人いるのだが、姉二人はすでに嫁いでいるので王都にはおらず、兄は軍の将軍職についているために軍事演習を行っており、帰還予定日は明日だそうである。

「香坂鉄兵です。今後お世話になります」

アリスの家族の前という事もあり、正直なところ鉄兵はかなり緊張しながら挨拶をした。

「なんだか硬いな。緊張しているのか？　別にここが王宮で俺達が王族だからって緊張する事ないぜ」

鉄兵の緊張が見て取れたのだろう。そう言ったのはヒューバートであった。にへらと笑ったその表情はなんだか妙に親しげである。

「そうだぞ鉄兵。昼の謁見の時でさえ今ほど緊張していたようには見えなかったというのに、どうしたというのだ？」

こちらはアリスの台詞である。その表情は焦りを含んだものであり、なぜか本気で心配しているようである。

アリスに心配をかけるのはこちらとしては本意ではない。アリスの家族も予想以上に親しげな感じなので緊張するのも失礼なのかもしれないとは思ったが、だからといってそう簡単に緊張を消す事なんてできる事ではない。緊張を解く方法は色々あるのだろうが、残念ながら鉄兵はこんな時に緊張感を解す方法を一つしか知らなかった。ゆえにそれを実行する事にする。その方法とはずばり、開き直る事である。

「いや、王宮で王族を前にしてるから緊張してるわけじゃないよ。ただ……」

「ただ？」

「アリスの家族の前だから緊張しちゃって」

鉄兵としてはただの本音だったのだが、アリスの家族にとってはツボに嵌る話だったようである。鉄兵の言葉に一瞬静寂が訪れたが、次の瞬間には食卓は爆笑の渦に飲み込まれていた。声を発しないアリア王妃ですら口に手を当てて笑いをこらえているようである。

「あっはっは。なんてーか、やっぱりおまえは大物みたいだな」

「はあ……」

豪快に笑うシリウス王の台詞に鉄兵はただただ恐縮するばかりであった。王族のアリスとは結構長い時間旅を一緒にしてきたし、シ

リウス王はあの通りの性格なので今更王族だからという理由で畏まるなんてできないというだけの話だったのだが、確かに王族の前だからという理由より友人の家族の前だからという理由で緊張するというのは、よく考えてみれば大物に見える発言なのかもしれない。

シリウス王が笑みを含んだ視線を向ける。

「そういう事情ならなおさら緊張する必要はないだろ。おまえはもう、俺にとっちゃ家族みたいなもんなんだ。気軽にしろよ」

「そうそう、親父も良いこと言うぜ」

「馬鹿言え。俺はいつだって良い事しか言わないのさ」

持ち上げるヒューバートに調子に乗るシリウス王。なんというか、どこにでもいる家族のような会話である。

それを見ていた鉄兵は、なんだか懐かしい気分になってしまった。最近では実家に帰らず学校で寝泊りしていたが、それ以前の毎日家に帰っていた頃は、自分も父親とこんなやり取りをしていたなぁと思い出してしまった。正直なところ、いくらシリウス王に気さくな一面があったとしても、王家が一堂に会した場でこれほどフランクな雰囲気になるとは思っていなかった。ほのぼのとした家族の光景を目の当たりにして、すっと緊張が消えていく。

「そういう事なら遠慮なく」

「おう、そうしろそうしろ。さて挨拶も済んだし飯にするぞ」

シリウス王の言葉にまずは全員食事に手をつけたが、すぐにまた

会話が始まった。会話の一番手はヒューバートである。

「テツは……あ、テツでいいよな」

「ああ、それでいいよ」

「俺の事はヒューって呼んでくれ。ガブリエルもエルでいいよな」

「うん」

ヒューバートの言葉にガブリエルが頷いた。やはり父親に似て押しの強い性格のようである。

「でさ、テツはすっげー魔法使えるんだってな。一つみせてくれねーか？」

そういったヒューバートの目がものすごく輝いていた。いきなりのリクエストにちょっと怯んだ鉄兵だったが、その目はよ～く知っているものである。未知なる物への好奇心。純粋に自分の知らないすごいものを見たい、知りたいと思い、それを目の前にした時のそれである。

ヒューバートの気安い態度も手伝って、鉄兵はヒューバートの事がなんだか元の世界の友人達に重なった。思えば友人達はいつもこんな目をしていたなぁとさらに懐かしさが募る。

「兄上。鉄兵は芸人ではないのですよ。それは少し失礼ではないですか？」

ヒューバートの失礼な発言にアリスが憤慨する。アリスの気遣い

は嬉しかったが、ヒューバートに悪意が無いと判断した鉄兵は場の雰囲気を盛り上げる方向で行く事にした。

「いや、いいよアリス。ヒューは単純にすごいもんが見たいんだろ？」

「そういうこと」

ニヤリと笑う鉄兵にヒューバートがニシシと笑う。なんだかここ最近無かったノリに、心が少し乗ってくる。

「いいぜヒュー。面白いもの見せてやるよ」

ノリノリで答えてみたが、さてどうしようかと考える。すごい魔法といったところで何をやるかが問題である。こんな狭い場所でまさかリードの時のように森を覆いつくす水を出すわけにも行かないし、何をやったら度肝を抜けるであろうか？

ちょっと悩んだ鉄兵だったが、そこに手に持ったナイフとフォークが目に入った。こちらの世界の食器の主流はナイフ・フォーク・スプーン、それに手掴みである。基本的な発想はこっちの世界でも同じなんだなと驚いたものであるが、残念ながら箸は無く、日本人の鉄兵としては正直不便な思いをしていたところである。なので、ちょうどいいのでこれをネタにする事にする。

「それじゃ軽く地味なのを」

鉄兵はナイフとフォークを重ね、先端を両手に当てて挟み込んだ。解析魔法を実行する。材質は、ここは流石王族と言う事だろう納得の銀製であった。

続いて加工魔法を発動させ、掌を合わせるようにして押し潰し、球状に加工する。

「うぉ！」

「うわぁ……」

それだけでもうヒューバートとガブリエルが驚愕の声を上げた。もはや鉄兵の魔法を見慣れているアリスは別として、アリア王妃もシリウス王も驚いているようである。ヒューバートのきらきらとした目を見る限り、この時点で試みは成功のようだがこれで終わりのわけではない。

鉄兵は続いてそれを均等に二つに分け、細く引き伸ばした。細い棒状のものを二本作れば箸の完成である。

「ま、こんなところで」

完成した箸を手に持ち、シロ張りにニッと笑ってみる。

「すごい……」

「……話には聞いてたが、目の当たりにしてみると大したものだな」

ガブリエルはポカーンとし、シリウス王すら度肝を抜かれているようだった。ヒューバートに至ってはすげーすげーとおおはしゃぎの様子である。とりあえずヒューバートとは良い友達になれそうだなとか密かに思う鉄兵であった。

「鉄兵。なにやら独特な方法でその棒を持っているが、ひょっとしてそれは何かの道具として作ったのか？」

唯一鉄兵の魔法に慣れているアリスが箸に注目する。目の付け所がいいのは流石だろう。

「これ？　これはうちの国の食器。箸っていうんだけどこうやって摘んで使うもの」

そう言って鉄兵はひょいと料理を摘んで実践した。軽やかに箸を操り料理を口に入れる。

「あ、これすごく美味しい」

何気なく摘んだ鳥肉のソテーっぽい料理だったが、その美味しさに鉄兵が思わず驚く。

「美味いだろ」

と、なぜか妙に自慢げなのはシリウス王である。その横ではなぜかアリア王妃が照れている。

「すごく美味しいですけどなんで、シリウス王がそんなに自慢げなんですか？」

確かにすごく美味しいのだが、なんでそんなに嬉しそうなのやら？

専門の料理人が作ったものが美味くとも、そこまで自慢するような事ではないだろう。

「そりゃ、女房の料理が褒められれば嬉しいに決まってるだろ」

「あー……納得しました」

そりゃアリア王妃が照れているのも納得ができると言うものだ。にしても結構な数の料理が食卓には並んでいるのだが、これを全部アリア王妃が作ったのだろうか。

「これ、全部アリア王妃が作ったんですか？」

「いや、それとそれとそれの三品だな」

シリウス王がひいふうみいと指を差して数える。指差された料理はどれも庶民的なものであった。

「へえ、アリア王妃は庶民的なんですね」

「そりゃ元は庶民だからな」

驚きの事実……でもないのか？　アリア王妃を見たままに捉えれば納得できる話であった。

「そうなんですか？」

「アリアは俺の乳兄弟の姉でな。生まれた時からずっと一緒でこれからもずっと一緒なのさ」

さてここは話を少し飛ばす。今でこそオズワルド王国は大国であるが、シリウス王が生まれた時代はまだまだそこらの小国だったた

めに王家といえども暮らし向きは庶民的だったらしい。自然乳兄弟の姉であるアリア王妃とも家族同然に育てられ、当然のようにシリウス王はアリア王妃を嫁として娶ったのだそうな。食卓が庶民的なのもその頃の名残で、どうも贅沢な料理より庶民的な食べ物の方がシリウス王の口には合い、特にアリア王妃の料理が一番美味いとの事である。要約すればそれだけの話なのだが、シリウス王の「嫁の料理が最高だ」という惚気が延々と続いたのでここでは割愛する。はいはいご馳走様といったところである。

「にしてもこんだけ美味い料理が毎日食えるって羨ましいですね」

アリア王妃の料理を口に運びながら鉄兵が何とはなしに呟く。特にお世辞とかではなく、自分も、自分の母親もそれほど料理が得意ではなかったので純粋にそう思って口にしただけのことである。

「あれ、アリスだってお袋と同じくらい料理は上手いはずだぜ？」

「そうだな。アリスはよくアリアの手伝いをしていたからアリアと同じくらい料理は上手いはずだ」

そう言ったのはヒューバートとシリウス王である。言われて記憶を思い返す。

「そういえば……そうだったかも」

アリスの手料理を食べたのはアリスに会った当日の夜だけだが、あれはただの塩味の豆スープだったのに妙に美味しくて驚いた記憶がある。その時も王族だと言うのに料理の手際が良い事に驚いた気がするが、なるほどそういう理由だったのかと今更ながらに納得する。

「つまり、アリスとくっつきゃ万事解決だぜ」

「え……？」

「兄上！　失礼ですよ！」

ニヤニヤと笑うヒューバートの口から出た冗談にアリスが過剰に反応する。ヒューバートに厳重に抗議をしているが、その顔は真っ赤であった。

「なんだよ、そういう仲じゃなかったのか？」

「ただの友人……だよな？」

内心動揺している鉄兵が思わずアリスに尋ねる。アリスと目が合う。その目の中に鉄兵と同じく動揺の様子が見て取れたと思った瞬間、アリスは「知らん」と一言吐き捨ててプイと横を向いてしまった。

「まあ、まだ見合いの件もある事だしな。それはそれで好都合か」

シリウス王が呟いた言葉に鉄兵はなぜかガンッと横っ面を叩かれたかのような衝撃を受けた。今更ながらアリスが王都に帰ってきた理由を思い出した。シリウス王が言ったように、アリスは見合いをするために王都まで帰って来たのである。

見合いをするという事は、アリスが結婚するかもしれないという事である。そう考えた鉄兵の心には急に得体の知れない喪失感が広がり、なぜか不安感を覚えて暗い気分になってしまった。横を見れ

ばアリスも同じような表情をしていたのだが、鉄兵はそれに気がつかない。

ついでに二人を見るほかの面々の表情はニヤニヤと暖かかったりするのだが、鉄兵はやはりそれにも気がつかなかった。

よくわからない感情に押しつぶされそうになった鉄兵はワイングラスを手に取り、その中身を一気に喉の奥に流し込んだ。急激に酔いが来て、鉄兵を潰そうとする謎の感情に対抗する。

そんな鉄兵の横からすっとボトルを差し出された。見れば、ガブリエルがワインボトルを持っている。どうやら注いでくれるらしい。

「どうぞ」

「ありがとう」

にこにこ笑うガブリエルに、鉄兵もにこにこと対応してワインを注いでもらった。子供に酒を注いでもらうのは倫理的な問題で少し罪悪感を感じなくも無かったが、その気遣いは嬉しいものだったので少し心が軽くなった。

酒の力とガブリエルの気遣いのおかげで少しは回復したものの、気分はまだまだ下降気味である。酒を飲めば誤魔化せるので、安易だがそうやって誤魔化す事にする。

この分だと明日の朝が大変そうだなとは思ったが、鉄兵はあえて自分の本能に逆らわなかった

とまあそんな事があり、今に至るというわけである。

そんな訳で二日酔いに苦しんでいるわけだが、今日はオスマンタスと自分の就業条件について話し合う予定があるのでおちおち寝ていられない。このままぶっ倒れていたいところであったが、そういうわけにも行かないので気合を入れて起き上がろうかとしたその時、コンコンとドアがノックされ、ホーリィが部屋に入ってきた。手にはお盆を持っていて、その上には陶器製の水差しとコップが乗っている。

「おはようございます。テツ様」

「おはようございます、ホーリィさん」

優しげな笑みを浮かべるホーリィに釣られて鉄兵も笑顔を返す。途端に頭がガンガンと鈍く痛んだが、初日から二日酔いの醜態を晒すのは恥ずかしい気がしたので、表には出さずにごまかす事にする。

今日からホーリィは正式に鉄兵の従者という事になったらしい。従者というと妙な感じだが、ようするにこの世界では世間知らずな鉄兵のフォロー役のようである。身の回りの世話から書類の作成まで、分からない事があったらとりあえず頼めばどうにかしてくれるらしい。リードの兄に身の回りの世話をされるというとなんだか変な感じだったが、初対面から妙に波長が合う人なのでありがたい話であった。

ホーリィがテーブルの上にお盆を置き、水差しからコップに水を注ぎ始める。何はともあれ水分が欲しかった鉄兵は頭の痛みを押してさっさとベットから起きる事にした。

「どうぞ」

ベットの縁に座って靴を履き終えた鉄兵に、ジャストのタイミングでホーリィが水の入ったコップとなにやら粉末の入った包み紙を差し出す。

「これは？」

受け取りつつも疑問の声をあげる。水はともかくこの粉末はなんであろうか？　なにやら薬っぽいが、なんで薬なんかを出されたのだろう？

「ウコンを粉末にしたものです。二日酔いに効きますよ」

「それは……ありがたいです」

どうやらばればれだったようである。これは恥ずかしい。

羞恥心に突っ伏しそうになった鉄兵であったが、ホーリィがにっこりと微笑みかけてきたのを見てなんだか妙に心落ち着かせてしまった。年上にこういう事を思うのは失礼かもしれないが、鉄兵はしみじみとホーリィさんは癒し系だなぁとか思ってしまった。

少女と間違えてしまいそうなほど華奢なホーリィは、リードの兄というだけあって超がつくほどの美少年である。よく気がつくし、政務についても有能なのだろう。さぞかし女性にもてそうだなぁと思った鉄兵であったが、同時にもう一つの可能性に気がついてしまった。ついでに妙に波長が合うその原因もそれなのかもしれない。

「ホーリィさんって、ひょっとして男にもてます？」

「……何の事でしょう？」

誤魔化したホーリィであったが、目が口ほどに物を言っていた。

「……お互い、苦労してきたみたいですね」

「はい……」

シンパシーが繋がったものの、お互い目をそむけてしゅんとしてしまった。

空はこんなにも青く、風は爽やかである。太陽は燦々と輝いているのに、どうしてこんなにも気分が重いのであろうか。

とまあ、そんな朝の一幕であったとさ。

ある朝の一幕（後書き）

アリア王妃の名前はＦｒｅｅｄｏｍさんに、ヒューバート第二王子の名前はＬｉｚｒｅｅｌさんに、ガブリエル（エル）第三王子の名前は疾風迅雷さんから頂きました。皆様ありがとうございました～。

２０１１／２／６：ご指摘いただいた誤字修正
一応に会した→一堂に会した
なぜか不安感を感じて→なぜか不安感を覚えて

「俺の事はヒューって呼んでくれ。ガブルエルもエルでいいよな」
ガブルエル→ガブリエル

２０１１／８／１３：ご指摘いただいた誤字修正
こうも二日酔いが続くとだらしなく思われるかもしれながしれなが→しれないが

２０１１／９／６：ご指摘いただいた誤字修正
靴を吐き終えた鉄兵→靴を履き終えた鉄兵

交渉の行方

「魔法とは便利なものですね」

王城の通路を鉄兵を案内して歩くホーリィが、心底感心したように呟いた。なぜそんな言葉がホーリィの口から漏れたかといえば、朝の二日酔いでうな垂れていた姿から一転して、鉄兵が背筋をしっかりと伸ばして歩いているからである。

「そうですね。でも魔法に頼ってばっかりだとダメな人間になりそうだから気をつけなきゃですね」

二日酔いが治って気分爽快な鉄兵は、これ以上ないほどに爽やかな表情でホーリィの呟きに応えた。そんな鉄兵の言葉にホーリィがくすりと笑みを零す。

鉄兵が二日酔いから治ったのは、流石に二日酔いで就業条件の交渉の場に顔を出すのは失礼だろうという事で解毒の魔法を試してみた結果である。今までは元の世界に戻った時に変な癖がついていると大変な事になりそうなので自重していたのだが、今回は緊急措置として使ってみたのである。結果としては大成功で、二日酔いが治ったどころか生まれ変わったような清々しさである。これは本当に気をつけないとつい頼ってしまいそうなので注意するべきところだろう。

「そういえばオスマンタスさんって宮廷魔術師長なんですよね。なんで自分の人事担当なんですか？」

さて今はオスマンタスのところに顔を出しに行く途中なのだが、

ホーリィの後ろについてテクテクと歩いていた鉄兵はふと疑問に思っていた事をホーリィに聞いてみた。考えてみれば昨日の謁見の際も王の横に立つ人物は宮廷魔術師長のオスマンタスと宮廷神官長であるイスマイルだけである。要するにその二人が王に次ぐ国の最高峰の権力者だという事なのだろうが、それが神官と魔術師というのは少しおかしな話に思える。

「父う……オスマンタス師は宮廷魔術師長であると共に宰相の地位にも就いておられるのです。なにぶん10年前までは戦争ばかりをしていた国ですので、官僚が足りないものでして。育ってきてはいるのですが、まだ重い責任を負えるほどには成長していないのです」

苦笑気味にホーリィが説明をする。今の話を聞く限り、育ってきた官僚の筆頭がホーリィといったところなのだろう。にしても謁見の際には重臣っぽい人が結構いたような気がするのだが、あれは全て武官だったという事だろうか？

どうでも良い話だが、ホーリィが最初に言いかけた言葉は恐らく父上だったろう。別に実際父親なのだからそれで良いと思うのだが、やはりこういう時の定番として、王宮では父ではなく上司と思いなさいとでも言われているのだろうか？　そんな光景を思い描いてみたら予想外に和やかで、鉄兵は少しだけほのぼのとした気分になってしまった。

ここ二日ほど世話をしてもらって気がついたことだが、ホーリィは実務はしっかりしているが、やはりリードと同じように言動がたまに見た目相応の幼いものになる事がある。ホーリィもリードも鉄兵より年上なのだが、二人そろって精神年齢が幼くなる時があるという傾向は、それが半精霊族という種族独特の特徴なのかもしれないなと鉄兵は思った。

王都の主な種族が人間族という環境にあるために二人は大人のように振舞っているが、もしこれが人間族より身体の成長が遅い精霊族の国であったなら、二人は見た目相応のものとして未だ少年期を過ごしていたのかもしれない。どちらが良いかは分からないが、そう考えると環境というものはなかなか不思議なものだなと思った。まあ調査対象が今のところ兄妹一組だけなので、たまに言動が幼くなるのはただの遺伝という可能性は否定できないが。

話が逸れたが、それはともかくホーリィの話である。オスマンタスが宰相も兼ねているのは分かったが、わざわざ宰相が全ての人事を担当しているのだろうか？

「って事はオスマンタスさんが人事を全部担当しているんですか？」

「いえ、本来でしたら人事に関してはイスマイル様が一任されております。選考は他のものが担当しておりますが、最終面接は魔見眼をお持ちのイスマイル様が担当しておられます。イスマイル様の魔見眼は魔力波長によりある程度人格を探れますので、邪まな企みをもって王宮に潜り込もうとするものを弾く事ができるために人事には最適なのです」

なるほど。出会った当初にイスマイルが魔見眼があるために神官を束ねる地位についていると言っていた事に違和感を持っていたのだが、魔見眼にそんな効果があったためなのかと今更ながらに鉄兵は納得したりした。

謁見の時についてもアルテナ達を国に迎え入れることについて反論があまり無かった事に違和感を持っていたのだが、そんな事情があったからなのだろう。アルテナ達は下手をすればそこらの山賊な

どより性質の悪い、オズワルド王国に恨みを持っているはずの亡国の元騎士である。なのにあの程度の猿芝居であっさり意見が通ったというのは、すでにイスマイルにより検閲済みだったからというわけだろう。

さらに遡れば王都への道中でさえアルテナ達に対する警戒が甘すぎてこれで良いのかと疑問に思っていた事もある。つまりそれもイスマイルの判断の結果であり、イスマイルがいなければひょっとして今の結果は有り得なかったのかもしれない。そう考えればまさにイスマイルにより縁の下を支えられていたわけで、今更ながらに頭が下がった。

それはともかくホーリィの説明はまだ終っていない。

「一般でしたら就業条件は決まっておりますのでそれで終わりです。ですが、テツ様のように予算に関わるような採用となりますと、国庫を預かるオスマンタス師が担当する事になっているのです」

「そういう事ですか」

ようやく話が繋がったが、まあそういう事らしい。鉄兵は事業を起こす予定であるからその辺りを考慮しての事らしい。

とそんな話をしていたらオスマンタスの執務室に到着したようである。ホーリィが一室の前に止まり、ドアを叩く。

「失礼します」

ホーリィに連れられてオスマンタスの執務室に入ると、そこには立派な執務机に座り、お茶を片手に優雅に本を読んでいたらしいオ

スマンタスの姿があった。書類に囲まれて忙しく仕事をしている姿を想像していたのだが、どうやらそれほど忙しくはないようである。部屋の中は整頓されており、壁には本のつまった本棚がびっしりと並べられている。執務机の前は談話用の空間のようで、長椅子がテーブルを挟んで設置されていた。

オスマンタスがポンと本を閉じ、こちらを確認して笑顔を見せる。

「お待ちしておりました。おや、二日酔いと聞いておりましたが大丈夫のようですな」

「あはは。魔法で治しましたので大丈夫です」

なんで二日酔いの情報がここまで伝わっているのやら。ちょっと恥ずかしくなった鉄兵は頬をかいて笑って誤魔化す。

「ほう？　魔法でですか。あぁ、まずはそちらにお座り下さい。」

宰相を兼務していても基本は宮廷魔術師長という事なのだろう。魔法の話には興味津々のようである。談話用の長椅子を進めながらいそいそと自分もそちらに向かう。

「二日酔いが魔法で治ると言うのは寡聞にして知りませんでした。よろしければどういった種類の魔法なのかご教授下されませんか？」

長椅子に座り対面すると、興味を隠す様子も無くオスマンタスが前のめりに迫ってきた。なにやら新種の魔法でも編み出したのかと思われているようだが、別にたいした事はしていないのでどうしたものかと考える。とはいえ考えても何が思い浮かぶわけでもないが。

神官などがいる世界である。恐らくは魔法に頼り切っているために医療水準は低く、二日酔いのメカニズムも解明されていないといったところなのだろう。ならばそこら辺の事を交えて話せばいいだろうか？

「いや、ただの解毒の魔法ですよ。二日酔いはアルコールを体内で分解する際に発生する毒素が原因ですから、それを除去しただけです」

「ほう、二日酔いはそんなメカニズムで起こっていたのですか」

やはり思ったとおりだったようで、オスマンタスは心底感心している様子であった。

「しかし、良く考えれば二日酔いの治癒魔法がわかったところであまり意味はありませんでしたな」

「なぜです？」

「それはまあ、まさかサクヤ様に二日酔いを癒してもらうために祈るわけにはいかないでしょう」

ほっほっほっとオスマンタスが笑う。まあ確かに神様扱いされている人にそんな事を願うのは罰当たりと言うものであろう。

でも。と疑問が浮かぶ。確かに神官はサクヤの力を使って回復魔法を使うわけだが、自分が使えたように普通の魔術師だって回復魔法は使えるはずである。ならば意味がないとまでは言えないと思うのだが、そう言い切ったのはどうしてだろうか？

というわけでさっそく聞いてみたところ、答えは以下のようなものであった。

基本的に魔術師は回復魔法を得意とはしていないようである。魔術師は全ての魔法を使えるが、そこに使う魔力は自前である。一方神官は回復魔法しか使えないが、魔力はサクヤから供給されるためにほぼ無限である。サクヤの思いとどれだけ同調できるかで回復魔法の威力は変わるが、一般魔術師に比べて神官の使う回復魔法は比較にならないほど強力なのだ。

そう考えれば魔術師が回復魔法を習熟する意味合いは低く、魔術師の大多数は応急手当レベルの回復魔法しか使えないとの事であった。解毒についてもサクヤの魔力を使えばごり押しできるが、魔術師が解毒の魔法を使う際にはまず毒の種類を選別して、さらにそれを力づくで除去するという工程が必要らしく、それはとても難易度が高い行為らしい。ゆえに普通の魔術師が使用する事はあまりないようである。

話の流れで病気治療の話題にもなったが、こちらはもう魔術師には完全に手に負えない代物らしい。内臓疾患系の病気はまだ自然治癒能力を高める普通の回復魔法で対処できるが、風邪などの感染症は細菌やウイルス等の存在が認識されていないために長時間回復魔法をかけ続けて免疫系を活性化させる治癒方法が主流らしく、これは自前の魔力を使う魔術師にはかなり厳しいようである。また、癌等の腫瘍にまつわる病気は下手に回復魔法をかければ腫瘍の細胞が活発化し、逆に死期を早めてしまう結果になるために気をつけねばならず、せいぜい傷を縫う程度の外科医療水準であるこの世界においてはほぼお手上げ状態との事だった。

そんな事を話していたらコンコンとドアがノックされ、扉が開い

た。そこに入ってきた人物にちょっと驚く。

「失礼します」

入ってきたのはメイド姿のアルテナであった。どうやらお茶を運んできたらしいが、こちらなど気がついてないような様子で済まし顔をしている。

「言い忘れておりましたが、しばらくアルテナ殿はこちらに貸していただきます」

「はあ……」

オスマンタスが何か言ったようだったが、残念ながら鉄兵の耳には届いていなかった。不気味なほどに澄まして給仕をするアルテナの姿が珍しすぎて、それどころではなかったのである。

「見るなよぅ……」

「あー……悪い」

泣きそうな顔で睨まれてしまい、慌てて目を逸らす。別人かと思えるほどに淑やかだったので、もしや本当に別人ではないかと失礼な事を考えてしまい、思わずじーっと見てしまったのだが、予想以上に嫌だったようだ。

「そういや、なんでアルテナだけメイドやってるんですか？」

ばつが悪くなった鉄兵がオスマンタスに話を振る。マーティン達他の騎士達はしばらく仕事が無いために、今頃は中庭で訓練をして

いる頃である。なのになぜその騎士達の頭領だったアルテナだけがメイドなんてやらされるのかは前々からの疑問であった。女は武官になれないのかというとそうでもないらしく、理由がよくわからない。

「おや、王から聞いておられぬのですか？」

「さっぱりです」

本当は昨夜の晩餐の際に聞こうと思っていたのだが、早々に酒に逃げてしまったので聞きそびれてしまっていた。ひょっとしたらその時に話題に上がっていたのかもしれないが、残念ながら覚えていない。

「あの方も案外忘れっぽいお方ですからな。まあ私の口から説明いたしましょう。

……そうですな。一言で言えば家出娘へのお仕置き。といったところでしょうか」

ピクリ、とアルテナの猫耳が揺れたと思ったらそのまま耳がヘタレてしまった。なんとなく分かっていた事だが、親父さんだけは苦手なのだろう。

「お仕置き……ですか？」

「筋道を立てて説明いたしましょう。

アルテナ殿の山賊団は規模が大きいですからな。首領が捕らわれて王国に忠誠を誓ったからといって本拠地の部下達がはいそうですかと認めるとは限りますまい。なので後々の事もありますし、一昨日の夜にテツ殿の提案を聞いた後で早急に実質的な山賊団の首領で

あるアルテナ殿の父上と交渉をしたのですよ。
条件に関しては元よりあちらに有利なものでしたのですんなり合意が取れたのですが、そこで交換条件といいましょうか。部下をほったらかして家出した馬鹿娘を一から鍛えなおしてくれと言われてしまいましてな」

ほっほっほっとオスマンタスが笑う。なるほどそんな理由で侍女からやり直しているらしい。そういう事情なら自業自得なので頑張ってもらう他無いだろう。どうやらシリウス王の趣味ではなかったらしい。

給仕を終え、とぼとぼと部屋を出て行くアルテナの背中に『がんばれよー』と念を込めて送り出す。だが、出された紅茶に口を付けてみたところ、残念ながらこりゃ時間がかかりそうだなぁと思ってしまった。出された紅茶はかなり冷めてしまっていたのだ。

オスマンタスとの回復魔法談義は結構長い事やっていたので、考えてみれば鉄兵がこの部屋に入ってからだいぶ経つ。多分用意に時間をかけてしまい、ここに来るまでにお湯が冷めてしまったのだろう。ゆえに一人前には程遠く、メイド修行は時間がかかるだろうというのが鉄兵の考えである。

ここで裏を明かしておくと、紅茶が冷めてしまったのは鉄兵が考えているような理由ではなかったりする。真実のところは給仕の相手が鉄兵だと気がついてアルテナが、中々部屋の中に入る踏ん張りをつけられずに立ち往生してしまっていたという理由だったりした。

「さて、それではそろそろ本題に入りましょうか」

ぬるい紅茶に顔をしかめながらオスマンタスが話を進める。

「まずは役職についてですが、これは『技術顧問』という役職名をお望みでしたな」

「はい。それでお願いします」

「次に雇用期間についてですが、まずは期間限定雇用と言う事で雇用契約期間は半年間。これもよろしいですかな？」

「はい。それで大丈夫です」

ここまでが鉄兵の希望した条件である。役職名についてはあまり責任が発生せず、他の部署に警戒心を感じさせないための新しい役職名でお願いしていた。まあ要するにフリーの技術指南役と言う立場である。雇用契約期間については自動更新ではなくその時に再び条件交渉をする条件にしてもらっている。

「就業条件の方はこちらで考えておきました。まずはこちらに目をお通しくだされ」

差し出された書面に目を通す。まず目が行ってしまうのはなんといっても給与だろう。

「……かなりの高給ですね」

提示されていた金額は月給１００００オズほどであった。確か一般的な給与は３００オズだったはずだが、その３３倍ほどの額である。

「それはまあ、アルテナ殿達の給与も入っておりますからな。彼ら

は国の直接雇用ではなくテツ殿の部下ですので、給与はそこから遣り繰りしてくだされ」

なるほど、それなら納得がいく話である。一般的な人員を雇えば１８×３００＝５４００ほどかかる計算である。マーティン達は熟練した技術の持ち主であるからそれに色をつけて月５００オズを支払うとすれば１８人で９０００オズ。と言う事は鉄兵自身の給与は１０００オズということで、それでも高いが、自分の能力を考えればそれほど高くもないようである。

と、そんな風に鉄兵は計算したのだが、実はこれはオスマンタスが試算した内容とはかなりかけ離れていたりした。オスマンタスの試算としては、アルテナ達は鉄兵に隷属しているような状態であるので、せいぜいその給与は一般賃金以下の２８０オズ程度と考えていた。ゆえに鉄兵の給与は４９６０オズとして試算していたわけである。ちなみに例のガルム討伐の賞金が５０００オズ、ワンコインの1オズで一食外食が出来ると考えればどんな評価かわかっていただけるだろう。

その他の条件を見ていく。休みは月五日。住居については王国持ち。労災なども完備である。ここで少し暦について聞いてみたのだが、一月は３０日で一週は6日だそうである。要するに休みは週に１日程度だが、文官についてはここは多少の無理が効くそうである。ちなみに文官は月休五日だが武官は週休二日だそうで、武官の休みは文官の倍らしいのだが、その代わり融通は効き難く、変則勤務もあってそれだけハードだそうな。

ざっと見たところ待遇はかなり良いようだ。とはいえ気になる項目も二つ三つあるが。

「これは除外できないんですか？」

そう言って指差したのは従軍義務の項目である。

「魔術師には例外なく付いて来る義務でしてな。こればかりは除外できかねます」

こう聞くに魔術師は戦場ではほぼ必須のようである。どうやって扱うのかは知らないが、まあ除外できないなら仕方が無いだろうか。国が統一されているような状況だから戦争はないはずだし、余り気にするような事ではないかもしれない。

とまあそんな感じに交渉は進み、特に書面の条件に問題はなかったために合意となった。

「では雇用条件についてはこれで終わりですな。続いて仕事内容についてですが、これはすでにプランがあると聞いておりますが」

「はい。まずは小手調べに闇玉を低コストで光玉に変化させて一般に普及させる計画を立てています」

「ほうほう、してどのように？」

「具体的な方法については少し迷っているのですが、闇玉・光玉のメカニズムについては大体解析できましたのでどうにでもなると思います」

残念ながら時間が足りなくて闇玉・光玉についてはまだ詳細に解明できていないのだが、旅の間の時間を使ってコツコツその属性を調べてきたためにおおよその性質は理解できていた。

闇玉・光玉の性質について具体的には、と鉄兵は説明を続けた。
ここに書く事は少し分かりにくいので後の話で説明するものとする。

闇玉がなぜ暗闇を作っているのかと言えば、ようするに光子などの電磁波を吸収する作用があるためのようである。この吸収された電磁波が吸収限界を迎えた時に放出され、さらには水晶の構成物質である石英元素の電子軌道に影響を与えて励起・電子遷移を起こす事により光子を放出するというのがおおよそ分かった闇玉・光玉の変換メカニズムである。

なのでようするに電磁波を当て続ければある程度継続的に電磁場を発生するようになり、そのために発光すると言うことらしいのだが、地中に埋まっていた水晶が闇玉として発掘される事を考えれば全ての電磁波を吸収していない。もしくは電磁波の波長を忠実に再現している可能性などもあるのでここはもう少し研究が必要なところである。

「なるほど、さっぱりわかりませんな」

神妙な面持ちでオスマンタスが頷く。ちょっとずっこけそうになったがそりゃそうですよねと思う鉄兵であった。とはいえこれで却下されてしまうとちょっと困った事になるのだが。

「ですがまあ、私がわかってなくともテツ殿には分かっているようですな。
ふむ。闇玉もそれなりに値が張るものですが、長期的に見ればかなりのコスト削減になりそうですな。
とはいえ、いきなり王都全体にそれを適用するには少しリスクが高いような気もするが」

「ですね。だからまずは実験的に王城の中だけをテストモデルとして試してみたいと思います」

「それが良さそうですな。ではまず王城に適用した場合にかかる費用対効果の試算を……これはホーリィにやってもらうとするかの」

「かしこまりました」

後ろに控えていたホーリィが返事をする。とりあえず受け入れられたようなので後は地道に頑張っていく事にしよう。

「そういうわけですので、必要資材等についてはホーリィの方にお伝えくだされ。後はまた交渉と言う事で」

「了解しました」

これにて最初の打ち合わせは終了のようである。鉄兵はほっと胸を撫で下ろしたわけだが、その耳に「しかし」と呟くオスマンタスの声が聞こえた。

「これでは木こりや油屋が失業してしまいそうですな」

「そう……ですね。でもそれについては他に計画を考えますのでご安心ください」

「ほう？」

「まあ、まだ計画段階なので追々という事で」

材木も油もいかようにでも利用できる資源である。何を考えるに

しても不足する事はあっても余る事は無いだろう。

「ではこんなところですかな」

「はい。おつかれさまでした」

というわけでビジネスライクな話はこれにて終了である。

「テツ殿はこの後予定はあるのですかな?」

「いえ、特に無いです」

まだ企画段階なので鉄兵の仕事は少ない。闇玉・光玉について研究する必要はあるが、特に急いではいない。急ぐ必要があるのはこの国の技術レベルの調査くらいであろうか?

「では、今日は王城を見学されてはいかがですかな? これから長い付き合いになる場所ですしな。構造をよく知っておくとよいでしょう」

渡りに船と言う提案であった。ホーリィに案内されなくても城の中を歩き回れる程度に知っておきたいところだし、製鉄技術を確認するために鍛冶場などにも顔を出したいところであった。

「そうですね。ホーリィさんお願いできますか?」

「はい、喜んで」

というわけで今日の行動は王城見学に決定した。

交渉の行方（後書き）

闇玉・光玉の設定についてちょいと定義しきれてないので突っ込み大歓迎です。

２０１１／２／１２：指摘いただいた誤字修正
『当てるづければある程度』→『当て続ければある程度』

だが、出された紅茶に紅茶に口を付けてみたところ、
←
だが、出された紅茶に口を付けてみたところ、

２０１１／２／１４：指摘いただいた誤字修正
解毒の魔法ですよ二日酔いは
↓解毒の魔法ですよ。二日酔いは

２０１１／３／２４：指摘いただいた間違いの修正
「風邪などの細菌性の病気は細菌の存在が認識されていないために」
↓「風邪などの感染症は細菌やウイルス等の存在が認識されていないために」

バルコニーから見えるもの（仮）

「あれ、この音は……」

交渉を終え、オスマンタスの執務室から出た鉄兵は、なにかが聞こえたような気がして足を止めた。耳元に手をやり耳を澄ます。すると途端に聴覚強化の作用が働き、はっきりとその音の正体がわかった。

「どうしたのですか？」

「いや、シロが来てるみたいですね」

訝しげなホーリィに聞こえてきたのは例のギターっぽい楽器の音だった。相変わらず神がかったテクニックをしており、恐らくシロで間違いないだろう。

「ああ、シロディエール様の事でしたか。シロディエール様でしたらバルコニーの方にご案内させていただいております」

「あれ、シロが来た事知ってたんですか？」

「はい。オスマンタス師との話し合いの途中でこちらに到着されたとの報告が入っておりました」

ホーリィは事も無げにそう言ったが、鉄兵は首を傾げた。鉄兵がオスマンタスと話している間、ホーリィはずっと鉄兵の後ろに控えていたはずである。その間に部屋に入ってきたのはアルテナだけだし、そんな会話を交わしていた記憶は無い。なのに、いったいどう

やって報告を受けたのだろうか？

「ずっと後ろにいたと思ったんですけど、いつのまにそんな報告を受けたんですか？」

「ああ、ご存知ないのですね」

と、なにやら察したらしいホーリィが右耳に手を当ててこちらに見せた。何かと思い見てみれば、右耳にはなにやら紋様の刻まれた白い石のようなものが埋め込まれたピアスがついていた。

「こちらのピアスは魔法具でして、ある魔法具から発せられた言葉を受け取る事が出来るのです。それで」

と次は左手の袖の部分をこちらに向けた。見れば袖のカフスボタンにも同じような紋様の刻まれた白い石のようなものが埋め込まれていた。

「こちらがピアスの対になる魔法具です。こちらに話しかけると一定範囲に向かってピアスと同じ魔術刻印をされた場所に言葉を送る事が出来るのです」

なるほどそんな魔法具があったらしい。それならこちらが気がつかなかったとしてもおかしい事ではない。

「へー、それは便利ですね。ちょっと見せてもらって良いですか？」

「はい。どうぞ」

興味津々な様子の鉄兵に微笑を浮かべながら、ホーリィがピアス

とカフスボタンを外して渡してくれた。リルと対峙した時に魔法のロープを使ったものの、鉄兵はほぼ初めて触る魔法具というものを興味深く観察する。

石の素材はどうやら大理石のようである。とはいえこの場合、素材は関係無く刻まれている刻印が重要なのだろう。これが恐らく精霊文字というもののようであるが、謎の翻訳機能が働いている鉄兵にはカフスボタンの方の文字は『音投』ピアスの方の文字は『音受』と読み取る事が出来た。機能と少し意味合いが違う気もするが、機能しているということはまあそれでいいのだろう。

そういえば、と思い出して魔法を覚えた時に使った精霊視の魔法を使ってみた。すると鉄兵の予想通りにピアスとカフスボタンの周りにはやや緑っぽい精霊の姿が見れた。恐らくこの精霊が文字を読み取り作動しているのだろう。

「これは……中々興味深いですね」

「そうなのですか？　これはそれほど珍しいものではないのですが、テツ様の国にはなかったのでしょうか？」

「そうですね。魔法自体無かったですから」

「え？」

なにやら驚いているような声が聞こえたので魔法具から眼を離して顔を上げてみると、ホーリィは狐につままれたかのような顔をしていた。つい魔法具に意識が集中してしまい、失言をしてしまった気がするが、別に隠しているような事ではないし特に問題はないだろう。

「魔法が存在しない国から来たんです。詳しくはリードにでも聞いてください……あ、これありがとうございました」

鉄兵は開き直ってそう言うと魔法具をホーリィに返した。ピアスとカフスボタンを受け取ったホーリィは一瞬だけなにやら聞きたそうな顔をしたが、すぐにそれを引っ込めた。ここはさすがに良く出来た官僚だという事だろうか。

「では、シロディエール様のところにご案内します」

というわけでホーリィに案内されて城のところに向かう。

シロのところへ向かう道すがら、さきほどの魔法具について詳しく話を聞いてみたところ、どうやらそれは無線に近い物のようである。とはいえ周波数をいじれるようなものではないらしく、『音投』の魔術刻印が刻まれた魔法具は音を発信できるものの受信側を特定は出来ず、『音受』の魔術刻印が刻まれた魔法具を持ってさえいれば誰でも受信できてしまうようである。なので王城でも広く使われているが、あくまで先程のように来客の報告をしたり指示を送ったりとあまり重要ではない会話でしか使われていないらしい。

あと、どうでも良い話だが右耳にピアスをつけるのは『自分はゲイである』という主張だった気がするが、多分こちらの世界にはそんな習慣は無いのだろう。そんな意味は無くともなんとなく気になってしまうのだが。

それはともかく、その後ピアスだけをもう一回貸してもらい、使用感の方を試させてもらったのだが、感度はあまり高くないようで生活音などは紛れ込まなかったものの、聞こえてくる音は結構大き

めであった。これなら静まり返ったオスマンタスの執務室でならこちらも気がつきそうなものであったが、そんな音が聞こえてきた記憶も無い。

なんとなく気になったのでホーリィに聞いてみたところ「簡単な魔法でしたら使えますので」と言う言葉がなぜか苦笑気味に返って来た。ようするに、音が漏れないような魔法を使ったという事なのだろう。まあオスマンタスの息子でリードの兄なら魔法がつかえてもおかしくは無いのだが、なぜ苦笑されたのだろうか？

と、ここで気がついたが、今更ながらの話だが、ホーリィは宮廷魔術師長の息子であるのに魔術師ではなく官僚である。妹のリードは魔術師だし、簡単な魔法なら使えるという事は魔術師の訓練もしたのだろう。なのに、ホーリィは魔術師ではなく官僚になった。単純に考えればオスマンタスが宰相も兼ねているために手伝いのために官僚になったものと思えるが、先程の言葉と苦笑から考えるとちょっと複雑な事情があるようにも思える。つまりホーリィには魔法の才能が無かったのではないかという事だが、流石にこれを質問するのは憚られたので鉄兵は話題を変えることにした。

「そういえば、アルテナの親父さんとはどうやって連絡を取ったんですか？」

アリスが王都と連絡をしていた方法も謎だが、オスマンタスがアルテナの父親と連絡を取ったという話はそれよりももっと違和感がある話であった。まさか敵の首領と通信網を確保していた訳もあるまいし、いきなり連絡を取ろうと思って取れるものなのだろうか？

「それはですね」

とホーリィが説明してくれたのだが、何のことは無い。ただ単にでたらめ臭い魔法の力を使った結果であるようだった。

魔法には『魔法の眼』という視界のみを遠くに飛ばすものがあるらしい。山賊の拠点がどこにあるか正確には知らないものの、だいたいの場所はわかっていたようである。なのでオスマンタスはその魔法を使って南の果てまで視界を飛ばして首領の位置を確認し、後はその場所に互いの姿と音を伝える魔法を使って交渉したそうな。なんとも呆れるほど便利な魔法があったものだとは思ったものの、まあだからこそ魔法なのだろう。いったいどんな原理になっているものやら。とりあえず通信に関しては電話線や基地局などを設置する必要がある科学より魔法の方が便利なようである。まあこんな荒業はオスマンタスぐらいにしかできないそうだが。

ここで話は少し逸れ、戦時中のオスマンタスの話になったのだが、戦時中のオスマンタスはなかなかえぐい人物だったようである。敵の魔法による通信網をかく乱したり、逆に魔法を使って敵の魔法や作戦を丸裸にしたりとやりたい放題だったようである。

戦場においてはオスマンタスは地形を変え、城壁をも破壊する大魔法を連発し、イスマイルが先頭に立って不死部隊と恐れられる神官騎士団を率いて突撃し、敵の魔法部隊にはなにやら魔法を無効化する剣を持っているらしいシリウス王が突っ込んだりして完封したりしてたらしい。当時は魔法を地形操作や攻城戦に使ったり、神官が戦士として活躍するという概念もなかったらしく、その他もろもろ含めて新しいアイデアを使用した結果が統一に繋がったとか。まあ新しいアイデアを上手く活用した者が勝つというのはどの世界でも一緒のようである。

とまあそんな事を徒然と話していたら、バルコニーに到着した。

話に聞いていたようにシロはそこにいたわけだが、無論一人孤独に楽器をかき鳴らしていたわけではなく観客を伴っていた。簡単に言えば休憩時間らしい侍女達に囲まれているのだが、これは中々に世の男性に僻まれそうな光景だった。シロの演奏と詩に聞き入る侍女達の表情は熱っぽく、シロの演奏姿を見つめる瞳は単に演奏にうっとりとしているだけではないように思える。そういえば、恐らくは例の謁見の打ち合わせ最中もこんな感じだったのだろう。そう思うと少し腹も立ってきたのはここだけの話である。

そんなろくでもない感想を鉄兵が抱いていると、その観客の一人の背中の横からぴょこんと犬っぽい鼻先が飛び出て見えた。というか良く見ればその観客だけは侍女姿ではなく私服であり、その後姿には見覚えがあった。金髪ツインテールのそれは間違いなくリードである。

『あるじ？』

「あ、リルちゃん」

無論リードの手の中から現れた鼻先はリルのものであり、敏感に鉄兵の匂いを嗅ぎ取ったリルはリードの腕をすり抜けて鉄兵に駆け寄ってきた。

『あるじ！　あるじ！』

「おかえり、リルー」

興奮した様子のリルはいつものように鉄兵にタックルをかましてきた。片膝を突いた鉄兵はそれをしっかりと受け止めて、顔を舐めてくるリルの頭をガシガシと撫で回す。

普段ならこれで大体収まるのだが、今日のリルはこの程度では興奮冷めやまないようである。興奮が抑えきれない様子のリルは鉄兵の手からもすり抜けるとキャンキャンとかしましく鉄兵の足元で騒ぎ始めた。

『あそんで！　あそんで！　あそんであるじ！』

「こーら。シロが演奏中なんだから静かにね」

そんなリルの様子に鉄兵はちょっと怒った様子で人差し指を唇に当てた。とはいえ内心はあまり怒ってはいない。正直シロの演奏なんてどうでもいいとほっぽって遊んであげたいところだが、無闇に甘やかすのは優しさとは違うのである。旅の間なら野放図でも良かったが、王都で暮らすとなればそれほど自由にさせておくわけにもいかず、少し窮屈に躾けざるを得ない。なので、これはその躾けのための第一歩であった。

鉄兵の言葉にリルが『ごめんなさい』と一声キャンと鳴く。しょんぼりしてしまったリルが健気で思いっきり構ってあげたくなったが、ここは心を鬼にしてしっかりと躾を行う事にした。とはいえそれほど鬼になる必要も無いので構う代わりによしよしと褒めるように静かに頭を撫で回す。すると、リルは無言でうっとりと目を細め、パタパタと忙しく尻尾を振り始めた。

「鉄兵、ごめんねー」

そんな風にリルと戯れていると、リードがようやくこちらにたどり着いた。申し訳無さそうにしているのはうっかりとリルを連れて帰ってしまったことについてだろう。

「うっかり連れてったんですか？」

「あはは」

質問をしたら笑って誤魔化されてしまった。どうやら図星のようである。とはいえうっかりで愛狼を連れて帰ったりされたらたまらないので釘を刺そうとしたところ、ちょっと予想外なところから援護射撃が飛んできた。

「テツ様、申し訳ございませんでした。昨日のうちにテツ様の元に連れて帰ろうかとも思ったのですが、夜も遅く、テツ様の状況を考えるにお邪魔になるかと思い今日まで預からせていただきました。朝のうちに返そうかとも思ったのですが、ここは妹の口から詫びさせる事が筋だろうと思い、そうさせていただきました。本当に申し訳ございませんでした」

ホーリィにここまで頭を下げられては許さないわけにも行かない。というか、良く考えれば昨日の夜は酔い潰れてしまっていたのでそのままならリルに寂しい思いをさせていたのかもしれない。そう考えるとリードに構ってもらえていたその状況の方が良かったのかもしれない。

「いやぁ……昨日は結局酔い潰れていたわけですし、考えてみれば助かったのかもしれません。でも、これからはついうっかりでリルを連れて行ったりしないでくださいね」

「はーい」

リードがしょぼんと肩を落とす。どうやらしっかり反省している

ようである。

でも、と考える。鉄兵はこれから一人暮らしのような状態になる予定である。しかも仕事内容から考えるに忙しくなる事は多いだろう。そうなると家に帰れない日も出てくるだろうし、リルに寂しい思いをさせる事も多くなるだろう。そう考えると、そういう日はリードの家にリルを預かってもらうというのは悪くないアイデアのように思える。幸いリルはリードに懐いている事だし、しっかりとリルにも言い含めればその方が良さそうである。

「……ところで師匠。多分自分はこれから家に帰れない日も出てくるでしょうし、そういう時は預かってもらえませんか？」

「え？　もちろんいいよ！」

しぼんでいた表情がぱあっと明るくなる。それを見て、やはりリードは笑顔が一番似合うなとか思ったのは胸の内だけに秘めておく事にした。

「それは助かります。えっと……その際の手配はホーリィさんに頼んでもよろしいんでしょうか？」

「はい。もちろんお受けいたします」

というわけでホーリィも満面の笑顔で快諾してくれた。一連のやり取りをおえたリードが兄の方を向いてえへへと笑う。そんなリードに「よかったね」とホーリィもにこにこと笑顔を返した。外見から判断すれば非常に麗しい兄妹の図であろう。だが、間違ってはいけないがこれは２２歳の妹とそれ以上の兄の図である。ただし半精霊族のであるが。

さて、そんなわけでリルをたまにリードの家に預かってもらえる事になったが、考えてみればリルの気持ちはどうなのだろう？　リルがリードに預かってもらう事を嫌がるとは思えないが、ここは一応聞いてみるべきだろう・

「リル、僕が家に帰れない時はリルをリードのところに連れてってもらおうと思ってるんだけどリルはどう思う？」

『あるじいない。いやだ』

リルから返ってきた答えは非常にシンプルなものだった。慕われてるのは嬉しいが、少し問題が違うような気がする。

少し考えた後、鉄兵は少し聞き方を変えてみる事にした。

「リルはリードが好きかい？」

『リル、リードすき」

リルがぱたぱたと尻尾を動かす。

「じゃあ誰もいないのとリードがいるの、どっちが好き？」

『リードがいるの！」

興奮した様子でリルがキャンと吼える。

「そうだよね。だから、僕が家に帰れないで部屋に誰もいない時にリードのところに連れてってもらおうと思ってるんだ。リルは誰も

いないよりもリードがいる方がいいよね」

『リル、リードがいるほうがいい！』

今度はしっかり理解したようで、リルははちきれんばかりに尻尾を降り始めた。ちょっと詐欺っぽい質問になってしまったような気もしたが、リルも理解してくれたのでこれでいいことにしよう。

「話はすんだかい？」

リルとの話が終ったところでひょいとシロが顔を見せた。気がつけばシロの独演会は終っていたようで、いつのまにか鉄傘を肩にかけて近くに立っていた。

「おはよ、シロ」

「おはよーさん。様子見に来たぜ。具合はどんなもんだ？」

「まあ、ぼちぼちかな」

「そうかい」

なんの意味も無い会話をお互い交わす。その言葉にシロは満足したのか分からないが、懐からキセルを取り出し腰から煙草を一掴みしてキセルにつめ始める。

「ところでテツよ」

「ん？」

「おまえさん、あれには気がついてるのかい？」

そう言ってシロはバルコニーの先の中庭の方を指差した。何かと思い耳を澄ませてみるとなにやら金属がぶつかるような重い音が聞こえてきた。

「……なんか、戦ってるような音がするな」

煙草を詰め終えたシロがキセルの吸い口に口をつけ着火魔法で火をつける。ふーと一息吐いたところでシロが口を開けた。

「中庭じゃマーティン達が近衛の連中と戦ってるようだぜ。おまえさん、見に行かなくていいのかい？」

「マジで！？」

さーっと鉄兵の顔から血の気が引く。一体何があったのか分からないが、マーティン達が近衛兵と事を構えているとはただ事ではない。下手をすれば即座に死刑が執行されてしまうわけで、落ち着いている場合じゃない。ってか、それが事実ならなんでシロはこんなにも冷静なのだろうか。

「行ってくる！」

「おう、頑張れよ」

シロの返事も待たず、鉄兵は走り出した。今いるバルコニーは城の3階にあるわけだが、王城は巨人族なども利用するためか一階一階の高さが高く、1階までは20メートルくらいあるだろう。下手に飛び降りれば致命傷になりかねず、大丈夫だとはわかっていても

身が震えるような高さである。

でも、そんな事を考えている場合ではない。

鉄兵は覚悟を決めるまもなくバルコニーの垣根を飛び越えて宙を舞った。

バルコニーから見えるもの（仮）（後書き）

２０１１／２／２５：指摘いただいた誤字修正
パタパタと忙しく尻尾を降り始めた。
↓パタパタと忙しく尻尾を振り始めた

文章一部修正。消し忘れてた部分を消しただけです。

２０１１／７／２：指摘いただいた誤字修正
ピアスとカフスボタンを受け取ったホーリィはホーリィは
ホーリィが一つ多い

対立

騙された。というのが嘘偽りの無い現在の鉄兵の心情であった。

さて現状を整理しよう。鉄兵は現在文字通り宙を舞っている。空は青々と晴れていて気持ちが良く、液体のような風と落下感は案外心地が良くて癖になってしまいそうなものである。鉄兵が飛び降りたバルコニーは王城の三階にあり、地上からはおよそ２０ｍほどの高さである。現代建築の建物から言えばまあだいたい７階くらいのものだと言えば分かりやすいだろうか。

そんな場所からいきなり人間が飛び降りれば、そりゃまあ誰もが吃驚するものだろう。事実、鉄兵の後ろのバルコニーからはまだ残っていた侍女達からの「キャー！」という悲鳴が上がっているし、下の中庭からはからも侍女達の悲鳴で気がついたらしい騎士達が「ウォー！」という叫ぶむさ苦しい悲鳴が上がっている。現状を考えるにこれは中々に混沌としていると言えるだろう。

なんでこんな状況になっているのかと言えば、それはシロは「マーティン達が近衛の連中と戦ってる」と言ったからである。そして、確かにその言葉に嘘は無かった。

それを聞いた鉄兵はその戦いを止める為に慌ててバルコニーから飛び降りた。そしてこれは想定外の事だったが、鉄兵がバルコニーから飛び降りた様は予想以上にインパクトがあったために、それだけで争いを止めるという目的は達成されてしまった。

これだけを聞けば一見何の問題も無い様に聞こえるかもしれない。

だが、問題は確かに存在していた。

その問題とは、遠まわしにいうなれば、嘘が無ければ真実というわけではなく、時には争いに備えるために争う事も必要だといったところだろうか。

冒頭で鉄兵が騙されたと言ったのはそのせいであり、まあ言ってしまえばマーティン達は確かに近衛騎士達と中庭で戦いを繰り広げていたのだが、それは血が流れるようなものではなく、ただの訓練だったというオチだったのだ。

ここでこれまでの事実を整理しよう。

ようするに鉄兵はマーティン達が訓練しているのを争いと勘違いし、慌ててバルコニーから飛び降りた結果、無駄に派手なパフォーマンスをしてしまい完全に周囲の度肝を抜いてしまい、訓練を妨害してしまっている状態にある。今更どうしようもないが、これは中々に恥ずかしい状況と言えるだろう。

なんとか取り繕おうと言い訳を考えるが、高々２０ｍくらいの高さでは着地までに二三秒の時間しかない。結局、ろくな言い訳を考える間も無く、鉄兵はすぐさまズシーンと軽く地響きを上げて中庭の地面に着地してしまった。

「えーと……」

５０対くらいの視線が鉄兵に集まる。いつぞやもこんな状況があってその時は恐怖心を覚えた気がするが、今回は羞恥心が先に上がり、頭が真っ白になる。

「すいません。なんでもありません。続けてください……」

結局のところ鉄兵は、顔を赤らめつつ俯き、やっとの事でそれだけ呟いた。

鉄兵としては精一杯の対応であったが、残念ながら騎士たちのフリーズ状態を解凍するには不十分な台詞だったようである。

特にマーティン達の真剣な表情が目に痛い。

「聞こえたか！　貴様ら手を休めるな。試合を再開しろ！」

どうしたものかと慌てる鉄兵を救ったのはそんな声であった。その声で我に返った騎士達がそれぞれお互いの相手と相対し、訓練に戻っていく。

「随分と派手な登場だったな」

「アリス……助かったよ」

騎士を怒鳴りつけたのと同じ声。だが、騎士に怒鳴りつけた時とは違い、親愛の情に溢れたその声の主であるアリスに話しかけられて、鉄兵はようやく人心地ついたようにほっと胸を撫で下ろした。

なぜアリスがこんなところにいるのかとも思ったが、状況から察するにマーティン達と近衛騎士達の訓練の監督をしていた以外は考えられないだろう。

「ごめん。迷惑かけた？」

「それはいいが……一体どうしたのだ？」

迷惑云々に関してはさらりと横に置き、アリスは不思議そうに鉄兵に話しかけた。その表情を見る限り、本当に理解できてないようである。まあそこそこ長い付き合いになってきたので鉄兵が三階から飛び降りようと傷一つ負わない事は理解しているようだが、普段の鉄兵の行動を鑑みるに、普段ならそんな行動をするわけがないというところから出ている疑問のようである。そりゃまあ

「いやまあ……シロに騙されてね。マーティン達が近衛騎士達と争ってるって言うから、慌てて飛び降りたらこのざまなわけ」

「シロに？　珍しい事もあるものだな……っと噂をすれば」

アリスが空を見上げる。釣られて見てみれば、そこには鉄兵と同じようにバルコニーから飛び降りるシロの姿があった。

二度目であるためか、はたまたアリスに怒られたためか、今回は騎士達も注意を逸らしたりはしない。バルコニーから飛び降りたシロは着地の瞬間に傘を広げ、ふわりと着地に成功した。随分と丈夫な傘だなと思ったが、そういえばシロはあれを武器にしていた事もある。恐らくは基本設計からして頑丈に作られているのだろう。

それはともかくちょうど良いタイミングである。騙された鬱憤を晴らすべく、鉄兵はやや八つ当たり気味にシロに詰め寄った。

「シロ、騙したな！」

「騙す？　何の事だ」

鉄兵に言い寄られたシロの表情は、意外なほどにきょとんとしたものであった。これではまるで無実の罪にはめているような気にな

る。

「とぼけるなよ！　さっきマーティン達が戦ってる……って、ん？」

とここで鉄兵は気がついた。確かにシロはマーティン達が戦っていると言っていたが、その様子は落ち着いたものだった。シロは竜人族で人間族の争いにはあまり関与しないという認識があったから落ち着いてるものだと早合点したが、ひょっとしたらシロは最初から事実をありのままに話していただけだったのではないだろうか？

……つまり、これはニュアンスの問題だったような気がしてきたシロの態度を見る限り、鉄兵をからかっている様子も無いし、多分それが本当のところなのだろう。どうやら所謂一人相撲というものをしていたようで、そう思い立った途端かーっと頭に血が上った。

「いや、なんでもないです。勘違いだったみたい……」

下手をすればカタカタ表記になってしまいそうなほどに虚ろに鉄兵は独白した。その様子にアリスは微笑み、シロは変な顔をしたが、鉄兵としてはただただ視線を逸らす事しか出来なかった。

「良く分からんが、あいつらはお前さんの部下じゃないのか？　部下の実力ぐらい客観的に確かめておいた方が良いと思ったんだが」

どうやらこれが先ほどのシロの言葉の本来の意味のようである。勘違いの恥ずかしさに逃げ出したいところだったが、シロの言った言葉の内容には興味があった。

「それは……そうだな」

正直なところ、鉄兵はマーティン達の戦闘技術に特に期待していない。無論それが非常に高い事は身を持って知っているのだが、鉄兵がやろうとしている事には関係が無い事なので特に気にしては無いという事である。

ただ、それは別として、鉄兵も剣道少年で育った青年である。単純にマーティン達の技量については興味津々である。

「で、アリス。これ今はなにやってるの？」

もはや先ほどの醜態を忘れたように鉄兵は目の前に繰り広げられる訓練の様子に集中し始めた。

「今はちょうど勝ち抜き式の試合をしているところだ。私も彼らの実力を知っておきたかったのでな」

「それは……面白いな」

そこからはもう、鉄兵は周りの雑音を完全にシャットアウトしてしまった。これはある意味弱点なのかもしれないが、鉄兵は一度本格的に物事に集中してしまうと周りが見えなくなってしまうのだ。やがてホーリィとリード。それにリルも正規のルートでやってきて合流したのだが、それはそれにさえ気がつかないほどの集中ぶりである。

騎士達の試合は面白いものであった。今回の試合での騎士達の戦い方は日本の剣道とは違い面白い技術を使っていた。恐らく分厚い甲冑を敵味方ともに着ているためであろうが、遠心力を利用したもの、また局所を狙った鋭い物が目立つ。装備が違えば戦い方も違うという事であろう。

それにしても、訓練にも関わらず騎士達は全身鎧のフル装備を身に着けているわけだが、確か板金の全身鎧は３０～５０ｋｇほどあるはずである。そんなものを着てよくもあれだけ動けるものだなと思ったが、よく見れば鎧のそこここには同じ模様の魔術刻印が刻まれているようだった。視力を強化して読んでみると、どうやら『支える』とかそんな意味のようである。これもやはり意味合いがちょっと違う気がするが、恐らくはあの魔術刻印により軽量化されているのだろう。

鉄兵騎士団ともいうべきマーティン達と近衛騎士団の練習試合は、途中経過は省くが凡そにおいて鉄兵騎士団が優勢であった。ベスト１６に残ったうち近衛兵が残ったのは二人のみであり、ベスト８になれば一人を残して全てが鉄兵騎士団のものであった。だが、さすがは近衛兵といったところであろう。隊長と思しきその人物は危うげなくそのまま勝ち進み、決勝まで残った。

対する鉄兵騎士団の代表はといえば、マーティンかと思いきや、ちょっと意外な事にヨハネであった。ヨハネは例の決闘で一番初めに鉄兵と相対した相手であり、いつぞや鉄兵の底を探るような視線を送っていた男である。いつも鋭い観察眼をしていたし、まとめ役はマーティンであるものの、実は実力ならばヨハネなのかもしれない。

ヨハネと近衛騎士隊長が向き合い決勝が始まる。奇を衒う事も無い正面からのぶつかり合い。正々堂々とした、あくまでも騎士としての尋常な立会いは、見ているこちらも清々しく、その迫力には思わず圧倒されてしまった。

そういう技術面についても素晴らしいものだったが、鉄兵にとっ

て何より印象的だったのは、近衛騎士隊長に立ち向かうヨハネの楽しそうな姿であった。

考えてみればヨハネを含め、鉄兵の騎士団は元々騎士だったのだ。ある意味これは復権したようなもので、正式な騎士としてこうして競い合えるのは彼らにとってずっと願っていた夢だったのかもしれない。残念ながら復興という形での夢の具現化ではなかったが、それでも現状を楽しんでくれているのならば、鉄兵としてはがむしゃらに頑張った甲斐もあり、ちょっとじんと来てしまった。

決勝は闘志と闘志が正面からぶつかり合う良い試合であった。だが、どんな試合であろうと終わりのときは来る。その理通りにこの試合にも終わりの時は来て、やがて近衛騎士隊長の痛烈な一撃がヨハネを捕らえ、決着がついた。

その素晴らしい試合に感動し、鉄兵は我知らず拍手をしていた。その拍手に皆は少し戸惑っていたようだが、鉄兵の気持ちが通じだのか、やがて誰からとも無く拍手があがり、場は満場の拍手に包まれた。

その拍手に応えるように近衛騎士団長がヨハネに手を差し出す。地面に転がっていたヨハネも近衛騎士団長の手に応え、その手を借りてゆっくりと身体を起こした。身体を起こしたヨハネと近衛騎士団長は、互いの健闘を称する様に腕を組む。これは、鉄兵の騎士団が近衛騎士達に迎え入れられたとも言えるべき場面だろう。そう思うとちょっと感動的なシーンにも思え、鉄兵は温かい目でそれを見守った。

感動的ともいえるシーンが終ると、不意にマーティンが目で騎士団を制した。即座に鉄兵の騎士団がアイコンタクトに応じて動き出

す。全身フル装備だというのに一糸乱れぬ動きを見せた鉄兵の騎士団は鉄兵の前に隊列を組み、片膝を落として跪いた。今まではアリスの指示に従っていたが、あくまで主は鉄兵という事なのだろう。鉄兵としてはむず痒いところだが、それを許容するのも責任者としての勤めである。

とはいえ、偉そうにするのは鉄兵の趣味ではない。なのでそこは彼らに無理をしてもらう事にする。

「礼は不要でお願いします。礼儀の重要性は理解していますが、僕はこの国の礼儀に慣れておりません。なので公式の場を除いてはあくまで普通に接してください」

「……了解いたしました」

不本意そうではあったものの、マーティンは素直に頷いた。その口元に微かに苦笑とも思えるような笑みが浮かんでいるところを見ると、マーティンも少しは鉄兵の性格に慣れたといったところであろうか。

「姫様、テツ様とお話をさせていただいく機会を与えてはいただけないでしょうか？」

そんなやり取りをしていた鉄兵の耳に、そんな言葉が聞こえてきた。見れば鉄兵の横では先ほど決勝で勝った近衛騎士団長がアリスに向けて片膝をついていた。

「それは私が許可する事ではない。話したいのなら直接話すがよい」

「感謝いたします」

立ち上がり、近衛騎士団長が握り締めた拳を開いた左手の掌に当てて感謝の意を示す。

近衛騎士団長はゴリラともいえるほどのマッチョだが、兜を脱いだ容姿はといえば美形とまではいかないまでも中々整っていた。金髪碧眼の短髪で、大きな鼻と口。それに愛嬌がありながらも鋭さを失っていない目元は武人としては素晴らしい貫禄を見せている。

「私はトラヴィス・アズマイヤーと申します。仕えるべき主は王家のみである故に、礼を失する態度をお許し下さい」

敬礼も無く、トラヴィスが堂々と自然体で鉄兵に話しかける。礼が必要ないというのは鉄兵にとって好都合である。

「了解いたしました。私に対して礼は不要です」

ややほっとしながらトラヴィスに返事をすると、そんな鉄兵の思考が顔に出ていたのか、トラヴィスはあからさまに緊張を解いたようだった。

「謁見の席での言葉、感動いたしました。あなたのような誉れ高い人物と出会えた事を天に感謝いたします」

「いえ、それほどの事でもありません」

「ところで、話を聞くにテツ様はヨハネ殿より腕が立つと聞き及んでおりますが、どうでしょう。是非一手ご指南いただけませんか？」

要するに立会って欲しいといわれてしまったわけだが、さてそう

言われてしまえば困ったところである。恐らくとも言えず、何でもありで立ち会えば鉄兵は間違いなくトラヴィスに勝利できるだろう。だが、魔法抜きで戦えば、相手はヨハネに正面から挑んで勝った相手である。正直勝てる気がしない。

少し考えたが、面倒事はごめんである。なのでここは適当に受け流す事にした。

「残念ながら、ここは遠慮しておきましょう。私は確かにヨハネに勝ちましたが、それは持久戦の末での事です。技術で言うならば私はヨハネよりも何段も格下でしょう。恐らく立会ったとしても得るものはなにもないと思います」

「はは、ご謙遜を」

「いや、本当の事ですよ」

「……そうなのですか」

鉄兵の言葉が本当の事だと悟ったようで、トラヴィスは少し気落ちしたようだった。がっかりさせてしまって悪いが、まあ本当のことなのでここは勘弁してもらおう。

「おい、テツよ」

「ん？」

不意にシロに呼ばれて振り返る。すると、シロはなにやら放り投げてきた。

何かと思い掴んでみると、それは稽古用に刃引きされた練習刀のようである。

何でこんなものを投げて寄こしたのか訝しんだその瞬間、鉄兵の身体は得も言えぬ不吉な予感に総毛立ち、我知らず全身と掴んだ剣を強化し、強化した剣を横に構えて防御した。

その瞬間、単独の人類が起こす音としてはおかしいようなガキーンという激しい金属音が鳴り響き、練習刀が何かを防いだ。

鉄兵の練習刀が防いだものは、もはや見慣れたシロの鉄傘であった。つまり、今の一撃を放ったのはシロである。

手加減したシロの一撃ですら、人間一人をぼろ雑巾にできる威力を秘めている。そんな威力を持つシロの一撃でさえ強化された鉄兵の肉体には通じないために測りにくいが、それでも鉄兵はこれがシロの手加減無しの一撃なのであろう事を本能的に理解した。

一体何が起きているのか、あまりに突飛な出来事に思考する事を拒否した鉄兵の頭脳では分からなかった。青天の霹靂という言葉が使われるべきは、まさに今この瞬間である。

状況を把握できない鉄兵は、ただただ交わった武器の先にある、血走ったシロの瞳に自分の瞳を見つめ合わせる事しか出来なかった。

衝突

交わった武器を挟んでシロの顔が見える。いつだって余裕を残していたシロの表情は、しかし今はそこになかった。あるのはただ射抜かんばかりの鋭い視線。今まで見せた事も無いような冷酷な表情のみである。

走馬灯、というわけではないだろう。だが、こんな状況だと言うのに脳裏に浮かぶイメージは最初に会った時のあの川原でのニッと笑うシロの笑顔で、今目の前に見えるシロの表情との余りの違いに目が眩み、思わず萎えて崩れ落ちそうになってしまう。

なぜ、自分は今、シロと武器を交わしているのだろう。

なぜ、シロは今、自分をあんな目で見ているのだろう。

そんな疑問が止め処なく溢れてくる。

溢れるものがあれば失うものもあるもので、疑問と引き換えに喪失していったのは、目の前で起きている事態に対しての現実味であった。

まるで現実感の無い光景。だから放心して何も感じないのかと言えばそうではなく、疑問の溢れ尽きた先に湧き上がって来たものは強い恐怖心であった。

自分の知っているシロを失った恐怖心。確かにそれもある。だが、普段なら心のウェイトの少なからぬ割合を占めるであろうそんな恐怖心も、今はそれを上回る別種の恐怖に追いやられ、軽々と飲み干

されてしまっていた。

圧倒的な質と量で鉄兵の心を覆い尽くしている巨大な恐怖心の正体。それは、死への恐怖である。

生存本能が身を打ち震わす。真剣に対峙して初めて理解したが、シロは人の形をしているものの、人などとはまるで異質な存在であった。まるで地震や台風のようなものであろうか。一人の人間の力で敵うはずの無い災厄。人知の及ばぬ圧倒的な暴力が人間の形を取って具現化したもの。それがシロの本質のように思えた。

そんなものが自分に狙いを定め、刃を向けている。その事実を認識するだけで身は震え、心は凍え、ただ生きたいという生存本能のみが激しく暴れまわる。

客観的に考えて、それでも力においてシロに勝っているだろうと鉄兵には思えた。

だが、それと同時にそんな事実に意味が無い事を、鉄兵は今いやと言うほど思い知らされているところであった。

例えるなら、巨象と獅子の戦いであろうか。

圧倒的な体躯と力を持った巨像と百獣の王である獅子。その両者が本気で戦えば、最終的には巨象が勝つだろう。

しかし、それがもし戦う意思を持たぬ巨象ならば、荒ぶる獅子に勝てる道理などないだろう。

鉄兵は、まさに戦う意思を持たぬ巨象である。

鉄兵は小中高校と剣道を習っていた。ゆえに戦う術も覚悟も身に着けている。だが、逆に言えば、本気を出せば人を殺してしまう技術も覚悟もあったゆえ、それゆえに理由が無い限り自らの力を振るおうなど考えもしなかったのだ。

ましてや今の鉄兵は研究者であり、その本質は学徒なのである。理由無き争いなど考えもつかぬ事であり、知識の求道とは真逆に位置するそれは、鉄兵にとって真に忌避するものであるものでもあった。

リルやアルテナ達の時は、それでもまだ戦う理由があり、実際に戦う事が出来た。

だが、今目の前にいる自分に襲い掛かってきた敵はシロである。恩も義理も友情も溢れんばかりにある相手に、なぜ理由もなく戦う事など出来るだろうか。

今の状況は、本当に殺されるかもしれないという恐怖を纏ったものである。

だが、そんな究極の理由でさえ、本当に死を覚悟する瞬間まで戦う理由にはなりえないかったのだ。それが、平和ボケした鉄兵という存在である。それが、彼の真実の姿なのである。

とはいえ、そんな大層な理由を付けずとも、シロはリルやアルテナ達を遥かに凌ぐ強敵である。ただその矢面に立たされただけで今まで感じた事が無いような圧迫感が鉄兵を押し込め、生への執着を根こそぎ奪っていっているのも事実である。

鉄兵の理性は自分の死を予感させていた。

だが、シロに襲い掛かられて自分の思考を一から確認して結論を出した理性であっても、それを上回るほどに生存本能というものは強かなものであった。

不意に芽生えた生存本能は、そんな鉄兵の前提さえも押し込めて、生きる事に執着を見せる。ゆえに本能が思考を支配し始めた鉄兵が取った行動とは、ただひたすらに戦う理由を求める事であった。

戦う理由さえあれば戦える、だからなぜこうなったのか、恐怖に震えながらも暴れまわる生存本能が、生存を賭けてその理由を必死に探し回る。

だが、ここまでの事はほんのわずかな一瞬の出来事であり、その刹那の時間の中で鉄兵には解答までにたどり着く事はなかった。

「テツよ。お前さん、わかっているのかい？」

永遠とも思えた一瞬。その先で不意にシロが口を開いた。

その口から漏れた言葉に、ふっと鉄兵の内から恐怖心が消えた。

その声が冗談めかしていたというわけではない。口調こそいつもと同じであるものの、シロの声は冷酷であり、過ちを攻めるような威が含まれている。

だが、シロは言葉を喋り、口調は同じであった。それはシロが理性を失っているというわけではなく、相手は理性を失った獣ではないと言う証明である。そして話した内容は非難めいているが、その

内容からシロの行動は理由があるものだと理解できる。ならば、その理由さえ知る事が出来れば、未だ武力か知力かどちらになるか定まらぬものの、解決への道があると言えるだろう。

「なにが……だよ！」

だから、鉄兵は感情のままにシロの鉄傘を振り払った。今は、ひたすらに情報が欲しい。ゆえに鉄兵は間合いを取ってシロから情報を聞き出したかった。

攻撃を弾かれたシロが後ずさり、間合いを取る。何の構えも無いその姿でさえシロは微塵の隙も見せてないが、すぐさま襲い掛かってくるような気配も無い。それが最初から予定されていたものなのか、それとも鉄兵の行動の結果なのかそれは分からない。だが、この小康状態は鉄兵にとって貴重なものであった。

シロが再び口を開く。

「世間じゃ俺とお前は互角に戦えるって事になってるって事さ」

それは、鉄兵の闘志を根こそぎ奪う言葉であった。今まで絶望と生への執着に向かっていた感情は逆方向に突き抜け、ただ申し訳無さのみが鉄兵の胸に残る。

鉄兵の頭の回転が速い。ましてやそれまでが危機的状況であったため、その情報処理能力は最大にまで上がっている。ゆえに、それからシロが言うだろう台詞は全て見当がついたし、それは大体の意味において当たっていた。

「謙遜したいならすればいいさ。ただし、自分にしか迷惑がかから

ない範囲でな。
だがな、お前さんは俺と互角に戦えるって事になっている。そんな奴に自分が弱いと言われちまえば、こいつは俺達竜人族の名誉に関わるって事さ」

これは、いつぞやの件の焼き直しである。あの時はイスマイルの助言で回避することが出来た。だが、今回は助言は無く深い考えもせず、何も気がつかないままに自分でこの状況を招いてしまったのである。同じ間違いを二度は繰り返さないと先日誓ったばかりだというのにこの有り様だ。本当に情けなくなってしまう。

が、そんな鉄兵の悔恨も意に介さず、シロの言葉は続く。

「俺は、俺達竜人族の誇りをかけてお前さんが俺と互角だと認めた。そりゃそうさ。実際にお前さんは俺と互角に戦えるんだからな。だがテツよ。お前さんはそんな事実はいらねぇと言った。なら、その看板は遠慮なく剥がさせて貰うぜ」

そしてシロは鉄傘を構え、鉄兵に襲い掛かってきた。

どうしていいものか分からず、鉄兵はひたすらシロの攻撃を凌ぎ続ける。さすが８００年もの間、大陸を巡回して紛争を収め続けた者というべきだろう。シロの攻撃は非常に的確であり、受ける事は出来ても、決してかわす事は出来ないものであった。

素早く重い一撃。その攻撃を受けるたびに鉄兵は地面に足を軽くめり込ませ、地響きのように地面を揺らした。これは鉄兵が相手だからその程度で済んでいるが、もしこれが普通の人間族や、例え巨人族であったとしてもその衝撃を受け流しきる事は出来ずに一撃の下に吹き飛ぶほどのものだろう。

そんな、全てが必殺の威力を持つ攻撃を防ぎつつ、鉄兵は思考を巡らせる。

これは、シロが持つ正当な権利を行使した結果である。意識をしていなかったとはいえ、鉄兵はシロを軽んじてしまった。それがこの現状なのだ。

シロは、これまで大した義理も無いというのに、ただ鉄兵の立場が良くなる様に傍にいてくれた。だが、だからといってシロは鉄兵をどこまでも甘やかす保護者というわけではないのだ。

譲れない誇りというものは誰にでもあるものだろう。

そして鉄兵はシロの名誉。ひいては竜人族というシロが属する共同体の名誉にまでいつの間にか入り込んでしまっており、それを今、汚してしまったのだ。

シロは、鉄兵なら大丈夫だろうと思い、自分と互角という名誉を鉄兵に分け与えた。だが、シロは判断を誤り、鉄兵は間違いを犯した。鉄兵はシロの眼鏡に叶わぬ行為をしてしまい、シロは自らの行動によってその過ちを正そうとしている。それが先ほどのシロの一言で鉄兵が導き出したこの騒動の本質である。

竜人族はその圧倒的な強さにより大陸を半ば強制的に平和に治めている種族である。その竜人族をも凌駕する人間族が自分が弱いなどと言い出したら一体どうなる事だろうか？

その答えは、竜人族の軽視傾向の助長であり、新たな戦いの火種である。それは竜人族にとって決して見逃す事ができぬ問題であり、

その火種を潰すには強さを示すしかないのである。

ゆえにシロは鉄兵に襲い掛かり、火消しを始めた。鉄兵はこの問題にどう収拾をつけていいかわからず、ひたすらシロの攻撃を受け続けていた。

この問題を解決するにはどうしたらいいだろうか？

解決の方法は、その実非常にシンプルである。すなわち、この戦いに勝つか負けるか、それとも引き分けるか。その三択しか存在しない。

だが、どれが正解であるか今の鉄兵には判断できず、苛立ちのみが重くつのる。

「ああもう！　クソ！」

決断できぬ苛立ち紛れに鉄兵はシロを攻撃した。八つ当たりのような何気ない一撃。だがしかし、その攻撃に対するシロの反応は過敏なものだった。

不意の鉄兵の攻撃を、シロは十分に受ける余裕があったというのに、なぜか慌てて飛びのき間合いを取った。その余りの慌てようは、この緊迫した場面だと言うのに思わず鉄兵が間抜け面を見せてしまったほどである。

何とはなしにシロと目が合う。すると、シロは少しだけ罰の悪そうな表情を見せた。

その表情でピンと来た。シロがどんな結末を欲しているのかを。

この争いにおける正解の選択肢を。

それはある意味、鉄兵にとって重い事実であった。だが、そうと分かればもはや迷う事は何も無かった。

「悪いシロ。シロより強いって看板、やっぱり俺にくれないか？」

鉄兵は挑発するように構えを解き、間合いを開けたシロに向かって言い放った。

「そうかい。だが今更そう簡単にはくれてやれねえな。欲しいなら、力尽くで奪ってみな」

傍目には不敵な笑顔に見える表情を浮かべたシロ。だが、その目にはいつも通りの飄々とした親しみがこもっており、鉄兵は自分の考えが間違えていない事を確信した。

「それじゃ遠慮なく」

口元に笑みを浮かべ、胸を張って言い放つ。

鉄兵はこの問題に終止符を打つべく剣を構えた。

衝突（後書き）

２０１１／３／１：指摘いただいた誤字修正
「まるで自信や台風のようなものであろうか」
↓「まるで地震や台風のようなものであろうか」

「今目の前に見える白の表情と」
↓「今目の前に見えるシロの表情と」

決着（前書き）

3／5に掲載して一時削除していたものの再掲載です。変更点はありません。

決着

剣を構え、方針を定めた鉄兵は、さてこの騒動に相応しい幕引きの方法はどんなものだろうか思考をめぐらせた。

勝つか、負けるか、引き分けるか。

先ほど悩んだこの選択肢。今となっては悩んだ事すら馬鹿らしいが、シロが望む結末を鉄兵なりに考慮した結果として出した結論は、ぶっちゃけどうでもいいというものであった。

鉄兵の考えが正しければ、正味なところシロの目的はすでに達成されている。ゆえにシロはもう流れに任せているだけであり、決定権は鉄兵に委ねられていると言っていいであろう。無論、だからといってこの戦いがここで終るわけは無く、勝敗の決定は必須事項である。シロが手加減する事など無いだろうし、力は上でも自分はシロに勝てないかもしれない。

だが、鉄兵が考えるところ、ここで重要なのは勝敗ではない。言ってしまえば、これはシロによって仕掛けられた、いわばデモンストレーションなのだろう。原因も分からず手に入れた力を振るうのは趣味ではないのだが、シロが望むというなら期待に応えるしかないだろう。ここでなにが一番重要なのかといえば、それは自分の実力を見せ付ける事である。そしてそうするには何が一番良いのかといえば。それは決まっているだろう。有無を言わせぬ圧勝である。よって、鉄兵はこの勝負に本気で勝ちに行く事にした。

「アリスごめん。少し暴れさせてもらうよ」

「構わぬ。見学させてもらうとしよう。だが、後片付けはしてもらうからな」

目は向けず、言葉だけで一応はアリスの許可を取る。許可が出なくても構わずやるつもりであったが、その答えは案外あっさりとしたものであった。それにしても後片付けとは緊張感の無い台詞である……一応その事も頭に入れておく事にするが。

それも考慮に入れて作戦を組み立てた鉄兵は、それが可能かどうか体内に宿る精霊に聞いてみた。その答えは『可』である。

答えを聞いた鉄兵は、靴底を通して解析魔法を発動させた。自重しない解析魔法は城を丸々解析し、全ての構造データを丸裸にする。とはいえ、さすがにそんなデータは覚えきれないので記憶の方は体内の精霊に丸投げしたが。

さらに鉄兵は広範囲に知覚を広げる魔法を展開した。中庭はいうに及ばず、城全体にわたって生体反応の位置情報が頭に流れ込む。これにて準備は完了である。後は戦うのみだ。

準備が整った鉄兵は、おもむろに剣の構えを解き、剣をくるりと逆手に持ち直して地面に突き刺した。構えといて今更手放すのはちょっと格好が悪いが、本気で戦うというのなら、生半可な剣術など無駄でしかない。

「シロ、ちゃんと避けろよ」

まずは小手調べである。鉄兵は右手を胸の前辺りに構えると、人差し指のみ突き出した。その指の先にポッと仄かな光が宿る。

シロの後ろに生体反応が無い事を確認し、鉄兵は構えた右手を素早くシロへと向けて振り払った。無論、シロと鉄兵の間には少なからぬ間合いが開いており、鉄兵の手はシロまで届かない。だが、当然何も起こらぬわけはなく、鉄兵が腕を振るったその瞬間、人差し指の光は輝きを増し、指向性を持った光線が射出されてシロに向けて襲い掛かった。

高出力のレーザーが大地を削り、爆風を起こす。

文字通り光速で迫る光の刃を、しかしシロはひらりとかわした。鉄兵の攻撃は一撃で終わる事はなく続いたが、鉄兵の指の動きからその軌道を見切ってか、シロはその全てをひらりひらりとかわしきり、光の刃を食らったのはシロの後ろにあった城壁のみであった。

シロが光線をかわす度に城壁はすぱすぱと切りかれていく。やがて城壁がその姿を保てなくなり崩壊したその瞬間、雷のように鳴り響くその崩落の音に紛れるようにシロは受けから攻めへと転換した。

シロと鉄兵の間合いはおよそ１０ｍ。その間合いをシロは野生の豹の如き踏み込みで一気に飛び縮めた。

シロの鉄傘が顔面に迫る。渾身の力を込めたシロの一撃。いかなる生物でも破壊するであろうその一撃を、しかし鉄兵は瞬きさえせず迎え入れた。

それを見ていた騎士達は、直後に訪れるであろう惨劇を思い浮かべ息を飲んだ。が、直後が過ぎ、その結末を見た騎士達は違う意味での嗚咽を漏らした。

シロの最強の一撃対鉄兵の頭部という勝負。その結末は鉄兵の完

勝に終わったのだ。

シロの鉄傘が曲がって折れて弾け飛び、無残な姿で宙を舞う。獲物を失ったシロは眉をしかめて距離を取ったが、そんなシロに向け、鉄兵はゆるりと左の掌を向けた。

鉄兵が掌を突き出したのを見ると、危険を察知したシロはすぐさま横に飛んで緊急回避を行った。シロの直感は正しく、シロがいた空間には赤いものが現れたかと思うと、不意に炎が広がって爆発を引き起こした。

緊急回避で転げ回ったシロは間髪いれずに体勢を立て直し、即座に中庭を疾走し始めた。走るシロに照準を合わせ、鉄兵の左腕が動く。

疾走するシロの後ろを追尾するように爆発が引き起こる。並の人間なら爆風だけで致命傷を被いかねない爆心地を、しかしシロは大したダメージも無い様子で走り抜ける。

爆発が起こる度に大地がえぐれ、練習用の鎧案山子が砕け散る。爆発の威力こそ低いものの、まるで空爆のような攻撃を行った結果、そこに出来上がったものは、シロの姿を覆い隠すほどの広大な砂埃だった。

シロの姿を見失った鉄兵は爆発の魔法を打ち止め、新たな魔法を行使した。途端に強い風が吹き、砂埃を吹き払う。が、強風が砂埃を完全に払うまでも無く、鉄兵はシロの姿を見つける事が出来た。すぐ近くで。

砂埃で出来上がった煙幕を、シロは無駄にする事無く利用してこ

ちらに近づいていたのだ。鉄兵がシロを発見した時、もはやそこは一息で近接できるシロの間合いの中で、気がついた時にはシロの平手が鉄兵に迫っていた。

もはやシロの攻撃を受ける事はほぼ確定していたが、鉄兵は少しも焦らなかった。そもそもがこれはデモンストレーションなので、自分の能力を見せ付けるためにも全ての攻撃を弾く気でいたのである。

だが、シロを相手にして、それは流石に余裕の見せすぎだったといえよう。

平らにした掌を水平に突き出した徒手によるシロの攻撃を、鉄兵は貫き手による攻撃だと判断した。仮にシロの貫き手が鉄傘以上の強度があろうとも、その程度では鉄兵の物理防御を突破する事はまず不可能なのである。だから鉄兵はこの時、むしろシロの手が大丈夫かと心配してたりしたのだが、それはとんでもない勘違いであったのだ。

真っ直ぐに鉄兵に突きたてられるかと思われたシロの手は、しかし鉄兵の予想と反して衝突の瞬間に柔らかく変化した。その手がピタリと鉄兵の肩に乗り、服を掴む。

気がついた時には鉄兵の視界は上下逆になっていた。見る間に視界が地表に近づき、鉄兵は頭から地面に衝突した。

物理防御魔法によりダメージはないが、方向感覚を喪失して倒れこむ。何の技かは分からないが、どうやら投げられたらしい。鉄兵はすぐさま状況を把握して立ち上がろうとしたのだが、その時にはすでに遅かった。シロの身体が蛇のように鉄兵の右腕に絡みつき、

関節を逆方向に押し曲げたのだ。

「いててててて！！」

久々に感じる激痛に鉄兵は顔をしかめて大声で喚いた。一見完璧なように見える物理防御の魔法だが、実はこれ、関節技のような技には何の効力も持たないのである。自由に身動きが取れるように一定以下の力には反応しないように設定しているため、瞬間的な強い力ではなく持続した弱い力で関節技をかけられると効力を発揮しないのだ。

「ちょ、シロ！　なんで関節技なんて使えるんだよ！」

「なに、昔キヘイに習ってな」

予想外の出来事に、緊迫感も忘れて鉄兵が叫ぶ。なんだか楽しそうに答えたシロの言葉は想定外ではあったものの、言われてみれば納得の理由であった。という事はどうやらキャリアは２００年ほどのようである。となるとシロは達人級の腕前と予想される。これは少し困った事になった。

シロが使った技は腕挫ぎ十字固めという技である。一見地味な攻撃に見えるかもしれないが、完璧に決まってしまった関節技ほど厄介なものは無い。柔よく剛を制すとはよくいったもので、例えばこの腕挫ぎ十字固めという技は、技をかけられた側が伸びきった状態から腕を曲げる力よりも、当然ながら技をかけた側の背筋力全てを使った押さえ込みの方が圧倒的に強いために、子供と大人ほどの体格差があったとしても破る事は困難な技である。強化された鉄兵の筋力はシロよりもだいぶ上回るが、残念ながらこの状態から強引に抜け出せれるほどのものではないようだ。

「降参するかい？」

シロの降伏勧告に、鉄兵は少し考えた。実力はもう十分に見せ付けたからそれでも良いのかも知れない。良いのかもしれないが、だが、ここで負けるのは少し悔しい。

「いや、もうちょい頑張るよ！」

鉄兵は自由な左腕を思いっきり地面に叩きつけて魔法を行使した。途端に土はその性質を変え、流砂の如き様相を見せて鉄兵の身体を沈み落とした。あわよくばアリ地獄のように砂の中に引っ張り込もうとしたのだが、残念ながら危険を察知したシロはあっという間に技を解いて危地から脱出してしまったためにその目論見は潰えてしまった。

地中の中で考える。ここまで戦えば十分だろう。鉄兵は油断することなく、一気にこの勝負の決着をつける事にした。

知覚魔法でシロの位置はわかっている。鉄兵は３０ｍほど距離を置いたものの、敢えてシロの真正面に飛び出て魔法を行使した。

鉄兵が出てきて魔法を行使したのを見ると、シロは機敏に反応して緊急離脱をしようとした。が、現れた効果に一瞬身体を硬直させる。

鉄兵が行使した魔法。それは暗闇を作る魔法だったのだ。２０ｍ四方に展開された暗闇は、残念ながら一瞬しかその効力を発揮しなかったが、その一瞬の硬直さえ奪えれば効果としては十分である。

その隙を見逃さず、鉄兵は次なる魔法を行使した。途端に地面が弾け、闇が消えたその時には地表を隔てて逆方向に、先ほどの闇と同じ規模の穴が開いていた。

大穴に捕らわれたシロは、それでも機敏に行動し、跳躍して脱出するために足に力を入れる。だが、鉄兵はそれを許さずに新たな魔法を行使してシロの機動力を完全に奪った。

今度の魔法は水の魔法である。一瞬で現れた水の抵抗力に力を奪われ、シロの脱出は夢と消える。

そして、止めの魔法である。

まるでプールのようになったその穴の水に向け、鉄兵は魔法を行使した。途端に水は液体から固体に形を変え、氷の塊に変化してシロの身体を封じ込めた。

えげつないほどの威力と規模を誇る鉄兵の魔法に、見物をしていた騎士達は目が眩む思いであった。この場にいる誰もが、鉄兵の魔法使いとしての実力を認め、半ば恐れすら抱いた。

だが、この場にいる誰一人として。この戦いが終ったとは思っていなかった。自分達ならその魔法の一つだけでも決着は着いただろう。だが、それはあくまで『自分達なら』なのだ。

そう、鉄兵の相手であるシロは竜人族なのである。この程度の攻撃で終る種族ならば、この大陸の中央でのうのうと覇を唱えてなどいられないのだ。

そして予想通り、戦いはまだ終ってはいなかった。

氷に小さなひびが入る。最初は小さなひびだったものは見る間にその規模を拡大し、やがて氷は砕けて弾けて飛び、そこから何か巨大なものが姿を現した。

氷を飛び散らせて飛び出してきたもの。それは無論、白竜形態のシロであった。

さてここからが本番である。といいたいところだが、残念ながらここで勝負はほぼ終わりであった。勘の良い人なら気が付いているかもしれないが、この展開は一度経験したものなのである。

白竜形態のシロを倒すというならば、普通に戦えば無傷で終わらせるという事は不可能であろう。だが、そんな不可能な事を可能にする魔法を鉄兵は一つだけ持っているのだ。

白竜形態のシロが現れる事を予想していた鉄兵は、シロが飛び出すと同時に行動を起こしていた。シロが飛び出し地表に足を下ろしたその時、鉄兵はシロの目の先に着地していた。腰をかがめ、掌をシロの体表に押し当てて魔法を行使する。

鉄兵の行使した魔法は、すぐさまその効力を現した。

それは音も無く迅速に作用した。魔法を食らったシロの身体は見る間に縮小していき、最後に残ったものは、きょとんとした表情を見せる人間形態のシロの姿であった。

鉄兵が使用した魔法は、魔力吸収である。

竜人族の竜化について、鉄兵は二つほど仮説を立てていた。それ

は即ち急激な細胞の増加による肥大化か、リルと同じように魔力を身に纏う事による巨大化である。どうやら正解は後者であったようだが、魔力吸収を行った結果起こる現象についてはいずれにせよ変わらない。

リルの魔力量を調整する時に得たデータだが、魔力を吸収すると痛みを感じるというものがあった。痛みを感じると言うのは痛覚に訴える何かがあると言う事であり、この世界の住人は多かれ少なかれ魔力に依存していると言う事は予想されるものであった。急激に魔力を消費したリードが眩暈を起こしていた事実を鑑みると、恐らくは肉体構成に必要な物質として取り込まれているのだろう。その線で考えると、急激に水分を失うと脱水症状を起こすように、急激に魔力を消費すると脱魔症状を引き起こすものと思われる。ゆえに、恐らくは鉄兵の魔力吸収は魔力をそれほど持たない生物であったとしても戦闘不能にまで追い込む威力があると思われた。これは前者であっても有効であったはずだから、無傷での無力化は出来ていたはずである。

結果的に竜化についての仮説は後者が正しかったようだが、リルの時と違ってダメージを受けた様子の無いシロを見る限り、そのメカニズムはリルとは少し違うようである。竜人族自体はあまり魔力を持たない生物であるようなので、考えられるのは周囲の魔力を集めて竜化するという無意識魔法を操る種族だと言ったところであろうか。リルのような魔獣との違いは、恐らく体内に蓄えた魔力を使うかなのだろう。

白竜形態を強制的に解除されたシロは、盛り上がった気持ちを醒まされてしまったようで罰が悪そうに頬を掻く。

「お前さん、さすがにこいつは反則じゃねえか？」

そしてしばし考えた挙句に繁々と鉄兵の顔を見て吐き出した台詞はそんなものであった。そりゃまあ誰にも破られた事が無い奥の手を、こんなにもあっけなく封じ込められてしまったのだから、そう思うのは至極当然の事だろう。そう考えると少し申し訳なくも思えたが、良く考えてみればシロから始めた事なので自業自得といえるだろう。

「いや、ごめん。でも、反則っぽいけどこれで俺の勝ちだろ？　それともまだやった方が良い？」

それでも謝りつつ形だけは挑発してみる。正直これ以上はごめんであるが、シロの狙いを考えればこれで終わりのはずである。

「流石にここまでやられちゃ負けを認めるさ。お前さんは俺よりも強い。竜人族より強い男だと、これからは胸を張って名乗ればいいさ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

この会話のために、二人は戦いを繰り広げたのだ。

いつもとは少し違う優しい笑みをシロが見せる。その笑みに心底からの親身なものを感じ取って、鉄兵はなんだから少し照れてしまった。

やり遂げた達成感と暖かい感情にはにかみながら、鉄兵はシロからの贈り物を受け取った。

決着（後書き）

２０１１／３／５：指摘いただいた誤字修正
「最初は小さな日々だったものは」
→「最初は小さなひびだったものは」

真相

「にしても、こいつはちょいとやりすぎだったんじゃねえか？」

戦いを終え、我に返ったシロが辺りを見回しふと言った。

戦っている最中はアドレナリンが分泌されていたために気にしていなかったが、シロに言われて周囲を見回してみれば、これはなかなかに酷い惨状であった。城壁の一部は崩れているし、更地だった中庭は見るも無残に大なり小なりの穴や山が出来ている。シロの真後ろには２０ｍ四方の巨大な穴さえ開いているし「ちょっとした戦争でもあったのですか？」と聞かれても否定できないような惨状に、鉄兵は我が事ながら少しやりすぎたかなーという気分にもなった。とはいえ、アリスに言われたので後片付けの準備はしてあるから問題は無いのだが。

「まあ、やりすぎたかも。でも、これがシロの狙いだったんだろ？」

「さて、何の事かねぇ」

懐をごそごそと漁りながらシロが言う。何を探しているか知らないが、その適当な物の言い様に少しだけ不安になる。自分としてはシロの意を汲んだつもりだったのだが、ひょっとしたら勘違いだったのだろうか？　勘違いだったとしたら、全力でやってしまったために少し恥ずかしい事態である。

「シロ……」

のんびりと懐から取り出した煙管に煙草の葉を詰めるシロに鉄兵

が話しかける。

「ん？」

「ひょっとして俺の勘違い？」

「さてな。どっちだっていいじゃねえか」

微かな不安を感じつつ問いかけた鉄兵の言葉に、シロはただそれだけを言っていつものようにニッと笑った。どうやら答える気はないようである。とはいえ、シロがそう言うならどっちでも良い事なのだろう。これは思考停止した楽観論からの結論ではなく、シロの判断能力を信用しての結論である。

ここでようやく鉄兵が推測したシロの狙いの話をするが、以下は鉄兵がシロの言動と態度から読み取った内容である。

これまでのシロの言動を鑑みるに、シロは口に出さない事はあっても嘘を吐いた事は無い。つまり、先ほどシロが言った言葉は全て本心からのものと言って良いだろう。

ここで、戦闘の最中にあったシロの発言を並べてみる。

「世間じゃ俺とお前は互角に戦えるって事になってるって事さ」

「謙遜したいならすればいいさ。ただし、自分にしか迷惑がかからない範囲でな。

だがな、お前さんは俺と互角に戦えるって事になっている。そんな奴に自分が弱いと言われちまえば、こいつは俺達竜人族の名誉に

関わるって事さ」

「俺は、俺達竜人族の誇りをかけてお前さんが俺と互角だと認めた。そりゃそうさ。実際にお前さんは俺と互角に戦えるんだからな。だがテツよ。お前さんはそんな事実はいらねぇと言った。なら、その看板は遠慮なく剥がさせて貰うぜ」

とまあこんなところである。この発言を鉄兵なりに整理すると、以下のようになる。

1）・世間では鉄兵とシロは互角に戦える実力があると思われている。

2）・シロは事実、鉄兵がシロと互角に戦える実力があると認めている。

3）・シロは鉄兵の発言に特に関与する意思は無い。ただし、それは後述の4）に抵触しない場合に限定される。

4）・1）という噂が立っている以上、鉄兵が自分が弱いと公言する場合には竜人族の名誉を傷付ける恐れがある。

5）・シロとしては4）を許容するわけにはいかないため、4）の行為を行う場合はそれを阻止しなくてはならない。

この内容から考えるに、シロにとってあくまで大事なのは竜人族であり、鉄兵の発言はその名誉を傷付ける恐れがある。ゆえにシロ

は竜人族の名誉を守るために鉄兵に襲い掛かってきた、と取れるだろう。

単純化して考えれば、まあこれは合っているのだろう。

とはいえ、ここには疑問が残る。

その疑問とは、鉄兵の能力を示したいだけなら、ただその力を見せ付けるように言えばいいという事だ。わざわざシロが鉄兵と争う理由など、どこにもないのである。それくらいの事はシロも理解しているだろうに、にも関わらず、シロは鉄兵に襲い掛かってきた。これはシロの思考としては少し不自然と鉄兵には思えたのだ。

鉄兵は当初、その原因をシロが自分を見限ったのではないのかと思った。だが、とあるシロの反応によりそれは思い違いだと推測できた。その反応とは、破れかぶれで放った一撃にシロが過剰に反応して間合いを取った事である。

その後に見せたシロの罰の悪そうな表情を見て、鉄兵は二つの事実を理解した。その一つ目は、いまや鉄兵はシロさえも怯えを見せる化け物だという事である。

シロは、自分が鉄兵に敵わないという事を最初から自覚していたのだろう。シロの過剰な反応。あれは、シロが鉄兵の力を恐れた事から起こした反応だと推測ができる。それは罰の悪そうなあの表情からだけの推測だが、恐らくは間違っていないだろう。

リルと戦った時でさえ怯えを見せなかったシロが、怯えを見せた。今までも規格外だ化け物だとさんざん言われてきていたが、これまで散々飄々とした態度で鉄兵を翻弄し続けていたシロにまでそんな

態度を取られたのは、正直なところ鉄兵にとって少なからずショックな事であった。まあ、今は関係ないのでそれは横に置いておくが。

問題は二つ目の事実である。それは、やはり自分はシロと戦う必要があるのだという事であった。

前述の通り、鉄兵の戦闘能力を示すだけなら戦う必要など無い。にも拘らず、シロは鉄兵の力を恐れていたというのに戦いを挑んできた。何でそんな事をしたのかといえば、まあこれはいつものように人が好すぎるほどのお節介を焼いたからだろう。つまり、シロは下手をすれば自分の命すら無くなるだろうと予測した上で、さらにここで一戦交えておく必要があると判断したわけである。

その理由は、なんとなくではあるが理解できる。要するに「謙遜してないで力を誇示しちまえ」という事なのだろう。

なぜ力を誇示する必要があるかといえば、現代の日本と違ってここはまだまだ戦乱が収束したばかりの戦国末期であり、各地の勢力も予断を許さない状況だからなのだろう。つまり、この国はまだまだ安定しているわけではなく、武力こそが尊ばれる国なのだ。国というのは基本、武によって興され、文によって治められるものである。今はその過渡期であるが、まだまだ前者寄りであり、いくら知力があろうとも武勇が無ければ疎んじられる。

そんな国で先程のような謙遜を見せ続けていれば、遠からず鉄兵は軽んじられる。シロはそれを危惧して実力行使に踏み切ったものと考えられる。アリスがあっさりと戦闘を許したのも、シロと同じ危惧を抱いたからかもしれない。

それでも実戦を見せる必要までは無いと思えたが、もし戦わずに

戦闘力のみを示したところで、先程までの気の抜けた鉄兵によるものだったなら恐らくは迫力の欠けたものになっただろう。実際に力があったとしても、その力をあまり重要視していない鉄兵がそう意識して行使すればたいした事は無いという印象を持たれる可能性がある。そうなる可能性がある以上、多少の危険を冒したとしてもシロは確実な方を選んだのだろう。それに、実際戦うとなればそれだけで竜人族の名誉は守られるから一石二鳥でもあったし。

鉄兵がシロと戦った時点でいずれにせよ竜人族の名誉が守られる事は確定している。鉄兵が勝つにせよ負けるにせよ、戦いの様子を見せ付ければ竜人族の強さを認識させる事が出来るため問題は無いのだ。とはいえ、シロが負ければ竜人族が人間族に負けたと言う事で多少は竜人族の評判が下がるだろう。なので、人間族が竜人族に勝ったのは事実であるが、なら人間族なら竜人族に勝てるのかといえばそれはＮＯであると言えるような勝負じゃなくてはならなかったが。

とまあそんな事情を考慮して、鉄兵は少し派手に戦闘を行った。シロを屈服させるだけなら、例の物理防御魔法の応用である金縛りの魔法で押さえつけて魔力吸収をすればいいだけの話だったのだが、あれだけ効率の悪い戦い方をしたのはそういう事情があったからである。今回の件における裏事情はこんなところであろうか。

「しかし、こいつを片付けるにゃちょいと時間がかかりそうだな。まあ気長にやるかね」

煙管に火を付け、煙を吐きながら、シロがしかめっ面を見せる。どうやら後片付けを手伝ってくれる気はあったようだが、ちゃんと準備をしていたのでそれには及ばなかったりする。

「いや、ちゃんと準備しといたからすぐ片付くよ」

「ほう？　どういう事だ」

「力を見せるつけるのはむしろここからって事さ」

言いながら、鉄兵は魔法を行使すべく体内の精霊に意思を伝えた。先程は竜人族の事情を考えて戦闘を派手に行ったと書いたが、派手に城壁などを壊した理由の本命はむしろこちらにあったのだ。

鉄兵の魔法が発動する。

それは、まさに『魔法』であった。

例えば、先程戦闘で使ったような光線や爆発、地割れや大水や冷凍の魔法は元の世界の文明ならば、手間や時間はかかるだろうが再現できるだろう。だが、今鉄兵が行使した魔法は、残念ながら現在の科学の力では再現が不可能な、まさに『魔法』であったのだ。

鉄兵が魔法を行使したかと思うと、鉄兵の魔法によって損害を追った物質が不意にふわりと浮かびあがった。それら浮かび上がった物質が直ちに移動を開始し、在るべき場所に戻っていく。崩れ落ちた瓦礫は元の城壁へ、爆発で四散した金属片は元の鎧案山子へ、土山は踏み固められた地面へと。

魔法の発動からわずか１０秒足らず。たったそれだけの時間で、鉄兵が行使した魔法は荒廃した中庭を戦闘が起こり荒らされる前の状態に完全に戻した。

「こいつは……流石に驚いたな」

これには流石のシロも心底から驚いているようである。とはいえシロの顔色は冴えないが。

「すごいはすごいが、しかしこいつは正直気分の良いもんじゃねぇな」

シロが難しい顔をしてぼそりと呟く。その気持ちは、鉄兵にも分からなくは無かった。

壊れたものは戻らない。それは物理的・精神的なものを問わず、物でも生物でも同じである。だからこそ、シロはそれを最小限に抑えようと８００年もの間この大陸を巡回し続けていたのだ。

そんなシロだからこそ、こうも簡単に破壊されたものが再生されたりして欲しくないのであろう。破壊するという事は比較的簡単な行為だが、それを再生するには非常な労力を伴うものである。その原則があるからこそ、人は必要以上の破壊を忌避するのだ。その原則の内に生きてきたシロにとっては鉄兵の魔法は好ましくなのだろう。

とはいえ、鉄兵の意見は少し違うのだが。

「まあ、準備が必要な魔法だから多分もう使う機会はないよ」

「……そうかい」

今回使用した再生魔法は、事前に解析魔法を使用して得た解析データを元に、念動の魔法と加工の魔法を自重せずに使った結果である。解析魔法のデータがなくとも似たような真似は出来るだろうが、

さすがに全部元通りというのは無理だろう。

大規模な解析魔法も手を触れずに行う加工魔法も、これまでそんな事出来るわけが無いという常識が邪魔をして試しもしなかった魔法である。しかし、実際に試してみるとそれは可能であった。流石に全てをイメージできるわけも無いので魔力のロスは激しく、鉄兵以外の人物にはできないだろう代物であったが、ここで問題になるのはそこではない。

ここで問題になるのは、既成概念というものは新しい事をするには邪魔になる事があるということである。同じように、シロの考えも正しいとは思うが、鉄兵としてはシロの考えを尊重しつつ、もう少し前に向けて考えを進めたいところであった。

再生魔法についても、現代の科学力では再現できないと言ったが、未来永劫にわたって再現してはならないという理由にはならない。それが再現できるようになるまでに、何十年、何百年、何千年とかかるかもしれない。だが、それが技術として完成され、普及し始めればそれが常識となれば、常識となった世界では新たな習慣が生まれるだろう。それは新たな軋轢の種になるかもしれないが、人が滅んでしまわない限り、新たな技術は折り合いをつけられて新たな既成概念となっていくものだ。

それが危険な技術なら、無論の事それは制御されていなければならない。変化を恐れてその技術を拒否をするというのも一つの道だろう。

でも、できるなら、可能な限り新しいものを見てみたい。

それが技術者である鉄兵の基本的な考え方であった。

動揺

さて、戦闘の後片付けは終ったが、それで全部が終ったわけではない。さっさと終わりにしてしまいところだが、まだある意味一番の大仕事が最後に残ってるのだ。それがなにかといえば、事態の収拾という奴である。

これだけ派手にやらかせば、城の面々も城下の人達も気が付いてないわけが無いだろう。恐らくはこれから説明に追われる事が予想されるわけで、なかなかに気が重い。とはいえ、自分がやらかした事なので、これればかりは避けて通る訳にはいかないだろう。

そんな事を考えながら耳を澄ませてみれば、意外にも現場に近い城内には大きな混乱は無い様で、城外での騒ぎが大きく聞こえてきた。とはいっても城外の騒ぎも混乱しているという程ではない。いきなり城の城壁が崩れ落ちたりすればもうちょっとパニックになっていても良さそうなものだが、まあ落ち着いている分には気にする事も無いだろうか。

とりあえずの状況を確かめた鉄兵は、今度はアリス達の様子を見るために向き直った。すると、これは予想していた事だが、リードとホーリィは腰が抜けてしまったようで二人仲良くへなへなと地面に腰を下ろしている。マーティンや近衛等の騎士達はといえば、流石は武官であり、腰を抜かしたりはしていないが、そうはいっても衝撃は隠せないようで、悪夢から目を覚ました後のように複雑な表情をつくっている。その中でアリスだけは平気な様子で、むしろ上機嫌な表情を見せていたが、これは例外というものだろう。

「どうだトラヴィス。鉄兵と一手交えてみるか？」

そんなアリス達の様子を見てまずはどうするべきかと鉄兵が考えていると、アリスの口からそんな言葉が飛び出してきた。アリスにしては珍しく本当に意地が悪く聞こえる台詞だが、様子を見るに、多分本気で意地悪をしているように見える。なぜそんな似合わない真似をしているのかを考えてみれば、まあ、不甲斐無い自分が原因なのだろう。

アリスの態度を見るに、どうやら鉄兵の不甲斐無い態度に腹を立てていたようである。なのでシロと鉄兵が戦う事でトラヴィス達を見返す事が出来たので、思わず厭味の一つも言ってしまったというところだろうか。そう考えるとアリスは自分の側に付いてくれているようで、そこは嬉しくあるが、反面、自分の不甲斐無さからそんな事を言わせてしまったと思うと恥ずかしくもある。

このアリスの言葉にトラヴィスがどう出るかと思って様子を見ていると、これまた流石に近衛騎士の隊長と言うべきだろうか、トラヴィスの解答はなかなかに味があるものであった。

「姫様の命とあらばやぶさかではございませんが……幸い命の保証はしてくれそうですしな。しかし、残念ながら姫様を楽しませるような戦いはできないでしょうな」

一見すれば負けを認めて尻込みしているようにも聞こえる台詞。武勇を重んじる時代の武官としては致命的ともいえる隊長の台詞に近衛騎士達は落胆の色を隠せなかったようだが、そこに込められた言葉の意味を考えてみれば、どうやら鉄兵の弱点を見破っているようでもあった。

その言葉の意味をアリスも分かったのだろう。トラヴィスの言葉

はアリスに対する厭味でもある。その言葉で我に返ったのか、アリスは自分の態度を恥じたようで苦笑を見せた。

「戯れだ。許せトラヴィス」

「はっ」

特に表情を崩す事無くトラヴィスが返事をする。なにやら一件落着してしまった感じだが、このままではどうにも他の騎士達に勘違いされてしまいそうである。話を蒸し返すのも少し微妙だとは思ったが、鉄兵はトラヴィスの名誉と自分の立ち位置をしっかりと認識させておくためにも少し話をする事にした。

「トラヴィス殿。少しだけお話させていただいてよろしいですか？」

「ええ、構いませんよ」

トラヴィスに話しかけると、トラヴィスはにっこりと笑って答えてくれた。

「では、お言葉に甘えて……

戦いを見ていただいた後なら納得していただけるでしょうが、私は多分、魔法を使って正面から戦えば、ここにいる誰よりも強い力を持っているでしょう。

ですが、私が先程、自分はヨハネよりも弱いといったのも事実なのです。その時は剣の腕前の事を言っていたわけですが、改めて考えるとそれだけではないようです。

言ってしまえば、私はここにいる誰よりも弱いのかもしれません。

その理由を、トラヴィス殿は気が付いているのではないですか？」

鉄兵の意外な発言に場がざわめく。質問されて注目を浴びたトラヴィスは軽い苦笑を漏らした。

「そうですな、見当だけはついております」

「その答えを、言ってくれませんか？」

間髪入れずに頼み込むと、トラヴィスの苦笑が引っ込んだ。難しい顔をして、しばし目を瞑って頬を掻いたトラヴィスは、やがて開いた目を空に向け、姿勢を正して口を開いた。

「では、言いましょう。私が思うに、どうやらあなたには人を殺める覚悟が無いようだ。その覚悟が無いならば、戦場において私はあなたの力を頼る気にはなれない」

「その通りです」

侮辱とも言えるトラヴィスの言葉を、しかしその言葉が周囲に浸透する隙も与えずに鉄兵は即座に肯定した。

「私は文官です。戦うためにこの国に仕えたのではなく、この国を豊かにする技術を活用してもらうために国に仕えたのです。

確かに私は強い魔法の力を持っています。ですが、私はその力を人を殺めるためには使えないし、使うつもりも無い。故に私はこの国に仕える武官の誰よりも弱いのです。

臆病と思われるかもしれませんが、それは事実です。そして私はそれでいいと思っています。

文官は武官の領域を侵す必要は無いし、その逆もまた真でしょう。故に、文官である私は武官の領域である武について、その領域を侵すつもりは無いのです。

なので、私は人を殺める覚悟を持つ必要は無いし、むしろそれは持つべきでは無いものではないかと思っております。
この国に住む全ての住人は、あなた方に守られる立場にあります。それが武官の仕事であり、その中には私も含まれているのです。
私は文官です。故にこの国と住人を守る仕事はあなた方に任せ、代わりにこの国をもっと住みやすい場所にするために頑張りましょう」

どうやら感銘を与えるまでには至らなかったようだが、それでも周囲の騎士達の様子を見るに、概ね鉄兵の意見は受け入れられたようだった。自分の仕事を再確認したのか、和みつつも納得したような表情を見せる騎士達を見て、鉄兵は内心で胸を撫で下ろした。元々演説が得意なわけでも無いので、まあこの程度が出来れば及第点といったところだろうか。

「そうですな。この国を守る仕事は我々に任せていただきましょう。もっとも、あなたを守る必要を私は感じませんがね」

トラヴィスがニヤッと笑って軽口を叩いた。その様子に鉄兵も表情を緩めたが、しかし次のトラヴィスの台詞に鉄兵は顔をしかめる事になった。

「しかし魔術師殿。あなたには従軍義務もあるのでそれでは困るのですがね」

「あー……そうでした。困ったな。どうしよう」

顔をしかめた鉄兵を見て、騎士達の間から軽い笑いが漏れた。さっき確認した事なのにすっかり忘れてしまっていたためにどうにも締まらない結果になってしまい、少し恥ずかしい。

「まあ、あなたの事はわかりました。追々やっていきましょう」

すっとトラヴィスから手が差し出された。表情を見ると、非常に穏やかな笑みを浮かべていた。

「よろしくお願いします」

鉄兵ははにかみつつその手を取った。取った手をぎゅっと握り返される。剣ダコで膨れたその手は驚くほど熱く、どこまでも頼もしかった。

さてこれにて一件落着という雰囲気となったが、そんな時、どこからともなくパチパチという拍手の音が聞こえてきた。

その音に釣られて皆がそちらを振り向く。すると、そこには一人の男が立っていた。

「いや、素晴らしい魔法と演説でした」

そんな台詞と共にこちらに歩いてきた男を見て、アリスが弾んだ声をあげた。

「ルナス！」

「やあアリス。久しぶりだね」

親しみのこもった声をその男にかけたアリスは、軽く駆け足で男に近寄ると、軽く男と抱き合った。

アリスと並ぶその男を見ると、アリスとその男の関連性は一目瞭然であった。髪こそ僅かにウェーブがかかった金髪であるが、まるで女性のように整ったその容姿も瞳の色も、アリスを思わせるものだったのだ。

その真紅の瞳が鉄兵の方に向く。

「先程から拝見させていただいておりました。私も話に加わらせていただいてもよろしいでしょうか？」

「え？　あー……はい」

突然の登場と、アリスを思わせる瞳に見つめられて、鉄兵はたじろぎながら答える。

「鉄兵、紹介しよう。彼は……」

その横でアリスが男を紹介しようとしたが、男はアリスの口元にそっと人差し指を寄せ、アリスの言葉をさえぎった。

「アリス。自己紹介くらい自分でさせてくれないかな？」

「そうか？　ならここは譲ろう」

アリスに対してなんとも馴れ馴れしい態度だが、どうやらアリスにとって男の行動は普通の事のようだ。

「はじめまして。ルナス・セプテン・オズワルドと申します。シリウス王の弟の息子で、アリス姫とは従兄妹の関係にあります」

なるほど従兄妹であったらしい。ならばこの馴れ馴れしさも納得というものだろう。

「……それと」

ルナスはアリスの後ろから手を伸ばし、肩を掴んで軽くアリスを抱き寄せた。鉄兵はなぜかイラッと来たものの、アリスも小首を傾げながらもされるがままにしているし、従兄妹ならばこの馴れ馴れしい態度も普通なのだろう。

と、鉄兵は心に余裕を持つためにそんな風に思おうとしたのだが、そんな余裕は次のルナスの一言で吹き飛ぶ事になった。

「今度、アリス姫とお見合いをする事になっております」

「……え？」

一瞬、何を言われたのか分からなかった。

そしてその言葉の意味を理解した時、鉄兵は何も考えられなくなってしまった。

ルナスと呼ばれた男を見れば、アリスとよく似た顔をこちらに向け、にやにやと笑っている。

噂に聞いていたアリスの見合い相手。その相手を前にして、鉄兵はただただ名状しがたい強い感情に支配されていた。

動揺（後書き）

ルナスの名前は疾風迅雷様から。セプテンというミドルネームはＦｒｅｅｄｏｍ様から。トラヴィスの名前は匿名の方から頂きました。ありがとうございました～。

２０１１／４／６：指摘いただいた誤字修正

耳を済ませてみれば
↓澄ませてみれば

検討だけはついております
↓見当

月の公子・その1

「今度、アリス姫とお見合いをする事になっております」

ルナスと名乗る男は確かにそう言った。

そしてその言葉を聞いた鉄兵は、何も考える事が出来なくなり、ただただ馬鹿みたいにルナスの顔を見る事しか出来なくなってしまっていた。

アリスがお見合いをする。それは最初から分かっていた事である。

そのためにアリスは国に帰って来たのだし、鉄兵はそれに付き添うようにこの国に来たのだ。

当然ながらお見合いをするという事は相手がいるという事である。つまり、見合い相手がいる事は分かっていた事であるし、昨日の晩餐の席においても微かに仄めかされていた事だ。

なので鉄兵は近いうちにそのお見合い相手に会う事もあるだろうなと思っていたし、心にはとどめてはいた。

だからその人物に会ったとしても何のわだかまりも無く行動できる。そう鉄兵は何の根拠も無く信じていた。

だが、残念ながら現実はそうではなかった。

おかしい話ではあるが、自分の思考が不明瞭になったという事実を鉄兵は客観的に把握する事ができた。頭に血が上ったのだろうか、

不意に視界がぼやけ、思考がぼんやりともやにかかったようになっている。それと同時に焦りとも喪失感とも取れるマイナス方向に強く流れる感情が胸を支配している事を自覚できた。

一呼吸遅れて事実に気がつく。そう、これは明らかに負の感情である。それも、思考能力が麻痺してしまうほどの。

鉄兵にとって、これは生まれて初めて感じる感情であった。なぜこんなにも強い負の感情を感じてしまったのか、鉄兵は自分の事だというのに理解が出来なかった。自分の中にこれほど強い感情がある。そんな事すら鉄兵にとっては新発見であったのである。初めて感じるその強い感情を前に、鉄兵はただそれを押さえつけるために思考を停止するほか無かった。

感じたくも無い不快な感情。自分の中から消してしまいたくてたまらなく、一瞬だって身の内に飼っておきたくないと心から思うその感情は、しかし奇妙に甘い感覚も混じっていて、根深く心の奥底にとどまり続ける。この感情の根本に基づくもの。その理由も本質も、今すぐにだって理解できるくせに理解などしたくない。そんな非合理的で救いの無い判断が無意識下に脳裏で再考と即断を繰り返し、鉄兵はその一点に処理能力の全てを奪われ身動き一つ取れなくなってしまった。

なにか行動を起こさなければ。

その思いだけが脳裏に浮かぶ。

何も考えられない状況の中で、ただ一つその思いだけがはっきりと思い浮かんだ。このままだと、何か本当に大切な事が手遅れになってしまうような気がして、とにかく行動を起こさなければという

思いだけが募った。

でも、何をすれば良いのか、どうしたいのか。それが自分でも分からない。

結局のところ、痺れた思考能力ではその解を出す事が出来ずに、鉄兵は何も行動を起こす事が出来なかった。

そしてこの状況を動かしたのが誰かといえば、それはこの状況を引き起こした張本人であるルナスによってであった。

アリスの肩を抱いてにやにやと笑うルナス。そのにやにやとした頬が唖然とする鉄兵を前にしてさらに緩む。

「……ぷっ」

頬が緩むと同時にルナスの口角は堰を切ったかのように釣り上がり、やがて限界を超えて小さく喉を震わせた。

「あは、あははは！」

そして微かに口が開いたかと思ったら、ついには白い歯が零れ出て、大声で笑い出したのだ。

「あははは、はぅっ……！！」

突然笑い出したルナスが、奇妙な声を上げて不意に身体をへの字に折り曲げて崩れ落ちる。

「へ？」

一体何事が起こったのか、唐突なルナスの変化に鉄兵は先程までの鬱屈とした感情も吹っ飛んでルナスのそのありさまをきょとんとして眺めてしまった。

それでも我に返って　何事かと思い状況を確かめてみると、崩れ落ちたルナスのわき腹のあった位置にアリスの肘があった。

この状況が何を表すのか冷静に考えてみる。とはいえ考えるまでも無く事実はひとつしか無いような気がする。ルナスが奇声を上げて崩れ落ち、そのルナスのわき腹があった位置にアリスの肘があったという事は、つまりアリスがルナスに肘鉄を炸裂させたのだろう。

ルナスがアリスの肩を抱き、アリスはそれを拒む事も無かった。そんな仲睦まじいさまに鉄兵は動揺を隠し切れずに醜態を晒してしまったというのに、突如訪れたこの光景はなんなのだろう。

突如高笑いしたルナスとそれを撃墜したアリス。その強烈なインパクトに先程までの動揺は吹っ飛んだが、それとは別に鉄兵は状況にまるでついていけず、疑問符を浮かべつつアリスを見た。

すると、アリスは額に手を当てはぁっと溜息を吐いていた。

「ひどいじゃないかアリス」

そんなアリスに復活したルナスがにやけた表情で笑いかける。が、アリスはいかにもやれやれしょうがないなといったような表情を浮かべていた。

混乱する鉄兵に、アリスの目が向く。

「すまない鉄兵。見ての通りルナスはどうしようもない奴なのだ」

真摯な瞳が鉄兵を見つめる。その瞳を見ただけで鉄兵はとりあえず何もかも許してしまう気になったりもした。が、それよりもまずは説明が欲しいところである。

「そうそう、僕はどうしようもない奴なのさ。悪いねテツ君」

そう言って「あはは」とかる～く笑ったのはルナスであった。先程までの挑発的な態度とは打って変わって好意的な笑みを浮かべてにこにこと笑っている。

「えーと……はぁ」

いつもならここで説明を求めるところだが、しかし鉄兵の口から出てきたのは曖昧な溜息のような声だけであった。なんだかんだで未だ動揺が抜けきれず、ただ呆然と事の成り行きを見守る。

唖然とする鉄兵を放っておいて二人の会話はまだまだ続く。

「しかし、お見合いの相手がルナスだったとは……そうか、私はそこまで追い詰められていたのか」

頭を振ってうな垂れるアリスの口からそんな台詞が零れ出た。なにやらショックを受けているようである。

「そうだね。これを断ったらもう後はないんじゃないかな。君も僕もね」

対するルナスもにこにこと物騒な台詞を口にした。

未だ頭の回転を取り戻していない鉄兵にはいまいち二人の言葉が理解できず、困った鉄兵は戸惑いの表情を隠そうともせずにシロの方を見て助けを求めた。とりあえず困った時のシロ頼みである。

シロを見ると、シロは会話の流れにあまり興味が無かったのかぼーっと煙をくゆらせていた。が、鉄兵の視線に気がついたようで、少し顔を歪ませた後に口を開く。

「ルナス第七王位継承者か……あまり良い噂はきかねぇな。確か才気はあるがやる気が無く、年がら年中遊びまわってるってぇ話だったかな。ついでに女性に興味が無く、男色の気があるんじゃねぇかって噂だ」

「竜人殿。それは違いますよ」

王族相手に容赦ない台詞だなとシロの代わりに鉄兵が焦っていると、本人の口から訂正の言葉が飛び出した。

「私は女性に興味が無いわけじゃない。ただ興味を持てる人物が少ないだけです」

「……だそうだ」

訂正するのはそこだけなのかと突っ込みたくなるルナスの言葉に、シロは投げやりな口調で鉄兵にパスを投げた。なぜかは知らないが、どうもシロは心底ルナスに興味が無いようである。

それはともかくシロの言葉を元に先程の二人のやり取りを考える。シロの言葉を考えるに、ルナスはあまり女性に興味が無いようである。そして先程の二人のやり取りを考えるに……

「つまり二人はお互いにあまりに興味が無い？」

なぜか非常に望ましいと思える結論が頭に浮かび、鉄兵がそれをそのまま口にする。

すると、鉄兵の結論とは裏腹に二人は難しい表情を見せた。

「そうとも言い切れないかな」

非常に危うげなものを触るような表情でルナスが苦笑する。

「僕もアリスもお互いが最低限のラインだろう。だから他に選択肢が無いなら今回の話はまとまったんじゃないかな」

「そうだな……」

ルナスのその言葉を、アリスは否定しなかった。

その言葉を聞いて、鉄兵の内側に先程感じた負の感情が蘇る。しかし、鉄兵のその感情は「でも……」と再び語り始めたルナスが紡いだ言葉によって打ち払われる事になった。

「僕とアリスは兄妹みたいなものだ。だからあまりそういう事は考えたくないかな」

「そうだな」

ルナスはそう言いつつ悪い夢でも見た後のような苦い表情を浮かべる。その言葉に、アリスもうんうんと頷いている。

どうやら二人は必要があればそうなるものの、お互いに恋愛の対象にならない存在のようである。なにか大切な事を忘れている気がするが、そんな二人の態度にほっとしてしまった鉄兵である。

しかし、その話を聞いた後に別の疑問が浮かんできた。なら、なぜアリスとあんなにも密着し、自分を煽るような態度を取ったのだろう。

と、ここでようやく鉄兵の頭が回りだす。先程感じた感情から元に導き出された結論はこれしかないというものであった。

「つまり……俺ってからかわれたの？」

ここでようやく辿り着いた結論は、鉄兵にとって不覚としか言いようの無いものであった。

自分で出した結論ながら、先程までの感情を考えるに不愉快極まりない事である。かといってそれを確かめないという選択肢を持たない鉄兵は恐る恐るルナスの方を見た。

すると、ルナスは再びあのいやらしい笑みを浮かべていた。そのルナスの表情を見て、鉄兵はそれが正解だと気がつき、どんよりとうな垂れる。ちなみにそんな鉄兵の様子を見てアリスがどこか嬉しそうな表情を見せていたのはここだけの話である。

「あはは、改めてごめんね。でも、そんな事は今、どうだっていい

事なんだよ」

いつのまにか擦り寄ってきていたルナスが馴れ馴れしく鉄兵の肩に手を乗せる。

「それよりも、ボクは君に興味がある」

「へ？」

ふと高校時代に散々味わった危機の記憶が蘇り、鉄兵は身を硬くする。

だが、そんな鉄兵の個人的な体験から来る危機感にルナスが気がつくわけも無く、ルナスはさらにずいと鉄兵に近寄った。

「僕は、君の事を深く知りたいんだ」

非常に顔が近かった。

ある意味告白の台詞のようなその言葉は、無論男に言われても嬉しいものではない。その言葉に鉄兵は怖気立ち、完全な拒否の姿勢をとろうとしたのだが、しかしそれよりも早くルナスはすっと鉄兵の近くから離れて状況を動かし始めた。

「とりあえず場所を変えて話さないか？　ホーリィ、鉄兵殿はこの後どこに行く予定なんだい？」

「は、はい。この後は町に出て鍛冶工場を見学する予定でした」

それまで鉄兵とシロの戦いに当てられて腰を抜かしていたホーリ

ィは、しかしそのルナスの言葉で立ち直ったようである。戸惑いつつもしっかりとルナスの言葉に返事を返す。

「それは丁度いいね。早速行こうか」

ルナスはなんとも強引な性格らしく、思い立ったが吉日とばかりに鉄兵に笑顔を向けた。

が、そんなルナスに待ったの声がかかる。

「待てルナス。なにをそんなに急いでいるのだ？　話があるならここで話せば良いではないか」

至極もっともなアリスの言い分は、しかしルナスの言葉に抗う事が出来なかった。

「僕はそれでもいいけどね。でも、そろそろ先程の騒ぎを受けてここに君の兄君が到着する……と聞いたらどうだい？」

ルナスのその言葉にアリスの表情が引き締まった。

「ふむ……そういう事なら鉄兵はこの場にいない方がいいのかもしれないな。ルナス、頼めるか？」

「任せてもらうよ」

鉄兵の与らない場所で話がほいほいと展開していく。なにがなにやら分からないうちに自分の意思とは関係なく自分の行動が決まってしまったらしい。

「それじゃ、行こうか」

「え？　えっと……」

ルナスの左手が鉄兵の右手を掴む。ルナスのスキンシップ力の高さに躊躇うところもあり、それ以上に自分の意思とは関係ないところで自分の行動が決定されてしまった事に戸惑った鉄兵だったが、救いを求めるようにアリスの方を見ると、アリスは鉄兵を正面から見据えてただ黙って頷いた。その表情は真剣そのものである。よくわからないが、アリスの表情を見るにここは従った方が良いらしい。

「わかった」

最初から最後までルナスに翻弄されつつも、覚悟を決めた鉄兵は自分の意思によってルナスに手引かれてこの場を後にする。

そして鉄兵が去った後に残されたのは、鉄兵とシロの対決から続く一連の緊張感からようやく開放された者達だけであった。

その中で、未だ腰を抜かしたままのリードがリルを抱きしめ話しかける。

「鉄兵、いっちゃったね」

置いていかれたリルがキャウンと一声悲しそうに吼える。

「けど、そうなら今日もずっと一緒にいれるのかな？」

そう言いつつ、リードは嬉しそうにリルに笑いかけ、そっとリルの頭を撫でた。

鉄兵とは違い、リードとリルは会話による意思の疎通はできない。

だがしかし、リードの気持ちを感じる事が出来たのか、キャンと一声嬉しそうに鳴くと、リルは嬉しそうに尻尾を振ってリードの頬をぺろりと舐め始めた。

月の公子・その1（後書き）

２０１１／６／３０：ご指摘いただいた誤字修正

ルナスのわき腹があった位置にルナスの肘があった
↓アリスの肘があった

その言葉に鉄兵は怖気だし
↓怖気立ち

２０１１／９／１３：ご指摘いただいた誤字修正

身体をへの字にオチ曲げて崩れ落ちる
↓折り曲げて

月の公子・その2

ルナスに強引に手を引かれて中庭を離れた鉄兵達は、城門の方へ向かって歩いていた。先ほどの会話にもあったように、現在の目的地は製鉄技術を見れる場所である。

連れて行かれる方向を考えるに、どうやら目的地は城の外にあるようである。鉄兵はあまり深く考えずに鍛冶場も城の中にあるんじゃないかと思っていたのだが、どうやらそれは間違いだったらしい。まあ、考えてみれば火事の危険性があるような施設をわざわざ城内に作る必要は確かに無いだろうし、郊外にでも作ったほうが色々と合理的だろう。

その辺りの確認を一応ホーリィにしておきたいところだったが、鉄兵は声を出す事をなんとなく中慮してしまった。なんというか…非常に空気が悪いのだ。

今現在、鉄兵の周りにいるのはルナスとホーリィの二人である。

いまだ鉄兵の手を引いているルナスの機嫌は非常に良さそうある。鼻歌でも歌いだしそうな表情でずんずんと先行しているのだが、しかし、手を引かれる鉄兵とそれに付き従うホーリィの表情は、ルナスの機嫌の良さと反比例するようにどんよりとしたものであった。

大体の場合、研究者にとって偏見というのは敵である。無論、例外はあるものの、基本としてはひとつの考えに固執して物の本質を見誤らない事こそが重要なのだ。だからというわけではないが、鉄兵は人間関係において普段からなるべく偏見を持たないように心がけていた。つまり、その人の言葉や行動の一つだけを見て好悪を決

めず、なるべく客観的に良いところも悪いところも受け入れるという事である。

そんなわけで他人に対してあまり悪感情を持ったりはしない鉄兵であったが、それでもルナスに対しては良い印象を持てなかった。まあ、なんだかんだ言って第一印象というものはやはり重要だという事だ。

つい先ほど出会った人物に感情的にかき回され、さらには仲間と引き剥がされてほぼタイマンという状況なのだ。正直なところ心証は最悪だし、望む望まざるにかかわらず、どうしても警戒心が先に立ってしまう。

一方、ホーリィに関してもルナスに対してはなぜか強い緊張感を持っているようであった。

話を聞くにルナスは王弟の息子であり、確かに緊張を持って接するべき人物ではあるだろうが、ホーリィは元々シリウス王を筆頭に王都の重鎮に対して身近に接していた人物である。故にルナスを相手にそこまで畏まる必要も無いと思うのだが、どうしてこうも緊張しているのか、残念ながら鉄兵には推測することができなかった。

「鍛冶場って城の外にあるの？」

しかし、いつまでもこの空気の中で過ごすのは精神衛生的によろしくない。軽く意を決した鉄兵は、城門にたどり着く寸前につい先程は言い淀んでしまった台詞を口にした。

「あ、はい。町の外れにあります」

鉄兵の言葉にホーリィが我に返ったように答える。

「城の中に作ろうって話もあったみたいだけどね」

その話に食いついてホーリィの言葉を継いだのはルナスだった。

「でも、鍛冶師の親方は頑固な人でね。城じゃ落ち着いて良い仕事ができないって事で、結局町の外れに居を構えてるのさ」

僕も知り合いだけど良い人だよ。とルナスが言葉を結ぶ。どうやら親方さんは気難しい人らしい。

「親方は……」

その親方について説明しようとしたのだろう。微笑みながら口を開いたルナスだったが、その言葉が不意にピタリと止まった。次いで背後の城門を気にするように

一体どうしたのかと気になった鉄兵が耳を澄ましてみると、魔法による超聴覚を使うまでも無くその音は聞こえてきた。ここ一月近く馬車で旅をしていた鉄兵にはもはやお馴染みの音でるそれは、馬の蹄が地を蹴る音であった。

とはいえ、それは旅路の間に聞いていた２０頭近い馬の足音よりさらに多く、控えめに考えても１００騎以上はいる気がする。それが全力で駆けているらしいのだが、一体何事だろうか。

「少し遅かったようだね。ここは隠れようか」

その理由を、ルナスは知っているらしい。いまいち状況を理解で

きなかったが、相変わらず鉄兵は強引に手を引かれ、ホーリィはそれに付き従って城門の横に姿を隠した。

鉄兵達が姿を隠すとほぼ同時に開け広げられている城門から多数の騎馬が入城する。特に門番に押し止められたり場内から応戦のための兵が出現するわけでもない様子を見るとこの騎馬達は城の関係者だと推測できたが、さて何が起こっているのやら？

「で、なんで隠れたんだ？」

全力で城門を駆け抜ける騎馬の足音は見事なまでに迫力があるもので、すぐ近くにいるというのに普通に話したところで声が相手の耳に届きそうも無い。仕方なく耳打ちするように顔を近づけ、鉄兵はなんとなくつっけんどんにルナスに聞いた。

「別に理由はないさ」

明らかに悪意のこもった鉄兵の言葉を、しかし無視するようにルナスが微笑む。

「あれはアリスの兄君。つまり次期国王様の直属部隊さ。別に僕達が隠れようが隠れまいがなんら危険な事は無いよ」

どこか他人事のようなルナスの言葉は、まるで気にする事でもないと言わんばかりの口調であったが、しかしその言葉にはなぜかどことなく含みがあった。

「ただ、君達のあの戦いでかなり神経質になってるだろうからね。お会いするのはまたの機会にした方がいいんじゃないかな」

「なるほど……そういう事か」

その言葉で鉄兵はようやく全てを理解した。というか今考えてみれば推測する要素は全て揃っていたというのに、どうして今まで気がつかなかったのか……どうやらここに来てもまだ先程のショックで頭が回っていなかったようである。

なぜ、アリスがルナスと行動を共にする事を是としたのか。

意味が無いというのになぜこんな風にこそこそと隠れるのか。

それは、城の騒ぎを見て急行したアリスの兄とのいざこざを避けるためだったのだ。

そういえばルナスに連れ出される前にルナスがアリスとしていた会話でもそんな事が話題になっていたような気がする。

ここでふと思いついたが、シロとの戦いの後で町の人達がパニックに陥っていなかったのもアリスの兄のおかげだったのではないだろうか？

常識的に考えれば突然城内から爆発音が響いたり城壁が内側から崩されたりしたら混乱が起こってもおかしくない。なのに騒ぎが少なかったのは、城に急行するアリスの兄の部隊の姿が民衆達の混乱を抑えたのではないだろうか？

いや、鬼気迫った騎士団が全力で疾走すれば逆に騒ぎになりそうな気もするが、もしそれが真実だったとすれば、次期国王であるアリスの兄は民衆から絶対の信頼を得ているのだろう。まあシリウス王の息子というならそれぐらいのカリスマ性は持っていそうなもの

である。どんな人なのか興味は湧いたが、ここはルナスの言うように一度間を置いた方がいいだろう。

「さて、今のうちに町に出ようか」

次期国王の直属部隊は流石に精鋭部隊のようで、１００人規模の部隊にも拘らず、今城門から突入してきたと思ったらあっという間に通り去ってしまっていた。駆け去る騎士達の背中を眺め、十分に間をおいた後でルナスが手を引き鉄兵に微笑みかける。

妙に愛想が良いのはいいのだが、いい加減に手を離してくれないだろうか。そんな風に鉄兵は思ったのだが、どうやらルナスにそんな気はさらさら無いようである。緊張からか汗ばんできてちょっと気持ち悪いのだが、ルナスはそんな事は気にした様子も無くがっちりと鉄兵の手を握っている。

仕方なく手を引かれて城門の陰から出る。鉄兵はこうもこそこそと行動をするとなにやら悪い事をしている気になったのだが、その事に関してもルナスは鉄兵とは正反対な感情を抱いているようで、ふと見たルナスの表情はなぜか妙に満足げであった。なんというか、あれはどう見てもいたずらっ子の表情である。

初対面時の小芝居といい、今のこの表情といい、どうやらルナスは人の裏を掻くような悪戯が好きなようである。思うに、鉄兵をいざこざから遠ざけたのも、鉄兵を気遣ったというよりかはアリスの兄に対する悪戯心からの行動なのではないのだろうか。というか、これは多分当たってる。

まあ、その事について触れると何か面倒な事になる気がしたのでスルーする事として、諸所諸々の事に目を瞑り、とにもかくにも鉄

兵達は町へと出た。

さて、実のところ入城の時の騒ぎもあり、鉄兵は下手をすると町に出た瞬間に町の人に囲まれてしまうのではないかと危惧していたのだが、それは良くも悪くも回避された。

町に出た鉄兵の姿を見つけた民衆は、鉄兵の予想通り歓喜の表情を浮かべたのだ。今にも押し寄せて自分を囲みそうな気配を見せる人々に鉄兵はとっさに身構える。

しかし、その後の展開はかなり予想外のものになった。

「え？」

想像もしていなかった事態に、鉄兵の口から思わず声が出る。

そこで鉄兵が見たものは恐れの目だった。ただし、それは鉄兵に向けられたものではない。前を歩くルナスに向けてだ。

鉄兵を見つけた民衆は、予期せぬ話題の人物の登場に一様に顔を綻ばせた。だがしかし、その前を歩くルナスの姿を認めた瞬間、みるみるとその表情から喜びを無くし、やがて目を伏せて顔を背けたのだ。

民衆は、まるで鉄兵達の姿など見えないとでも言うように自分達の日常へと帰っていった。一度膨らみかけた熱狂という名の空気が物理法則に反したように急速に萎んだその空間は、一種異様な雰囲気を作り上げる。

「みんなの僕に対する反応に戸惑ってる？」

あまりといえばあまりの事態に呆然とする鉄兵に、ルナスが微笑みかける。

「……まあ、正直」

口から出た言葉は端的だが、鉄兵は内心かなりの衝撃を受けていた。確かに元の世界でも人から避けられる人物というのはいた。だが、ここまであからさまに態度に出し、まるでそこに誰もいないかのように振舞われ、避けられるという現場には出くわした事は無かったのだ。

「はは、君は正直だね」

なぜだろう。傍若無人に思えたルナスの笑みが、今は非常に寒々しいものに見えた。

「僕がみんなになんて言われてるか知っているかい？」

だが、ルナスはあくまで笑顔を絶やさず、鉄兵に微笑みかける。その笑顔は、もしかしたらルナスの仮面なのかもしれないと、なんとなく鉄兵はらしくない思いを抱いた。

戸惑い、何も言えないでいる鉄兵を見てルナスがクスリと笑う。

「月の公子さ」

そして、彼はその名前を口にした。

月の公子・その3

「月の公子さ」

苦味を含んだ表情でルナスはその名前を口にした。

本音を言おう。

その名前を聞いた鉄兵がまず考えたのは、本当に場違いな話ではあるのだが、なかなかに厨二臭い渾名だなぁという感想だった。

いや流石にそれはどうかと自分でも思うのだが、本当にそんな考えしか出てこなかったのだから仕方が無い。今こそ確信したが、どうやら中庭でルナスに騙されて以来、明らかにまともに頭が働いていないようなのである。ルナスとは致命的に相性が悪いのだろうか。鉄兵はどうしてもルナスと波長を合わせる事ができず、先程からどうしても言いたいところを察することができずにいるのだ。

とはいっても、相性が悪かろうが時間は動いているわけで、察せられないからと言って何も応えないわけにはいかないだろう。鉄兵はルナスの言葉について考える。

話の脈絡を考えるに、先程の民衆の態度に関係があるのだろう。多分、ここはその事について訪ねるべきなのだろうが、思い切り良く人に物を尋ねられるのを自慢とする鉄兵であるのだが、なぜかここではその積極性を発揮することができず、消極的な態度を取る事しかできなかった。

「……なんか、かっこいい名前だな」

ルナスに対しても。自分に対しても。反応に困った鉄兵は、とりあえず適当な事を言ってみた。

「あっはっは。ありがとう」

その鉄兵の台詞に対し、意外にもルナスは本気で笑っているようであった。今となってはその笑いはわざとらしく見えるのだが、しかし腹を抱えて大げさに笑い声を上げるその様は、本気の笑いも幾分か混じっているように見えた。

その笑いがピタリと止まる。

「でも残念ながらかっこいい事は一つもないんだよ」

笑いは止めても笑顔はそのままに、ルナスが鉄兵と目を合わす。その目に、鉄兵はなにがしかの決意染みたものが見えた気がした。

「月の公子の意味するところは日陰者、厄介者ってところかな。不気味で何をやらかすか分からない王子様って意味さ」

語るルナスの表情はあくまで笑っている。だが、今となってはその笑みの中には、多分に自虐の成分が含まれているように見えた。

その名の意味を考える。欧米では月は不吉の象徴と言われているらしいが、どうやらこの世界での月はその位置にあるようだ。

それを踏まえて再度思考を巡らせる。

すると、それは、なんとも嫌な渾名だった。

急激に雰囲気を変えたルナスの姿と相まって、想像力が膨らんでしまう。

想像の果てに鉄兵は思わずルナスに同情してしまいそうになったが、しかし危ういところで考え直した。

火の無いところに煙は立たない。先程の住民達の反応は噂どころのレベルではなく、本気でおびえているように見えた。

それらの事から情報をまとめ、思考を回す。出た結論は、少なくともルナスは彼らが怯えるような、何らかの大きな事件を起こしているというものだった。

不意にツンと鼻の奥にきな臭いものを感じて、鉄兵は少しだけ落ち着きを取り戻した。

その原因が偏見なのか、はたまた真実なのか。それはここでは判断がつかない。だが、いずれにせよ、これは表面的なものに惑わされてはいけない問題のようだと鉄兵には思えた。ここまでは髄液に不純物が混ざったように摩擦を起こして全く回転しなくなっていた頭だが、そろそろ本気で滑りを良くしなければ危険だと判断し、鉄兵は少し自分に気合を入れる事にした。

ルナスが自分を観察しているのも構わず、深く深呼吸をして息を整える。

そして落ち着きを取り戻した鉄兵は、正面からルナスの目を見つめてみた。

「ホーリィ」

そんな鉄兵にルナスは苦笑を寄こしたかと思うと、ルナスはホーリィに人差し指を口元に押し当てた。

それを見たホーリィが「はい」と背筋を伸ばし、緊張気味になにやら唱え始める。途端に周りの喧騒が消え、静かになった。とはいえ周り人々が動きを止めたというわけではない。周りの人々が雰囲気だけは騒がしそうに動いているところを見ると、どうやら周囲と音が隔てられているようだ。オスマンタスとの会話中も似たような魔法を使っていたと言っていたし、これはきっとその魔法の拡張版なのだろう。

背を向けて、ルナスが町中へと歩き出す。手を握られたままの鉄兵は、必然としてその後ろに続く。

「自分の事を語る人間って言うのは、胡散臭いと思わないか？」

背中越しにルナスが語る言葉は、しかし鉄兵には自分に向けて話しているようには感じられなかった。どこか空虚で独り言染みたその台詞は、事実聞かせるために話しているのでは無いのかもしれない。

「けど、君に僕を知ってもらうために少しだけ語らせてもらうよ。まあ、実際に僕は人に恐れられるような事をやっているって事だけだけどね。」

ごくさりげなく済ませた言葉は、鉄兵の予想を裏付ける言葉だった。

「あの竜人殿は言葉を濁してくれたけど、僕は外道と呼ばれるような行為を犯した事があるのさ。その証拠に……」

と、その時。ルナスが猛然と振り返り、側に従うホーリィに猛然と掴みかかろうとする。

が、大きく振り上げられてホーリィ襲い掛かったその腕は、ホーリィに触れる直前でピタリと止まった。

ルナスの突然の奇行に反応する事もできず、鉄兵はただ戸惑いの表情を浮かべる。

だが、その直後に襲い掛かられたホーリィの姿をみて、鉄兵はルナスが何をしたかったのか分かってしまった。

ホーリィは目を閉じて萎縮し、へなりとその場にへたり込んでしまっていた。いや、ホーリィだけではない。魔法によってざわめきこそ聞こえてこないものの、まるでルナスがいないものとして振舞っていた周囲の人々も、一様に後退り、その顔を引きつらせて心底からの緊張を見せていた。

「ほら、ホーリィを見てみな。それに周りの人達だって。みんな僕を恐れているだろ？」

ルナスが鉄兵に微笑みかけ、そんな言葉を口にした。その表情は笑っているにも関わらず、鉄兵の目には能面のように感情の無いものに見えた。

人一人の一挙動が波打つように人々の間に波及していくその光景は異様なものだった。ましてやそれがルナスの存在自体を無視をす

るような態度だったのに、今では軽蔑を含みながらも恐れを見せているのだ。

その異常性は、ひょっとしたら下の世界にもあったものなのかもしれない。

だが、少なくとも鉄兵はこんな光景を目にした事がなかった。

鉄兵の知る日常からかけ離れたその光景は、確かに鉄兵にとって異様なものであった。

しかし、それで鉄兵も周りの人達と同様に萎縮してしまったのかというと、それは別の話であった。

ルナスを取り巻く異常性を目の前にして、これまた場違いな話ではあるが、鉄兵は逆に妙に落ち着いてしまっていたのだ。

異様な光景を前にして、なぜそんな反応に至ったのかといえば、それはルナスにまつわる事実を思い出したせいである。

鉄兵が思い出した事。それは、あの中庭でルナスを見つけた時のアリスの顔だった。

アリスは王族であるが故、ある程度の切捨てというものが出来る人物だろう。だが、本当に信頼していない人物に、あんな笑顔を向けることなんて出来ないと思うのだ。

無論、それは鉄兵の思い違いかもしれない。アリスは王族であり、俗に言う王族特有の選民思想で民衆の思いなど軽視しているのかもしれない。

でも、少なくとも鉄兵はそんな事を思いたくないし、これは主観でしかないのだが、あのアリスが非道を行う人物にあれほど無防備な表情を晒すとは思えなかったのだ。

ゆえに、目の前ではルナスが暴虐不尽に振舞っているというのに、鉄兵はアリスの笑顔を思い出し、場違いにも心癒されてしまったのだ。

そして心に余裕ができ、冷静に自体を見つめることができた今、鉄兵の目にはルナスが自虐的に振舞っているように見えた。

微笑みながらも鋭い視線を向けるルナスのその姿は確かに挑発的である。だが、鉄兵はその瞳の奥には諦めにも似た怯えが見えた気がしたのだ。

それは願望から生まれた誤った認識なのかもしれない。

だが、そんなルナスの隠れた表情を目にした気がしてしまった鉄兵には、もはやルナスのその振る舞いが悲しい演技にしか見えなくなってしまっていた。

そんな事を思っている間、鉄兵はルナスの目じっと見つめていた。

それはただアリスの笑顔を思い出してぼけっとしてしまっていただけで、特に意味は無いことであった。

だが、ルナスにとってはそうではなかったようで、ルナスは酷く強烈な反応を見せた。

ルナスは一瞬その顔に動揺を見せたかと思うと、今までの余裕ある態度を一瞬にして掻き消し、突如として不機嫌そうな表情を顕にしたのだ。

予期せぬルナスの表情の変化に鉄兵は一瞬怯んだが、しかしそれよりも鉄兵の表に強く現れたのは、訝しげな表情であった。

それもまた、純粋にルナスの変化に対して怯えよりも戸惑いが色濃く現れただけだったのだが、しかしこれもルナスにとってはそうは見えなかったようである。

不機嫌そうに鉄兵を睨んでいたルナスであったが、しかしその表情は今にも首を傾げそうなほど真っ直ぐに戸惑いの感情を露にする鉄兵を前にして長くは続かなかった。鉄兵の視線を真っ向から受けたルナスは、やがて鉄兵の戸惑いをさらに上回るほどに戸惑いの表情を見せたのだ。

が、しかしそれは今回も一瞬の事で、ルナスの表情は更なる変化を見せた。ルナスは気まずそうに顔をしかめると、今度は少し子供っぽいとも言えるほどに素直に不機嫌そうな表情を見せて深くため息をついたのだ。

残念ながら相変わらずルナスが何を思ったのかを察する事はできなかったが、しかし鉄兵にはなぜかルナスの表情に諦めの色が混じっているように見えた。

そのため息から半テンポ置いて、鉄兵はようやく事の真相をおぼろげながら推察する事ができた。頭の回転は戻ってきたものの、どうやらルナスの心境を察する能力についてはまだまだだったようである。

今更の事だが、恐らく先程のルナスの態度は自分に対する示威行為も含んでいたのだろう。それを全スルーされて不思議そうに眺められてしまったのだ。そりゃため息を吐きたくなるだろう。我が事ながら空気の読めなさに少し恥ずかしくなってくる。

そして不機嫌そうにため息をついたルナスが顔を上げた時、ルナスの表情はまたしても変化を見せていた。

それは、戸惑いも欺瞞も感じられない、妙にすっきりとした笑顔だった。

「ま、そんな訳で僕は最悪なのさ。詳しくは後でホーリィにでも聞いてもらうとして、僕はその事について口にしないし、釈明もしないよ。僕が説明したり釈明したところでどうせ嘘になってしまうからね」

妙にさばさばとルナスが語る。

ここでなぜか急激に頭の回転が戻り始めたが、ルナスのその言葉には、ルナスに出会ってから感じていた鉄兵の思考を乱すような妙な違和感は含まれていなかった。恐らくだが、これがルナスの素の姿なのだろう。

「でも……」

ルナスの口からぽつりと言葉が漏れる。

不意にルナスの顔から不機嫌さが消え、真面目な表情が現れた。

「僕はその事について後悔していない」

その言葉が持つ意味は、多分深い根を持っている。鉄兵はその言葉をしっかりと心に受け取ったが、しかし反面ではどこか虚ろな台詞としてしか聞き取れなかった。

ルナスが話をしている相手は間違いなく鉄兵である。

だというのに、鉄兵にはその言葉が自分に向けて発せられた言葉だとは到底思えなかったのだ。

それは、ここではないどこか遠くにいる人物に向けて語った言葉のように聞こえた。

ゆえに嘘偽りの無い響きがその言葉には聞いて取れたし、恐らくは半ば無意識の台詞であると推測できるだけに、それだけは譲れない言葉に聞こえた。

ふと気がついたが、ルナスが真面目な表情をしたのは今が初めてかもしれない。

割と置いてけぼりな展開だし、台詞だけを聞いたらもうどうしようもなく厨二的な台詞である。

しかし、目の前でリアルタイムにルナスのその表情を追っている鉄兵には、ルナスのその言葉に確かに重いものを感じたし、それを笑う気にもならなかった。

なんだかんだ言って鉄兵は別の世界の住人である。元の世界の知識に毒され、どうしてもこういう場面では醒めた目線になってしま

いがちであるが、でもここは元の世界ではないのだ。

基本的なここは人の付き合いが狭く深い世界である。その中で浅く広く名が知られている人物ならば、どうしても偏見の目に晒されて、確立された個を押し潰されないように印象強く輝こうとするものなのだろう。ましてやそれが良心の呵責にさいなまれて生きている人間ならば、こうやって芝居染みた行動を取ることによってしか生きられないのかもしれない。

そんなことを考えていたら、不意にルナスが手を離した。汗に濡れていた手のひらに清々しい風が流れ込み、不意に爽やかな気分を感じたが、しかしようやくルナスの手から開放されたというのに、鉄兵は喜びよりもなぜか不安を色濃く感じてしまった。

「君の聞きたい事に答えてあげようか？」

ルナスは、そんな言葉を口にした。何の事かと鉄兵が訝しがっていると、ルナスは微笑みを取り戻し、鉄兵に笑いかけてきた。これは、例のいたずらっ子の表情である。

「君の不興を買うと分かっているのに、なんでアリスを引き合いにして君をからかったのかについてさ」

どうやら調子を取り戻したらしいルナスの言葉の裏を、鉄兵は読み取ることができなかった。

「……それで？」

言葉少なくルナスを促す。あの時のルナスの行動はただのお遊びだと分かっているわけだし、今となってはあまり気にしていない。

でも、事が自分に関わる事だけに、少しだけ気になったのは確かだ。

「僕が噂以外に君について知っているのは中庭の一件を眺めていた事だけだけど、少なくとも一つだけ分かる事があった。不躾だけど、君はこの国に深く関わるつもりがないんだろ？」

「え……？」

ルナスのその台詞に、鉄兵は背筋が凍るような思いだった。これは、ルナスがそう感じたという個人的な意見と考えるのは危険だろう。誰か一人が思っているなら、周りから見ればそう見えると考えた方が妥当だ。

「図星だろ？　僕はその事について責めたりしない。ただ、シリウス王や大神官殿、それにオスマンタス師はアリスを君にあてがって呪縛しようとしていたようだけど、アリスは僕の大切な従兄妹殿なんだ。だから適当に扱って欲しくなくってね。

……って、聞いているのか？」

残念ながら鉄兵は前半の言葉に動揺してしまい、その後半の言葉は届いていなかった。

言い当てられた事実に鉄兵は動揺を隠せないでいた。そう、これは言い当てられたのだろう。

ルナスの言葉は、多分どこも間違っていない。

なんだかんだで自分は軽い気持ちでいた。恐らくそれは事実なのだと思う。

薄々は自分でも自覚していた事実がルナスの言葉で明らかにされ、鉄兵は酷く動揺してしまった。

そしてだからこそ今まで気がつかない振りをしていた問題が重みを持って鉄兵の心に押し寄せてきた。果たして自分はこの国に深く関わるべきなのだろうかと。一年と経たずにこの世界から姿を消す予定である自分が、これ以上に友誼を深めたり国政に関わっても良いものだろうかと。

「……まあいいさ。で、そろそろ正気に戻ってくれないか？」

「え？　ああ……」

深い問題に圧倒されそうになっていた鉄兵だったが、ルナスに呼びかけられて遠い思考の世界から戻ってきた。人を前にして話をしている最中なのだ。逃避が含まれていないといえば嘘になるだろうが、今は自分の問題について考えるべきではないだろう。

「それで、なぜ僕があんな真似をしたのかをいうと、さっきも言ったように、それは僕が君に興味があるからだ」

それは城の中庭でも言われた事である。だが、なぜルナスは自分に興味を持ったのだろうか。

そんな疑問が恐らく表情に漏れていたのだろうか。ルナスが鉄兵の顔を見て微かに微笑む。

「山賊姫。今となってはアルテナ公女といった方がいいかな。彼女が率いる山賊団の本拠地は誰の領土にあるか知ってるかい？」

問われた鉄兵は瞬時に回答を脳裏に浮かべた。アルテナ率いる山賊団の領土は確か王弟の領土だと言っていたはずだ。そして王弟と言えば確か……

「あなたの父親の領土か」

ルナスの自己紹介を思い出す。確かルナスは『シリウス王の弟の息子』と名乗ったはずである。

「できればルナスと呼んでくれないか？」

なぜかにこやかにルナスが笑う。

「客観的に見て、父は無能ではないよ。でも、山賊姫の集団を制圧する事はできず、事実上その存在を黙認する事で治安を守ってきた。それなのに、誰とも知れない人物が突如現れて山賊姫を討伐し、父の領土を下賜され、さらには従兄妹殿と良い仲になっているという話じゃないか。興味が湧くのも当然だろ？」

「それは……悪い事をしたようで……」

ルナスの言葉に鉄兵は呻きそうになった。

ルナスの立場になって考える。端的に言えばどこの馬の骨とも言えないような人物が父親の顔に泥を塗り、領土を奪い、見合い相手を横取りしたわけである。興味を持つどころの騒ぎではなく、殺意を持たれてもおかしくないだろう。正直ものすごく気が引ける。

「君は、君のすべき事をしただけだろ？」

返ってきた答えは、意外にも満面の笑顔だった。

「実のところ、その件については昨日の時点でもう気にして無かったよ。僕もあの謁見の場にいたんだからね」

何か聞き捨てならない言葉が聞こえたような……

「素直に言うよ。僕はあの謁見を見て感動したんだ。こんな人間もいるものなんだなってね」

「それは……ありがとうございます？」

動揺した鉄兵は、訳が分からない返答を返した。あの猿芝居を見られていたとは……今更ながら顔が赤くなる。

「謁見を見て、僕は君から学び取りたい事ができた。だから、僕は君に僕を見て欲しかったんだ。
話は長くなったけど、それがあんな真似をした理由だよ。
どうだい、君は僕を無視できなくなっただろ？」

そう言って、ルナスはいたずらっぽく笑った。

「……これは完敗かな」

ルナスの話を聞いた鉄兵は、げんなりとした表情を浮かべて負けを認めた。

どうやら全てはルナスの掌の上であったらしい。冷静に自分の心理を確かめるに、確かに今や鉄兵はルナスの事を無視できなくなっている。別に勝負ではないのだが、結果を見る限り、これは負けを

認めざるを得ないだろう。なにやら悔しい気もするが、どうやらルナスの方が明らかに一枚上手のようである。

「ところで、学びたい事ってなに？」

負けを認めた鉄兵は、気になっていた事を聞いた。技術的なことならともかく、王族であるルナスが自分から学びたいとは一体何のことやら

「……まあ、それはそのうち話すとしようじゃないか」

その言葉に、ルナスの表情が一瞬だけ引き攣るように歪んだ。

「そんなわけで改めてよろしく頼むよ」

誤魔化すようにルナスが右手を鉄兵の前に差し出す。

一瞬だけ見せた表情の歪みに虚を衝かれ、その手を反射的に握り返そうとした鉄兵だったが、ふと我に返って躊躇を見せた。

今更ながらの話だが、ルナスの策略にまんまと嵌って様子見に徹していた鉄兵は、結局のところ終始話の主導権を握られてしまっていて、ルナスが自ら語ったこと以外には何も情報を引き出していない。何をして民衆から恐れられているのか、何が目的で鉄兵に近づいたのか、結局重要なところは何もわかっていないのだ。

それはルナスが意図した結果であり、逆説的に考えればこの握手をするまでは隠したい事なのだろう。

ここで握手を交わせば、鉄兵はルナスを知人として認めた事にな

る。考えすぎかもしれないが、ここでルナスの思い通りになってもいいものだろうか？

「……よろしく」

一瞬だけ躊躇った鉄兵だったが、一瞬の後には鉄兵はルナスの手を取って握り返していた。

躊躇する鉄兵の背中を押したのは、それはまたもあの時に見せたアリスの笑顔であった。

物事はすべて出来る限り単純にすべきだと言ったのは、さてどの偉人であっただろうか。

他人の噂と身内の笑顔。

この単純な二択を前にすれば、どちらを選ぶかは簡単な事だったのだ。

ルナスが歯を見せ、満面の笑みを見せる。

その笑顔を見て、悪い奴じゃないんだろうなと思ってしまったのは、これまた単純な事であろうか。

「それじゃ行こうか」

「え？　ちょ、ちょっと！」

続いてルナスが取った行動に、鉄兵は相も変わらず調子を狂わされる事となった。

鉄兵としてはてっきりルナスの手から開放されたと思っていたのだが、ルナスは握手した手を離さずにそのまま鉄兵の手を引いて歩き出したのだ。どうやらここに来るまでルナスが鉄兵の手を離さなかったのは、何か策略があっての事ではなく、地の行動だったようである。

かくして野郎同士が手を握って歩くというそのむさ苦しい光景は、鉄兵が手の間に流れる汗の気持ち悪さに耐え切れずにとうとう切れるまで続いたとさ。

魔法鉱物ミスラルの謎

「テツ様、到着いたしました。あちらが鍛冶場でございます」

城を出てからちょうど一時間ほど歩いた頃、鉄兵たちはようやく鍛冶場にたどり着いた。

「ありがとう、ホーリィさん」

「いえ」

道案内をしてくれたホーリィにお礼を言うが、その反応は硬いものだった。城の中ではニコニコとしていたというのに、今は取り付く島も無い感じである。

その原因はやはりルナスの存在にあるのだろうが、しかし城を出た直後と比べれば状況は改善されているように思える。なぜかといえば、今のホーリィからは城の頃にあったようなおどおどとした緊張感が消えていたからだ。

恐らくは、ルナスの本当の姿を見て思うところがあったのだろう。そのせいで警戒心はとけているようだが、しかしホーリィはその時ルナスによって無様な姿を晒されている。温厚そうに見えるホーリィだが、その件に対しては許す事ができないようで、少し怒っているようであった。

ゆえに、ルナスに対して怯えてはいないが拗ねている。鉄兵にはホーリィの態度がそんな風に見えた。

それはさておき、鍛冶場である。ようやくこの世界の技術力に触れるわけだが、さてどんなものだろう？

「外見は普通の建物なんだな」

鍛冶場を視界に収めた鉄兵は、忌憚無い感想を呟いた。

鍛冶場と紹介された建物は、見事なまでにごく平凡な石造りの建物であった。特徴といえば多分火事対策なのだろうが、町の中心地とも言えるのに周りには建物が無く、一軒だけぽつんと建っている事くらいだろうか。

ちなみにここがどこかといえば、この国を三重に囲む城壁の一重目の門を抜けてすぐの場所である。ここは町の中心とも言える栄えた場所なのだが、なぜそんなところに鍛冶場があるのかといえば、場所から推測するに、恐らくこの鍛冶場ができた頃はこの場所は周りには何一つ無い郊外だったのだろう。つまり、繁華街に鍛冶場があるのではなく、鍛冶場がある場所に繁華街ができたというわけである。

「別にここで製鉄作業をしているわけじゃないからね。でここはあくまで加工をするための場所だから、こんなもんだよ」

「そうなのか？」

「そうだよ」

ルナスの言葉になるほどと鉄兵は頷いた。考えてみれば鉄兵が父親にこき使われて働いていた町工場もなんにかざりっけも無い掘っ立て小屋であった。

ちなみに、ふてぶてしい態度を取るようになったホーリィとは逆に、ルナスはここに来るまでの間に随分と打ち解けた態度を取るようになっていた。何があったのかと言われれば何があったのだろうと頭をひねるしかないのだが、気軽に話せるようになったのは面倒が無くて良い事だろう。

ここに来るまでにエキセントリックな態度を取り続けていたルナスだが、あの後話をしてみれば、意外な事にかなりの常識人である事がわかった。それに今では先程までの挑発的な態度は完璧に身を潜め、かなりのんびりした態度を取っている。

正直なところ、ルナスのあまりの急変ぶりには『これはまた何かの作略なんじゃないか』と疑いたくなるところだったが、しかし鉄兵にはこれがルナスの地なのではないかと思えた。特に根拠があるわけじゃないのだが、しいて言えばまったく演技が無いのである。

人間、演技をしている時には多少わざとらしい部分が出るものだが、今のルナスにはそんな気配が全く感じられないのだ。無論、先程までの態度がわざとらし過ぎたので違和感が無いだけなのかもしれないが、ぶっちゃけ考えるのが面倒なので鉄兵は素直に受け止める事にした。無闇やたらに疑うのは疲れるし、自分の得意分野ではないのだから。

「それに親方はずぼらというか、自分の作品の装飾は凝っても自分の事には無関心な人でね。作業場さえあれば他はどうでも良いみたいだよ」

「なるほど、それ系の人か」

続いて言ったルナスの言葉に、鉄兵は妙に共感できた気がして深く頷いた。実際にあってみないと分からないが、元の世界でそんな人物達に囲まれていた鉄兵には、なんとなくどんな人物なのか予想できた気がしたのだ。職人気質というか医者の不養生というか、恐らくそんな人物なんじゃないだろうか。

と、ここで気になったのだが、そういえばルナスはなんで親方についてなぜ詳しいのだろうか？　確か城門のところでも親方とは知り合いだといっていた気がするが、他領の公子（王子）が本国の鍛冶師と仲が良う事実には違和感を覚える。

「そういやルナスはその親方さんと何で知り合いなんだ？」

考えても分からないような事はすぐに聞くのが鉄兵の癖である。さっきから自分で口にしている話題なのですぐに返事は返ってくると思ったのだが、しかしなぜかルナスは渋い顔をした。

「それはまあ……親方を紹介しながら話すよ。とりあえず早く入らないか？」

「はいはい、それじゃ行ってみるか」

さり気なく手を握ろうとするルナスの手をさらりと避ける。雰囲気がさらりと変わったルナスだが、過度なコミュニケーションを取ろうとするのは変わらなかった。きっとこれは最初から隠していなかったルナスの地なのだろう。ちなみに男に追い掛け回されて灰色の高校生活を送っていた鉄兵にはわかるのだが、ルナスに男色趣味はなさそうである。専門のジャンルが違うのでよくわからないが、

「先に行って来訪を伝えてきます」

「お願いしま～す」

歩き出そうとした鉄兵達に先んじて、ホーリィが慌しく鍛冶場の方に走っていく。年と比べて身体が成熟していないホーリィが子供のようにわたわたと走っていく様を見て少し心癒されてしまったのはここだけの話だ。

ホーリィに続いて鉄兵達も鍛冶場の中に足を踏み入れる。

鍛冶場の中は非常にシンプルな構造をしていた。

ガランと広い空間は、どこかバイトもしていた父親の工場を思い出させる。基本は土間で、なぜかその土間の真ん中に剣らしきものが一本無造作に落ちている。後は火の点った鍛冶炉らしきものが三つほど並んでいるのと、サンプルらしき武器や日常品が壁に飾ってあるくらいのものだった。

その景色の片隅に、何故か畳敷きの座敷があり、そこでホーリィは背を向けて胡坐をかいて座っている男の方を揺さぶっていた。

シロと同じような紺色の着流しを着たその男の髪は黒く、やはりシロと同じように長髪を現代風のチョンマゲの様に結わいていた。肌はやや白いが黄色味を帯びた色をしていて、それだけを聞くと一見日本人のように思えるだろうが、しかし残念ながら背中越しでも分かるその骨格と体系は白人種のそれであった。

「イズム様、起きてください！」

イズムというのは例の親方の名前だろうか？　ホーリィはその親

方らしき人物の肩を揺らしているわけだが、親方は目を閉じたまま微動だにしない。

「ホーリィ。イズムは寝ているわけじゃないよ。ここは任せてくれないか？」

そんなホーリィの肩に、ルナスが後ろから手を置いた。一瞬びくっとなったホーリィだったが、それはルナスに怯えたわけではなく、単純にいきなり後ろから触られたからのようだ。

ここで一つ言い忘れていた事を記すが、ルナスは腰に剣を佩(は)いている。

さて、ルナスの言葉でホーリィは大人しく後ろに下がったわけだが、その後ルナスが何をしたかといえば、それはただ三つだけの動作であった。それはすなわち、腰の剣を抜き、振り上げ、振り下ろしただけである。

「え？」

その動作があまりにも自然で素早く行われたために、そのギャップに思わず鉄兵は間抜けな声を出してしまったが、さらにその後に訪れた光景もごく自然なものだった。

左の肩口を狙ったルナスの一撃は、しかしイズムの肩に食い込むことは無かった。まるでルナスが寸止めでもしたかのようにルナスの剣は肩口でピタリと止まり、それ以上動く事がなかったのだ、

そこでようやく背を向けていた男が立ち上がり、その動きにあわせてルナスが剣を納める。

立ち上がった男の右手には、一本の小振りなナイフが握られていた。刃よりも握りの方が長いような細工用のナイフなのだが、それでルナスの剣を受け止めたのだろう。

「なんだそのなまくらは」

振り返った男は開口一番そう言い放った。

親方は１６０センチそこそこの小柄な体型で、無精ひげが生えてるものの割と優男然とした涼やかな人物であったのだが、しかし大きな目をギロリとしたその様は、父親の工場にいた熟練工が自分が失敗した時に見せるそれであった。その凄みに古い記憶を刺激され、視線を向けられてすらいないのに鉄兵は思わず竦み上がる。

「親方の剣は実用的過ぎるからね。城に出入りするには装飾に凝ったこっちの方がいいのさ」

トラウマの蘇った鉄兵とは違い、ルナスの態度はあっさりしたものだった。親方はルナスの言葉に「ふんっ」と不機嫌そうに鼻先で笑う。

「なら先に言え。取りにきな」

要約すれば次までに装飾の凝ったものを作っておくから取りに来いと言う事だろうか。よく分からないが非常に仲が良さそうである。

「えっと……」

とりあえず心の中でルナスの評価を『意外と常識人』から『やっ

ぱりエキセントリック』に戻しつつ、このままでは埒が明かないので介入の隙を探してみる。すると、こちらの様子に気が付いた親方が鉄兵に目を向けた。

「失礼した。あなたは？」

「はい。テツと申します。今日はここに見学に来たんですが」

「ああ、あんたがテツ殿か。そいつはちょうどいいな」

ちょうどいいとか言われてしまった。親方がこちらに良い笑顔を向けてきたが、一体何の事なのやら。

「ああ失礼した。イズム＝クライデンと申す。以後お見知りおきを」

「よろしくお願いします。ところで……アマテラスの人ですか？」

シロと同じように着ている物は着流しだし、髪型はチョンマゲである。名前もなんとなく日本人っぽいし、シロの件から察するにそうなのかなと思って聞いてみたのだが、イズムの反応は渋いものだった。

「……いや、元アルケンバインの住民だ」

渋い顔のイズムの口から出てきた言葉は少し意外なものだった。

アルケンバインといえば、確か技術に秀でた国だったはずである。つまりイズムはアマテラス風の格好をした元アルケンバイン人らしいのだが、なにやら複雑である。

「さっそく地雷を踏んでるねぇ」

そんな鉄兵達の様子を見てルナスがニヤニヤと笑う。聞こえてきた言葉にこの世界にも地雷があるのかなどと少しピントが外れた事を思いつつ、ルナスに向かって首を捻ってみせる。

「親方の父母はアマテラス人だったけど、アルケンバインに流れ住んだ。そして親方はアルケンバインで育ったけどこの国に流れてきた。要はそういうことだよ」

なるほど。それなら確かに理屈は付くが、それがなぜ地雷なのだろうか？

「……つまり？」

「鈍いね。ヒントは僕と親方の仲が良い理由だよ」

その言葉に鉄兵は頭を捻ってみたところ、答えはすぐにわかった。直接的な表現はしていないが、ルナスとイズムには共有する項目があると言う事なのだろう。そして今の会話が地雷と言うのなら、答えは一つだろう。つまり、イズムは悪評によって国にいる事ができず、流れてきたと言うことなのだろう。

「すいません。失礼な事をお聞きしました」

「いや、構わんよ」

慌てて鉄兵が謝ると、イズムは苦笑して手を軽く振った。

「悪いがこう見えて年寄りでな。座らせてもらうよ」

よっこらせっと掛け声を上げて親方が再び胡坐をかく。年寄りと言ったが、見たところイズムは３０歳を越してはいないように見える。

「この国は良い所だよ。脛に傷があろうと無能は無能なりに、有能なら馬車馬のようにこき使ってくれるからな。そうだろ、ルナス！」

胡坐をかいた親方は、少し独り言めいた口調でルナスに話を振った。振られたルナスは苦笑しつつ、言葉を返す。

「まあね。で、馬車馬であるところの親方は何をそんなに考え込んでたんだい？」

「おうそれよ。ちょいと困った事になっててな。是非テツ殿の意見を聞きたいと思ってたところだ」

「僕の？」

「おうよ。王さんからそいつを量産しろと言われたんだが、行き詰っててな」

そう言って親方はあごをしゃくりあげ、イズムが先程座って向かいあっていた物を示した。

「どれどれ……ってそれですか」

何かと思いイズムが示した先にあるものを確認した鉄兵は、盛大にずっこけそうになってしまった。何があったのかといえば、それは鉄兵が王国に向かう途中で作り上げたショックアブソーバ式のダ

ンパーだったのだ。そういや回収し忘れてたが、まさかもう研究に回されていたとは……ちょっとだけシリウス王の敏腕っぷりを垣間見た気がする。

「率直に言って、こいつは量産できるようなもんなのか？」

「いや無理です。多分」

内心焦りながらも妙に疲れてしまった鉄兵は、率直な質問に率直に返す。まだ製鉄技術を見ていないのでわからないが、ナノメートル単位の調節が必要な機械である。多分この世界なら魔法を使わないと無理だろう。そして魔法についても今のところ量産は無理と思える。

「やはりそうか。まあそうだろうな。まあ仕方ねえ。王さんにはそう言っておくか」

イズムも無理だと考えていたのだろう。無理だと言われたのに妙に嬉しそうでもある。

「しかし馬車の揺れを抑えるってえのは面白いアイデアだったんだが、さてどうしたもんかねぇ」

出来ないなら出来ないなりに、次善の策を考えているのだろう。恐らくは先程嬉しそうだった理由には、その事も含まれているのだろう。新しいアイデアに刺激されるのが職人と言うものである。

そしてその言葉に、無論のこと鉄兵は反応した。ダンパーは別にこれだけではないのだ。

「ところで、見たところここは鍛造のようですけど、鋳造はやってるんですか？」

「ここじゃやってないが、どちらかと言えば鋳造が基本だな」

鍛冶炉を見て察しはついていたが、やはりこの鍛冶工場は鍛造が主体だったようである。だが、当然ながら鋳造技術もあるようだ。

ここで鍛造と鋳造についての違いを軽く記すが、簡単に言えば叩いて鍛えるのが鍛造で、型に流し込んで冷やすのが鋳造である。鍛造は叩いて鍛えるため金属の結晶が細かくなり、ガスや不純物が取り除かれて質の良い金属になる。対して鋳造は溶かして冷やすだけなので金属の結晶が大きくなり、中にガスなどが溜まって脆くなる。

なら鍛造の方が優れているかと言えば一概にはそうとは言えない。確かに鍛造は質が良くなるのだが、その分手間がかかり、また技術がいる。一方鋳造は質で言えば良くないが、型を作って流し込むだけなので大量生産に向いているのだ。

そして、生活に密着しているのは主に鋳造技術の方である。なので鉄兵としてはそっちの方を見ておきたかったのだが、鍛冶技術と言う事でこちらが紹介されたのだろう。

一一閑話休題。

「鋳造の方法は？」

「砂で型作ってそこに流し込んでるが？」

どうやら砂型鋳造が主流のようである。どれくらいの質の金属が

用意できるかは分からないが、構造がシンプルなら鉄器の大量生産は可能だろう。

「じゃあ、例えばこんなのはどうです？」

そう言って、鉄兵は無造作に鉄兵作のダンパーを手に取った。中のオイルを魔法で消滅させ、本体をぐにゃりと変形させていく。

「お、おま……！」

イズムが驚いた顔を見せるが、鉄兵はあえて気がつかなかった振りをする。なぜなら今の行為には証拠隠滅の意図もあるからである。危うく手の届かないところに回されそうになっていたが、こういうものはあまり残さないほうがいいだろう。

「例えば、これが代用品」

そう言って鉄兵が差し出したのは、弓状に沿った二枚の板を、反りを外側にして両端を止め、中に二本のバネを入れてボルトで締めただけの代物である。

「これの上に車体を乗っければ中の二本のバネで衝撃が吸収されるという構造です」

「なるほどな……」

鉄兵の魔法を見たイズムは驚愕の表情を露にしていたが、しかしそれよりも技術知識に対する欲求が上回ったようである。

「しかしバネってのははじめて見たな。これは簡単に作れるのか？」

言われてみればバネは割と材質が難しいものである。

「それじゃ、こういうのはどうです？」

再び魔法を行使する。続いて作ったのはリーフスプリングというものである。簡単に言えばバームクーヘンのように板を重ねただけの代物であるが、ただしバームクーヘンとは違って円形ではなく、ゆるやかに反らせただけの代物だ。

「これの両端を車体につけて、中心を車軸に固定します。そうすると板が伸びて衝撃が吸収されるわけです」

「こいつは興味深いな……」

親方が興味津々に身を乗り出す。

さてここからは長いので割愛するが、技術話に花が咲いた技術者同士の会話は女性の買い物とよく似ている。当人達にとってはこれ以上無いほどの楽しいものだが、付き合わされる方が退屈なのも同様だ。その他にも色々な形式のサスペンションを見せたりと親方と二人で盛り上がっていた鉄兵だったが、ふと白けて退屈そうにしているルナスの姿に気が付き、我に返って慌てて会話を終わらせた。

「世話になるな。代わりと言っちゃなんだが、俺に聞きたい事があれば何でも聞いてくれ」

結局のところ次回訪れる時に設計図を持参すると言う事で話は済み、ホクホク顔のイズムが気分良さそうに胸を叩く。お言葉に甘えて何か聞いておきたいところだが、さて何を聞こうか？

とそこで目に入ったのが何故か土間に一本だけ放置されている剣である。作ったまま柄さえ付いていない剣なのだが、なんであんなところに放置されているのであろうか？

「それじゃとりあえず。なんであの剣はあんなところに放置されてるんですか？」

「あぁ、あいつか」

「拾ってみればわかるんじゃないかな」

最後の台詞はルナスである。明らかに良からぬ事を考えているようで、顔がにやついている。

「おいルナス。滅多な事いうなよ」

睨みを利かせるイズムにルナスが降参だと言わんばかりに小さく両手をあげる。

ふんっと鼻を鳴らすと、イズムは懐から先程のナイフを取り出し、土間に放置された剣に投げつけた。ナイフは狙い違わず剣に当たって弾かれたわけだが、その弾かれ方が尋常ではなかった。

何が起こったのかといえば、青白いプラズマが発生し、派手な火花が上がったのである。

「おぉ、なにこれ！」

公務と言うことで多少猫を被っていたのだが、鉄兵は目の前で起

きた現象に興奮し、思わず素に戻って反応する。まるで高圧電流に触った時のような現象だが、さてこれはどういうことなのだろうか？

期待を込めてイズムを見る。するとイズムはにやりと笑って口を開いた？

「ミスラルさ」

「あれがミスラルか……」

名前だけは聞いていたが、どうやらあれが噂の魔法鉱物というやつのようである。恐らくは電流が流れる作用が働いているのだろう。精霊刻印については精霊が読める文字を書き、それを見た精霊が興味本位でそれを実行しているだけのようだが、あれはどういう作用で魔法が働いているのだろうか？

「あれってどんな作用で電流が発生してるんですか？」

「それは……俺にもわからん」

その答えに肩透かしを食らった鉄兵はガクリと肩を落とす。

「ま、それがあの剣があそこに置いてある理由でね」

横から口を出してきたのはルナスだった。

「ミスラルは鍛え上げて初めて効果が固定される金属なんだよ。だからそれまでは誰にもどんな効果が出るか分からないし、その原理は誰も知らない」

ルナスの言葉を真に受けるなら、恐らくは鍛え上げた結晶構造により光玉・闇玉のように様々な効果を生み出す金属なのだろう。一応は、本当に一応は科学的にも理解できる理屈だが、しかしどんな金属なんだと突っ込みたくなる。

「だからあれの時は大変だったな。鍛えあがったかと思った瞬間に感電しちゃって、親方は本当に死にそうだったもんね」

「人の失敗を楽しそうに語るなよ。人間が卑しくなるぜ」

「お気遣いだけもらっておきます」

不貞腐れる親方を見て、からからとルナスが笑う。

「ったくよ……で、どうだい。面白いと思うか？」

イズムは、おどけるルナスに呆れた視線を向けた後、こちらに視線を向けてにやりと笑いかけた。

「それはもう」

それは、掛け値無しの言葉である。元の世界でも一つの物質が加工や組み合わせ次第で色々な性質を持つ事は普通にあるが、これはその比ではない。そんなものを前にしてつまらないなどと言ったら技術者の名折れだろう。無論、技術者にも色々あるので興味が無い人は多数いるだろうが。

「ところがこいつは扱いにくい素材でな。見ての通り下手に打っても使い物になりゃしねぇ。まああいつは泥棒除けには丁度いいがな」

その言葉に「あー」と鉄兵は同意の意を示した。考えてみればその通りである。

鉄兵は俗に言う武器と言うものに詳しくないが、常時高圧電流が流れる剣ならば使いこなせれば無類の強さを発揮するだろう。元の世界のスタンガンの剣バージョンのようなもので、相手に僅かに触れただけでも感電させれる兵器なら弱いわけがない。

でも、問題は山ほどある。見ただけで察する事ができるが、この現象にはＯＮ・ＯＦＦのスイッチなどと言う便利なものは無いのである。土間に放置してあるところを見ると、誰もあれを動かす事が出来ないのだろうと言う事が推測できるように、握りの部分をゴムで固めればなんとかなるかもしれないが、電流は常時熱を発しているのである。ゴムは電流を通さなくとも、その熱ですぐに駄目になってしまうだろう。下手すれば使用中に握りが溶けて感電するなどという自体も想定できる。そうなったら間抜けどころの騒ぎではない。

これが大量生産できるなら小は電池代わりに大は発電施設にと色々面白い事が出来そうだが、安定して作れないとなればあまり意味は無い。

「結局、武器として役に立ったのはシリウス王に謙譲した消魔の魔法が付与された剣くらいだったな。魔法で魔力を消すっつうのは今一わからん理論だが、役に立てば言う事はねえか」

噂だけには聞いているが、シリウス王の剣はどうやらイズムが作成したらしい。

「ちなみに加工するにはどれくらいの熱量が必要なんですか？」

ここまで話を聞いた鉄兵は、その有効活用法について考え始めた。例え効果がランダムでも、鋳潰して再利用すれば狙った効果が得られるかもしれない。人海戦術で挑めば利用価値はあるんじゃないかと思って聞いてみたのだが、返ってきた答えはまたも微妙なものだった。

「そいつは気分次第だな」

「気分次第？」

初めは職人的表現なのかと思って続く回答を待っていたのだが、しかしイズムはそれ以上の返事をする気がないらしく、口を開く気配は無い。その横ではニヤニヤと笑うルナスを見て、鉄兵はなんとなく嫌な予感を感じた。

「ミスラルは資格が無い人間には加工が出来ない金属なんだよ。資格が無い人間ならいくら薪をくべようと溶かす事さえ出来ないのさ」

「……は？」

ルナスはあっさりと言ってくれたが、鉄兵にとってそれは金属から火が出る雷が出るというレベルを完全にぶっちぎった衝撃だった。

物質の性質と言うものは本当に平等なものなのだ。例えば水が１００度で沸騰するように、環境に左右はされても性質と言う意味では大差が無いものなのである。それはリンゴが落ちれば地面に引かれるのと同じように、万有に共通する物理法則である。

だというのに、ミスラルは人を選ぶ金属だという。そんなものが

あるとすれば、まさに神秘の金属としか言う他ないだろう。溶解温度の差が大きく、不定であるというならまだ説明は付くが、言葉の通りに特定の人間にしか反応しないとなれば、それは真の意味で魔術がかった魔法の金属としか言えない。

「おっと、大丈夫？」

専門分野で不意打ちを打たれた鉄兵は、かなり本気でめまいを感じてよろけた。ルナスに肩を支えられて何とか持ちこたえたが、動揺はかなり大きかった。

「ごめん、大丈夫。でも、さすが異世界だな」

「異世界？」

「それより」

衝撃のあまりうっかりと口を滑らした鉄兵は、失言を無視するように無造作に話を変えた。

「ミスラルは貴重なものなんですか？　できれば研究したいんで少し分けて欲しいんですけど」

とっさに出た言葉だが、その言葉に嘘偽りは無い。想定外の事実に大いに驚きはしたが、どう考えても常識はずれな金属に、鉄兵の知識欲はいや増すばかりであった。先程とっさに推測しただけの理論だが、結晶構造で色々効果が変わる鉱物ならば、闇玉・光玉の研究にも役に立つだろう。

「まあ貴重は貴重だが、テツ殿にならわけてやるさ。裏庭に生えて

るから少し持ってきな」

「ありがとうございます……って、生えてる？」

さりげない言葉だったので思わずスルーしそうになったが、不適切に思える発言に気が付き鉄兵は脊髄反射で突っ込んだ。てか生えてるってなんだ？

「そうか、テツ殿は知らないんだったな。ミスラルは地面から生えて成長するんだよ。樹木みたいにな」

「いやまさか……」

と常識が邪魔をしてその言葉を信じられなかった鉄兵だが、その言葉は数分後に後に付ける言葉を加える事となった。

「まさか、本当に生えてるとはな……」

ところ変わって鍛冶場の裏庭である。

そこには、鉄兵の基準から考えて、あまりにも常識外れな光景が広がっていた。

ミスラルは、白っぽい金属である。その白っぽい金属が、本当に木を模したかのように地面から生えている。その様は、ここが本当に元の世界とは違う場所なんだなぁと思わせるのに十分な代物だった。

「俺が植えた時は本の小さな小枝だったんだが、３０年経ちゃなかなか立派なもんだろ？」

「そう……ですね」

いや本当に立派なものであるのだが。楓のような形状のそのミスラルの木は５－６メートルはありそうな立派なもので、元から生えないものなのか分からないが、葉は生やしておらず、冬場の枯れ木のような佇まいをしていた。

「ちなみにこれは楓型だけど、他にも色んな種類があるよ。竜人の都・カァウルーンの周辺はこいつの群生地でね。一度見る価値はあるよ」

「それは環境に悪そうな密林だな……」

かなりテンパっている鉄兵は、ルナスの言葉に見も蓋も無いツッコミをいれた。金属が地面から生えているわけである。それは素晴らしいまでに生存に適さぬ地なのではないだろうか。

「いや、ミスラルは魔法鉱物だからね。虫やら動物には結構良い環境らしいよ？　思考に反応して樹液や葉っぱや果物とか生やしてくれるみたいからね。人間と比べて虫や動物は資格を持ってるのが多いから、そういう生物には優しい土地みたいだよ」

ちなみに資格者が望めばアルコールを含んだ果物とかも出してくれらしいよ、とルナスが笑う。

それはどんな酒池肉林だと思った鉄兵だが、もはや突っ込むのは止めておいた。これ以上聞いていると根本から常識が破壊されそうなのだ。

「触って調べてもいいですか？」

「存分にやりな」

笑ってイズムが許可を出す。

許しを得た鉄兵は、恐る恐るミスラルの木に近づいて、その表面にそっと触れた。形状は確かに樹木なのだが、触った感じでは、これは明らかに金属である。

実のところ、これまでは魔法やリルの一件以外ではこの世界は元の世界とそれほど変わっているところが無かった。だが、これはその三番目に連なる世界の差である。

鉄兵の内心を話せば、ミスラルの存在は魔法やリルのような生物以上に認めがたい存在であった。

しかし、確かめて、それは事実だった。ならばそれは認めるしかないだろう。

そして、認めた以上は知識欲が湧き上がる。

鉄兵は、その知識欲を満足させる術を持っている。それがなにかといえば、解析魔法である。そして手段を持っているというならばそれを使うほか無いだろう。樹木タイプは一度断末魔をきいて嫌な印象がこびりついているのだが、それを理由にここで止めると言う選択肢は存在しない。

鉄兵は体内の精霊に呼びかけて解析魔法を行使した。

瞬時にミスラルの構成式が頭に浮かぶ。

それはまるで有機物のように複雑な構成をしていた。が、すぐに基本となるのは４つの元素だと言う事実を突き詰める。見た事も無いその構成式。それは……

「……ツ様！　テツ様！」

気が付くと、鉄兵はホーリィに支えられていた。

「大丈夫か？」

「おいどうした！」

見ればホーリィだけではなく、いつの間にかルナスやイズムも側にいた。状況を考えるに、多分一瞬であろうが気を失っていたのだろう。

「悪い。大丈夫」

そう言って鉄兵はホーリィの手を離し自分の足で地面に立ったが、しかし足がよろけた。あれは一瞬の事だったが、随分とダメージを負ったようである。

「ホーリィさんありがとう」

「いえ、間に合ってよかったです」

完全に意識を失ったあの状況なら。強化魔法も解けた状態で倒れて怪我をしていたかもしれない。鉄兵が気を失った時に支えてくれ

たらしいホーリィに礼を言うと、ホーリィは嬉しそうににっこりと微笑んだ。

「それで、なにがあったんだい」

「ああ……」

言うべきか、言うまいか。どこぞの悲劇の王ではないが、それは中々迷うような内容であった。

「……前に切り倒したばかりの樹木に解析魔法を使った事があるんだけど、その時は木の断末魔が頭に流れてきて酷い目にあった」

悪い予感は的中するものである。嫌な予感は感じていたのだが、今回もそれにあたったようだ。

「……それで？」

にわかにルナスの顔が真剣みを増す。

「今回は。それよりもずっと強力な思念を感じた、だから意識が飛んだらしい」

「それは、つまり……？」

ルナスは、もはや察しているのだろう。目に真剣さをいや増し、鉄兵に詰め寄る。

あの時の状況よりさらに酷い。脳みそを舐められたようなあの感触。他には考えられないだろう。

「つまり、ミスラルは生き物ってこと」

にわかには信じがたい事実。だがそれが真実である。

魔法鉱物ミスラル。その正体は生きている鉱物であった。

魔法鉱物ミスラルの謎（後書き）

旧式サスペンションの情報は感想で趣味の鍛冶師さんから頂戴いたしました。
人物：イズム＝クライデンはｗｅｂ拍手で匿名っぽい人からいただきました。ってか匿名になってませんよｗ

２０１１／９／６：ご指摘いただいた誤敬語修正
「テツ様、到着いたしました。あちらが鍛冶場になります」
↓「鍛冶場でございます」

２０１１／９／１３：ご指摘いただいた誤字修正
対して鍛造は溶かして冷やすだけ
↓鋳造
これは致命的に恥ずかしいｏｒｚ

断章：『それ』の顕現（前書き）

この話はスルー可能です。
書いたは良いけど特に必要も無いのに割と超展開であり、話の構成上の問題もあって短いですが番外編的なものとして分けさせていただきました。

断章：『それ』の顕現

それは鉄兵の処理能力を超えた時間軸の話であった。

綿密に言えば、その現象を時間軸という枠で処理する事に意味は無い。

だが、あえてそれを人間の常識を元に誰にでも分かるように説明すれば、１０のマイナス３６乗秒という限定された時間の中、時間のベクトルが定まらぬ次元の内にそのやりとりは行われた。

「ミスラルは生き物だ」

丁度鉄兵がそんな台詞を口にした直後、『それ』はミスラルの樹木からぬっと姿を現した。

とはいっても、『それ』はその姿を完全に現したわけではない。それは人間で言うところの人差し指のほんの先の先。得体の知れぬ穴の中に何があるのか確かめるべく、敏感な触覚器であるその指先を恐る恐る差し入れた程度の具現であったのだが、しかしそれがこの世界に及ぼす影響は強大でありすぎた。

例えば、山が一つ衝突したとして、それを受け止められる人間などいないだろう。物理法則が正常に働いている以上、圧倒的な質量にぶつかれば確実に人間は死ぬ。

そして現れた『それ』は、それと同義の災厄をもたらすに足る存在であったが、しかし救いは存在している。つまり、現にその身が現れてはいるが、その存在は未だ不確定の霧の中にあり、この物質

世界に影響を及ぼしていないと言う事である。

とはいえ、このままでは『それ』は自らの存在を確定し、膨大な質量が周囲を押し潰し、国が一つ滅ぶ事になるだろう。

ゆえに、災厄を回避すべく、鉄兵の口から言葉が漏れ出た。

【動くな！】

『それ』は、その言葉の意味を正しく理解した。

今にも顕現しようとしていた『それ』は、その言葉の意を汲み、物質世界への具現化を止めた。言葉を伝えた存在の姿を確認し、その存在が傷つかぬようその身を小さく折り畳んでいく。

存在を小さく折り畳んだ事により、鉄兵達とこの国は物理的な脅威から開放された。

が、しかし、未だ『それ』がこの物質世界に災厄を及ぼす可能性は存在していた。

『それ』は、自分に言葉を伝えた存在と意思を通じようとした。

だが、『それ』とこの物質世界に住む住人との間には精神の構造に違いがありすぎる。存在として上位とも言える『それ』が自分達が使う方法で生身の存在と意思を通じようとすれば、それだけで精神が砕けてしまう。

ゆえに、自己を守るべく、鉄兵の口から言葉が漏れ出た。

【話すな！】

今度の言葉もまた『それ』は正しく理解した。

存在の在り方の違いに気が付いた『それ』は先程自分の表面を撫でたものから流れ込んできた記憶を取り込んだ。そしてこの世界の生物が空気の振動を感じ取り、意思を通じる事を学ぶ。

『それ』はこの世界で使われる意思の疎通方法を私用するために現し世の身体を構築した。

かくして『それ』は人間とそれに準じる存在に損害を与えず、精神を壊さぬような意思の疎通方法を持った肉体を構築した。

これにより、一見『それ』がこの世界に住む存在に害を与える可能性は消え去ったかのように思えたが、しかし『それ』は未だにこの世界に住む存在にとって脅威でしかありえなかった。

人間は恐怖という感情により個の在り方を放棄し、自らの生命活動を停止する事すら有り得る生物である。

そして『それ』が現し世の身体として構築したものは、それを目にしたものがそうなる可能性を十分に秘めているものだったのだ。

言葉で語る事すら憚れる姿をした『それ』がこの世界にその姿のままで顕現すれば、恐怖心を持つ知的生命体は『それ』を目にしただけで悉くがその存在を自ら消失させるだろう。

ゆえに、個の在り方を守るべく、鉄兵の口から言葉が漏れ出た。

【見ろ！】

今度の言葉もまた、『それ』は正しく理解した。

自分とそれ以外の姿の違いに気が付いた『それ』は、現し世の姿のあり方を観察した。自分に触れた存在の記憶から、この世界でも受け入れられる無害な姿を検索する……

……そうやって幾多にも渡り制御に制御を重ねた『それ』は、ついにこの世界にとっての脅威というカテゴライズから外れる事に成功した。

自らの現し世の身体に満足した『それ』は、ようやくにして現し世に顕現する。

そして同時に現し世の身体は物質世界の法則に縛られ、時の流れに支配された『それ』は鉄兵達の前に姿を現した。

断章：『それ』の顕現（後書き）

元ネタはクトゥルー的なななにか。
１０のマイナス３６乗秒に特別な意味は無いです。

２０１１／１０／１：ご指摘いただいた誤字修正
１のマイナス３６乗秒
→１０のマイナス３６乗秒
これは恥ずかしい！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1784n/

ある工業大学生の受難

2011年10月3日01時07分発行